Kashima -MACHI cultural assets investigation report Vol.11

Jo-Kanzuka Tumuli Loc. No.1-4
&
Jo-Kanzuka Site Loc. No.1-7

Emergency excavations BY Land readjustment PROJECT

~Research organization~

Kashima -MACHI Board of Education　Social Education Division

545 Uejima, Kashima -MACHI, Kamimashiki District,Kumamoto Prefecture, Japan

~Excavation investigator~

Tomokazu ASAKUNO　Takaaki SHIIBA

~Editor~

Tsuyoshi HASHIGUCHI

2024

Printed in Japan

上官塚古墳群（第1区～4区）　上官塚遺跡（第1区～7区）

嘉島町文化財調査報告書　第11集

2024

熊本県上益城郡嘉島町教育委員会

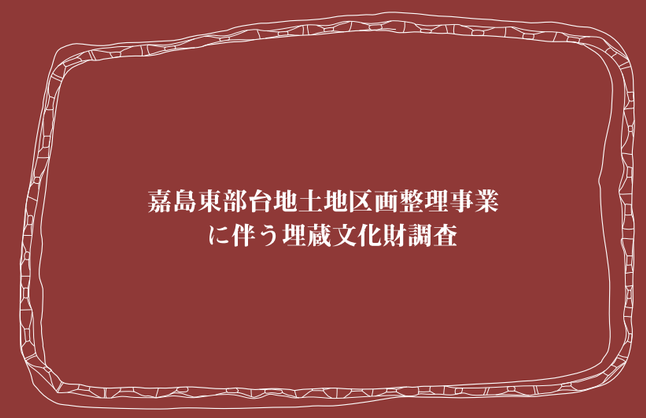
嘉島町文化財調査報告書　第11集

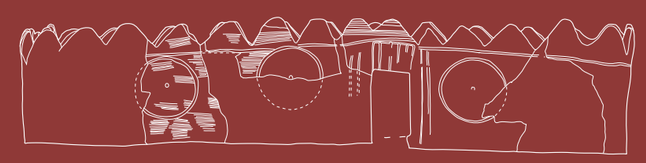
上官塚古墳群

第1～4区

上官塚遺跡

第1～7区





嘉島町教育委員会

2024

嘉島町文化財調査報告書　第11集

上官塚古墳群
上官塚遺跡

○調査
中川祐二　浅久野友和　椎葉天昭

○編集
橋口剛士

嘉島町教育委員会
2024

序

嘉島町では東部台地土地区画整理事業を平成９年から計画し、事業を推進しているところであり、複数の埋蔵文化財包蔵地がその事業地の範囲内にあることから、平成 12 年から調査を実施しており、現在もまだ継続中であります。今回は、平成 16、18 年度に実施された上官塚遺跡及び上官塚古墳群における発掘調査の成果を報告するものであります。

本遺跡からは、縄文時代から中世にかけての資料が出土し、長い期間この場所が当時の人々によって利用されていたことが明らかとなりました。さらに古墳 SZ09 の周溝から家形埴輪・円筒埴輪・壺形埴輪・朝顔形埴輪とともに県内初の出土となる囲形埴輪が出土しました。

出土した資料は、嘉島町文化財センター及び同上島収蔵庫に保管されており、今後広く活用されることを待ち望んでおります。本報告書を通じて学術的な側面への貢献だけではなく、文化財保護に対する関心と理解に貢献できれば幸甚です。

最後に、文化財保護の趣旨を理解し、調査に際して便宜を図っていただいた関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

2024 年　月　　嘉島町教育長　青木政俊

例　言

1　本書は、嘉島東部台地土地区画整理事業に伴って実施した、 熊本県上益城郡嘉島町井寺所在の上官塚遺跡及び上官塚古墳群の発掘調査報告書である。
2　本遺跡の調査は、嘉島町教育委員会が主体となり、社会教育課が調査を担当した。
3　資料の整理は、旧嘉島町公民館で実施した。出土資料及び図面等の記録は、嘉島町文化財センター及び同上島収蔵庫に保管されている。
4　発掘調査時の写真は、中川祐二・浅久野友和・椎葉天昭が撮影し、空中写真は橋口が、遺物写真については牛島茂が撮影した。
5　本書の執筆・編集は橋口が行った。
7　土層及び土器胎土の色調を示す際には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用し、磁器の色調を示す際には『DIC カラーガイド　中国の伝統色』を使用した。

作業において下記の方々に尽力いただいた。
・発掘調査（50 音順、敬称略）

・整理作業
石田敦子　稲葉貴子　岩下恵美子　岩野一子　大川好美　緒方聡美　奥村朝子　椎葉一代　塩田喜美子　園田尚子　高田清香　髙松孝子　田中裕子　溜渕俊子　土田みどり　鶴田ミチヨ　永田清美　林伸彦　平井和子　平川恵里子　前田和子　宮守富子　森島ユリ子　森田ミドリ　山田由美　山内洋子　結城あけみ　吉田和子

発掘調査・整理作業の際に、次の方々からご指導をいただいた。（順不同、敬称略。所属は当時）
木村龍生　木庭真由子　長谷部善一　古城史雄　宮崎敬士（熊本県教育庁教育総務局文化課）　三好栄太郎（熊本市教育委員会）　杉井健（熊本大学文学部）　檀佳克（八女市教育委員会）　高木恭二（宇土市民会館）　荒木隆宏（玉名市役所）　竹田宏司（玉名市教育委員会）　吉田和彦（杵築市教育委員会）　寺前直人（駒澤大学文学部）　青柳正規（奈良県立橿原考古学研究所）犬木努（大阪大谷大学文学部）　髙木正文

目　　次

第１章　調査の経緯と経過　・・・1
　第１節　事業と調査体制
　第２節　調査の経過と問題点
　第３節　発掘作業の経過
　第４節　整理作業等の経過
第２章　遺跡の位置と環境　・・・8
　第１節　遺跡の地理的環境
　第２節　遺跡の歴史的環境
第３章　調査の方法と状況　・・・11
　第１節　調査の方法
　第２節　層序
　第３節　遺構・遺物
第４章　縄文時代　・・・14
　第１節　縄文時代
第５章　弥生時代　・・・18
　第１節　概観
　第２節　甕棺
　第３節　土壙墓
　第４節　包含層出土遺物
第６章　古墳時代　・・・91
　第１節　概観
　第２節　北甘木台地における古墳
　第３節　古墳
　第４節　土壙墓・木棺墓
第７章　古代以降　・・・135
第８章　総括　・・・138
　第１節　調査の成果
　第２節　まとめ

挿図目次

第１図　区画整理事業の範囲と遺跡　…１
第２図　上官塚遺跡付近の調査箇所推移　…３
第３図　修正前の調査区配置図　…４
第４図　修正後の調査区配置図　…５
第５図　土地区画整理事業報告書刊行計画図（既刊含む）　…６
第６図　整理作業工程図　…６
第７図　嘉島町遺跡地図　…８
第８図　阿蘇南西麓付近の地質図（※１）　…９
第９図　布田川断層と遺跡の位置関係　…９
第 10 図　飯田溝と古墳の分布　…10
第 11 図　土層堆積概念図　…12
第 12 図　調査区遺構配置状況　…13
第 13 図　包含層出土遺物実測図（縄文土器）　…14
第 14 図　包含層出土遺物実測図（石器）　…15
第 15 図　包含層出土遺物実測図（打製石斧）　…16
第 16 図　本稿で取り扱う範囲における甕棺出土分布図　…19
第 17 図　北甘木における甕棺分布　…20
第 18 図　甕棺第１群の分布　…22
第 19 図　甕棺第１群の甕棺（46，47 号甕棺）　…23
第 20 図　46 号甕棺実測図（甕棺第１群）　…24
第 21 図　甕棺第１群の甕棺（48，49 号甕棺）　…25
第 22 図　甕棺第１群の甕棺（50，51 号甕棺）　…27
第 23 図　甕棺第１群の甕棺（52，53 号甕棺）　…29
第 24 図　甕棺第１群の甕棺（54，55 号甕棺）　…30
第 25 図　甕棺第１群の甕棺（56 号甕棺）　…31
第 26 図　甕棺第１支群の甕棺（58 号甕棺）　…32
第 27 図　甕棺第１支群の甕棺（59，60 号甕棺）　…33
第 28 図　甕棺第１支群の甕棺（61，62 号甕棺）　…34
第 29 図　甕棺第１群周辺の甕棺（39，41 号甕棺）　…36
第 30 図　甕棺第１群周辺の甕棺（42，43，44 号甕棺）　…37
第 31 図　甕棺第１群周辺の甕棺（57 号甕棺）　…38
第 32 図　甕棺第２群の分布　…39
第 33 図　甕棺第２群に属する甕棺①（73，74 号甕棺）　…41
第 34 図　甕棺第２群に属する甕棺②（75，76 号甕棺）　…42
第 35 図　75 号甕棺実測図（第２群）　…43
第 36 図　甕棺第２群に属する甕棺③（77，78 号甕棺）　…45
第 37 図　77 号甕棺実測図（第２群）　…46
第 38 図　78 号甕棺実測図（第２群）　…47

第 39 図　甕棺第２群に属する甕棺④（79，80 号甕棺）　…48
第 40 図　甕棺第２群に属する甕棺⑤（82 号甕棺）　…49
第 41 図　82 号甕棺実測図（第２群）　…50
第 42 図　甕棺第２支群の分布　…51
第 43 図　甕棺第２支群の甕棺①（64，65 号甕棺）　…52
第 44 図　65 号甕棺実測図（第２支群）　…53
第 45 図　甕棺第２支群の甕棺②（68，69 号甕棺）　…54
第 46 図　68 号甕棺実測図（主棺、第２支群）　…55
第 47 図　甕棺第２群周辺の甕棺（72 号甕棺）　…56
第 48 図　甕棺第２群周辺の甕棺（66，67 号甕棺）　…58
第 49 図　67 号甕棺実測図（主棺、第２群周辺）　…59
第 50 図　67 号甕棺実測図（副棺、第２群周辺）　…60
第 51 図　甕棺第２群周辺の甕棺（70，71，83 号甕棺）　…61
第 52 図　甕棺第３群の分布　…62
第 53 図　甕棺第３群に属する甕棺①（84，85，86 号甕棺）　…63
第 54 図　甕棺第３群に属する甕棺②（87，88，89 号甕棺）　…65
第 55 図　88 号甕棺実測図（第３群）　…66
第 56 図　甕棺第３群に属する甕棺③（90，91 号甕棺）　…67
第 57 図　甕棺第３群に属する甕棺④（92 号甕棺）　…68
第 58 図　92 号甕棺実測図（第３群）　…69
第 59 図　甕棺第３群に属する甕棺⑤（93，94 号甕棺）　…70
第 60 図　93 号甕棺実測図（第３群）　…71
第 61 図　甕棺第３群周辺の甕棺①（63 号甕棺）　…73
第 62 図　甕棺第３群周辺の甕棺②（95，96 号甕棺）　…74
第 63 図　95 号甕棺実測図（第３群周辺）　…75
第 64 図　96 号甕棺実測図（第３群周辺）　…76
第 65 図　上官塚古墳群の甕棺（１，２号甕棺）　…77
第 66 図　土壙墓の区分　…79
第 67 図　土壙墓の分布　…80
第 68 図　土壙墓実測図１　…81
第 69 図　土壙墓実測図２　…82
第 70 図　土壙墓実測図３　…83
第 71 図　包含層出土遺物１　…84
第 72 図　包含層出土遺物２　…85
第 73 図　包含層出土遺物３　…86
第 74 図　包含層出土遺物４　…87
第 75 図　包含層出土遺物５　…88
第 76 図　包含層出土遺物６　…88
第 77 図　北甘木台地における古墳分布　…92
第 78 図　北甘木台地における古墳の規模　…94

第 79 図　上官塚遺跡・上官塚古墳群における大型古墳の分布　…95
第 80 図　上官塚 1 号墳遺構平面図　…97
第 81 図　上官塚 1 号墳周溝内出土遺物実測図　…98
第 82 図　SZ05 遺構平面図　…100
第 83 図　SZ05 主体部（石棺）蓋検出状況図　…101
第 84 図　SZ05 主体部実測図（蓋除去後）　…102
第 85 図　SZ05 主体部掘り方実測図　…103
第 86 図　SZ05 周溝内出土遺物実測図　…104
第 87 図　SZ06 遺構平面図　…106
第 88 図　SZ07 遺構平面図　…107
第 89 図　SZ08 遺構平面図　…108
第 90 図　SZ08 周溝内出土遺物実測図　…109
第 91 図　SZ09 遺構平面図　…111
第 92 図　SZ09 主体痕跡実測図　…112
第 93 図　SZ09 周溝内出土遺物実測図 1　…113
第 94 図　SZ09 周溝内出土遺物実測図 2　…114
第 95 図　SZ09 周溝内埴輪出土状況実測図　…116
第 96 図　SZ09 周溝内出土円筒埴輪実測図 1　…117
第 97 図　SZ09 周溝内出土円筒埴輪実測図 2　…118
第 98 図　SZ09 周溝内出土朝顔形埴輪実測図　…119
第 99 図　SZ09 周溝内出土壺形埴輪実測図 1　…120
第 100 図　SZ09 周溝内出土壺形埴輪実測図 2　…121
第 101 図　SZ09 周溝内出土家形埴輪実測図　…122
第 102 図　SZ09 周溝内出土囲形埴輪実測図　…123
第 103 図　土壙墓の区分　…124
第 104 図　土壙墓の分布と古墳の位置　…125
第 105 図　土壙墓実測図 1　…126
第 106 図　土壙墓実測図 2　…127
第 107 図　土壙墓実測図 3　…128
第 108 図　土壙墓実測図 4　…129
第 109 図　木棺墓実測図 1　…130
第 110 図　木棺墓実測図 2　…131
第 111 図　木棺墓実測図 3　…132
第 112 図　包含層出土遺物実測図　…135
第 113 図　包含層出土遺物実測図　…136
第 114 図　包含層出土遺物実測図　…137
第 115 図　上官塚古墳群と上官塚遺跡調査地点配置図　…138
第 116 図　上官塚古墳群と上官塚遺跡（南東から、2020 年撮影）…139
第 117 図　北甘木丘陵における古墳の分布　…139
第 118 図　北甘木丘陵における甕棺の分布　…140

第 119 図　上官塚遺跡北側における甕棺編年　…142
第 120 図　甕棺の型式と分布　…143
第 121 図　甕棺主棺の開口角　…144
第 122 図　開口角と型式によるクラスタ分析結果　…144
第 123 図　塔ノ木遺跡出土線刻のある甕　…145
第 124 図　塔ノ木遺跡の線刻絵画と上官塚遺跡の線刻絵画　…146

表目次

第 1 表　縄文土器（包含層）観察表　…17
第 2 表　石器観察表（縄文時代）　…17
第 3 表　弥生土器（包含層）観察表　…89
第 4 表　弥生時代甕棺観察表　…90
第 5 表　石器観察表（弥生時代）　…90
第 6 表　上官塚 1 号墳周溝内出土遺物観察表　…133
第 7 表　SZ05 周溝内出土遺物観察表　…133
第 8 表　SZ08 周溝内出土遺物観察表　…133
第 9 表　SZ09 周溝内出土遺物観察表　…134
第 10 表　SZ09 周溝内出土埴輪観察表　…134
第 11 表　古代以降出土遺物（包含層）観察表　…137

図版（Plates）目次

PL- 1　上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土円筒・朝顔形・壺形埴輪
PL- 2　上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土家形埴輪
PL- 3　上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土囲形埴輪
LP- 4　上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土遺物①（上）　上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土遺物②（下）
LP- 5　上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土遺物③（上）　上官塚遺跡　SZ08 周溝内出土遺物（下）
LP- 6　上官塚遺跡　65 号甕棺
LP- 7　上官塚遺跡　68 号甕棺
LP- 8　上官塚遺跡　75 号甕棺
LP- 9　上官塚遺跡　77 号甕棺
LP-10　上官塚遺跡　78 号甕棺
LP-11　上官塚遺跡　82 号甕棺
LP-12　上官塚遺跡　88 号甕棺
LP-13　上官塚遺跡　92 号甕棺
LP-14　上官塚遺跡　96 号甕棺
LP-15　上官塚遺跡　47 号甕棺（上）　上官塚遺跡　50 号甕棺（下）
LP-16　上官塚遺跡　55 号甕棺（上）　上官塚遺跡　57 号甕棺（下）
LP-17　上官塚遺跡　63 号甕棺（上）　上官塚遺跡　66 号甕棺（下）
PL-18　上官塚遺跡　74 号甕棺（上）　上官塚遺跡　76 号甕棺（下）
PL-19　上官塚遺跡　80 号甕棺

第1章　調査の経緯と経過

第１節　事業と調査体制

本遺跡の発掘調査は、嘉島町が実施する嘉島東部台地土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査の一環で行われたものであり、平成12年から継続して行われている。

今回報告するのは、平成16年度・18年度において嘉島町教育委員会によって実施されたものである。報告書作成作業は平成30・31年度に整理作業、令和４年度に報告書作成作業が実施された。以下に調査時の体制を記す。

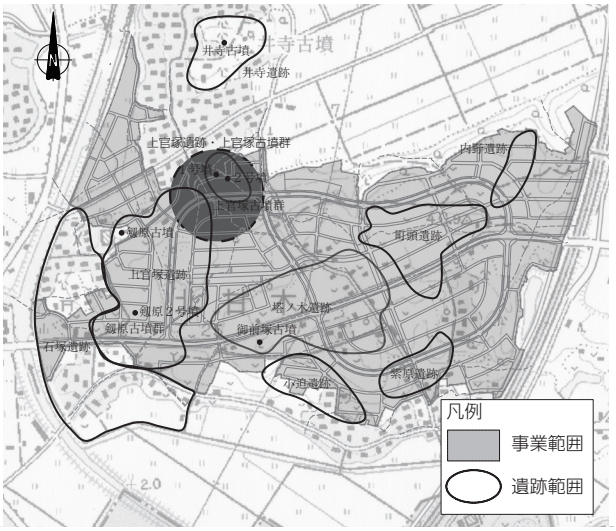
【発掘調査】

平成16年度（上官塚１～６区）

調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　六嘉　晉（教育長）
調査事務局　野村和行（社会教育課長）
松本伸二（社会教育係長）
調査担当　中川裕二（社会教育課主事）
浅久野友和、椎葉天昭（嘱託）

平成18年度（上官塚７区、上官塚古墳群１～４区）

調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　六嘉　晉（教育長）
調査事務局　野村和行（社会教育課長）
松本伸二（社会教育係長）
調査担当　中川裕二（社会教育課主事）
浅久野友和、椎葉天昭（嘱託）



第１図　区画整理事業の範囲と遺跡

【整理作業】

平成30年度

調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　髙野　隆（教育長）
調査事務局　西郡豊孝（社会教育課長）
増永貴士（社会教育係長）
整理担当　橋口剛士（社会教育課技師）

平成31年度

調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　髙野　隆（教育長）
調査事務局　増永貴士（社会教育課長）
園田ひろみ（社会教育係長）
整理担当　橋口剛士（社会教育課技師）

【報告書作成作業】

令和４年度

調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　髙野　隆（教育長）
調査事務局　増永貴士（社会教育課長）
園田ひろみ（社会教育係長）
古城史雄（会計年度任用職員）
水政みゆき（会計年度任用職員）
整理担当　橋口剛士（社会教育課技師）

第２節　調査の経過と問題点

１　概要

上官塚遺跡における区画整理事業に伴って実施された埋蔵文化財発掘調査は、現在の上官塚遺跡周辺を中心に実施され、その後台地上の遺跡に展開されていっていた。細かい着手順などについては記録がないため不明であるが、実施年度を元に色分けを行うと第２図のようになっている。遺跡の中心部分を初年度に実施した後、隣接する部分の調査に着手、その後徐々に北東へ調査域を展開し、それらが終了した後は遺跡を東西に横切って走る道路沿い付近を調査している。今回報告するのは平成 18（2006）年度に実施された、台地の北端部にあたる。

また、業務を引き継いでから調査が不足している箇所・現状保存により調査を回避した箇所などを洗い出し、事業課との協議の上追加の調査を 2022 年まで実施し、完了した。

２　問題点

平成 27（2015）年度に前担当から業務を引き継ぎ整理作業を進めるにあたって、これまでに実施されていた調査について多くの問題を確認し、修正を迫られた。その１つが調査区名の問題である。

（１）調査区名について

発掘調査を実施する際、同一遺跡内における他調査区と区別するために区名を振って記録等をしていくこととなる。

通例的には○○遺跡（第■次）第△区などといった名称を付与するものかと思われるが、調査を引き継いだ際に遺跡名と調査区名、及び作成された記録を確認していていくつもの不具合を確認した。

具体的には①遺跡名と調査区名が符合しない、②調査実施箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれていない、③遺構の通し番号が小グリッド＋連番となっていている、などである。

細かい不具合は他にも多くあったが、整理に際して致命的な錯誤を起こしかねない上記３点については引き継ぎ後すぐに修正を行った。

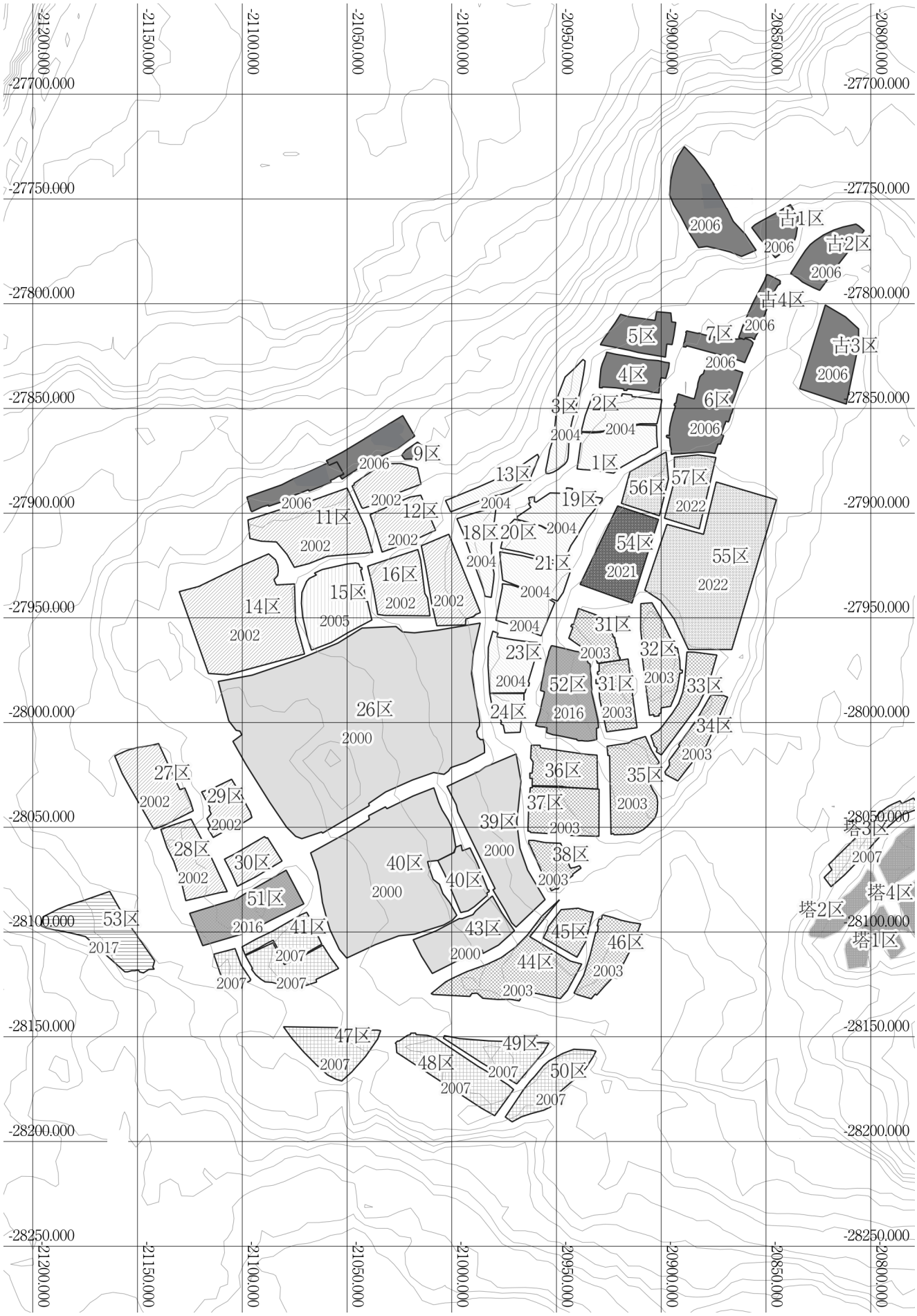
（２）遺跡範囲と調査区名の修正

①・②に対して、遺構の分布状況から判断するに石塚遺跡が延びてきていると考えるよりも上官塚遺跡が広がっていると考える方が妥当であり、それに伴って隣接する遠見塚遺跡に関しては不可分的な関係にあるため既存の上官塚遺跡に加えて石塚遺跡の一部及び遠見塚遺跡の全て、上官塚と遠見塚に隣接する遺跡名なし部分についてを上官塚遺跡として統合し、無秩序的に振られていた調査区名を上官塚遺跡○区という形で１から振り直しを行った。これに合わせて図面や写真などの記録について遺跡名・調査区名の修正を実施した。修正前と後を比較すると第３・４図のとおりとなる。

（３）遺構番号の修正

また、③について隣接するグリッドにおける同種の遺構があった場合やグリッド境界付近で確認された遺構などについて同一調査区内に○○号甕棺などが複数あるために取り扱いが混乱を起こしやすいことから、これまで実施された調査については各遺跡において通し番号で遺構種別ごとに１からの通し番号を振り直し、これについても図面と写真等記録の修正を実施した。

問題点は多く、現在に至っても完全に解消したとは言いづらい状態ではあるが、逆に一定程度整理作業が進んだ状態で引き継いだわけではなかったことが幸いし、統一的な見解に基づく修正を実施できた。これらの修正を経てようやく整理作業の端緒についたと考えている。



第２図　上官塚遺跡付近の調査箇所推移 (数値は世界測地形による　次頁以降も同様)

第３図　修正前の調査区配置図

第４図　修正後の調査区配置図

第３節　発掘作業の経過

遺構図面や写真を除いて調査日誌や野帳などのメモを含めて調査の経過を示す記録が残されておらず、詳細については不明である。

第４節　整理作業等の経過

１　記録等の修正

平成 27（2015）年度に当該調査区の洗浄作業が開始され、その後第１節で述べたような修正が加えられたことによる出土時のラベル等修正が併行して実施された。

２　整理作業

（１）報告書刊行計画

ア　全体把握と刊行計画策定

土地区画整理事業に伴う発掘調査の整理作業を実施するにあたって、前述の問題を抱えながら未整理のためまず全体的な報告書の刊行計画を立案する必要があった。

イ　上官塚遺跡の報告書刊行計画

これまでに実施された調査は、膨大な面積と資料量であったことから一括した報告書の作成作業は困難であると判断、上官塚遺跡については調査区の位置を基準に７冊に小分けして刊行していくこととした（第５図）。

ウ　整理の優先順位

土地区画整理事業は複数の遺跡にまたがって実施されており、事業地の東側に存在する内野遺跡、塔ノ木遺跡、町頭遺跡についても刊行計画を立てる必要があり、これらは遺物量等が比較的少ないことや修正作業がそれほどないことから早期に刊行が可能であると判断した。

エ　報告書の刊行と平成 28 年熊本地震

上記の計画に基づき平成 28（2016）年に内野遺跡、平成 30 年（2018）年に塔ノ木遺跡が刊行され、順次整理の進捗とともに報告書が刊行されていく予定であったが、平成 28 年熊本地震による復旧事業が間に入り込み、国庫補助事業であったために本調査実施分については翌年度の刊行を迫られるなど状況的に逼迫し、地震関係事業については外部からの応援を受けて調査を実施、整理作業は直営により次年度に実施し、刊行した。

その影響を受けて土地区画整理事業については執筆を担当する調査員の人的制約もあり一旦刊行作業は止めざるを得なかったが、整理作業自体はこれらと併行して進められていた。

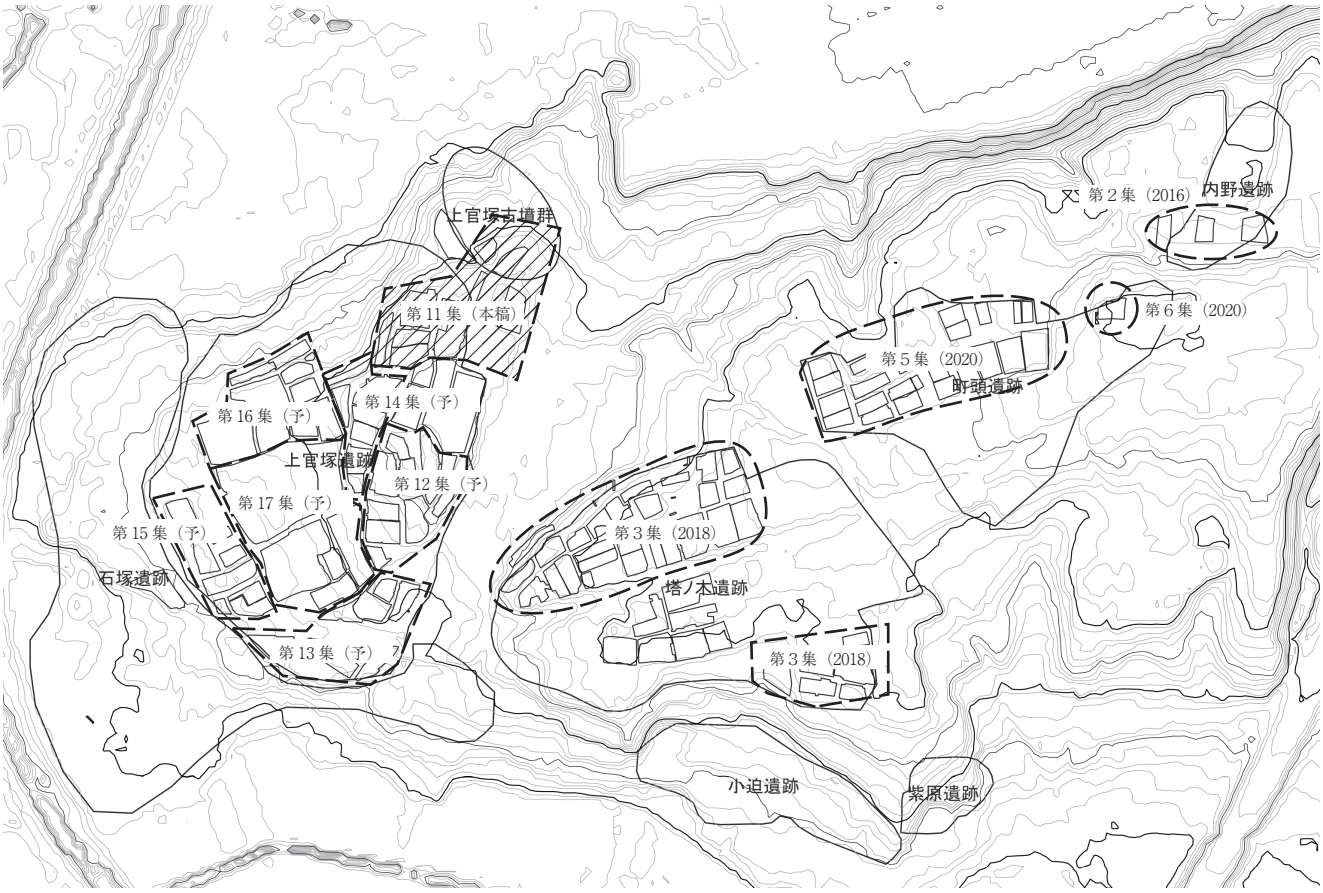
（２）整理作業の実施

整理作業は地震関連の事業による影響を受けながらもおよそ策定された刊行計画に沿って刊行の順に修正・整理が順次実施されている。前担当が調査した分については令和４年度で約８割強が完了しており、令和６年度までに整理作業が完了することを見込んでいる。

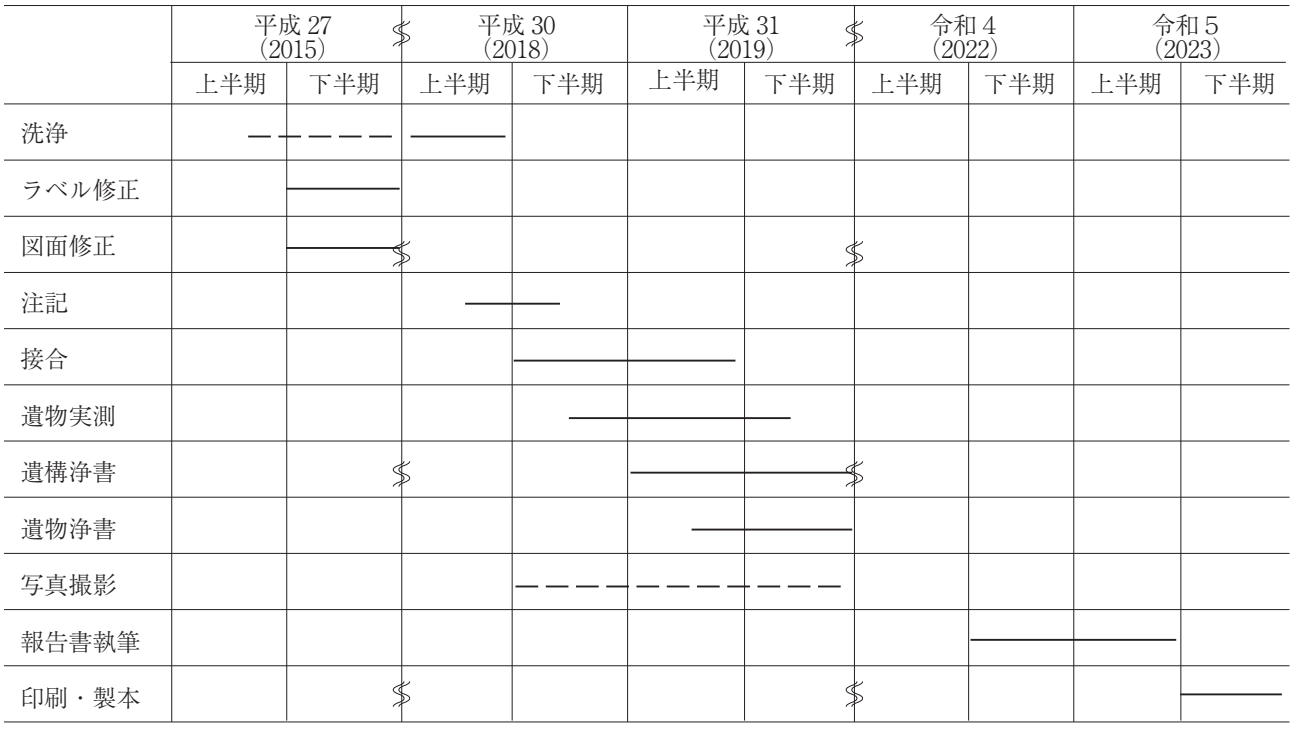
（３）本稿整理作業の進捗（第６図）

本報告書該当部分については、2018 年度までに洗浄・注記作業を完了し、2018 年度下半期～ 2019 年度上半期にかけて接合作業が実施された。遺物の実測・製図作業については 2019 年度に実施され、完了した。また、遺物写真撮影については 2018 年下半期～ 2019 年度で牛嶋茂氏により撮影された。

なお、現場で作成された遺構実測図については、整理に際してデジタルによる製図作業を実施し、一部直営にて行ったもの以外については業務委託（受託業者：（株）九州文化財研究所）により平成 29（2017）年度に実施された。その後、旧測地系でのグリッド枠・番号表記を維持しつつ新測地系への再配置作業を教育委員会で実施した。



第５図　土地区画整理事業報告書刊行計画図（既刊含む）



第６図　整理作業工程図

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の地理的環境

1　遺跡の地理的位置

嘉島町は、熊本平野南部、加勢川と緑川に挟まれた平野部に位置しており、熊本市と益城町、御船町と隣接する。遺跡は、嘉島町の東側、飯田山から西側へ延びる舌状を呈する丘陵地上の尾根部分にある。この丘陵は、嘉島台地・北甘木台地などと称される。

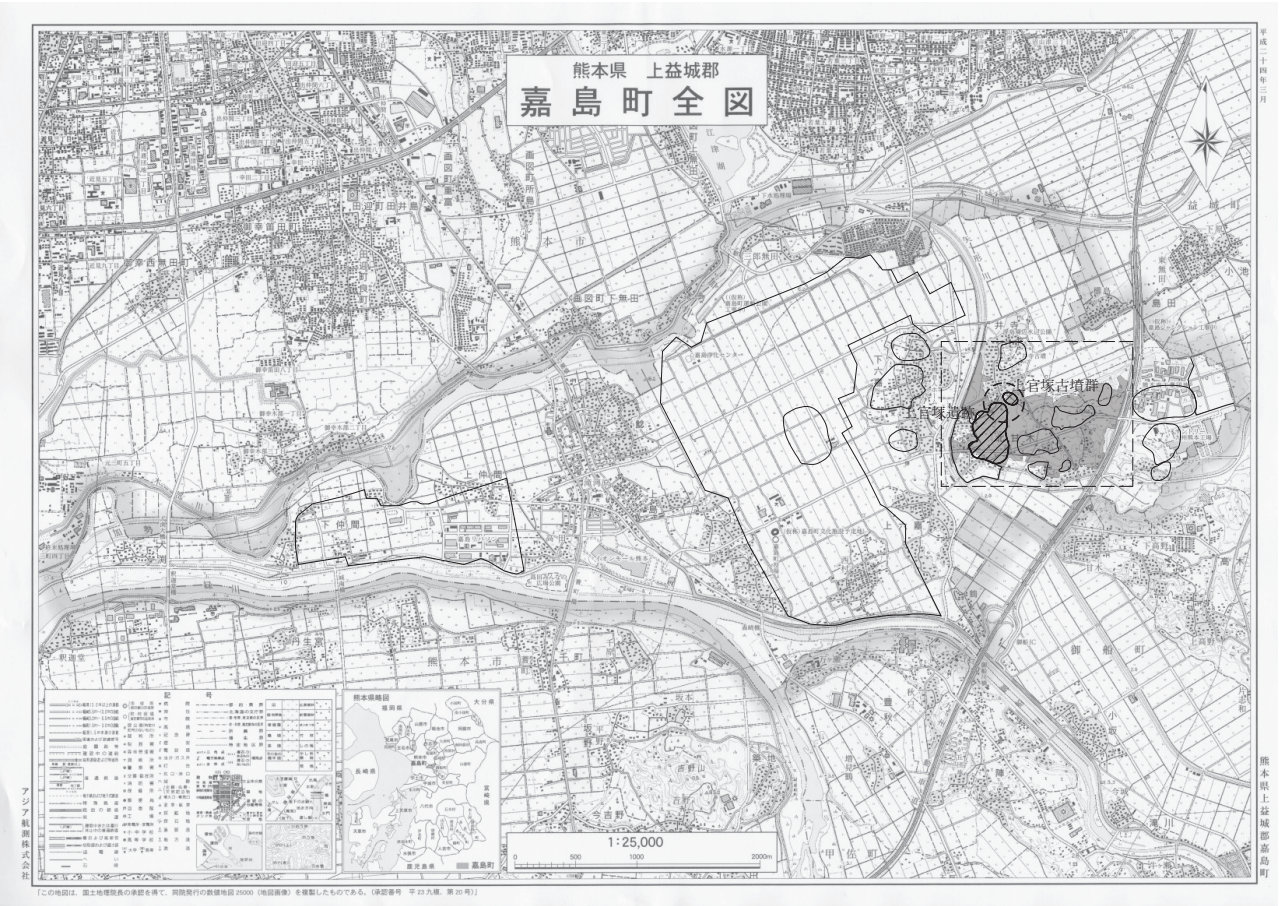
2　断層と平成28年熊本地震

この付近は阿蘇から延びる布田川・日奈久断層の枝分かれ地点にほど近いところである。次頁の段彩図を見てわかるとおり、丘陵が直線上に切れている様に見える部分がある（第8図）。これは断層崖であり、この断層崖を境に丘陵地と低地が明確に分かれている（第9図）。

また、低地においてはその断層により飯田山の北側にある船野山から吹き出した溶岩である砥川溶岩を切り込み、阿蘇の伏流水が湧き出す要因ともなっている。

平時は地形的な境目や湧水地の背景ともなる断層であるが、ひとたび動くと大きな被害をもたらす。平成28年熊本地震は、この布田川・日奈久断層の動きにより生じた大きな地震であり、益城町や西原村はもちろんのこと当町でも建物等に大きな被害を受けた。

遺跡は布田川断層の西端付近にあたり、当時区画整理事業の測量が完了して間もない時期で



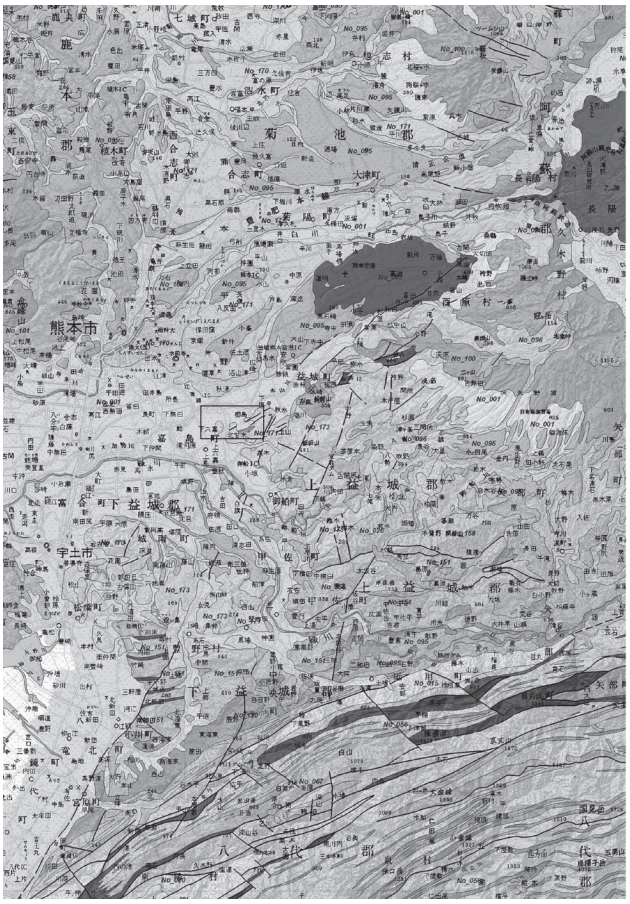
第7図　嘉島町遺跡地図

あったが、地震によって大きな変動が生じた。この付近にある国史跡井寺古墳も大きな被害を受け、復旧に向けて事業を実施しているところである。

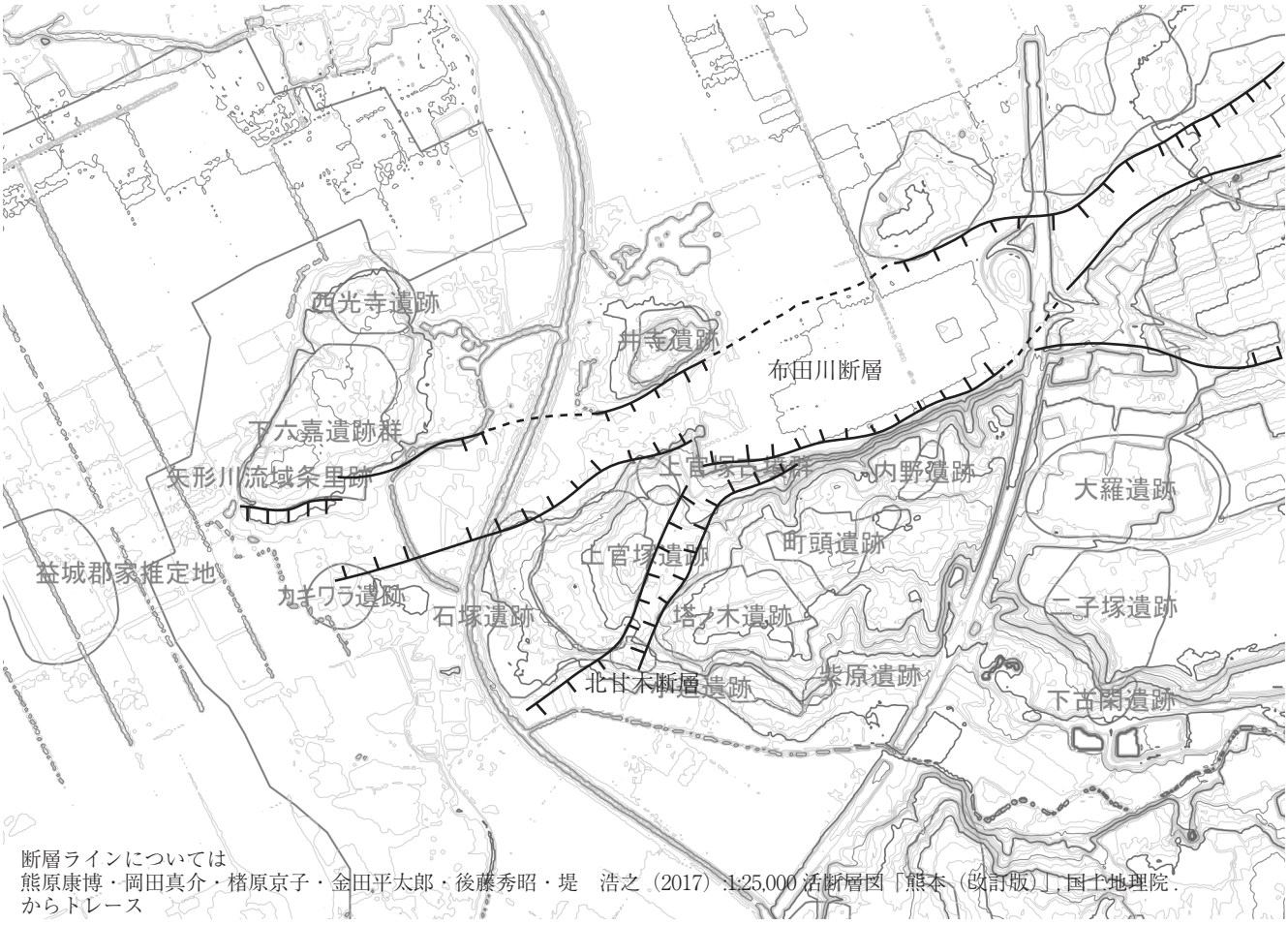
3　断層と遺跡

前項で触れたように断層の存在は北甘木台地における遺跡の形成にも影響を与えている。嘉島町の東部にある台地及び丘陵地形は間に低地や河川を挟んでおり、それぞれが独立したように見えている。区画整理事業に伴う予備調査や地震後に実施された試掘調査の結果を見ると、この低地部分での遺跡の存在はあまり見られず、台地や丘陵上に集中する傾向にあることがわかってきた。もちろん低地部分は洪積層でありこれまでに大量の土砂で覆い尽くされているため近年の工事で到達する深度にはないという可能性も否定は出来ない。

ここで注目したいのは上官塚遺跡と塔ノ木遺跡の間を走る谷状地形である。当町の文化財調査報告書第３集でも触れたがこの飯田溝と呼ばれる台地を隔てる谷状地形をはさんで両側に古



第８図　阿蘇南西麓付近の地質図（※１）



断層ラインについては
熊原康博・岡田真介・楮原京子・金田平太郎・後藤秀昭・堤　浩之（2017）1:25,000 活断層図「熊本（改訂版）」国土地理院．
からトレース

第９図　布田川断層と遺跡の位置関係

※

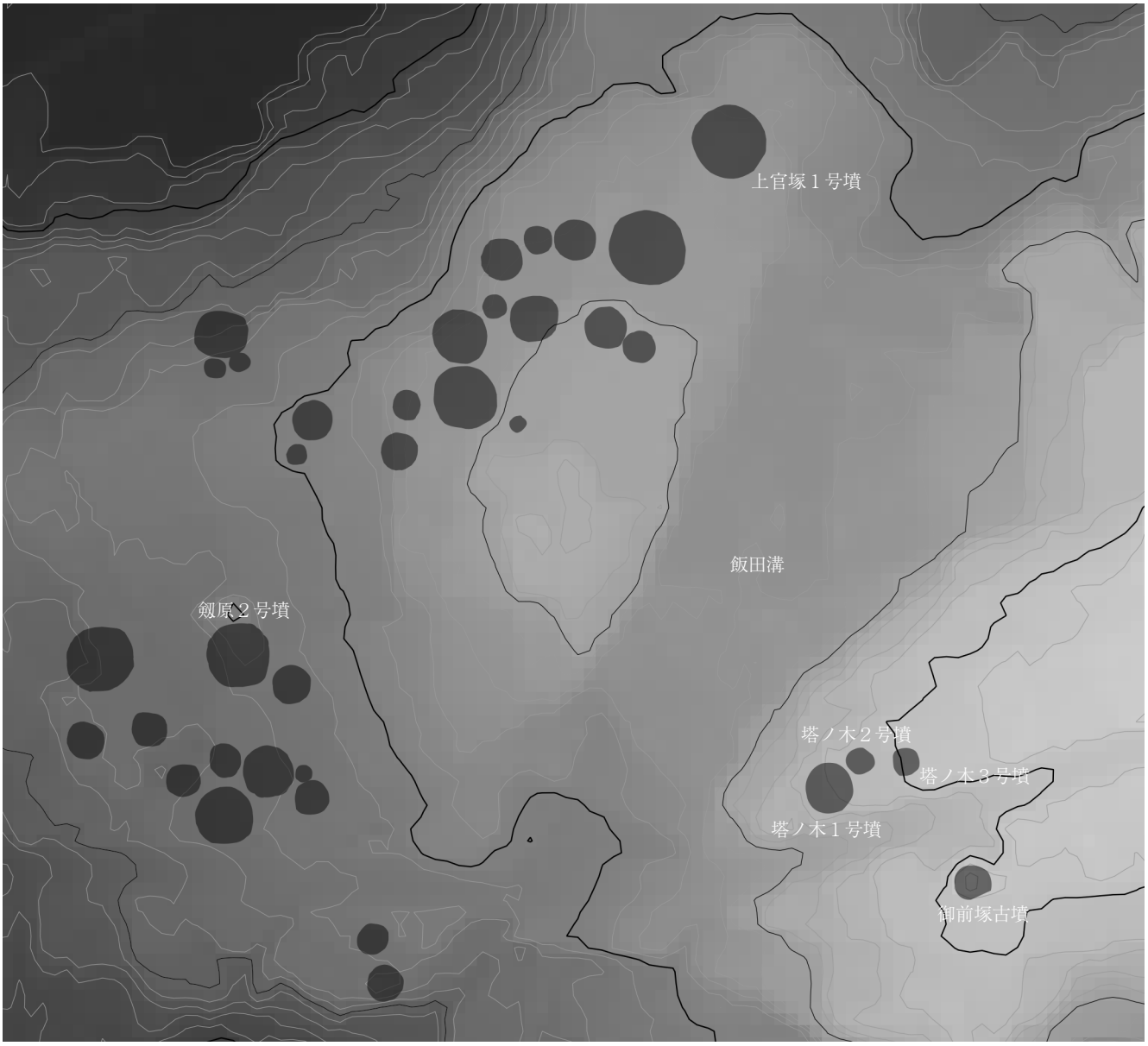
墳群が存在し、飯田溝には存在しないこと、上官塚に古墳の大部分が存在し塔ノ木におけるそれは特定の時期にのみ造営された可能性が高いことなどを指摘している（橋口 2018）。

本地域における古墳は低地部分には形成されず、丘陵や台地など標高が周囲よりも高いところにあり、かつそういった部分の縁付近に造営する傾向にある。飯田溝はそういった意味で上官塚側と塔ノ木側を隔てる区画のような機能を果たしている（第 10 図）。

これまで飯田溝の形成理由については直接的に触れる文献を見いだせなかったが、平成 28 年熊本地震後に布田川断層の延長と考えられるようになり、北甘木断層と命名され、飯田溝は地溝帯であるとされた（熊原ほか 2017）。

第２節　遺跡の歴史的環境

上官塚を含めてこの辺り一帯は「塚」という名前が多くつく地域であることは第 2, ３集において指摘したとおりである（橋口 2017,2019）。また、ほかの歴史的環境についてもそちらで触れているので本稿では省略する。



第 10 図　飯田溝と古墳の分布

第3章　調査の方法と状況

第１節　調査の方法

１　調査区・グリッドの設定

（１）調査区の設定

調査後耕作時の原状に戻すという制約を受けていたことから原則として畑一筆あたりに１つという調査区を設定し、調査を実施している。

調査に先立って表土剥ぎを重機で実施し、調査区を設定している。ただし、時として一筆地内であっても畑地内で排土を折り返した際それぞれを別の調査区としている場合もあり、命名に際しては統一的ではない。

（２）グリッドの設定

国土座標（Tokyo Datum）による 50 mメッシュの大グリッドを設定し､南北方向にＡ～Ｓ、東西方向に１～30 に基づく大グリッド番号を設定、さらにそれぞれを 10 m間隔で 25 等分することで 10 mメッシュとしている。

（３）座標の修正

遺物の取り上げや手書きの図面については、上記のグリッドに基づいて取り上げ・作成がなされているが、報告書に記載するにあたって旧測地系による位置情報を載せることは出来ないので、国土地理院の Web 版 TKY2JGD により座標の変換を実施した。

これによりグリッド原点の座標は X:-28627.927，Y:-21570.914 にシフトしている。そのため、本稿図中に表示される座標とグリッドの杭座標には差が生じ、新測地系でのグリッド杭座標は必ずしも整った数字の上にあるわけではないことを断っておく。

２　表土の掘削と遺構の検出

表土の掘削はバックホウにより行い、包含層については人力により行った。遺構検出についてはニガシロ層まで削平されていることが多いためその面で揃えて遺構検出を行っている。

３　記録作成

図面等記録については、グリッドを基準とした方眼上からの距離に基づいて手書きによる実測図を作成している。遺構図面は基本的に縮尺 1/40 により作成され、必要に応じて 1/10、1/20 の縮尺で個別図面を作成した。

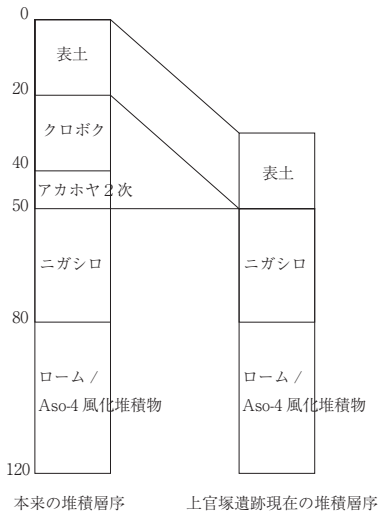
４　写真撮影

現場での写真撮影は、35㎜フィルムカメラ（Nikon 社製 F3）を用いてカラーポジ及びモノクロ写真を撮影した。

第２節　層序

本遺跡当該調査区における土層の基本情報となる土層標準が作成されておらず､不明である。

最近実施された付近の調査区における土層堆積状況を鑑みるに、熊本県中部地域における丘陵地の土層堆積状況と似通っており、上層のクロボク土、アカホヤの２次堆積土、AT を含むニガシロ、黄褐色のローム、Aso-4 風化堆積物の順に堆積している。ただし、本遺跡においては上層の削平が著しく表土下はニガシロ上面付近まで削り込まれており、アカホヤ２次堆積土を認めるのは稀であり、遺構検出面もニガシロとなることが多い（第 11 図）。そのためニガシロに到達し、さらに下層のロームまで掘削が及んでいるような遺構については上部を飛ばしながらも残存し、反対にニガシロに到達しない遺構については削平されていることが多い。こうした後世の２次的な営為により遺構の多くは消失しているため、今回確認できた遺構のほとんどはそうした削平を免れた一部のものにしか過ぎないことを示している。



第 11 図　土層堆積概念図

第３節　遺構・遺物

１　遺構

今回報告するのは上官塚遺跡の北端に位置する部分であり、北に行けば行くほどに遺構の密度が低くなっている。これは前節のところで述べたが削平により遺構が消失した可能性が高い（第 12 図）。

（１）遺構の種類

残存している遺構を列記すると、古墳（周溝・内部主体）、甕棺、土壙墓、土坑が確認されている。

（２）遺構の数量

数を見ると古墳は 5 基、甕棺は 59 基、土壙墓は 109 基と密度が高い。これらについては別章を設けて報告していくが、それぞれ群をなしていると言える。

（３）遺構の時期

遺構の形成時期を考えるとニガシロ（旧石器時代～縄文時代早期）上面を生活面としているものは確認できていない。クロボク層から切り込む時代のものがほとんどであることから、縄文時代前期以降のものと考えるのが妥当である。また、遺構の形状・性質から調査区内において残存した遺構は弥生時代～中世にかけてのものに限定されると判断している。特に弥生時代と古墳時代にその重点が置かれるものと考えているが先述したように削平により消失したと考えられる遺構が多いと思われるので、実態については不明な点が多々あるものとする。

２　遺物

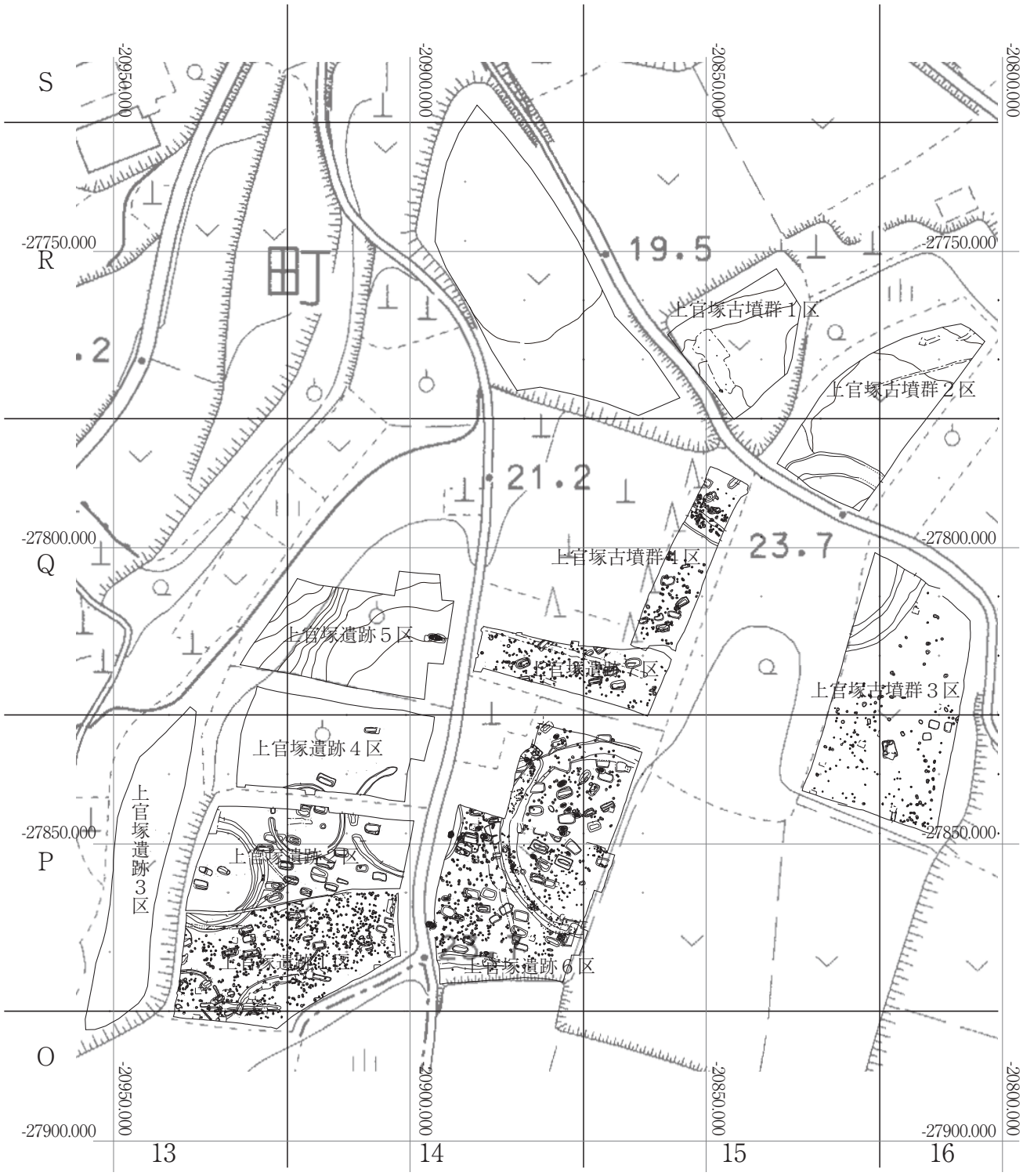
（１）遺物の種類

削平の影響を受けつつも包含層中に含まれる遺物を見てみると縄文時代の土器や石器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・磁器が出土しており、遺構の年代観とほぼ矛盾しない。

（２）遺物の数量

種類・数量の観点から見るとやはり遺構が多い弥生時代・古墳時代のものが大半を占める。そのほかの時代については一定程度存在するもののこの２者に比べると少ない印象を受ける。これも遺構における年代観を反映しているものと思われ、本調査区における中心時期は弥生時代～古墳時代にかけてと言っても良いかもしれない。

次章以降各時代の遺構・遺物に関する詳細を報告していくこととする。



※グリッドは旧測地系（TokyoDatum）で設定されたものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている。

第 12 図　調査区遺構配置状況

第4章　縄文時代

第１節　縄文時代

同時期の遺構は確認されていない。
遺物も上官塚遺跡の南側に比べて量は少なく、縄文時代における遺跡の中心が南側に偏っていることを示しているものと思われる。

１　土器

あまり数は多くないが２点呈示する。１は黒色磨研土器の深鉢で、口縁部に３条の沈線が施される。口縁下部で内側へ屈曲し、その後再び外反して胴部中頃で内側へ屈曲する。底部はやや幅広の平底と考えられる。外器面・内器面ともにミガキが施されている。

２は壷のような形状のもので､口縁部に１条、胴部に１条沈線が施されている。器面が荒れているため外器面の調整は不明であるがミガキが施されていたものと思われる。

２　石器

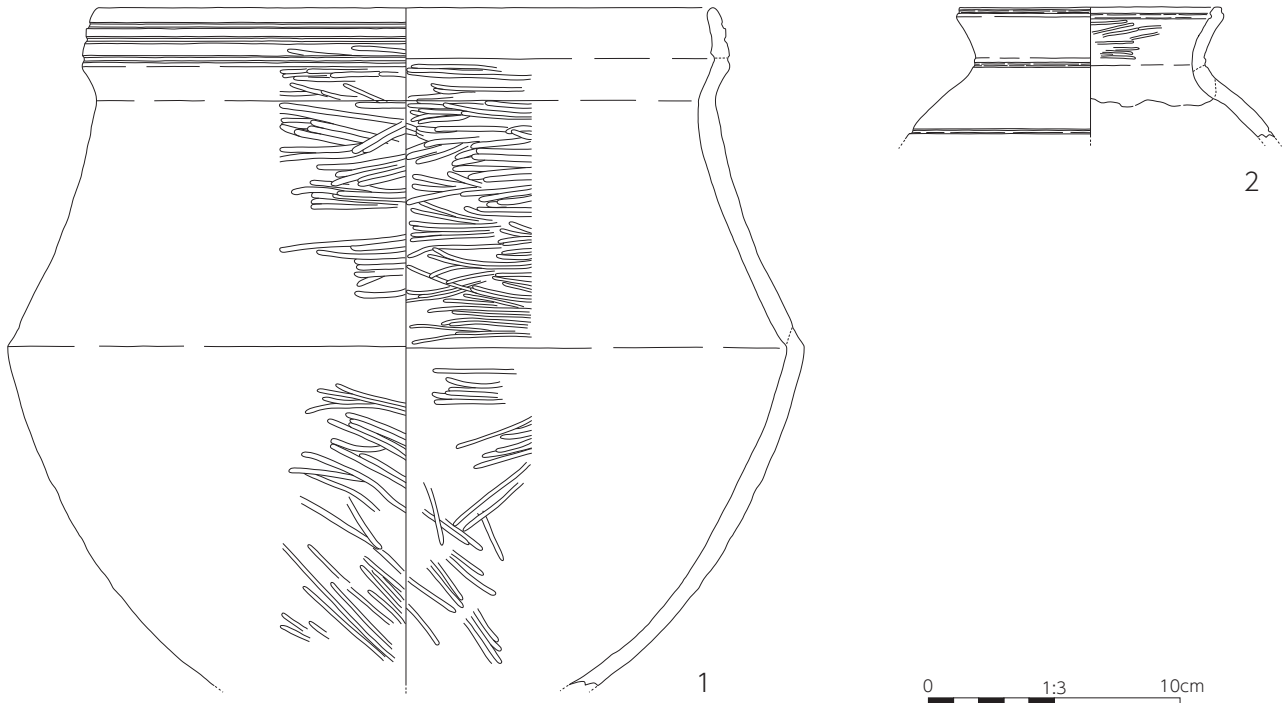
（１）削器

Ｌ１，Ｌ２は削器である。Ｌ１は分厚な剥片を素材として縁辺分を粗く調整し、その後刃部になる部分に調整を加えている。Ｌ２はＬ１よりも厚い剥片を素材としており、両面を大割によってある程度の形状とした後細かい調整により刃部を形成している。

（２）打製石斧

Ｌ３～L13は打製石斧である。概ね粗い打割のあと細かい調整によって形状と刃部を調整するもので、断面は両面凸形状を呈する。多くは折損している。

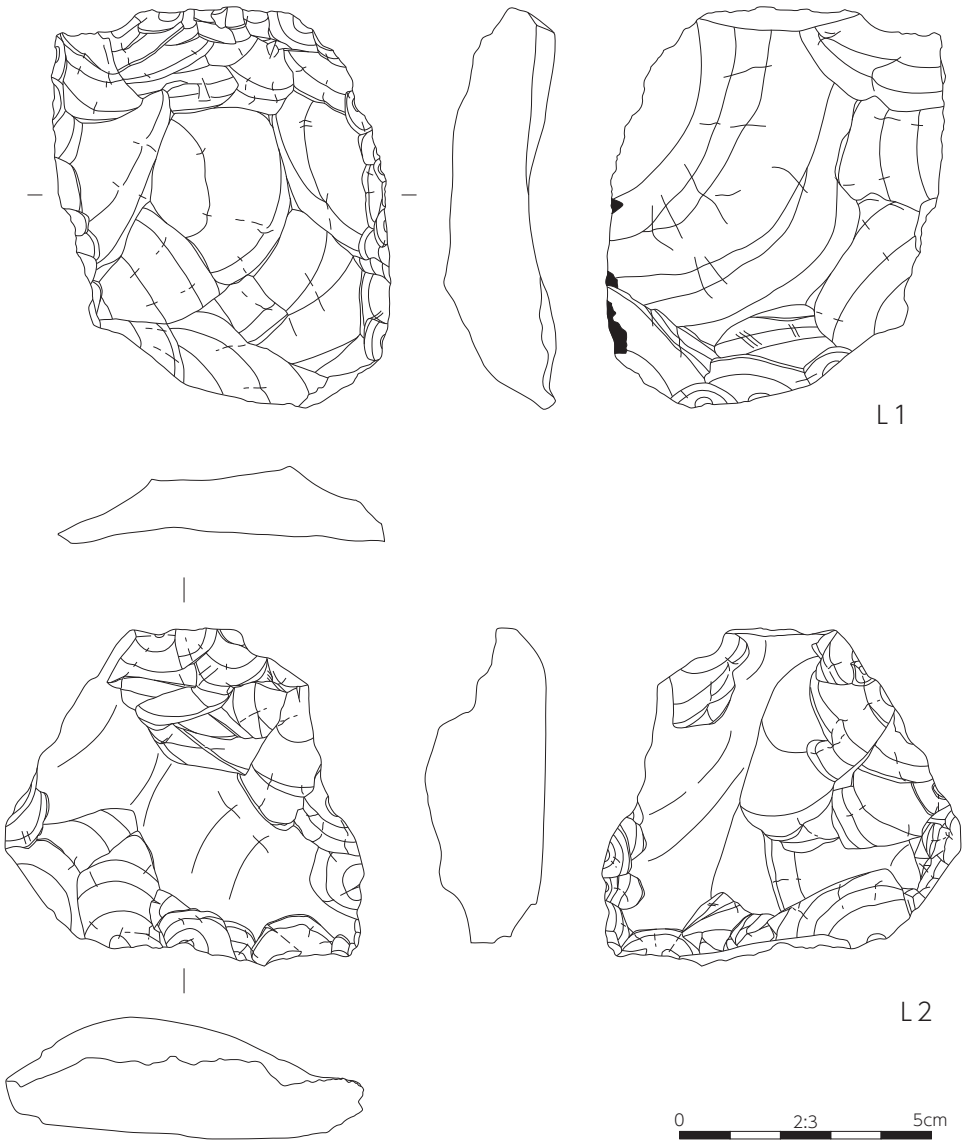
粗割後の調整については細かく入れていって整えるもの（L3～L5)、ある程度側面に調整を入れて形を整える程度にしているもの（L6



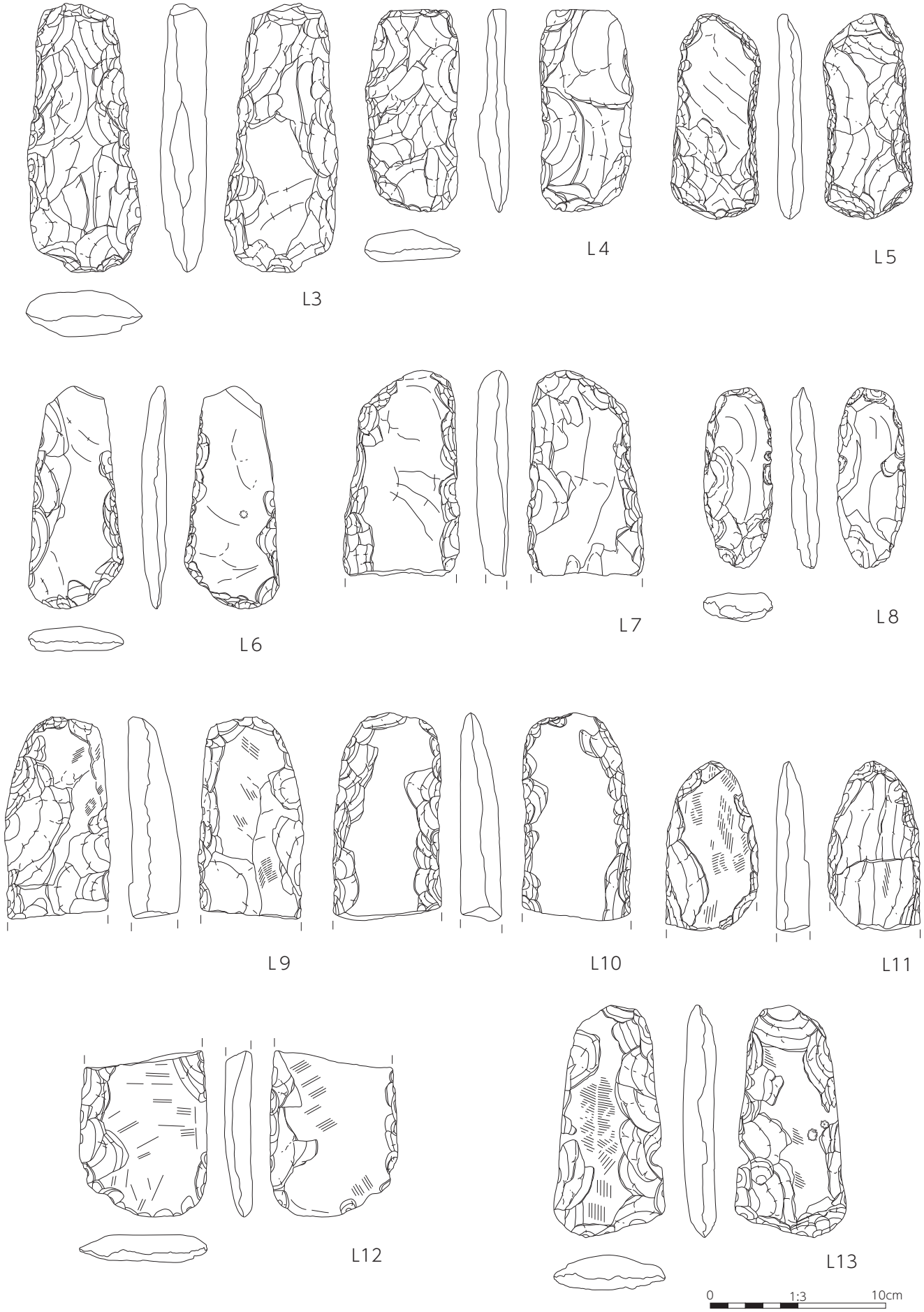
第13図　包含層出土遺物実測図（縄文土器）

～ L8)、背面等に研磨を施すもの（L9 ～ L13）などがある。

また、L8 は他のものに比べて小さく、刃部も幅が狭いことから、他のものとは別の用途で作られたものと思われる。



第 14 図　包含層出土遺物実測図（石器）



第 15 図　包含層出土遺物実測図（打製石斧）

第１表　縄文土器（包含層）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材(胎土)	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
1	1		P13-20	－	縄文土器		深鉢	口縁～底部	(24.4)	(26.9)	－	長石、角閃石、雲母	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	良好	外器面にケズリ痕あり 口縁に沈線３条あり
2	1		P13-25	－	縄文土器		鉢	口縁～頸部	10.6	(5.2)	－	長石、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ	ナデ ミガキ	良好	口縁の内器面に煤付着、粘土貼り付け痕あり 外器面口縁、頸部、胴部に沈線各1条 内器面口縁に沈線１条

第２表　石器観察表（縄文時代）

挿図番号	区	グリット	遺構番号	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
L1	6	P14-14			スクレイパー	8.09	6.85	2.3	115.44	
L2	6		SZ09	2層一括	スクレイパー	6.25	6.76	2.4	108.01	
L3	2	P14-6			石斧	15.58	6.69	2.68	313.41	
L4	2	P13-15	SZ05		石斧	11.69	5.45	1.98	103.14	
L5	1			一括	石斧	11.81	5.01	1.54	134.61	
L6	2	P14-6			石斧	12.8	5.52	1.42	123.52	
L7	6	P14-20	SI18		石斧	11.9	6.62	1.89	181.6	
L8	2			一括	石斧	10.41	3.98	1.62	84.88	
L9	1			一括	石斧	11.28	5.89	3.04	225.94	
L10	6	P14-15		一括	石斧	11.97	6.26	2.4	249.85	
L11	1			一括	石斧	9.7	5.28	1.97	136.31	
L12	2	P13-20	ST25		石斧	9.61	7.45	1.6	162.95	
L13	1			一括	石斧	13.4	6.4	2	194.08	

第5章　弥生時代

第1節　概観

弥生時代に属する遺構や遺物が確認された。特に甕棺が59基出土するなど特徴的である。一方で同時代の住居など集落機能の存在を示す遺構は見つかっていない。前述したように地表面以下相当部分まで削平されたため地表面付近に設けられた遺構については消失した可能性は否定できない。

第2節　甕棺

1　甕棺の分布

（1）甕棺出土状況

本稿で取り扱う調査区で59基の甕棺を確認した。数だけ見ると割と多く感じるが、全体的に見ればこれもほんの一部であるに過ぎない。

事実、上官塚遺跡全体で見ると第17図のように甕棺墓群が広がっており、遺構密度を示すヒートマップで表現すると当該調査区における遺構出土密度は、最密集域に比べればそれほどに高くはないことがわかる（第16図）。

（2）甕棺の分布域

個別に触れていく前に、全体像としての上官塚遺跡における甕棺墓群について触れておいた方が本稿における甕棺墓のあり方を理解しやすいと思うので、ここで触れておくことにする。

上官塚遺跡全体で甕棺は700基近く出土しており、塔ノ木遺跡での25基を加えると今回の土地区画整理事業に伴う調査で出土した甕棺の数は、ゆうに700基を超える計算となる。

分布の状況を見てみると、上官塚遺跡全体に分布しており、いくつかの最密集区域が存在する。

（3）甕棺の時期

全てを細かく把握しているわけではないが、時期としては弥生時代中期前半～後期前半にかけてであり、これを遡ることやこれより下る時期の甕棺が見当たらない点は以前報告した塔ノ木遺跡における状況と同じである。

ただし細かい時期に着目した上で上官塚の甕棺分布のあり方を見ることでその時期ごとにおける傾向がありそうだと見ており、後の考察の部分で試みることとする。

（4）地形と甕棺の分布

地形的な観点から見ると、上官塚遺跡と飯田溝が接する部分に小高い微高地が存在し、そこでの甕棺出土数は比較的少なく、むしろそれを取り囲むように帯状の分布を示している（第17図）。また、微高地の頂部付近には方形周溝がかたまって確認されており、他の部分では古墳は見られるものの方形周溝は見られないなど、方形周溝は特定部分にしか存在しない傾向にある。

さらに、上官塚遺跡の西側、標高的にやや下る部分において断面V字の大溝が南北方向に約250ｍ走っており、この溝を境に東側に甕棺の最密集域があり、反対に西側は数が少なくかつ比較的分布密度が低い傾向にある。

これを見るに大溝の東側が墓域、西が集落域と見ることができるのかもしれない。ちなみに集落域が想定される部分については土地区画整理事業の範囲外であることから調査が行われていないため、推定の域を出ない。

一方で「大溝」と「微高地」、「飯田溝」の3要素をして弥生時代の上官塚遺跡における土地区画を構成しているものと推定する。

（5）上官塚遺跡北端部における甕棺墓域

以上のような状況にあって今回報告する甕棺墓群は、微高地を取り巻く帯状の分布の一部と見ることができる。北端の上官塚古墳群あたりではほとんど確認されていないが、削平に伴う

第 16 図　本稿で取り扱う範囲における甕棺出土分布図

結果である可能性も否定できない。

甕棺は上官塚の１，２，４，６，７区で確認されており、地形的に斜面にあたる３，５区（１基のみ）ではほぼ確認されていない。基本的に尾根筋上か緩斜面上に造営され、斜度がきつくなる部分には造らないという傾向があるのかもしれない。

また、密度については全体的な観点から見るとあまり集中しているようには見えない北端付近ではあるが、北端付近に絞ってみたところでは２，６，７区の一部に集中する部分があり、特に２，７区におけるそれは石器製作址における「ブロック」のような状態である。

この分布塊のことを「群」として扱うこととし、それぞれの群を第〇群というように呼称する。また、密度は群に比べて高くはないが群の近くにあってある程度の密集を示すものを「支群」とし、群の枝として扱うこととする。よって最近傍の群から番号を取り、第〇支群と呼称する。また、それらに属さない、散布的な分布を示す甕棺については、各群の周辺として扱う。

次項において甕棺個別の特徴について報告していくが、まず２，６，７区における集中域について取り上げ、その後群周辺の甕棺を扱うものとする。また、時期的な観点を反映した分布については、本節最終項において検討する。

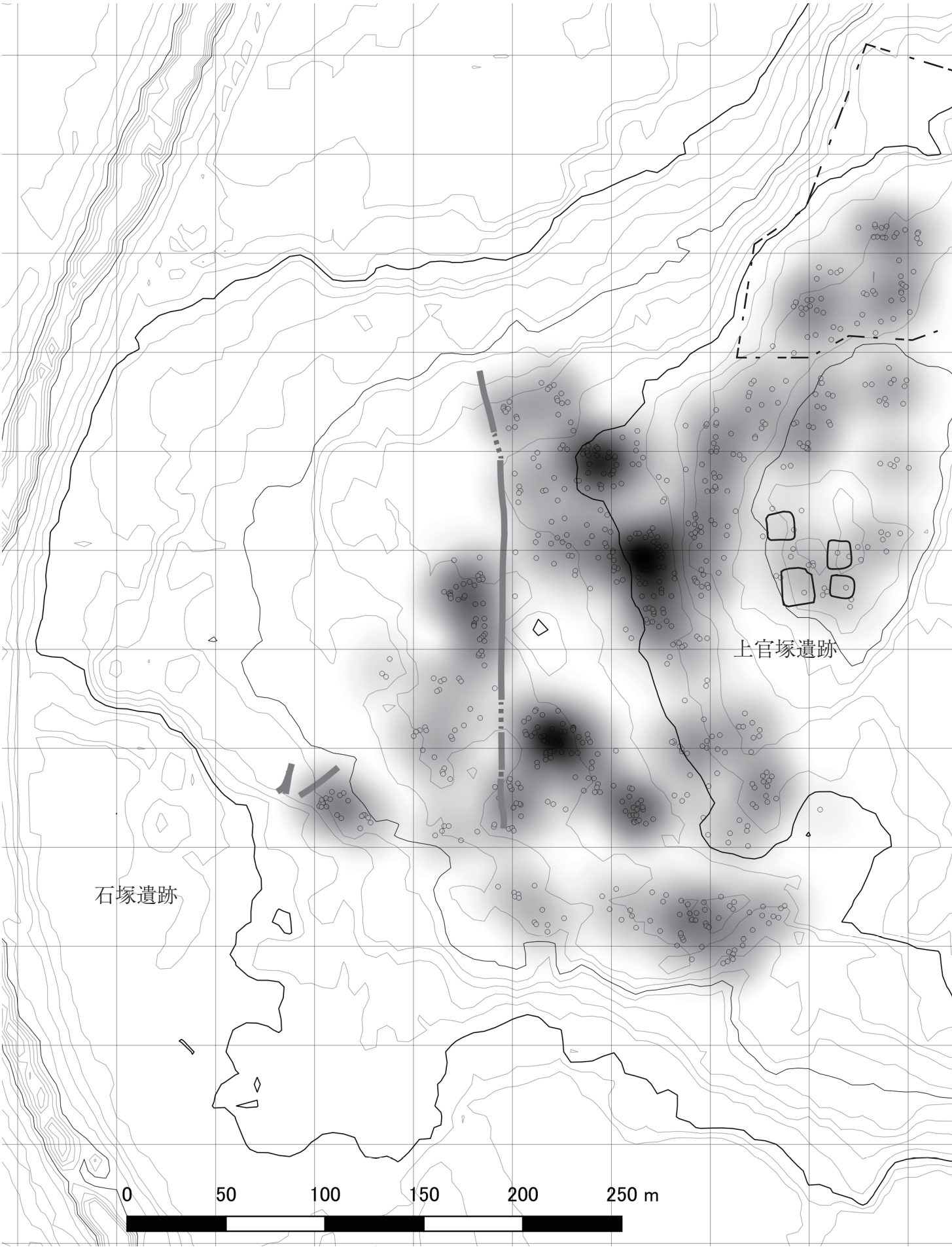
２　各甕棺の特徴

（１）甕棺の復元・実測対象

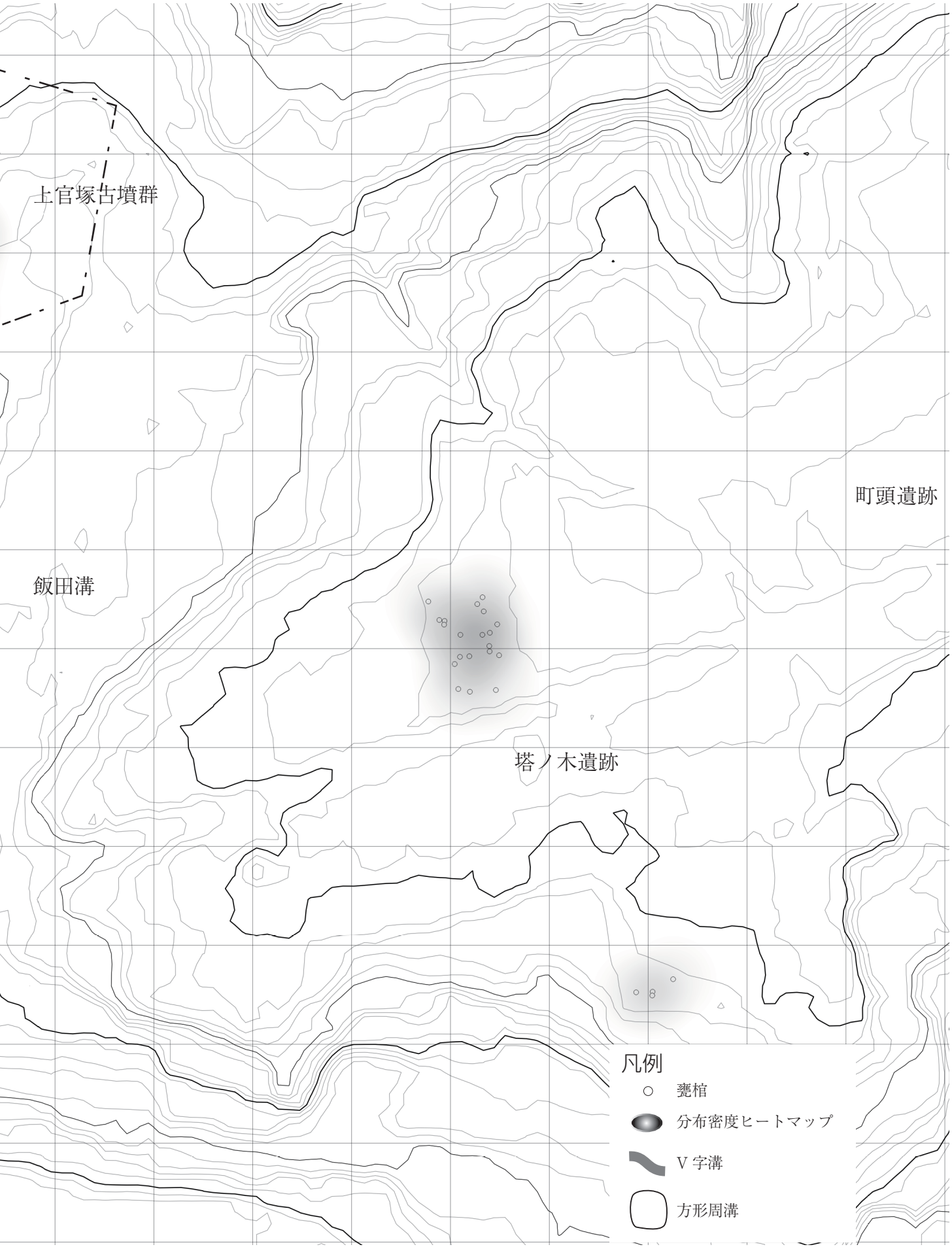
遺跡から出土した甕棺全点を復元し掲載するには時間的・労力的に制限があるため、残存率が悪いものや遺構平面図の状態で型式が容易に推測できるものは対象から外し、復元・実測したものは 59 基のうち 13 基に留めた。

（２）甕の大きさによる区分

なお、以後個別の甕棺について言及していくこととなるがその際組み合わせられる甕（鉢）の大きさに差が見られる。基本的に遺体を納める側（主棺）は大きく、納棺後蓋となる側（副棺）は小さい傾向にある。同規模のものが組み



第 17 図　北甘木台



地における甕棺分布

合わせられることもあるが、本遺跡のこの調査区における甕棺は副棺側が比較的小さいものを選択する傾向が強い。

また、主棺の大きさにもばらつきがある。埋葬対象者の大きさに起因している甕の選択（成人棺・小児棺）、型式に起因する大きさの規制がそこに存在しており、各甕棺における１つの特徴であると考える。

そのことから甕の大きさ（器高）を基準として区分し、その数値区分については基本的に塔ノ木遺跡で用いた区分を踏襲する（嘉島町教育委員会 2018）が、中型において細分できる可能性が出てきたため、区分を１つ増やして４区分とする。

大きさの区分については、以下のとおり。

ア　特大型　100cm 前後
イ　大　型　80cm 前後
ウ　中　型　60cm 前後
エ　小　型　40cm 前後よりも小さい

３　甕棺第１群（第 18 図）

第１群に属するのは２区出土の甕棺で 46 号、47 号、48 号、49 号、50 号、51 号、52 号、53 号、54 号、55 号、56 号（11 基）がこれに含まれる。

古墳（SZ05,07）が後世において築造されており群内の甕棺の一部（46,47,49,53,54 号）は周溝に削られるなどの影響を受けている。一方で墳丘の真下にあたる部分ではそれほど影響を受けていないものも見られることから、古墳築造時に地山まで到達する地形の平坦化は行われていないのではないかと推定する。

（１）　46 号甕棺（中型甕 - 大型鉢、第 19 図上段、第 20 図）

ア　遺構の特徴

楕円形の墓壙に対しやや斜方に据えて遺体を納める。墓壙の上部を削平により失っているため、全体の約 1/3 がない。

イ　主棺

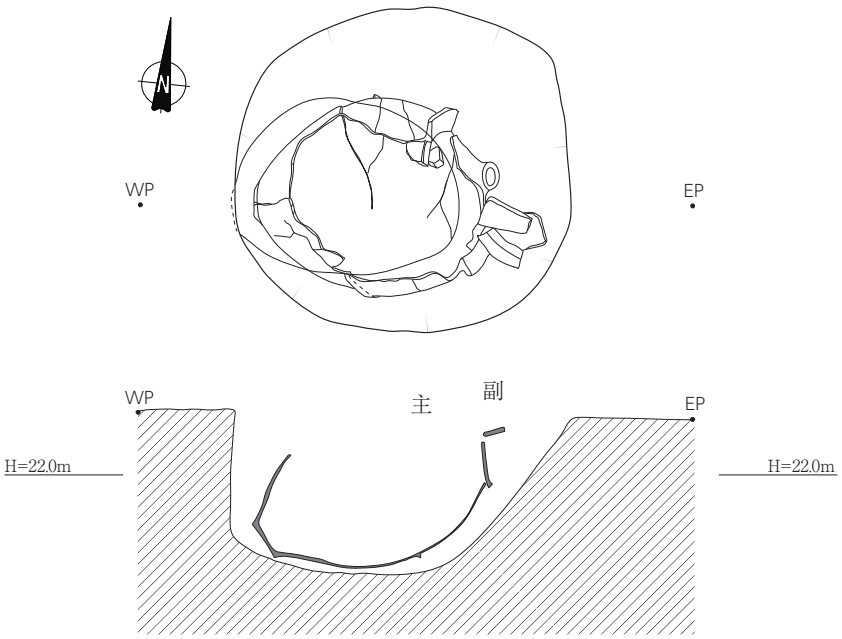
中型の甕で、口縁はくの字を呈する。口縁直下から強く張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。胴部下半も張り出しつつ胴部へ至り、底部直上でくびれる。底部は幅広の平底である。

ウ　副棺

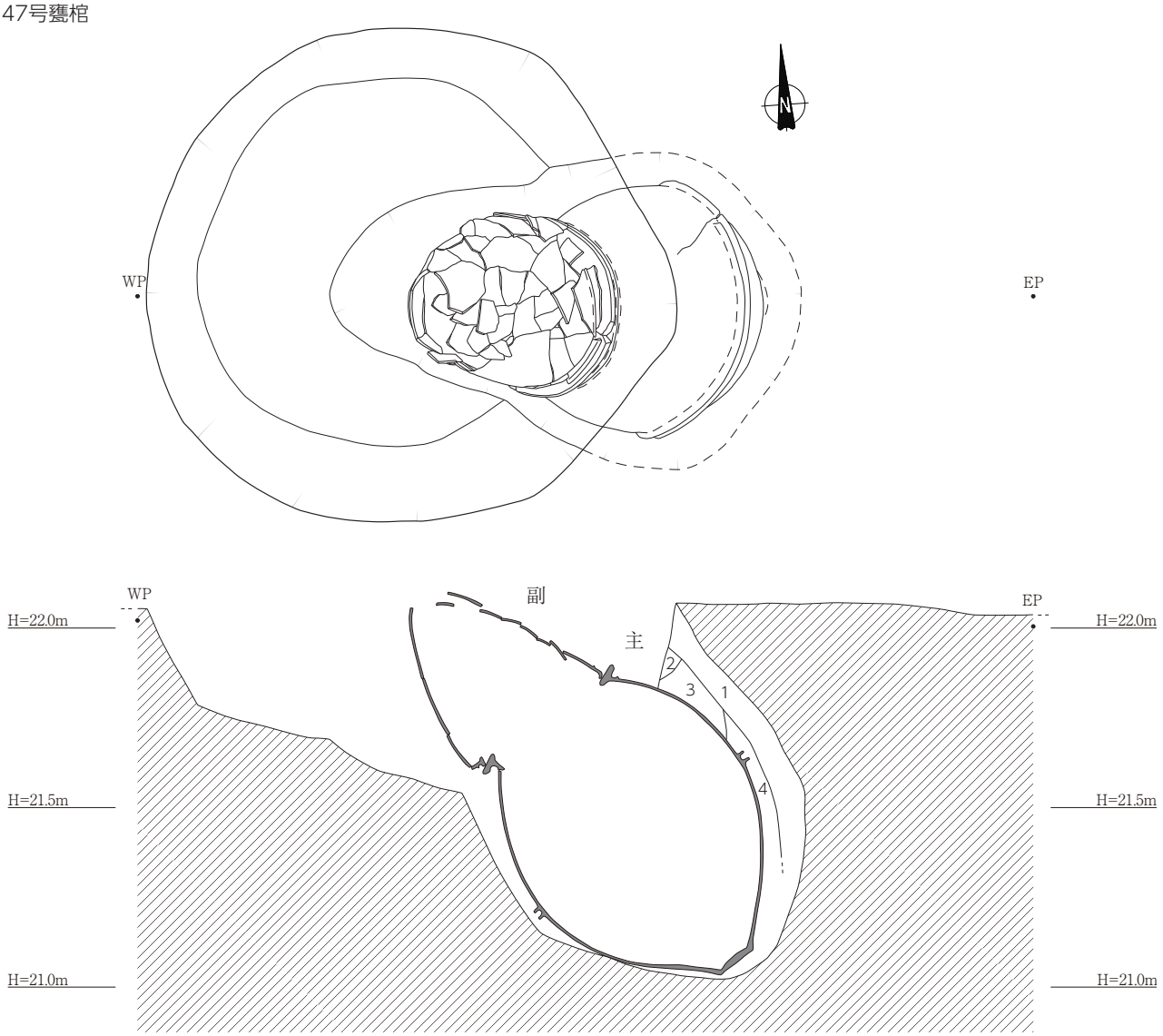
大型の鉢で口縁は角張っており鍔状にめぐ

第 18 図　甕棺第１群の分布

46 号甕棺



47号甕棺



0　1:20　50cm

土層注記
1　地山、褐色ローム層
2　暗褐色、やや締まる、小礫若干混じる
3　褐色、ロームの土の崩れたものか、詮にしているものか?
　締まりあり（地山よりはほぐれている）、小礫含む
4　暗褐色、締まりなし、しっとり、小礫若干入り込む
　粘性あり、粒子はやや粗い、安置時に詰め込んだ
　ものにしてはほぐれすぎている

第 19 図　甕棺第 1 群の甕棺（46，47 号甕棺）

る。直線状に胴部下半まで向かい、底部付近で屈曲する。底部は平底である。

エ　型式等

甕の特徴からＫⅢａ期とする。

（２）　47 号甕棺（大型甕 - 中型甕、第 19 図下段）

ア　遺構の特徴

円形に近い墓壙の底面付近から斜め方向に掘って袋状の部分を作り出す。その部分に主棺を据えるため、主棺は斜め上方を向く。遺体を安置後中型の甕で蓋とする。

イ　主棺

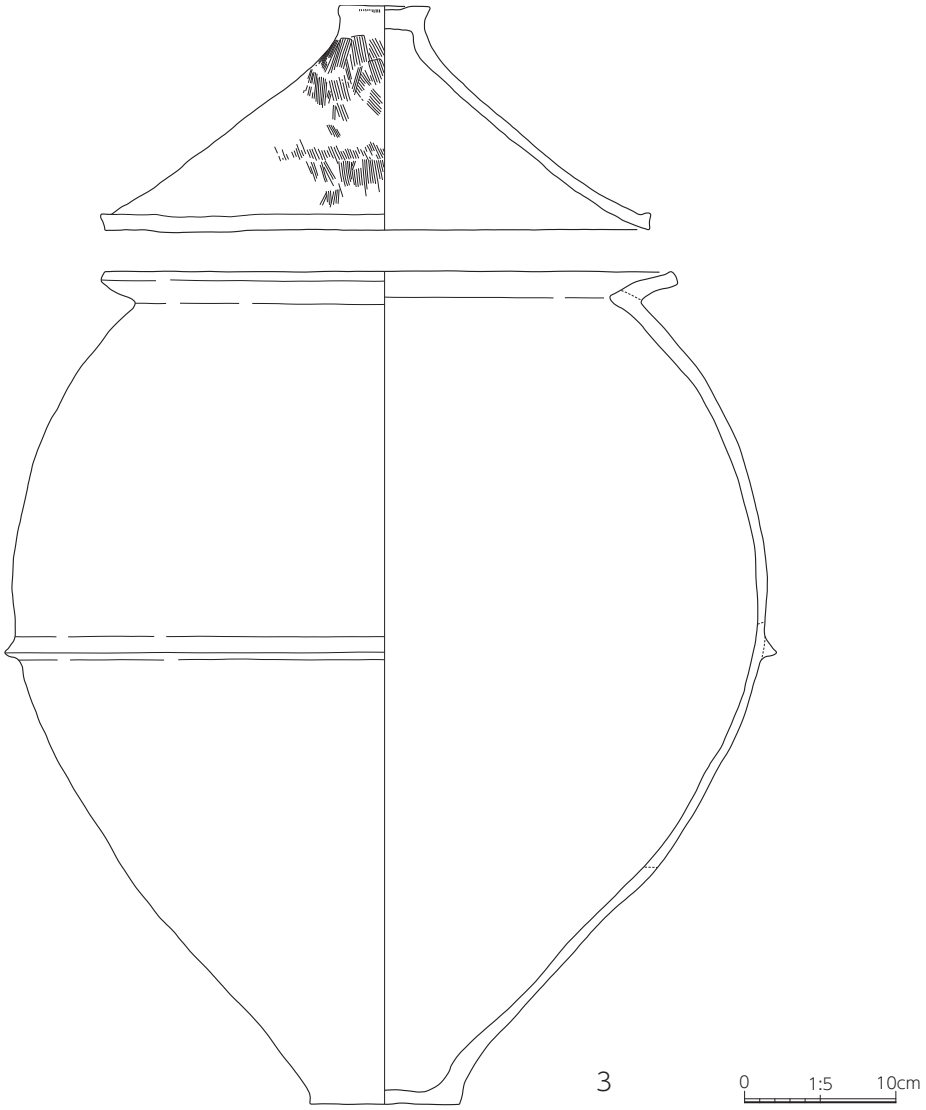
若干内傾する口縁で、口唇部は丸くなる。口縁部直下から強く張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。胴部下半も膨らみつつ底部へ向かい底部直上付近でくびれる。底部は平底である。突帯は口縁直下に断面三角形のものが１条、胴部中頃に断面三角形のものが２条巡る。胴部の突帯は間隔がやや広めである。

ウ　副棺

口縁を打ち欠いて合わせ口とするが、口縁の一部を合わせ口付近に噛ませている。胴部上方まで打ち欠くことで主棺の口径に合わせている。胴部中頃で最大胴部径となり、その後ゆるやかに底部へ向かう。底部を欠いており形状は不明であるが類似例から平底と推定する。胴部中頃に突帯を１条巡らす。

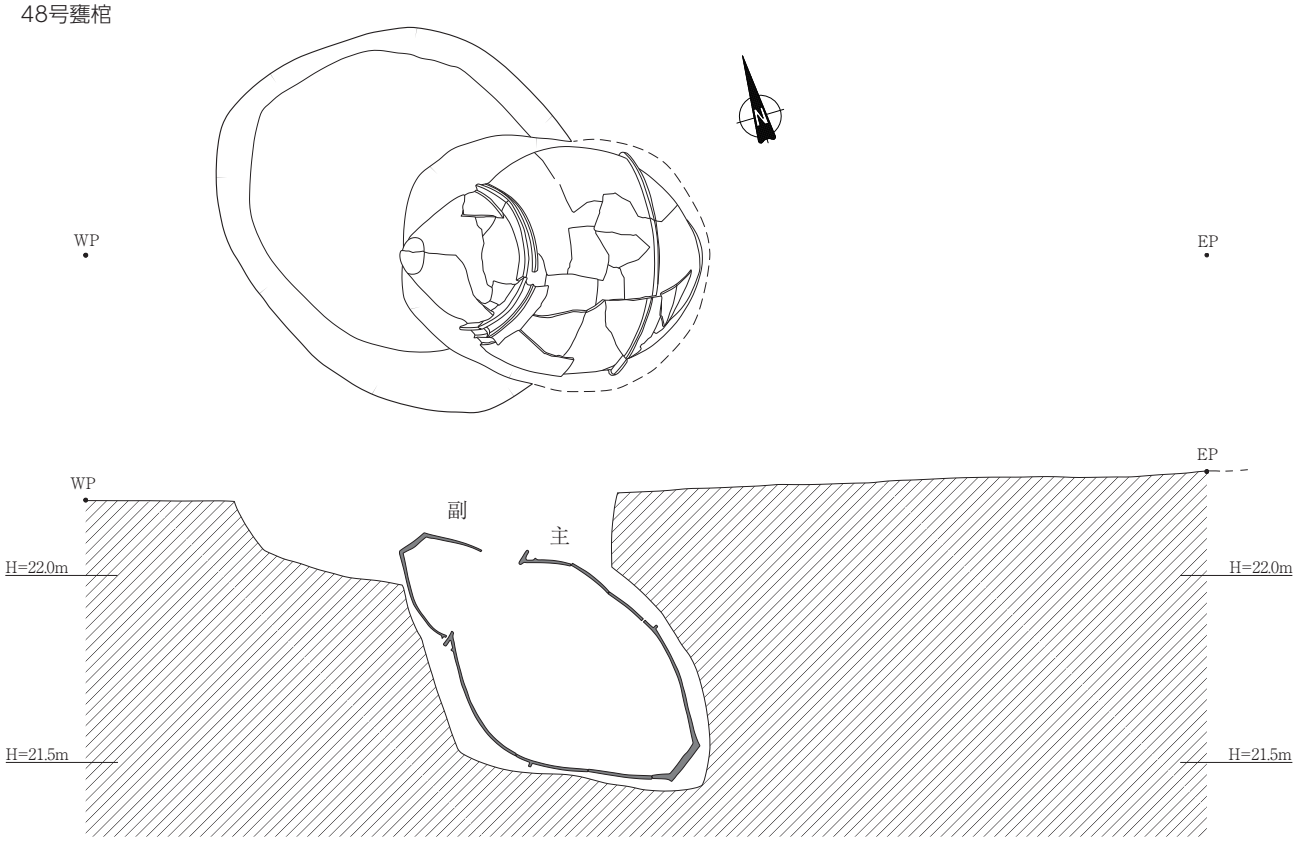
エ　型式等

特徴からＫⅢｂ期と推定する。

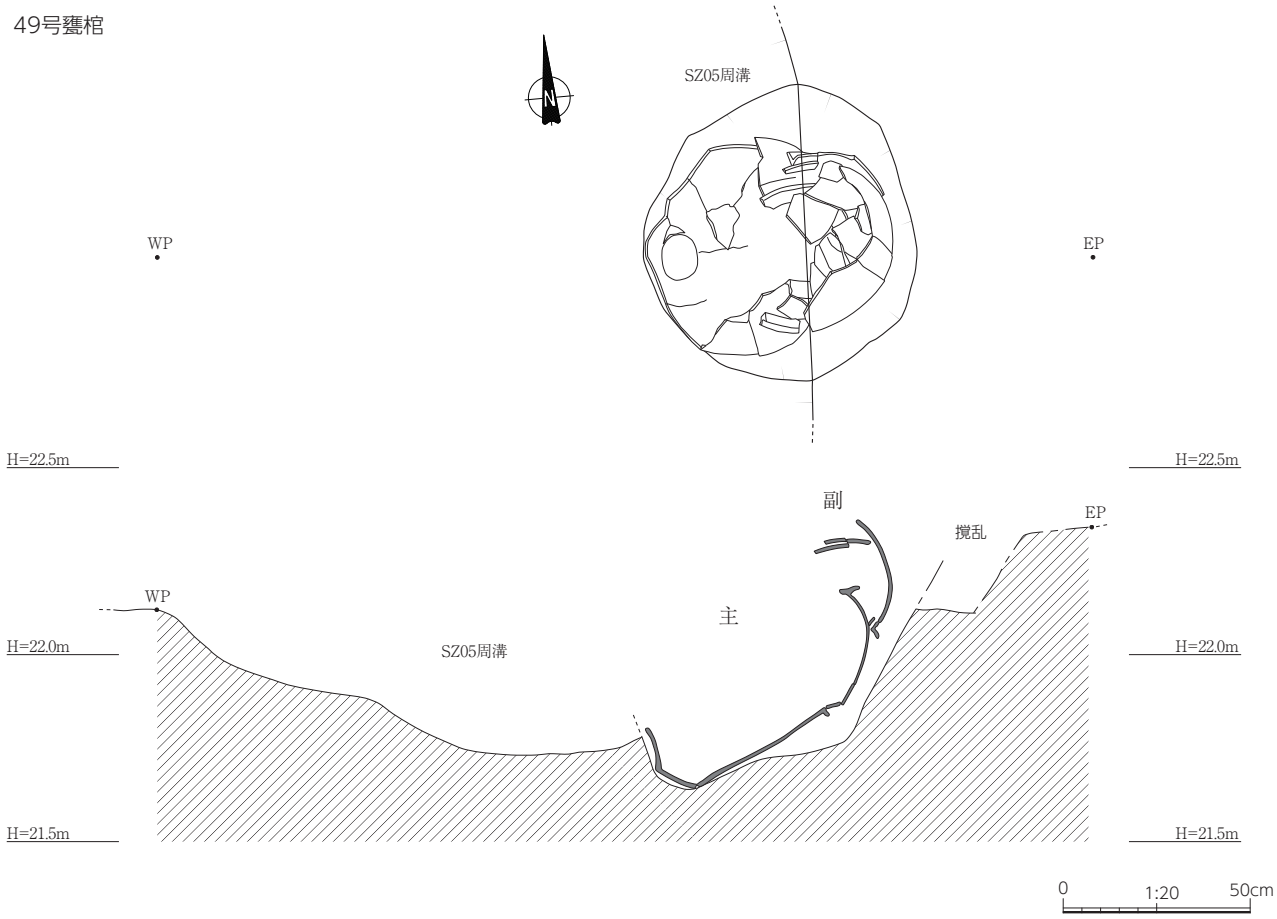


第 20 図　46 号甕棺実測図（甕棺第１群）

48号甕棺



49号甕棺

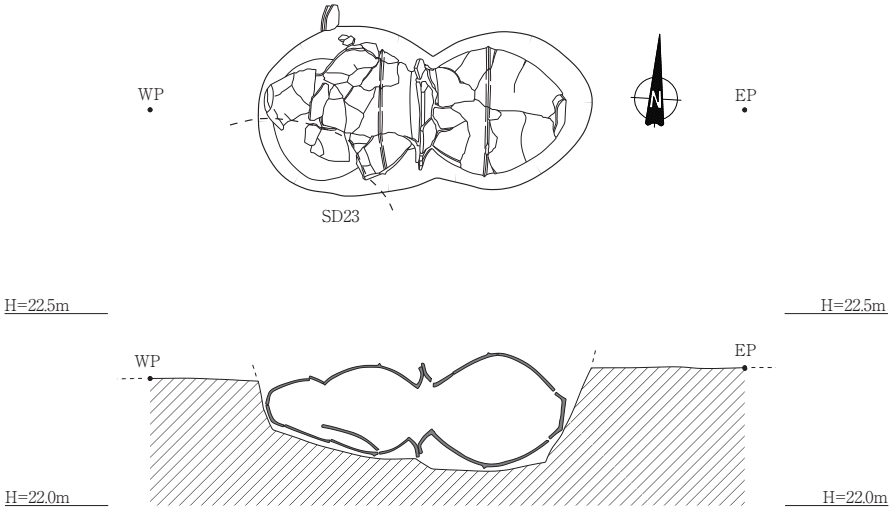


第 21 図　甕棺第 1 群の甕棺（48，49 号甕棺）

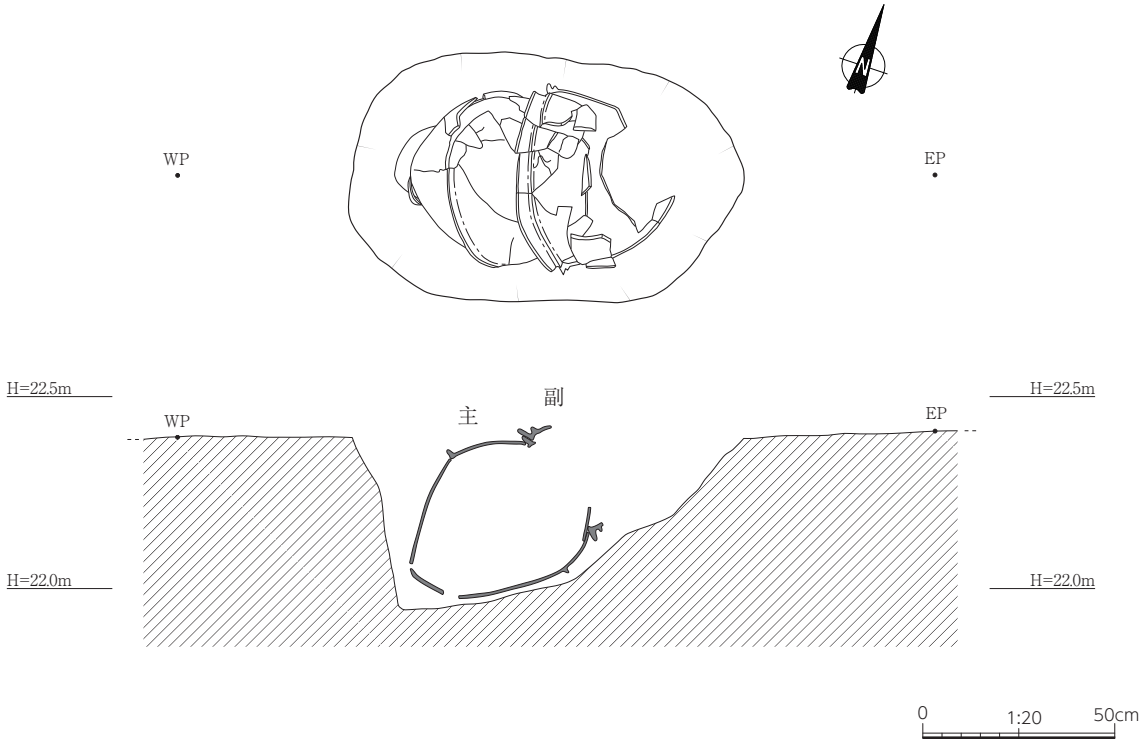
（3） 48号甕棺（中型甕 - 小型甕、第21図上段）
ア　遺構の特徴
47号と同様に円形に近い墓壙を掘り、底面付近を掘って袋状の部分を設けるがこちらは底面が平坦に近い。主棺はこの袋状部分に据えられ、斜め上方を向く。納棺後胴部中頃まで打ち欠いた小型甕を蓋として合わせ口としている。

イ　主棺
平坦な口縁で、口縁直下から外へ張り出し胴部中頃で最大胴部径となる。胴部下半で屈曲し、底部付近でくびれ底部へ至る。底部は幅広の平底である。突帯は口縁下部及び胴部下半に断面三角形のものが1条巡る。
ウ　副棺
胴部上半までを打ち欠いている。胴部下半で最大径を迎え、そこから屈曲して底部へ至る。底部はやや幅広の平底である。突帯は胴部中頃に断面三角形のものが1条巡る。
エ　型式等
特徴からＫⅢｂ期とする。
（4） 49号甕棺（中型甕 - 中型甕、第21図下段）
ア　遺構の特徴
SZ05直下にあり、周溝による削平を受けている。47，48号と同様に円形の墓壙を掘りその底面付近から袋状に掘り込んだ上で主棺を据えたものと思われる。方向としては斜め上方であるが若干角度がきつく、立ち気味である。納棺後中型甕を蓋として被せるが、主棺の口径が狭いことと副棺の口縁を打ち欠くなどはしていないことから主棺の胴部上半で合わせられており、少し風変わりな印象を受ける。
イ　主棺
内傾する鋤先状口縁で、口縁直下の部分がやや上方へ張り出しつつ肩状の部分を形成し、さらに外へ膨らみつつ胴部中頃で最大胴部径となる。そこから緩やかに底部へ収束していき、底部直上でくびれる。底部は平底である。
ウ　副棺
周溝と削平により大半を失っており形状は不確かであるが、中型の甕でくの字を呈する口縁部で胴部はやや外へ張り出す。
エ　型式等
特徴からＫⅢｃ期とする。
（5） 50号甕棺（小型甕 - 小型甕、第22図上段）
ア　遺構の特徴
墓壙の大半を失っており、構造については不明であるが、残存している部分を見る限り底面が平坦な楕円形の墓壙を掘り、そこに主棺を据えて納棺し、同形状の小型甕で蓋をするという形を取る。墓壙内の作業域は必要以上に大きく取られておらず、埋葬対象が小形（幼少者）であった可能性もある。
イ　主棺
口縁中頃が上方へ反る、くの字を呈する口縁部で、口縁下部で強く屈曲し、胴部中頃まで張り出しつつ中頃で最大径を迎え、そこから屈曲し上半と似た張り出しを保ちつつ底部へ至る。底部はやや幅広の平底である。胴部中頃に断面三角形の刻目突帯が1条巡る。
ウ　副棺
主棺とほぼ形状を同じくする。
エ　型式等
特徴からＫⅢｂ期とする。
（6） 51号甕棺（中型甕 - 中型甕、第22図下段）
ア　遺構の特徴
段を有する長楕円形の墓壙で、掘りくぼめられた中に主棺を据え、納棺後中型甕を主棺の口縁に接するようにして合わせ口とする。墓壙底面は傾斜しており、主棺はやや斜め上方を向く。墓壙上半は削平されており、副棺の大半を失っている。
イ　主棺
やや内傾する口縁で、口唇部付近が上方へ反る。口縁下部から外側へ張り出し、胴部中頃で最大径となり、下半から底部へ向かってやや直線的に収束する。底部は平底である。突帯は胴部中頃に断面三角形のものが1条巡る。
ウ　副棺
鋤先状口縁で胴部上半までの残存となり全体は不明である。口縁下部に断面三角形の突帯が1条巡る。
エ　型式等
特徴からＫⅢｂ期とする。
（7） 52号甕棺（中型甕 - 鉢、第23図上段）
ア　遺構の特徴
墓壙のほとんどを削平されており、長楕円形の墓壙底面付近が残る。そのうちの大半を占める主棺を水平に寝かせて納棺し、その後鉢を蓋として据えている。
イ　主棺

50号甕棺



51号甕棺



第 22 図　甕棺第 1 群の甕棺（50，51 号甕棺）

口唇部付近が上反する鋤先状口縁で、口縁下部から外側へ張り出す。胴部上半で最大径を迎え、そこから内側へ角度を変え膨らみつつ底部へ至る。底部は平底である。突帯は胴部中頃に断面三角形のものが１条巡る。

ウ　副棺

鉢形を呈するもので、平坦な口縁部から屈曲し、直線的に底部へ至る。底部は幅広の平底である。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ期とする。

（８）　53 号甕棺（大型甕 - 大型甕、第 23 図下段）

ア　遺構の特徴

SZ07 直下にあるため、甕の半分を消失する。墓壙の形状は隅丸の長方形となっているが、土壙墓を切り込んでいる可能性がある。棺は墓壙底面に対して水平に近い形で据えてある。同じ形状の甕を使用し、比較的小さめの大型甕の方に遺体を納め、大きめの方を口縁部を打ち欠いて蓋とする。

イ　主棺

副官に比べて比較的小さめの大型甕で、口縁は全体的にやや肥厚したくの字形を呈する。口縁直下から外へ強く張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。下半も外へ張り出しつつ底部へ向かいながらも底部は胴部径に対してやや幅狭であるため先すぼみ状になる。突帯は胴部中頃に断面三角形のものと断面コの字の刻目突帯が各１条巡る。

ウ　副棺

比較的大型の甕で、口縁部を打ち欠いている。口縁下部は外側へ強く張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。その後も下半付近まで張り出しつつ底部へ向かうが下半に至って屈曲し、ややすぼまりつつ底部へ向かう。底部は平底である。突帯は胴部中頃に断面三角形のものと断面コの字の突帯を１条ずつ巡らせる。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ期とする。

（９）　54 号甕棺（大型甕 - 中型？甕、第 24 図上段）

ア　遺構の特徴

SZ07 直下にあり、副棺のほとんど全てと主棺の半分を失っている。残存する墓壙が主棺の大きさとほぼ一緒であることから、墓壙の底面を袋状に掘り込んで主棺を差し込んでいるものと推定される。掘り込みはやや急角度であり主棺は斜め上方を向いている。

イ　主棺

内傾する鋤先状口縁で、口縁下部から外側へ張り出す。胴部上半で最大径を迎え、そこから内側へ角度を変えてゆるやかに底部へ向かって収束する。底部直上付近でくびれ、底部は平底である。突帯は口縁下部に断面三角形のものが１条、胴部中頃に断面三角形のものと断面コの字のものが各１条巡る。

ウ　副棺

ほとんど残存しない。口縁部は若干内傾する鋤先状口縁を呈する。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ期とする。

（10）55 号甕棺（小型甕 - 鉢、第 24 図下段）

ア　遺構の特徴

検出時に掘りすぎているためか墓壙をほとんど失っており、底面付近のみ残存する。墓壙の底面は緩く傾斜しており、主棺となる小型甕はやや斜方を向く。納棺後鉢で蓋をしている。鉢は小型甕の口径よりも大きく、被せた際に主棺の胴部上半あたりで合わさる。

イ　主棺

小型の甕で口縁は口唇部付近が外反し、その後内側へ入り込み、屈曲した後外側へ直線的に向かう。胴部中頃で最大径を迎え、底部へ向かって緩やかに収束する。底部は平底である。突帯は胴部上半で断面三角形のものが１条巡る。形態的に 50 号のものと似る。

ウ　副棺

鉢は平坦な鍔状の口縁で、屈曲して胴部は若干膨らみつつ緩やかな弧を描く。底部は幅広の平底である。52 号のものと似る。

エ　型式等

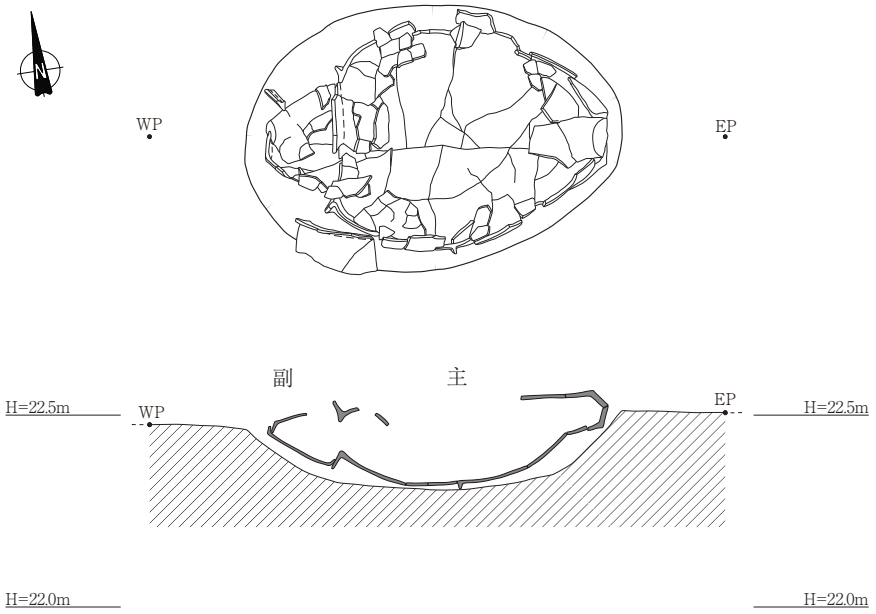
特徴から黒髪三式とする。

（11）56 号甕棺（小型精製甕 - 鉢、第 25 図）

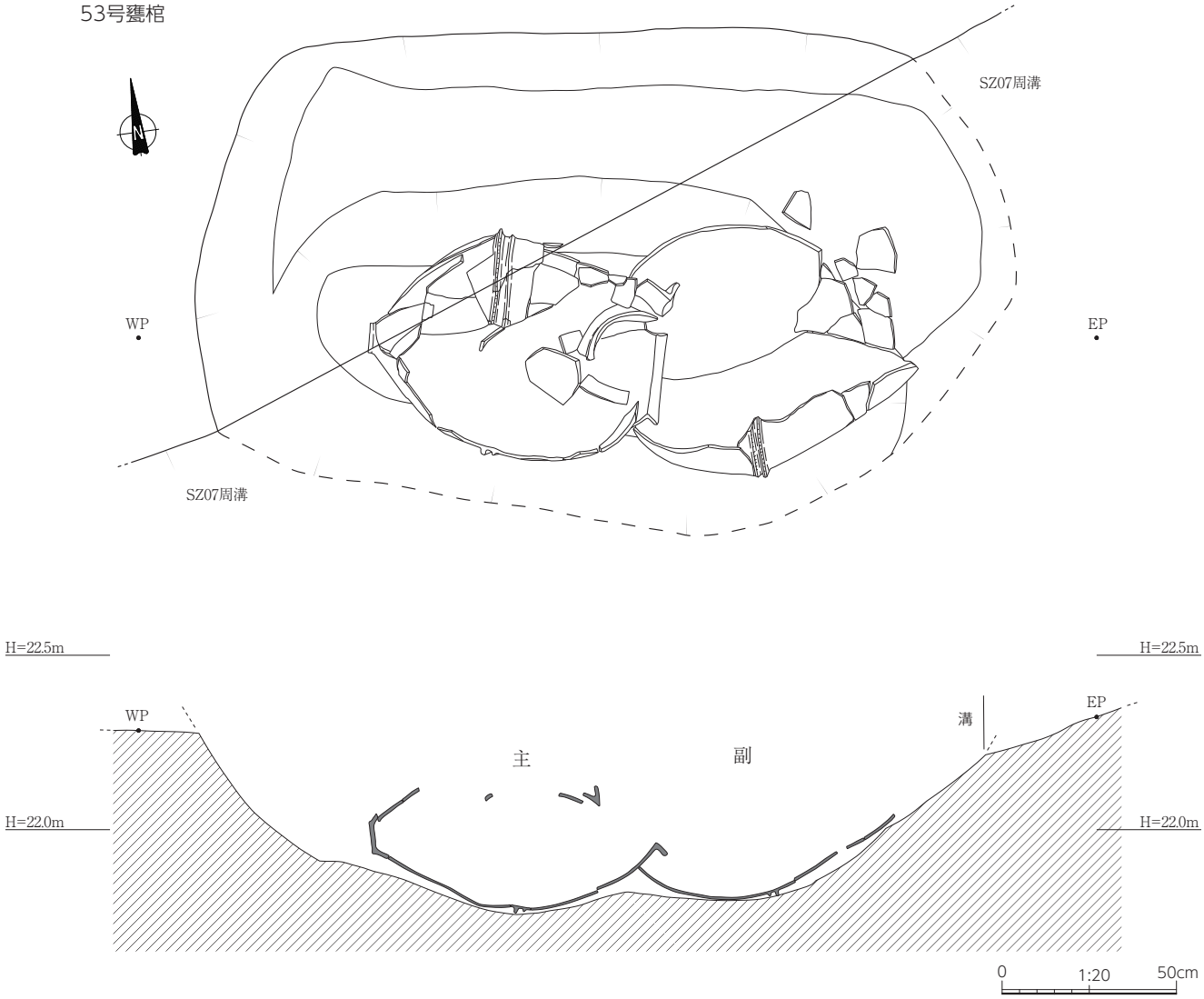
ア　遺構の特徴

削平により墓壙の 1/3 以上を失っている。その影響で甕の上半を欠く。段を有する墓壙で、浅く掘りくぼめた部分に主棺を据えて納棺後丸みを帯びた鉢を被せて蓋とする。主棺はやや斜

52号甕棺

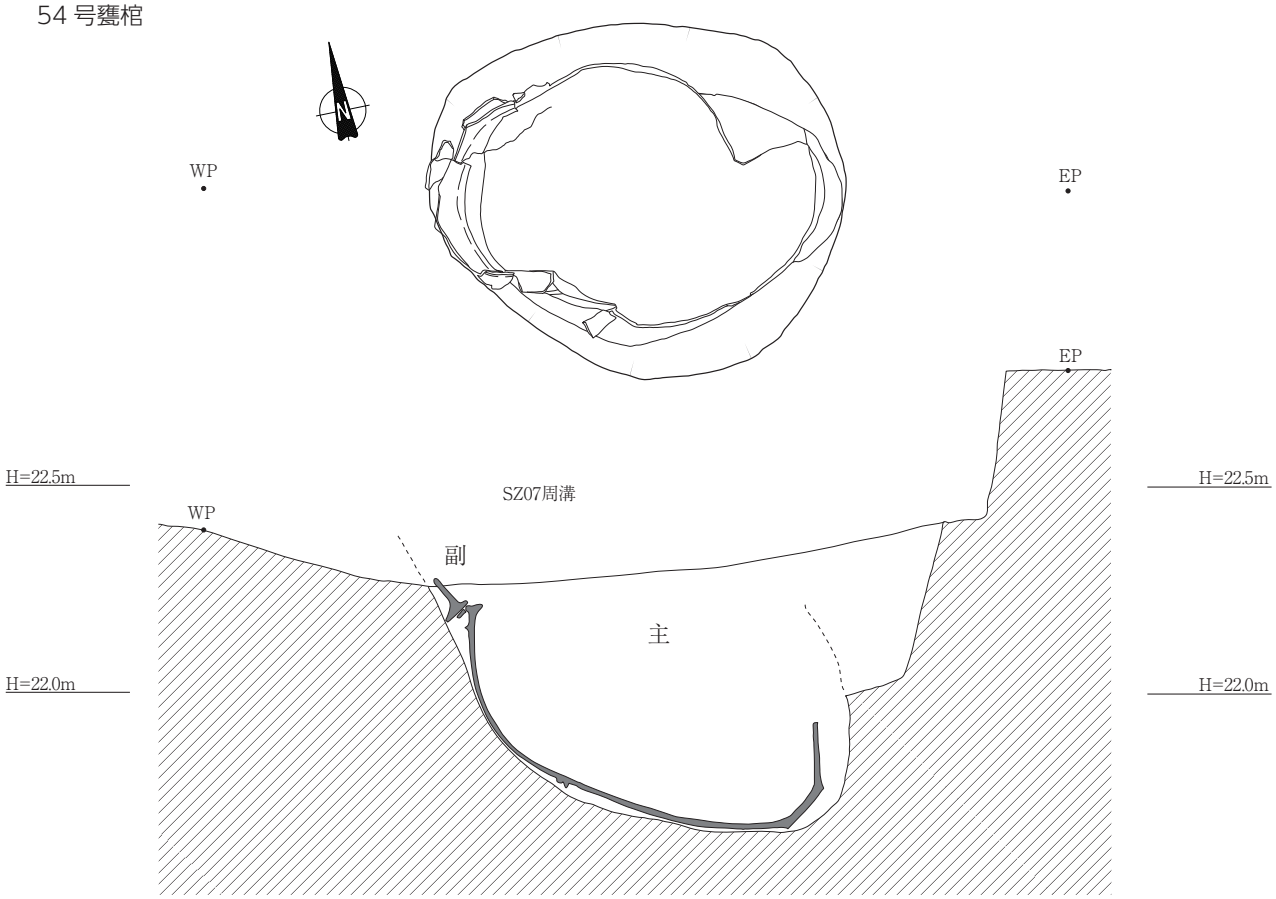


53号甕棺

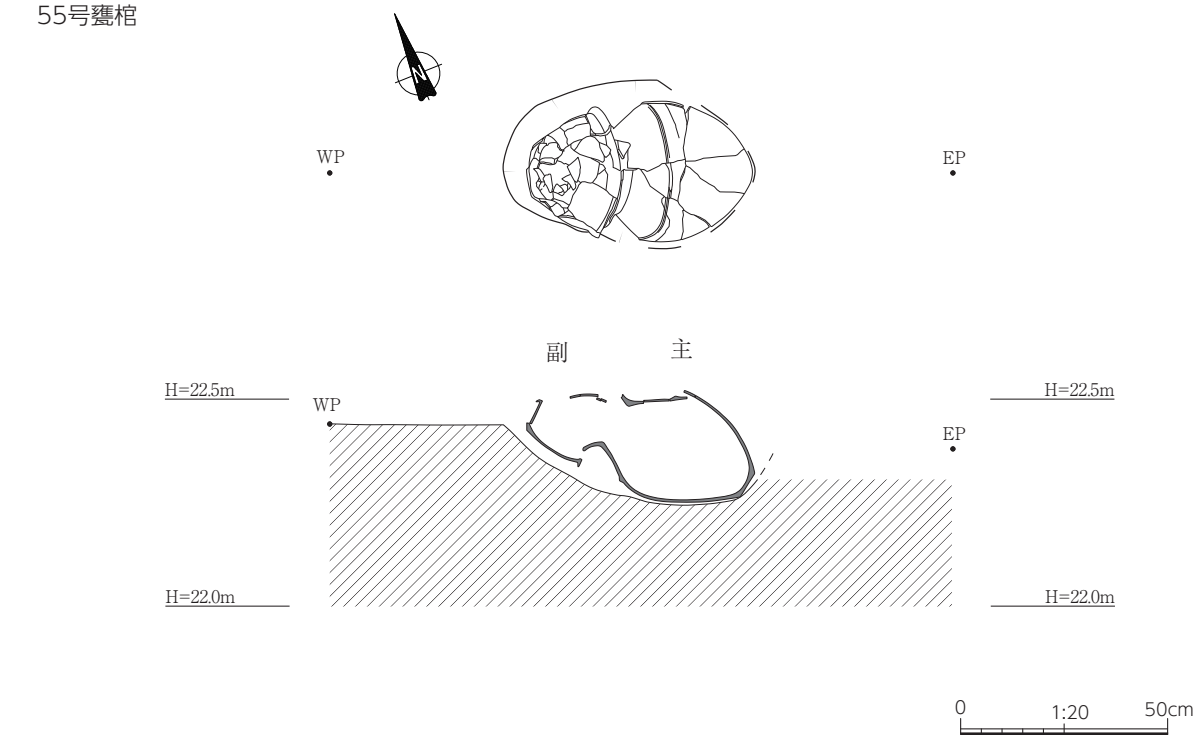


第 23 図　甕棺第 1 群の甕棺（52，53 号甕棺）

54 号甕棺



55号甕棺



第 24 図　甕棺第 1 群の甕棺（54，55 号甕棺）

方を向く。

組み合わせから本来は小型甕の口縁で合わせ口とされたものであったと思われるが、削平時に踏み込まれたためか副棺である鉢が下方へずれ、主棺の胴部上半付近まで落ち込んでいる。

イ　主棺

口縁内側に飛び出しを有する平坦な口縁で、内側端部に刻目を施す。口縁直下から内側へ直線的に入り込み、胴部との境界付近で屈曲し、外側へ張り出す。胴部中頃で最大径を迎えて屈曲し、緩やかに膨らみつつ底部へ至る。底部はやや幅広の平底である。突帯は口縁下部に断面三角形のものが１条、胴部中頃に断面三角形のものが１条巡る。

ウ　副棺

丸みを帯びた鉢で、若干内傾する口縁で屈曲し外側へ丸く張り出す。そのまま湾曲しながら底部へと向かうと思われるが、削平により底部を欠くため胴部下半より下は不明である。

エ　型式等

特徴から黒髪二式とする。

４　第１支群の甕棺

第１群のやや北に位置し、ある程度まとまった分布を示す一群を最近傍の群の枝としてみなし支群とする。

第１支群には 58，59，60，61，62 号の５基が含まれる。

（１）58 号甕棺（中型甕 - 中型甕、第 26 図）

ア　遺構の特徴

墓壙の大半を失っており、墓壙底面付近以外の部分では土器片も残存していない。さらに残った部分も小片状に砕けて散っており、荷重がかかるなどした上で削平の影響を受けているものと推測する。底面付近の墓壙形状は長楕円形で、残存甕棺片の状態から平坦な底面に対して平行な状態で据えられたものと思われる。ただし、蓋となった副棺については削平がひどく胴部上半付近しか残存していない。このことから主棺が斜め上方を向いていた可能性は否定できない。

イ　主棺

内傾する鋤先状口縁で、口縁下部から外側へ張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。そこから張り出しつつ底部へ向かって収束する。突帯は断面三角形の突帯が２条巡る。

ウ　副棺

口縁部を打ち欠いて胴部上半までを失っている。主棺と同じような形状をしていたものと推測されるが下半を欠く。突帯は胴部中頃に断面三角形の刻目突帯が２条巡る。

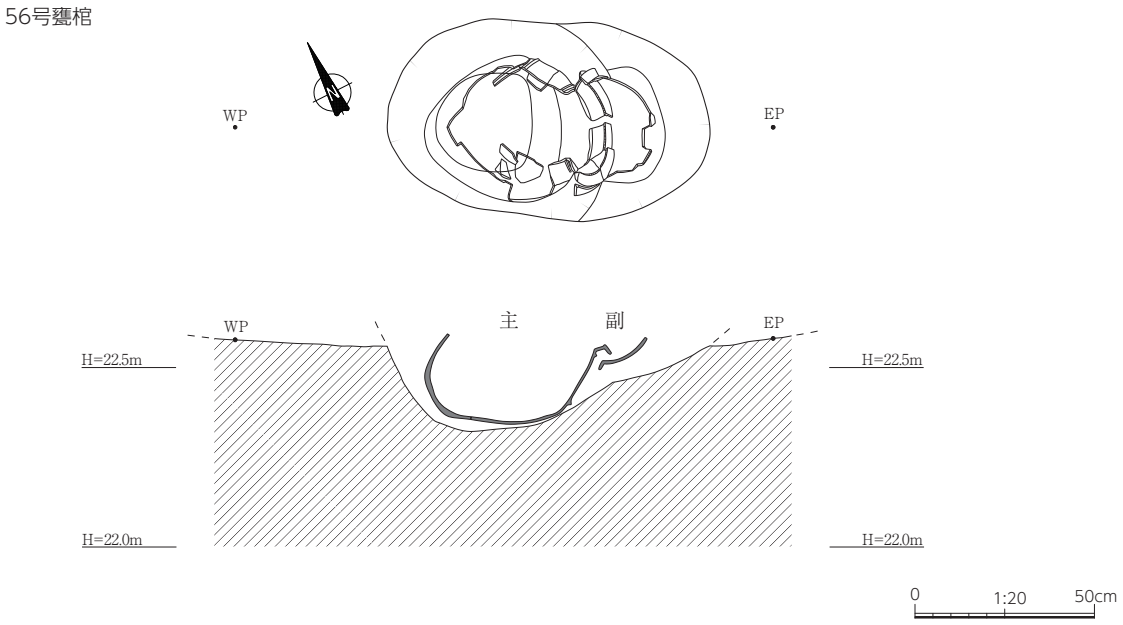
エ　型式等

ＫⅢｃ式と推定する。

（２）59 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 27 図上段）

ア　遺構の特徴

削平により底面付近以外の墓壙の大半を失っており、甕棺も残存が 1/2 以下の状態である。



第 25 図　甕棺第１群の甕棺（56 号甕棺）

長楕円形の墓壙で、主棺副棺ともに水平に据えられている。

イ　主棺

内傾する鋤先状口縁で口縁直下から外側へ強く張り出し胴部上半あたりで最大径を迎える。その後ゆるやかに底部へ向かい、底部は平底であるが、削平により欠いている。突帯は胴部中頃に断面三角形のものが１条巡る。

ウ　副棺

口縁を打ち欠いており、胴部上半と主棺の口縁内側を合わせている。胴部中頃まで強く張り出し､最大径を迎えた後直線的に底部へ向かう。底部はやや幅広の平底を呈し、突帯は胴部上半に断面三角形のものが２条巡る。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ式とする。

（３）60 号甕棺（中型甕、第 27 図下段）

ア　遺構の特徴

これも墓壙の大半を消失しており、恐らく副棺があったものと思われるが不明な状態である。墓壙底面付近の立ち上がり部分に底部を付けて据えており、低い角度ながら斜方を向く姿勢であったことが窺える。

イ　主棺

削平の結果、主棺は胴部上半より上を欠く。口縁下部から膨らみ胴部上半で最大径を迎え、下半でもやや張り出しつつ底部へ向かう。底部直上でくびれ、底部は平底を呈する。胴部上半に断面コの字の刻目突帯を１条巡らす。

ウ　副棺

組み合わせであった可能性があるが、削平により失われており、不明である。

エ　型式等

特徴からＫⅢｂと推定する。

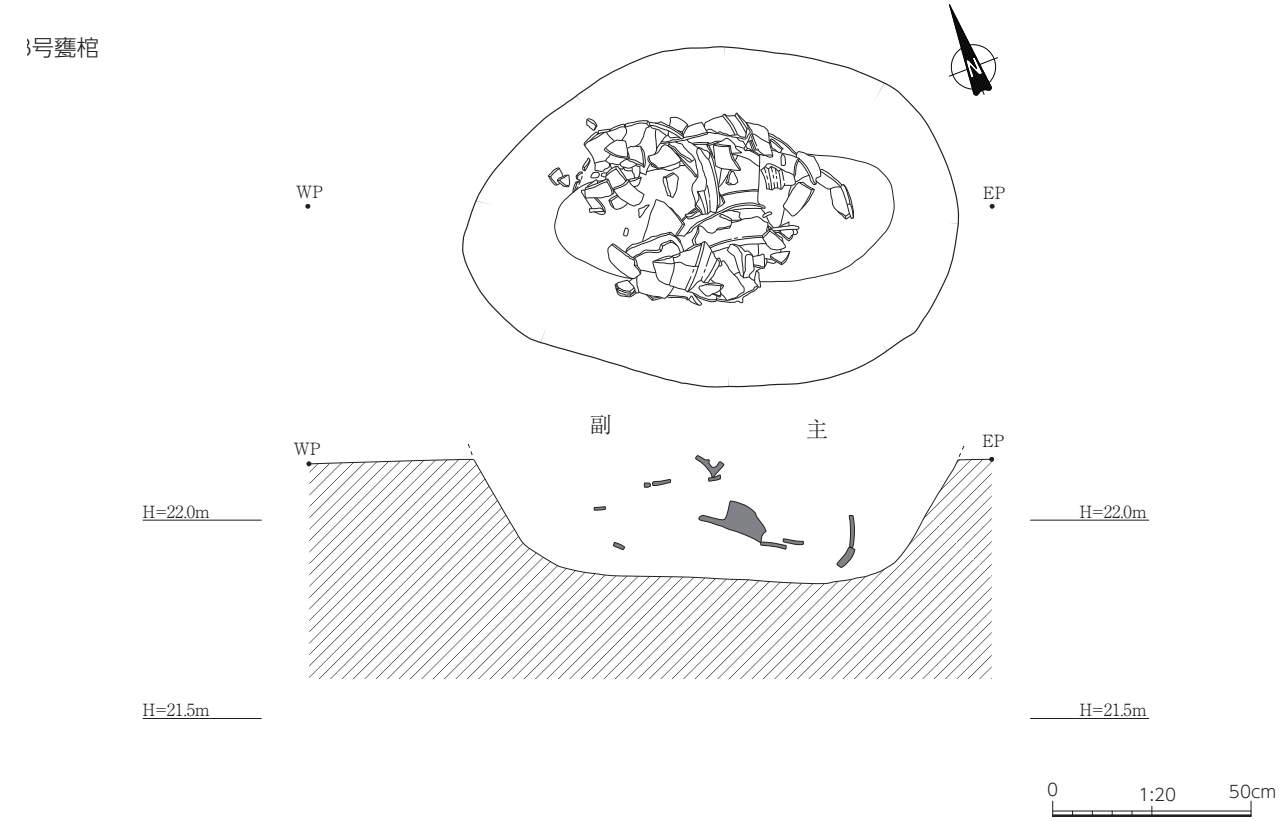
（４）61 号甕棺（大型甕 - 小型精製甕、第 28 図上段）

ア　遺構の特徴

墓壙を半分程度失っており、底面に付く部分以外を消失する。主棺の器高が約 80cm の大型棺であるにも関わらず、墓壙は棺が辛うじて納まる程度の長楕円形であり、底面に沿うように主棺を設置した後口縁を打ち欠いた精製小型甕を主棺の口縁内側に合わせて蓋とする。

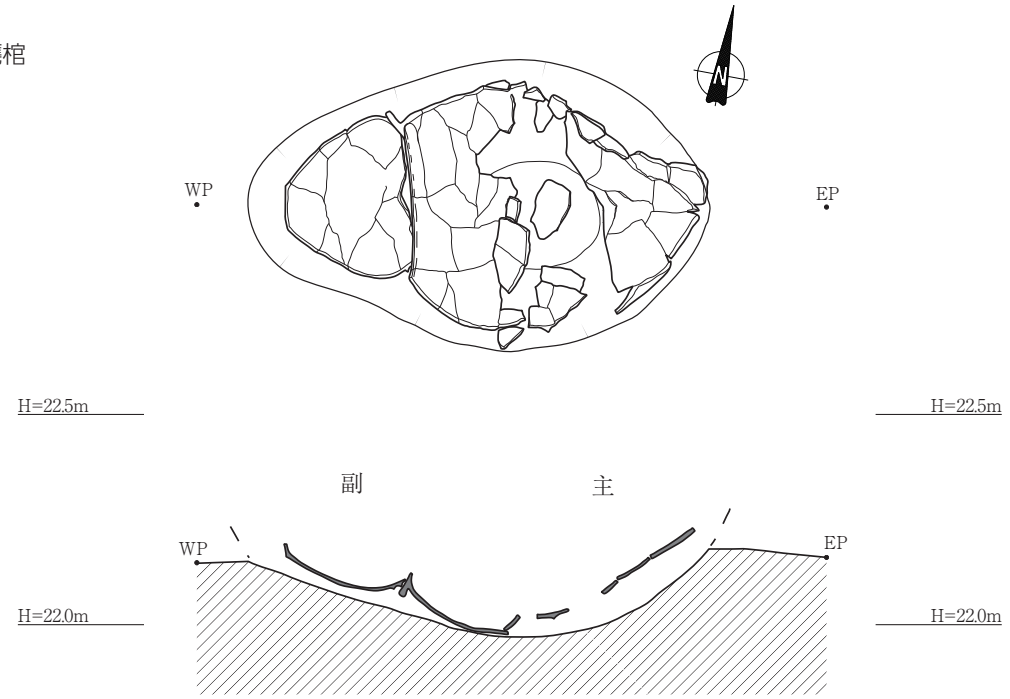
イ　主棺

内傾する鋤先状口縁で、口縁直下から外側へ強く張り出し、胴部上半で最大径を迎える。そ

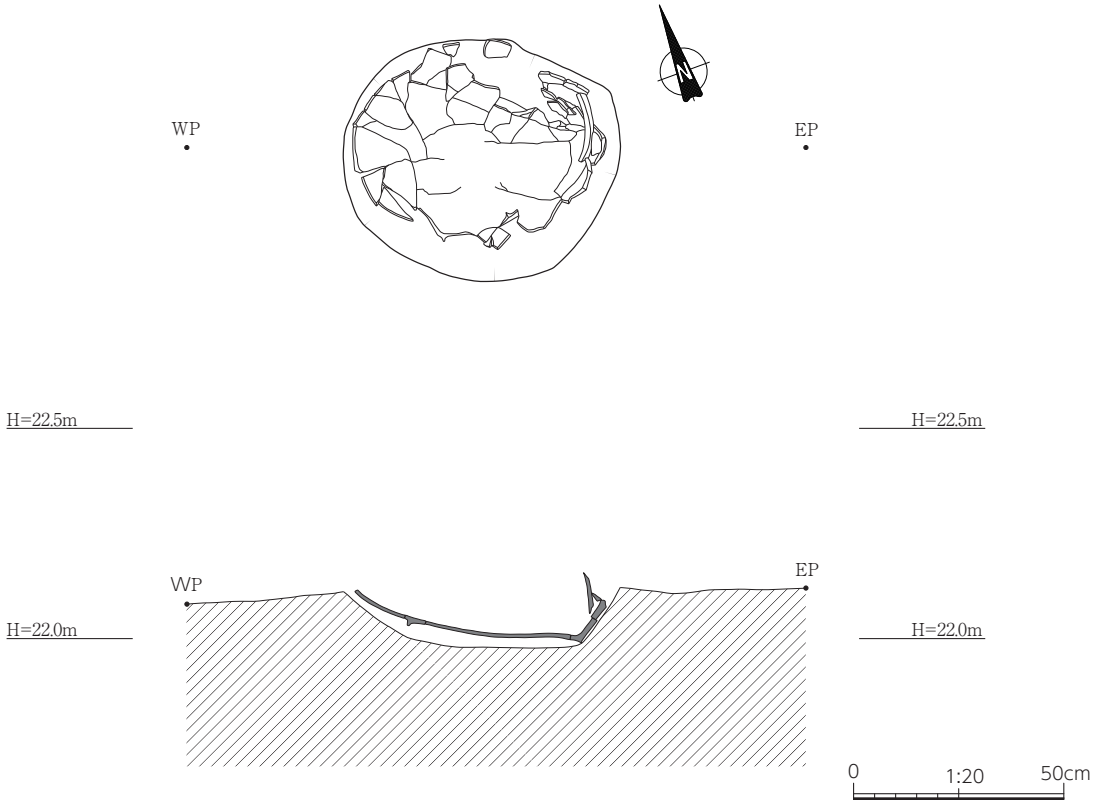


第 26 図　甕棺第１支群の甕棺（58 号甕棺）

59号甕棺

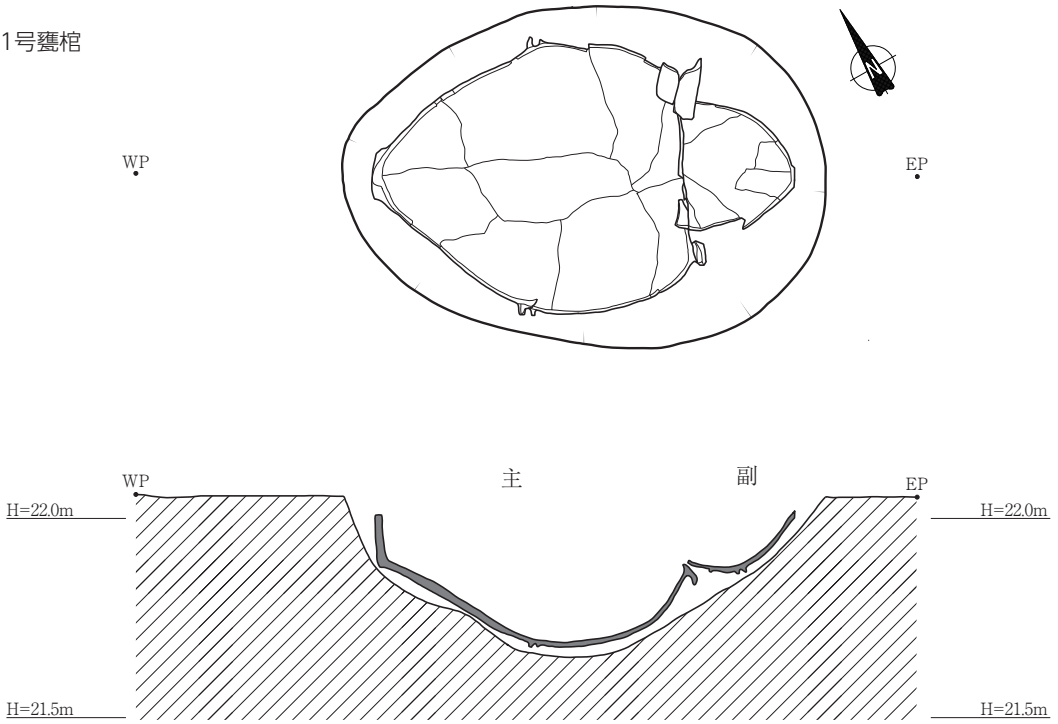


60号甕棺

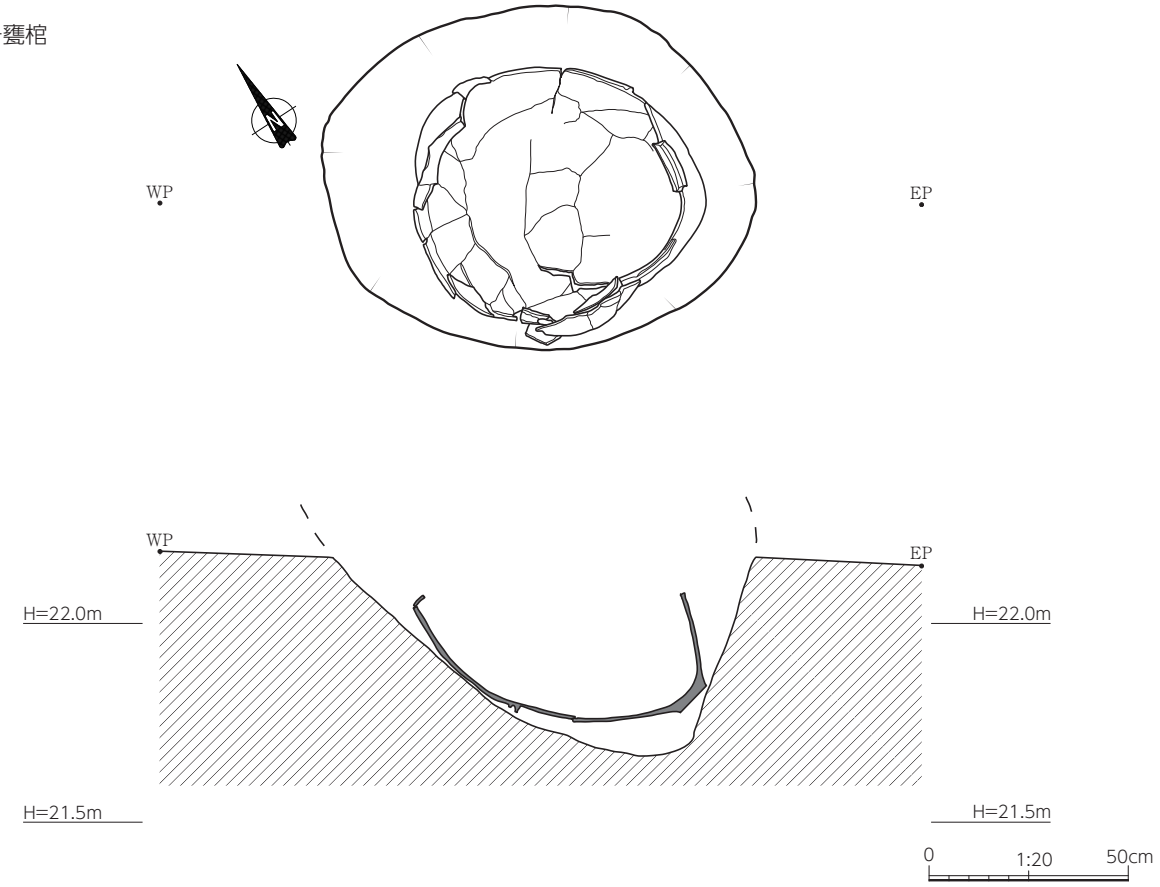


第 27 図　甕棺第 1 支群の甕棺（59、60 号甕棺）

61号甕棺



62号甕棺



第 28 図　甕棺第 1 支群の甕棺（61、62 号甕棺）

の後も外への膨らみを保ちつつ胴部下半から直線的に底部へ向かい、底部直上でくびれる。底部は幅広の平底であり、突帯は胴部中頃付近に断面三角形のものと断面コの字のものを各１条巡らす。

ウ　副棺

口縁を打ち欠いており、口縁下部から外側へ張り出し、中頃で最大径を迎える。下半も張り出しを保ちつつ底部へ収束する。底部を欠くが、平底と思われる。突帯は胴部中頃に断面三角形のものを２条巡らせる。内部に赤彩が施される。

エ　型式等

ＫⅢｃ式に位置づけられる。

（５）62 号甕棺（大型甕、第 28 図下段）

ア　遺構の特徴

墓壙の大半を失っており、主棺の半分以上を消失する。墓壙は片側が急角度に立ち上がる底面形状をしており、最深部に底部を沿わせる意図があったように思われるが、実際には急角度の立ち上がり部分に底面が当たり胴部中頃がその反対側斜面に接地することで安定させている。最深部で据えた場合立つくらいの角度となるためそれを避けたものか。この大型甕は副棺が伴うケースが多いため、副棺が置かれたものと推測されるが消失しているため確たることは言えない。

イ　主棺

削平により上半を失っており全形は不明である。胴部上半は外側へ張り出し、下半もその膨らみを維持しながら底部直上でくびれる。底部は平底である。突帯は胴部中頃下部に断面三角形のものと断面コの字のものが各１条巡る。

ウ　副棺

削平により消失しているため不明である。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ式と推定する。

５　第１群周辺の甕棺

第１群の周辺に散布的に存在する甕棺で、39，40，41，42，43，44，45，57 号がそれに該当する。

（１）39 号甕棺（大型甕、第 29 図上段）

ア　遺構の特徴

削平により墓壙の大半を失っている。その影響で墓壙底面に接している部分のみが残存する。甕の形状から副棺を伴う可能性もあったが調査区境界付近で確認されたものであり、副棺については調査区外になるということで確認されていない。ただし主棺がこのような状態であるため副棺もあったとしても相当程度削平の影響を受けているものと推定される。

イ　主棺（大型甕）

削平により６割程度を失っている。口縁はくの字でやや内傾する。口縁下部から外側へ張り出し、胴部上半で最大径を迎える。底部を欠くが平底と推定される。突帯は胴部中頃に断面コの字のものを１条巡らす。

ウ　副棺

調査区外に位置することから存在の可能性はあるが不明である。

エ　型式等

ＫⅢｃ式に位置付けられる。

（２）41 号甕棺（中型甕、第 29 図下段）

ア　遺構の特徴

39 号と同様に墓壙の大半を失っており、主棺の６割近くを失っている。

イ　主棺

口縁は内傾するくの字で、口縁下部から外側へ張り出す。胴部上半で最大径を迎え、胴部下半もやや膨らみつつ底部へ至るが底部を欠く。突帯は胴部中頃に断面コの字のものを１条巡らす。

ウ　副棺

削平により失われており不明である。

（３）42 号甕棺（小型甕、第 30 図上段）

ア　遺構の特徴

墓壙のほとんどを失っている。底面付近に接しているもの以外は削平されている。主棺は小型の甕で、副棺を伴う可能性はあるが消失しているため不明である。

イ　主棺

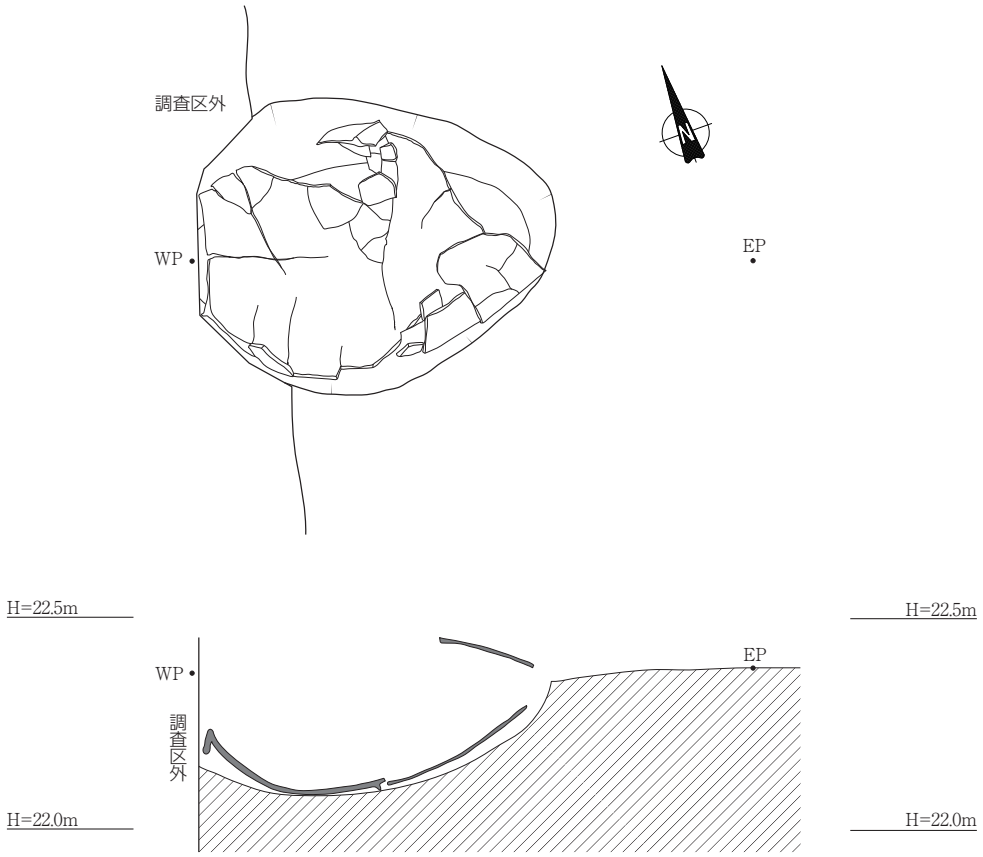
小型の甕で胴部上半から上を欠く。胴部中頃で最大径を迎え、その後底部へ直線状に向かい、底部直上でわずかに内湾する。底部は幅広の平底で、断面三角形の突帯が胴部上半に１条巡る。

ウ　副棺

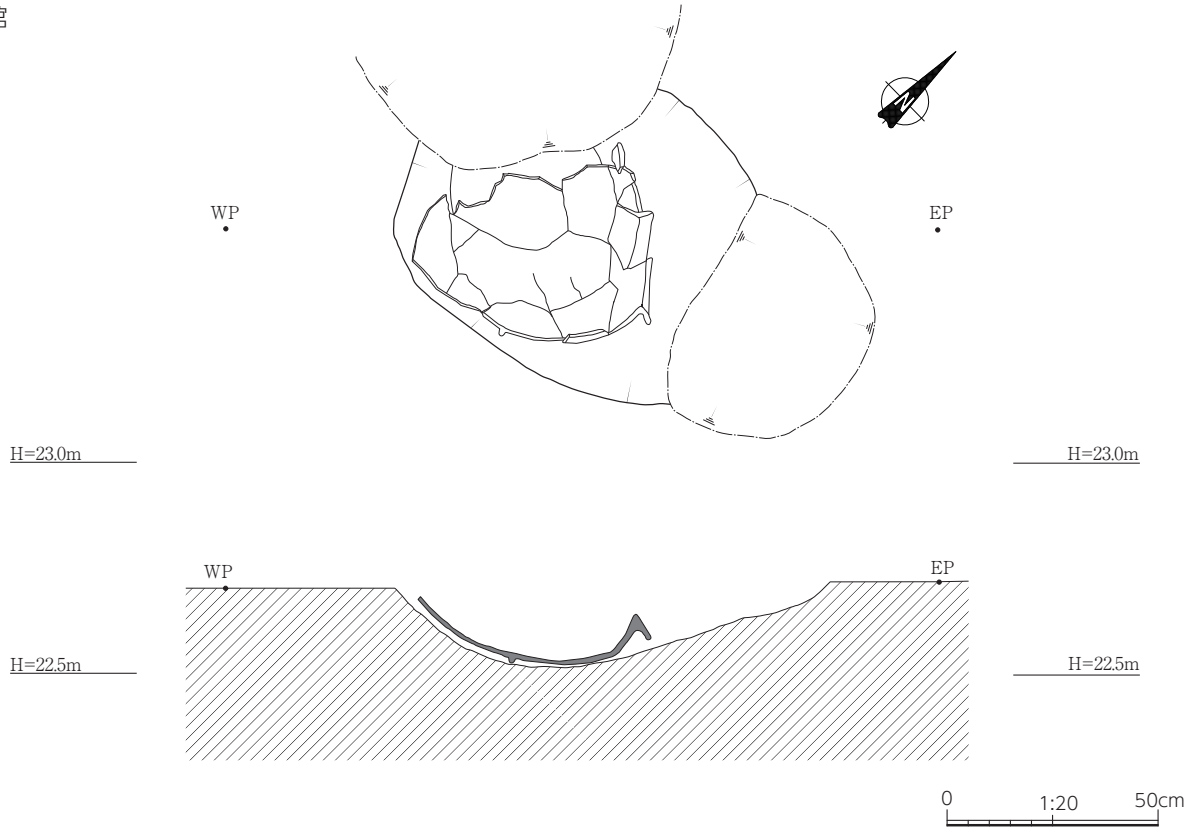
削平により失われており、不明である。

（４）43 号甕棺（大型甕、第 30 図中段）

39号甕棺

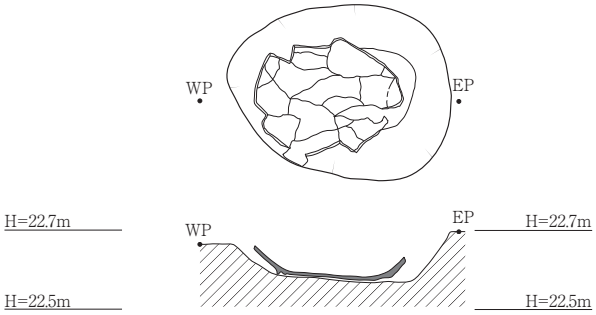


41号甕棺

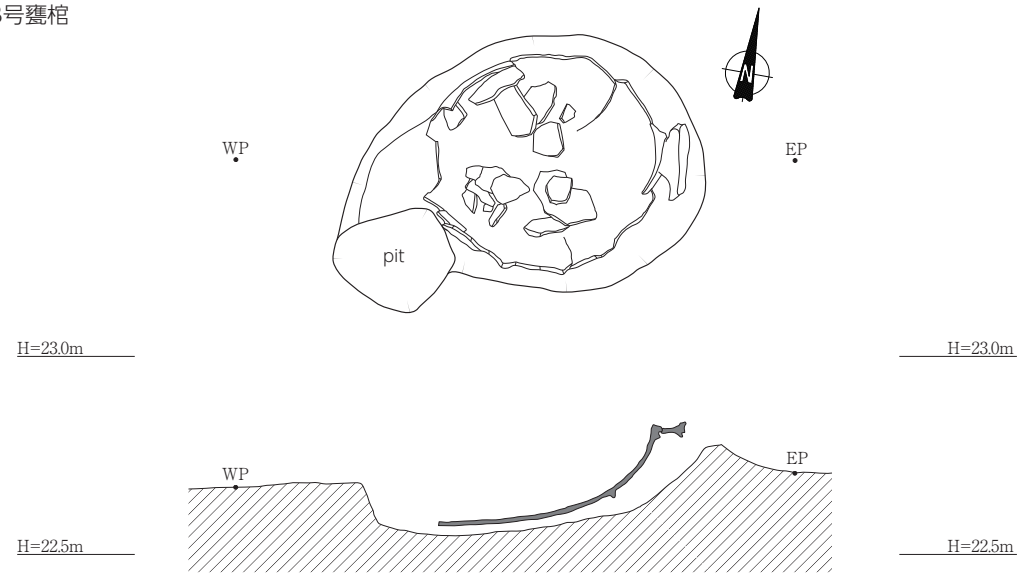


第 29 図　甕棺第 1 群周辺の甕棺（39，41 号甕棺）

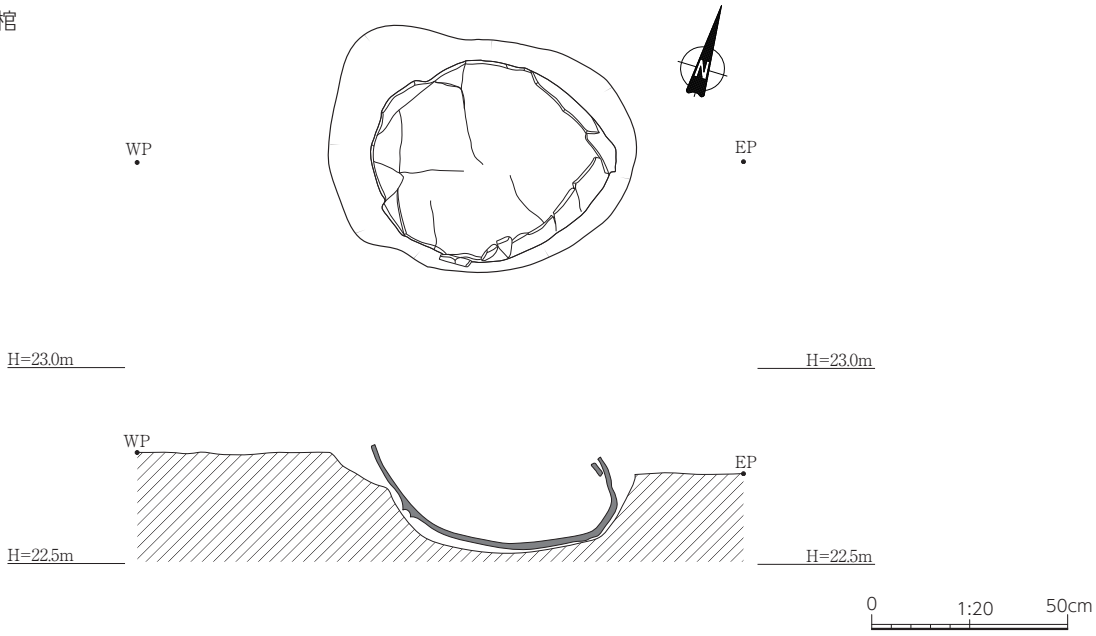
42号甕棺



43号甕棺



44号甕棺



第 30 図　甕棺第 1 群周辺の甕棺（42，43，44 号甕棺）

ア　遺構の特徴

墓壙の底面以外を失っており、底面に接している部分以外は削平されている。底面以外は残存しないので形状は不明である。

イ　主棺

肥厚した断面三角形の口縁を有し、口縁直下から内側へ直線的に入り込み頸状の部分を形成する。そこから屈曲して外側へ張り出し、胴部上半で最大径を迎え、その後ゆるやかに底部へむかう。底部を欠くが平底と推定される。

突帯は口縁下部に断面三角形のものが１条、胴部上半に断面三角形の刻目突帯が１条巡る。

ウ　副棺

削平により消失しているため不明である。

エ　型式等

特徴から黒髪三式とする。

（５）44 号甕棺（大型甕、第 30 図下段）

ア　遺構の特徴

墓壙の大半を削平されており、主棺の半分程度を欠く。墓壙の立ち上がり部分に底部を沿わせ、胴部形状に合わせたような底面で安定的に据えられているため、口縁は斜めを向く。副棺があった可能性があるが削平により失われているため不明である。

イ　主棺

削平により口縁部を欠く。口縁下部から外側へ強く張り出し、胴部上半で最大径を迎え、その後膨らみつつ底部へ収束する。底部はやや幅広の平底である。突帯は口縁下部に１条及び胴部中頃に２条断面三角形の刻目突帯が巡る。

ウ　副棺

削平により消失しているため不明である。

エ　型式等

ＫⅢａ式に位置付けられる。

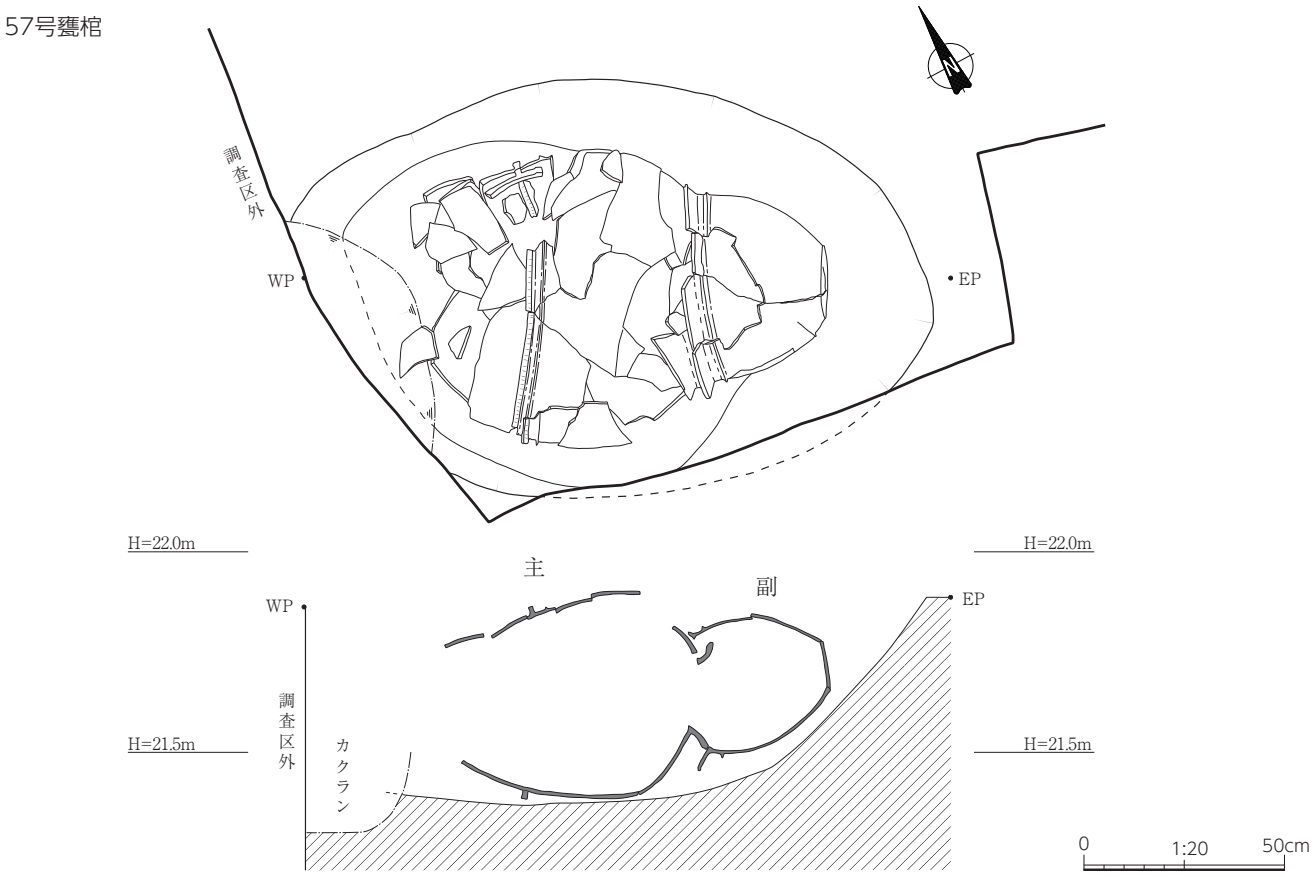
（６）57 号甕棺（大型甕 - 小型甕、第 31 図）

ア　遺構の特徴

長楕円形の墓壙で、主棺側は撹乱により消失する。そのことにより主棺の底部を失っている。底面に沿わせて設置し、副棺となる小型甕を主棺の口唇部付近と副棺の口縁内側を合わせて蓋とする。

イ　主棺

内傾する鋤先状口縁で、口縁下部で屈曲し外側へ強く張り出す。胴部上半で最大径を迎え、わずかに張り出しつつ胴部下半で内湾し、直線的に底部へ至る。底部は削平により欠くが、平



第 31 図　甕棺第１群周辺の甕棺（57 号甕棺）

底と推定される。

ウ　副棺

わずかに内側に飛び出す口縁部で口縁直下から緩やかに張り出して胴部上半で最大径を迎える。その後やや強く内側に向かって湾曲し、底部へ至る。底部は幅広の平底である。突帯は断面三角形のものが１条口縁下部に巡る。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ式に位置付けられる。

６　甕棺第２群（第 32 図）

第２群に属するのは６区出土の甕棺で 73 号、74 号、75 号、76 号、77 号、78 号、79 号、80 号、82 号（９基）がこれに含まれる。

（１）73 号甕棺（大型甕 - 大型甕、第 33 図上段）

ア　遺構の特徴

73 号の長楕円形を呈する墓壙は、主棺設置方向に向かって傾斜しており、主棺胴部付近が着底するようにわずかに掘りくぼめてある。納棺後同種類と思われる甕を蓋とする。上部を削平されており、副棺の多くと主棺の口縁～胴部を破損する。

イ　主棺（大型甕）

主棺である甕は口唇部の端部が下を向く口縁を持ち、胴部はやや張り出す。最大胴部径を迎える付近で屈曲し、底部付近でくびれる。底部は平底で、突帯は口縁下に断面三角形のものが１条、胴部に刻み目のあるコの字形突帯が１条巡る。

ウ　副棺（大型甕）

副棺となる甕は残存状況が悪く特徴が今ひとつ掴めないが、主棺とほぼ同じような特徴を有していたと思われる。

エ　型式等

特徴からＫⅢｂ式とする。

（２）74 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 33 図下段）

ア　遺構の特徴

74 号は長楕円形の墓壙で断面形はほぼ対称的であり底面は平坦である。口縁部を打ち欠いた甕と口縁部を有する甕とを組み合わせており、傾きや墓壙の作業場の面積もそう変わらないが、状況的に口縁を打ち欠いてある方が蓋と考えられるためこちらを副棺とする。

第 32 図　甕棺第２群の分布

イ　主棺（中型甕）

主棺は内傾する鋤先状口縁を持ち、口縁下に頸状を呈する部分を有する。その部分から下では外側へ張り出し、胴部中頃で最大胴部径を迎える。その後ゆるやかに底部へ至り、底部は平底である。胴部に断面コの字の刻目突帯を１条巡らす。

ウ　副棺（小型甕）

副棺は口縁を打ち欠いており形状は不明で、口縁下部から胴部にかけて強く張り出す。最大胴部径は胴部中頃にあり、その後緩やかに張り出しつつ底部へ収束するものと思われるが胴部中頃以下を欠いており、不明である。底部も平底とは考えられるが欠損のため不明である。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ式とする。

（３）75 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 34 図上段・第 35 図）

ア　遺構の特徴

75 号はやや小ぶりな長楕円形墓壙で、主棺である甕の胴部に併せた掘り方を有し、それに沿った据え方により口縁はやや下を向く。納棺後口縁を打ち欠いた副棺を蓋としている。副棺側の掘り方は底部付近でやや急に立ち上がる。また副棺は胴部上半まで打ち欠かれており、主棺の頸状部分内側の径に合わせてある。

イ　主棺（中型甕）

主棺は平坦で内側がやや飛び出す口縁で中頃がわずかに窪む。頸状の部分を持ち、直線状にくびれたのち外側へ屈曲して胴部は強く張り出す。胴部中頃付近で最大胴部径を迎え、その後ゆるやかに底部へ向かって収束する。底部は平底であり底部付近のくびれはない。

突帯は口縁下部の屈曲付近及び胴部中頃付近に断面三角形の刻目突帯が各１条巡る。

調整は外器面は横方向のち縦方向のハケ目、内器面は胴部は縦方向、口縁下部はややストロークの長い横方向のハケ目を施す。

ウ　副棺（小型甕）

副棺は口縁を打ち欠いており形状は不明で、口縁下部から張り出し胴部中頃で最大胴部径を迎える。その後ゆるやかに底部へ向かうが底部を欠損しており下部～底部付近の形状は不明であるが、平底であると推定する。

突帯は胴部上半に断面三角形の刻目突帯が１条巡り、器面調整は外器面が荒れているため判然としないが縦方向のハケ目を基調とし、内器面は斜め方向のハケ目で深さに応じて方向が交差する。

エ　型式等

主棺の特徴から黒髪三式に属する。

（４）76 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 34 図下段）

ア　遺構の特徴

76 号は長楕円形の墓壙であるが、墓壙は中位に段を持つ形状をしており、主棺は段のない側に設置され、底面から急角度に立ち上がる。副棺は段側に設置され、段内で納まる。底面は平坦で、甕も水平に近い形で設置されている。

主棺・副棺ともに口縁を打ち欠いており、特に副棺は胴部上半まで及んでいる。

イ　主棺（中型甕）

口縁を打ち欠いており、形状は不明である。口縁下部から直線的に外側へ張り出し、最大胴部径を迎える胴部上半で屈曲する。その後わずかに外湾しつつ底部へ収束する。底部は平底である。

突帯は最大胴部径を迎える胴部上半付近に断面三角形の刻目突帯が１条巡る。

ウ　副棺（小型甕）

胴部上半まで打ち欠かれており、口縁形状は不明である。胴部は強く張り出す。底部を欠損しているため形状は不明であるが、平底と推定される。

エ　型式等

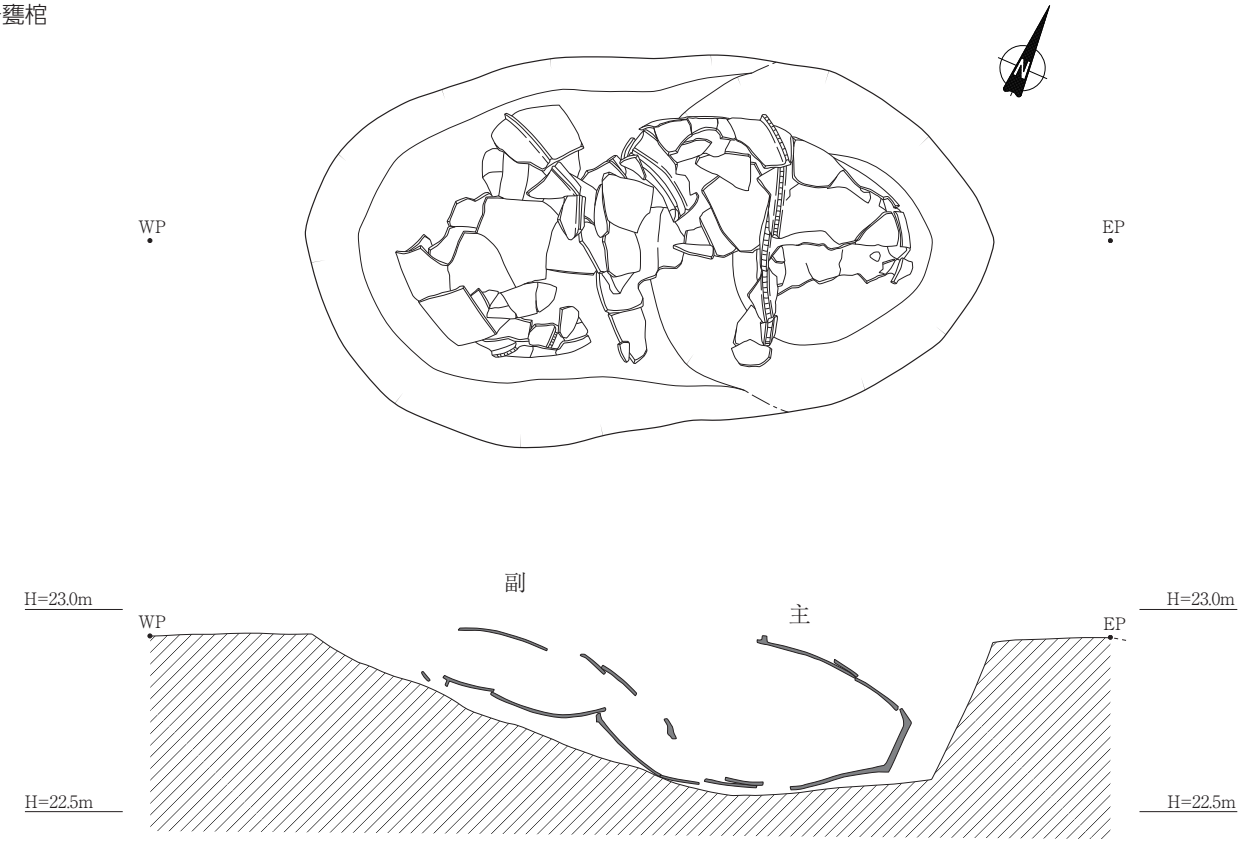
口縁形状が不明のため断定は出来ないが 75 号と似ることから黒髪三式と推定する。

（５）77 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 36 図上段・第 37 図）

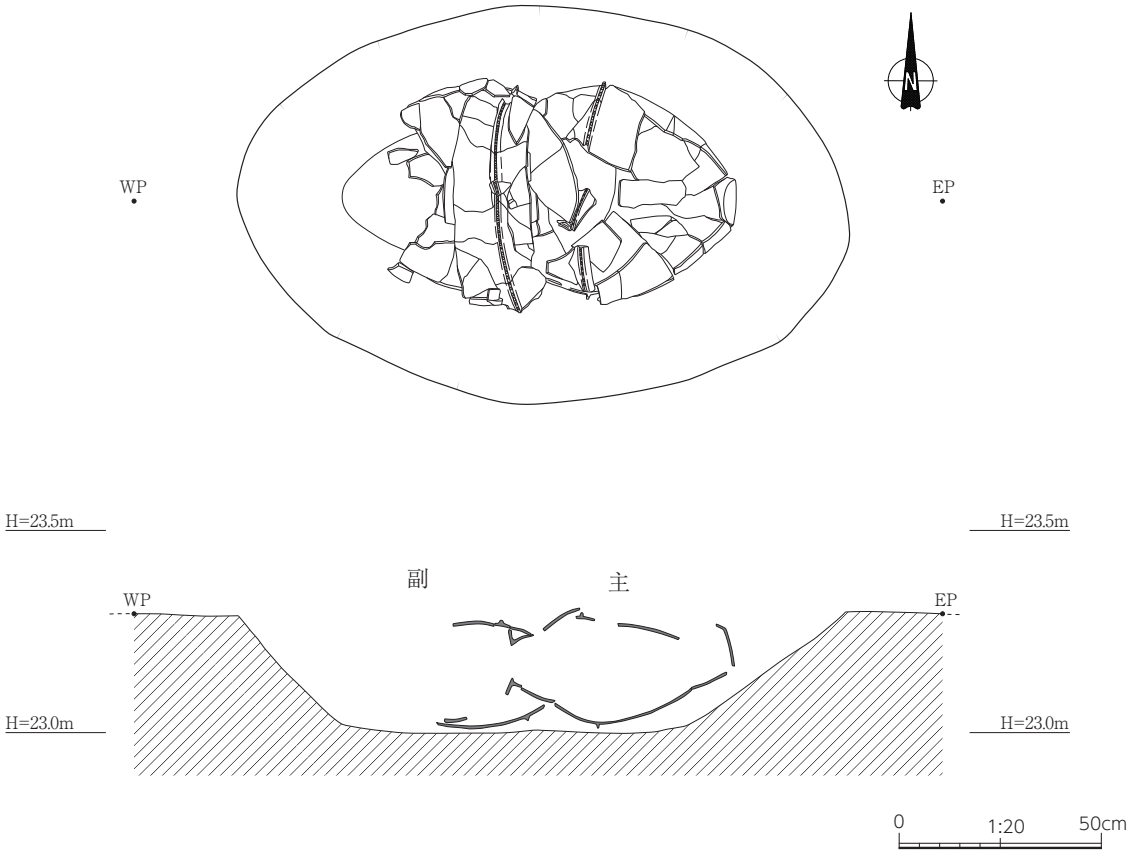
ア　遺構の特徴

77 号は長楕円形の墓壙であり、甕に比べて大きめの形状をしている。そのため主棺・副棺脇それぞれに大きめの空間が生じている。主棺設置位置と墓壙掘り方のズレは元々もっと大きいものを設置するつもりで掘っていたものが実際に設置する大きさと合わなかったことを示しているのかもしれない。墓壙の底面は主棺側に深く傾く形状をしているが最深部に主棺は設置されず墓壙中央付近に主棺は設置され、納棺後

73号甕棺

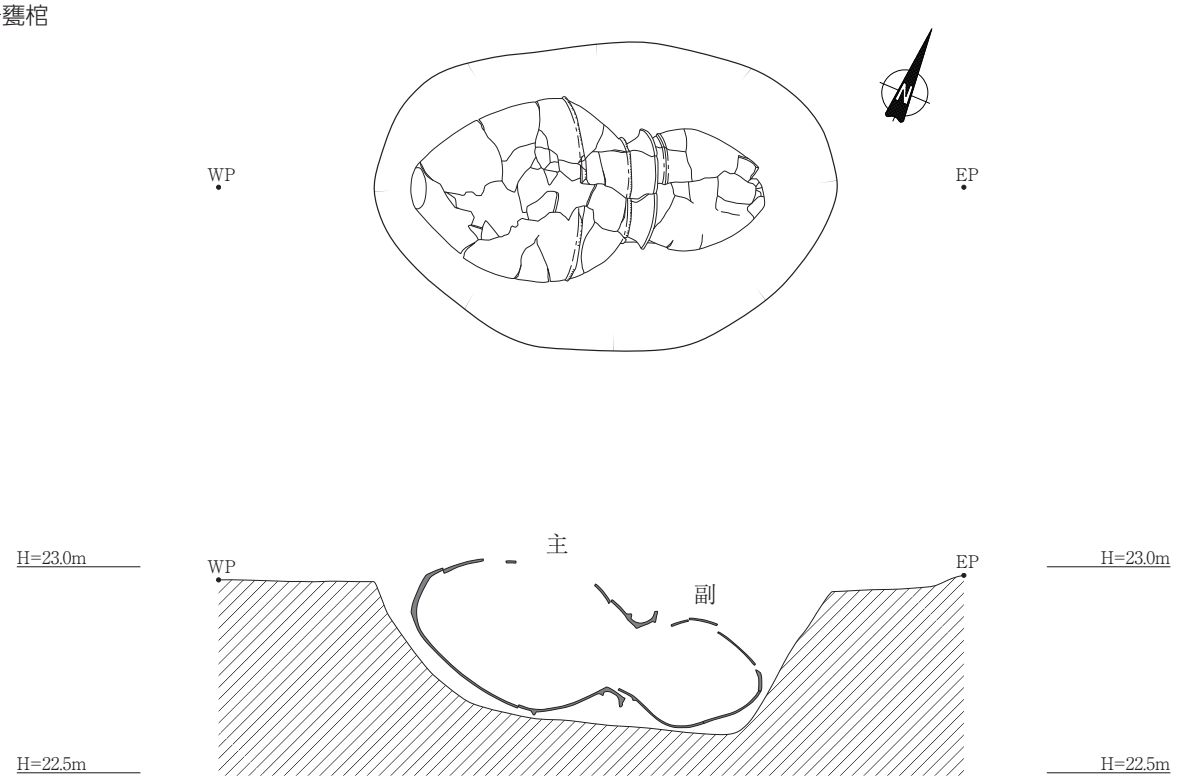


74号甕棺

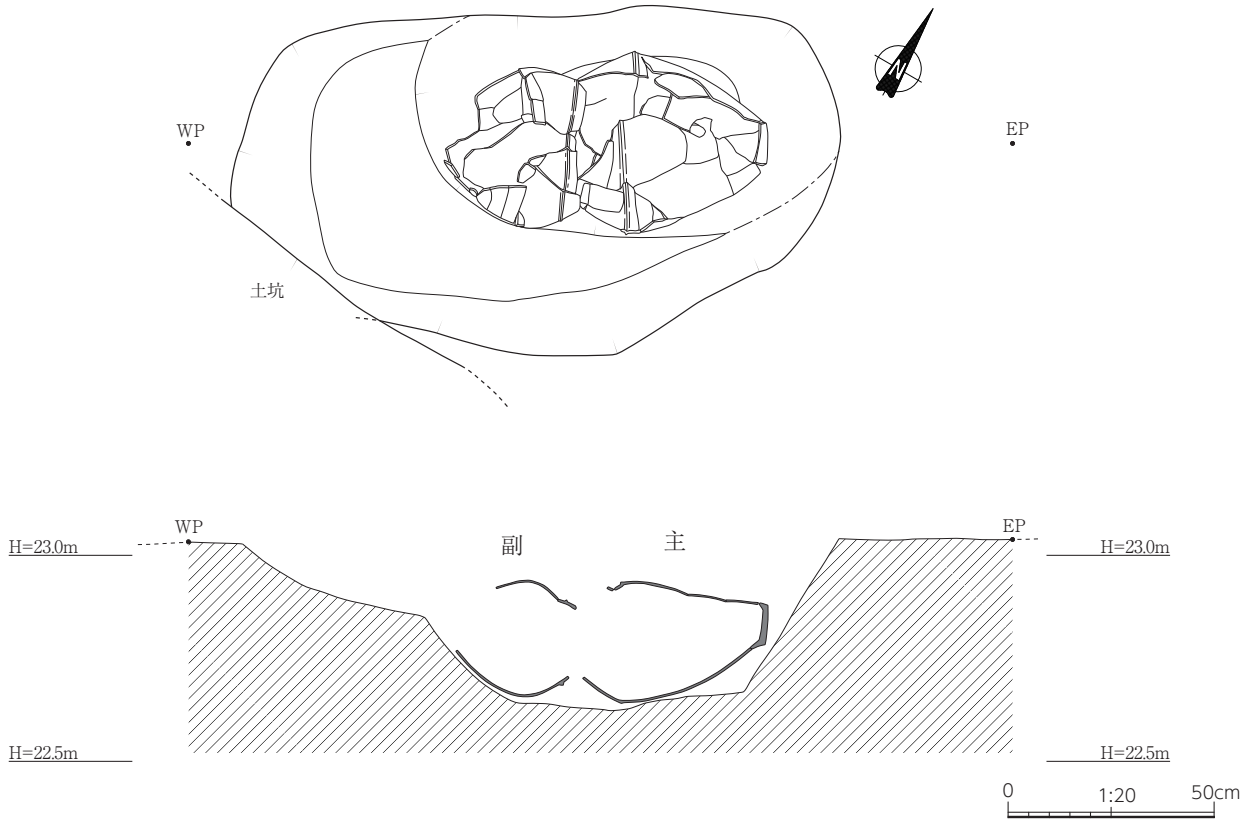


第 33 図　甕棺第 2 群に属する甕棺①（73，74 号甕棺）

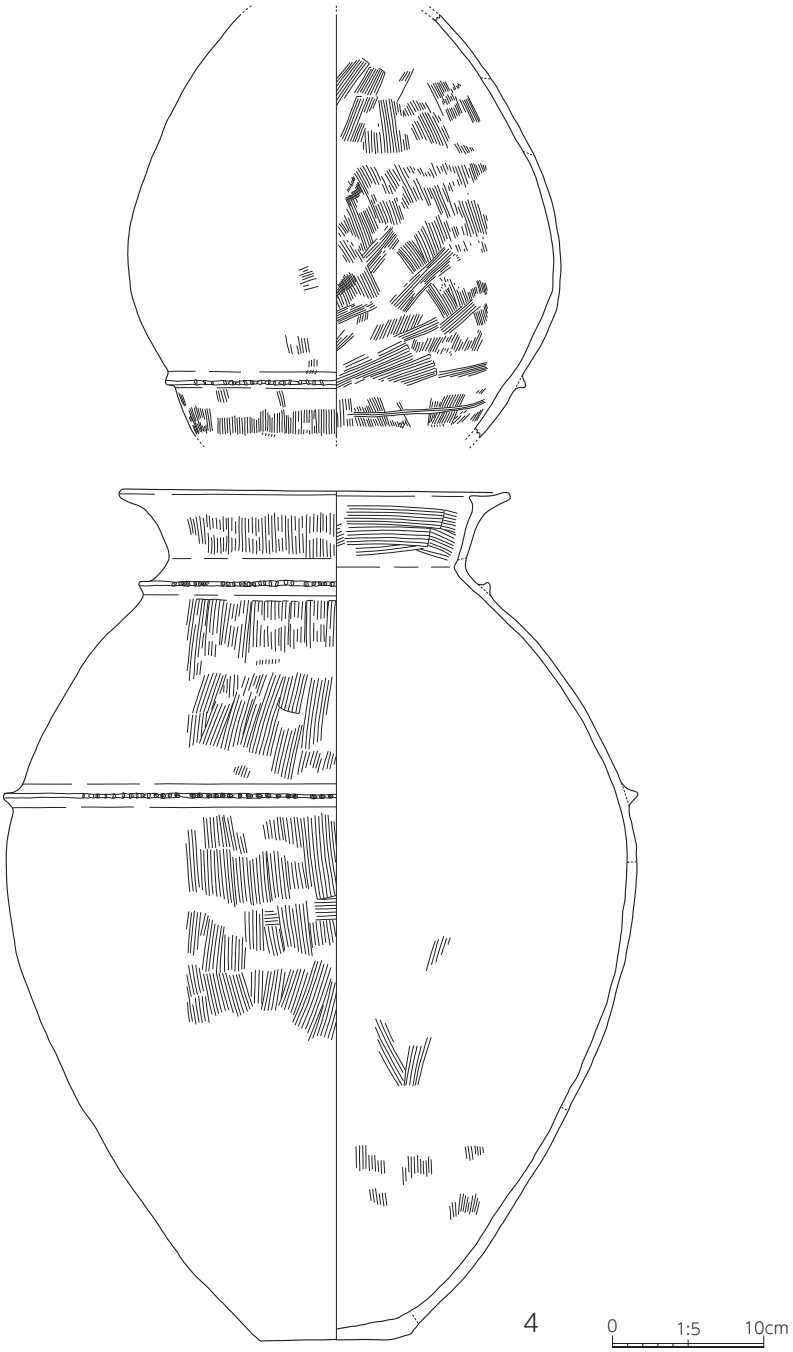
75号甕棺



76号甕棺



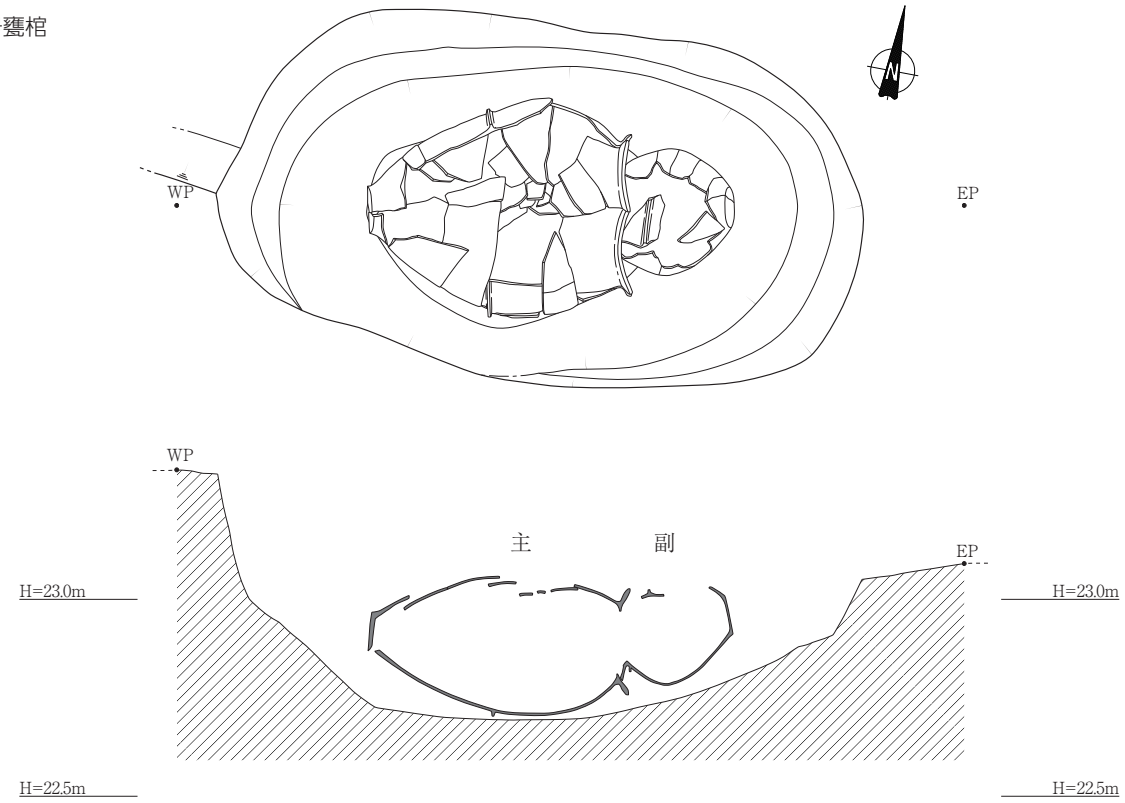
第 34 図　甕棺第 2 群に属する甕棺②（75，76 号甕棺）



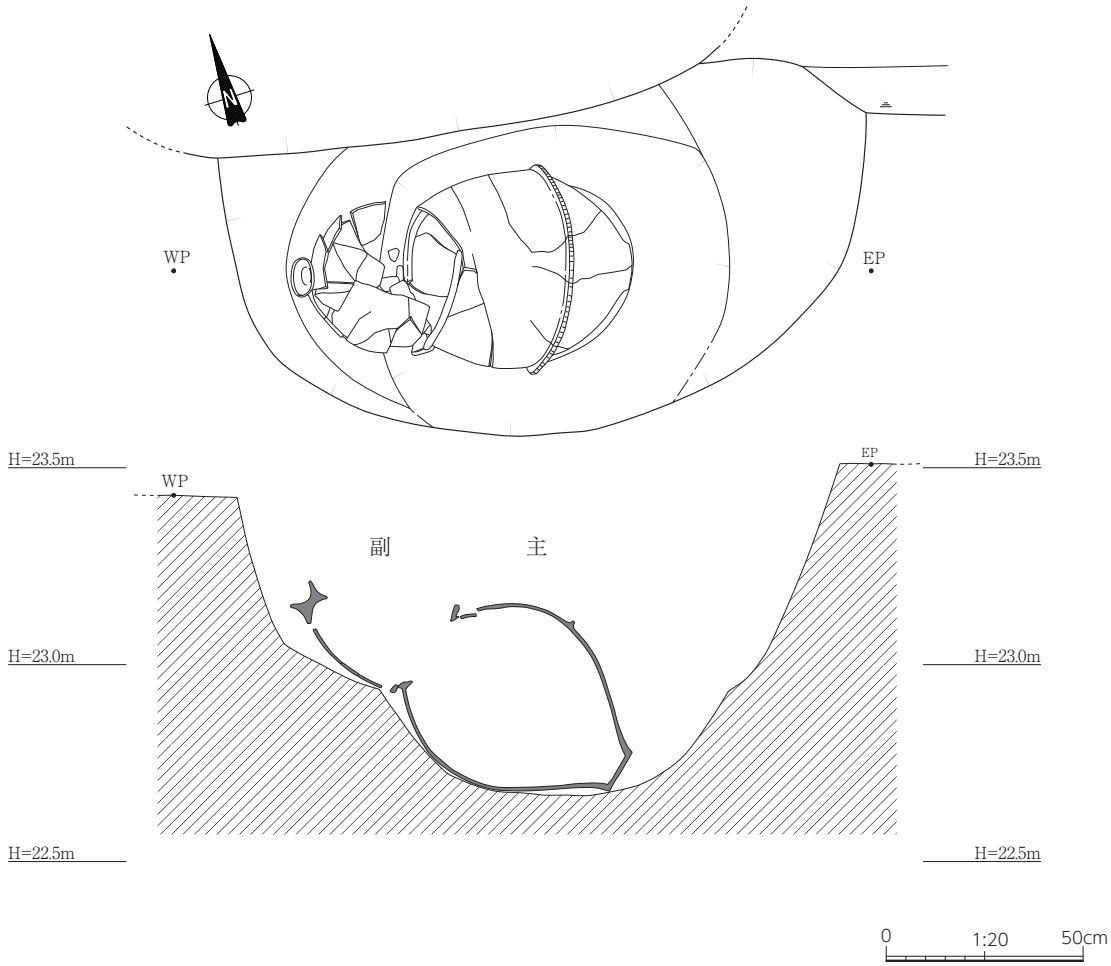
第 35 図　75 号甕棺実測図（第 2 群）

小型の甕（精製甕）により蓋がされている。
イ　主棺（中型甕）
内傾する鋤先状口縁で、口唇部は丸みを帯びる。内側への飛び出しははっきりしており、口縁直下から外へ大きく張り出す。口縁径はすぼまり肩の発達はまだ見られない。胴部上半で最大胴部径を迎え、その後緩やかに底部へ向かって収束し、底部直上付近でくびれる。底部は平底である。
調整は外器面胴部下半は縦方向、突帯を境に胴部上半は斜め方向のハケ目、内器面においてもほぼ同様の傾向が見られる。突帯は胴部中頃に断面コの字の刻目突帯を１条巡らす。
ウ　副棺（小型甕、精製・赤彩）
くの字に近い口縁で口唇部はナデにより角張った形状となる。やや上方向の弓反りの後屈曲して外湾する。胴部中頃付近で最大胴部径を迎え、ここで屈曲して底部へわずかに外反しつつ収束する。底部は平底を呈する。
調整は外器面胴部下半から中頃にかけて縦方向～斜め方向のハケ目、中頃から上半部の突帯まで縦方向のミガキ、突帯を境に口縁までに放射状の赤彩がなされる。
突帯は口縁下部の屈曲付近で断面三角形の刻目突帯が１条巡る。
エ　型式等
特徴からＫⅢｃ式とする。
（６）78 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 36 図下段・第 38 図）
ア　遺構の特徴
78 号は墓壙内に段を有する長楕円形の墓壙であり、深く掘りくぼめられた中に主棺を段差付近で配置し、段上に副棺を配置するような形で蓋をしている。段差は主棺の形状よりも大きいもので、掘り方の片側に寄せられた結果、主棺側に大きな空間が生じている。
イ　主棺（中型甕）
内傾する鋤先状口縁で口唇部は丸く肥厚する。77 号の主棺と同じく外側へ強く張り出し、胴部上半で最大胴部径を迎える。その後緩やかに外反しつつ底部へ収束し、底部直上付近でくびれる。
調整は外器面を縦方向のハケ目、内器面下部において縦方向のハケ目が施される。
突帯は胴部中頃付近に断面コの字の刻目突帯が１条巡る。
ウ　副棺（小型甕）
内部の飛び出しを失ったくの字を呈する口縁で、やや内傾する。口縁下部から胴部中頃まで緩く外反し、その後底部へ向かってすぼまりを見せる。底部は裾がやや薄手の上げ底である。
調整は内外ともに縦方向のハケ目が施される。突帯は存在しない。
エ　型式等
副棺の形態から黒髪四式とする。
（７）79 号甕棺（中型甕、第 39 図上段）
ア　遺構の特徴
円形状に掘りくぼめられた中に据えられており、掘り方から判断する限り単棺の可能性がある。甕の半分以上を削られており、墓壙もそれに伴って消失している可能性がある。
イ　主棺（中型甕）
口縁を欠いているが、欠損によるものかは不明である。口縁下部から外反し、胴部中頃付近で最大胴部径を迎える。その後緩く外反しつつ底部へ向かって収束する。底部は平底である。突帯は胴部にコの字の刻目突帯が１条巡る。
ウ　型式等
特徴から黒髪四式、ＫⅢｃ式とする。
（８）80 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 39 図下段）
ア　遺構の特徴
80 号は長楕円形の墓壙中に段を有する形状のもので、掘りくぼめてある方に主棺を納め、蓋となる副棺は段の上に納まる。主棺の底部付近に土坑が掘られたため胴部の中頃から下を欠く。また副棺の上方を削平により失っており、副棺も底部を欠く。その際底部は主棺側へ転がり、胴部中頃付近に留まっている。
イ　主棺（中型甕）
平坦な面を持ち内側がやや飛び出す口縁部で、頸状の部分があり直線的に内傾する。その後屈曲して外へ張り出し、胴部中頃で最大胴部径を迎える。下半付近を大きく欠くため確たることは言えないがこの後緩やかに底部へ収束し、底部は平底を呈すると思われる。
突帯は口縁下部に断面三角形の刻目突帯が１条、胴部中頃に断面三角形のものが１条巡る。

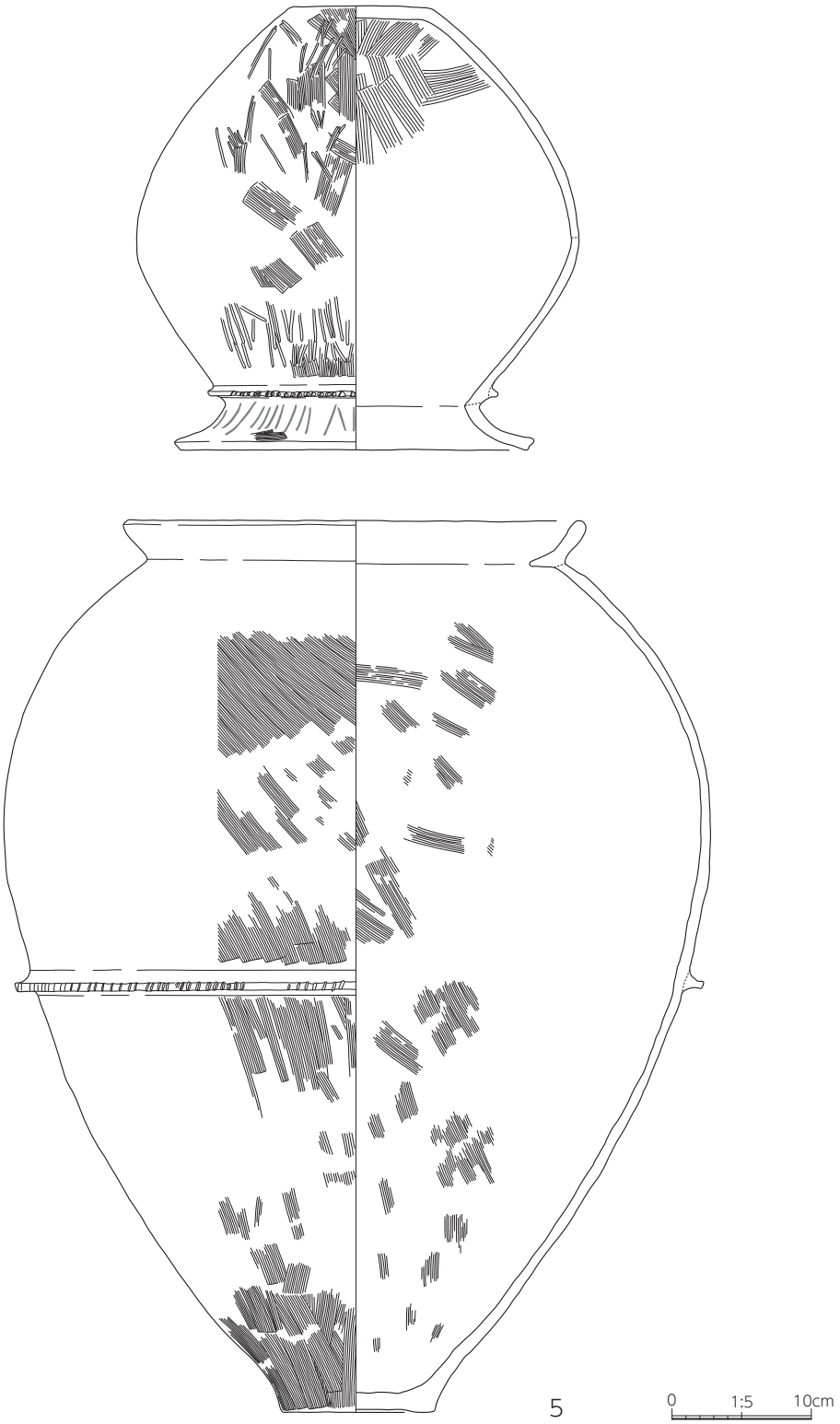
77号甕棺



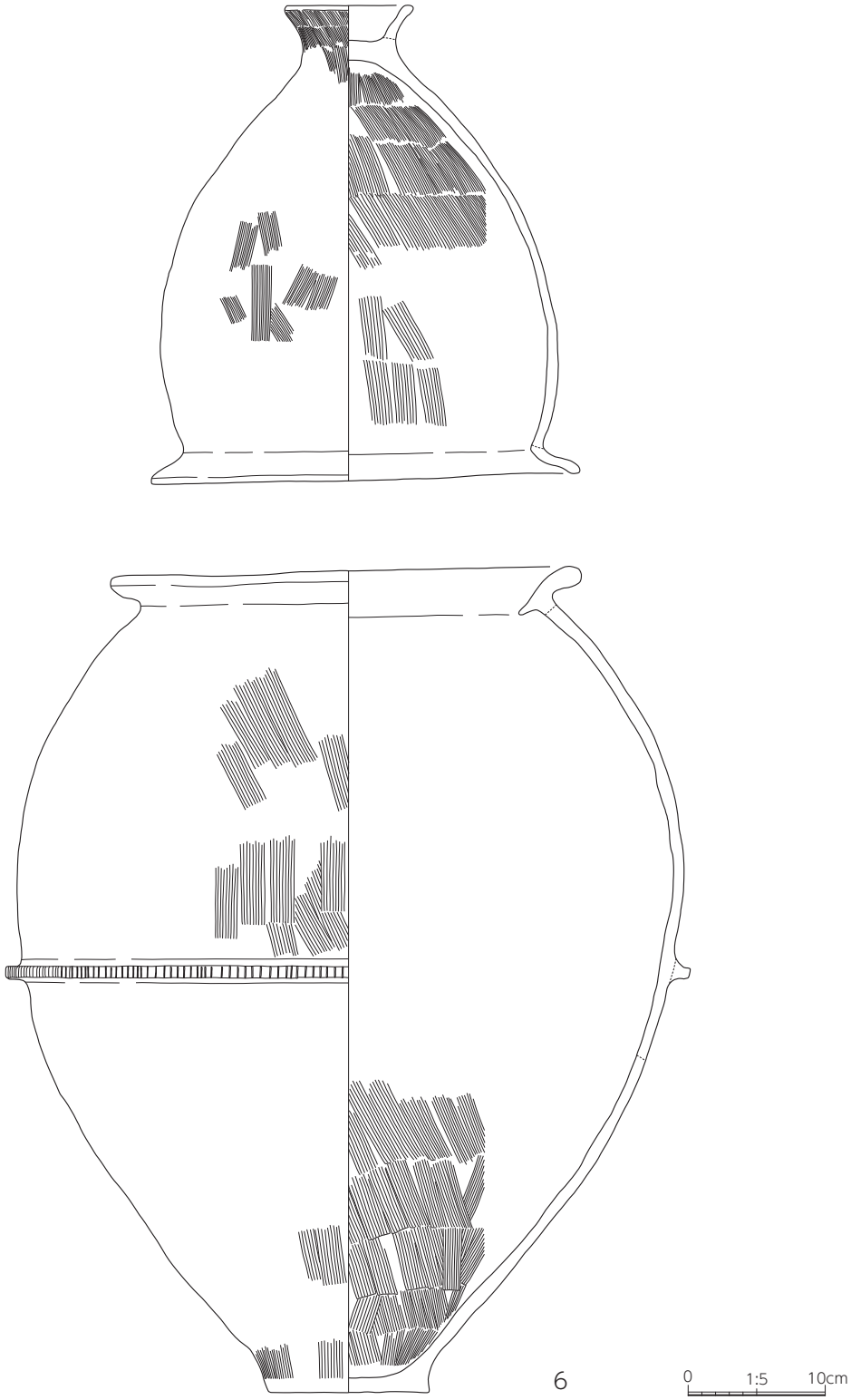
78号甕棺



第 36 図　甕棺第 2 群に属する甕棺③（77，78 号甕棺）

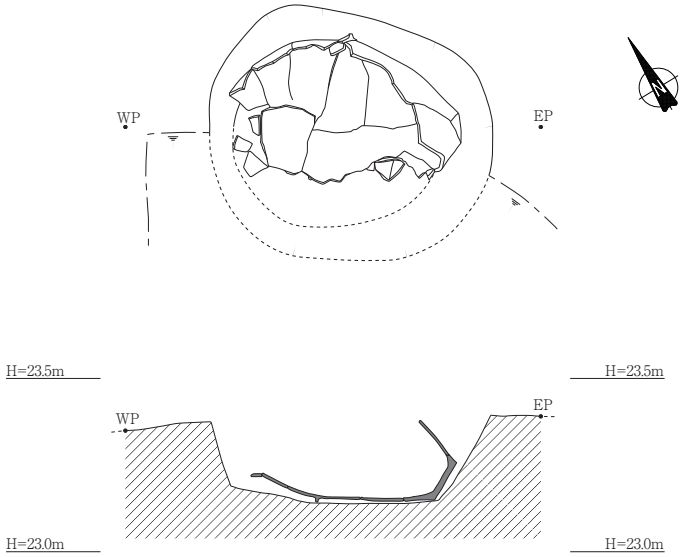


第 37 図　77 号甕棺実測図（第 2 群）

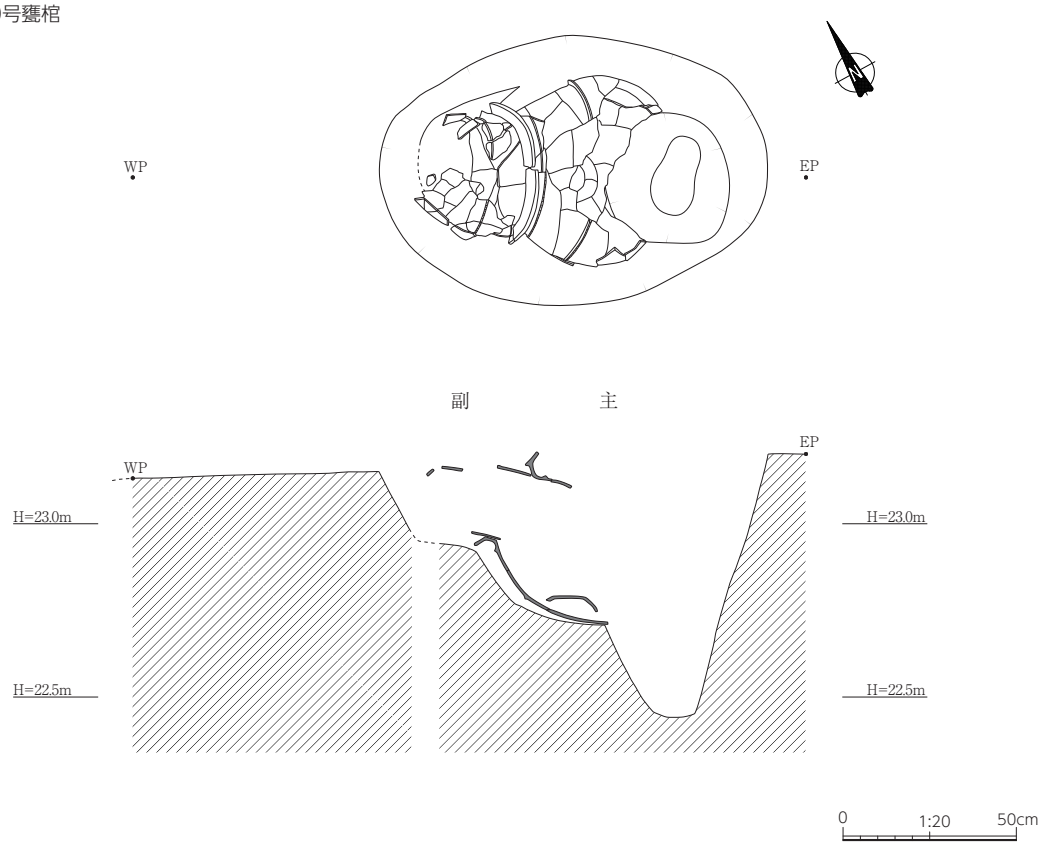


第 38 図　78 号甕棺実測図（第 2 群）

79号甕棺



80号甕棺



第 39 図　甕棺第 2 群に属する甕棺④（79，80 号甕棺）

ウ　副棺（小型甕）

口縁を打ち欠いており、形状は不明である。口縁下部から胴部にかけて外反し、胴部中頃で最大胴部径を迎えた後底部へ向かって収束するものと思われるが、削平により下半部を欠く。底部は破壊時に主棺側へと転がっており、平底である。

エ　型式等

主棺の形態から黒髪三式とする。

（9）82 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 40 図・第 41 図）

ア　遺構の特徴

長楕円形の墓壙で、主棺が納まるあたりが浅く掘りくぼめられているが立ち上がりが顕著ではない。胴部をその掘り方に沿わせるためやや上を向く。副棺は窪みより上に納まる。

イ　主棺（中型甕）

内傾する鋤先状口縁で、口唇部は丸くなる。口縁下部から強く張り出し、胴部上半で最大胴部径を迎える。その後中頃まで胴部の張り出しは維持され、突帯を境に直線的に底部へ収束していく。底部付近のくびれは見られない。

調整は外器面胴部下半は縦方向のハケ目、胴部中頃は斜め方向のハケ目で、内器面は胴部下半は縦方向のハケ目、胴部上半は横方向のハケ目を施す。

ウ　副棺（小型甕）

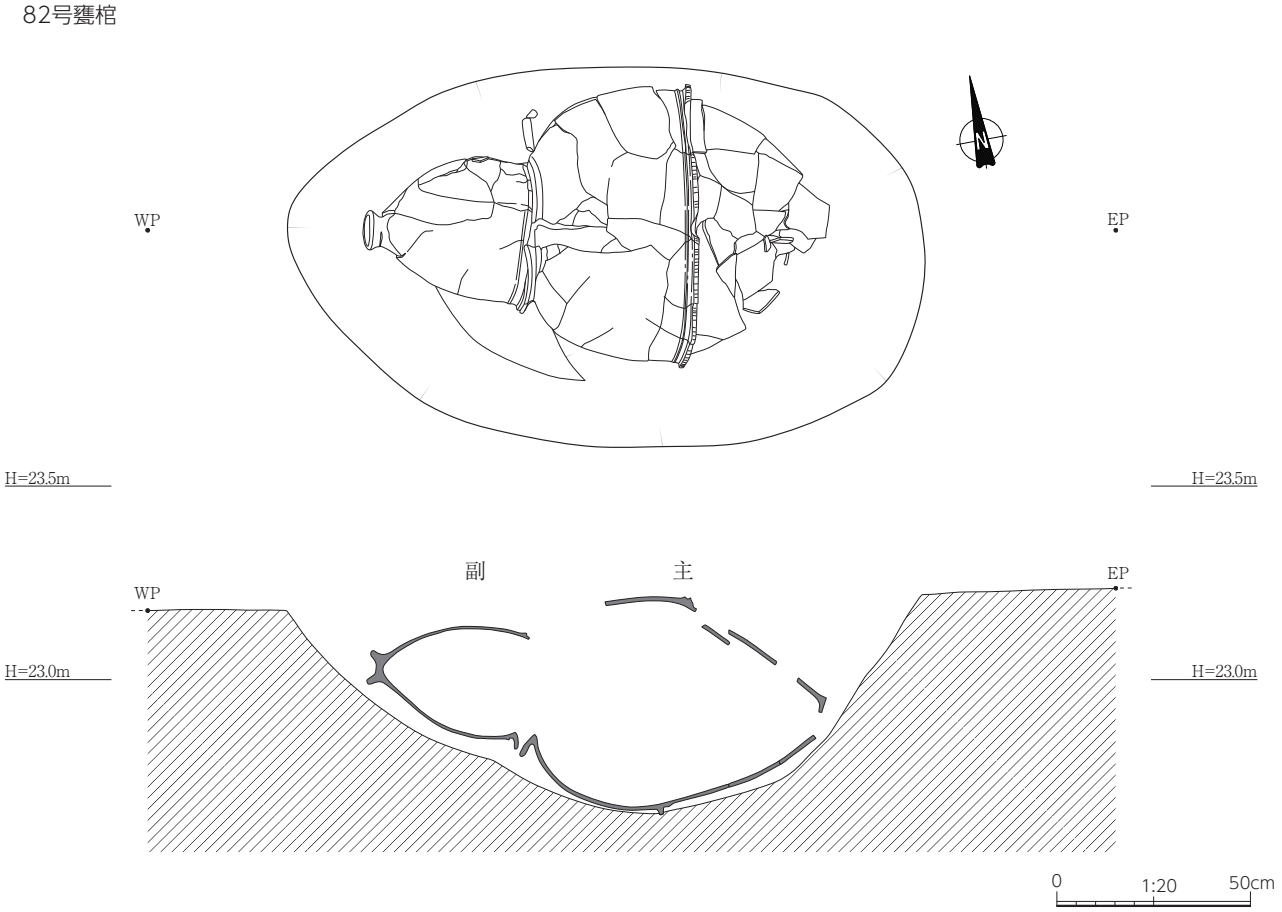
くの字に近いがわずかに内側が飛び出す。口縁下部から胴部に向かって緩く外反し、底部に向かってすぼまる。底部は裾がやや肥厚し内側に屈曲する上げ底である。

調整は外器面は胴部付近で縦方向のハケ目、内器面は胴部下半で縦方向、胴部中頃で斜め方向のハケ目を施す。

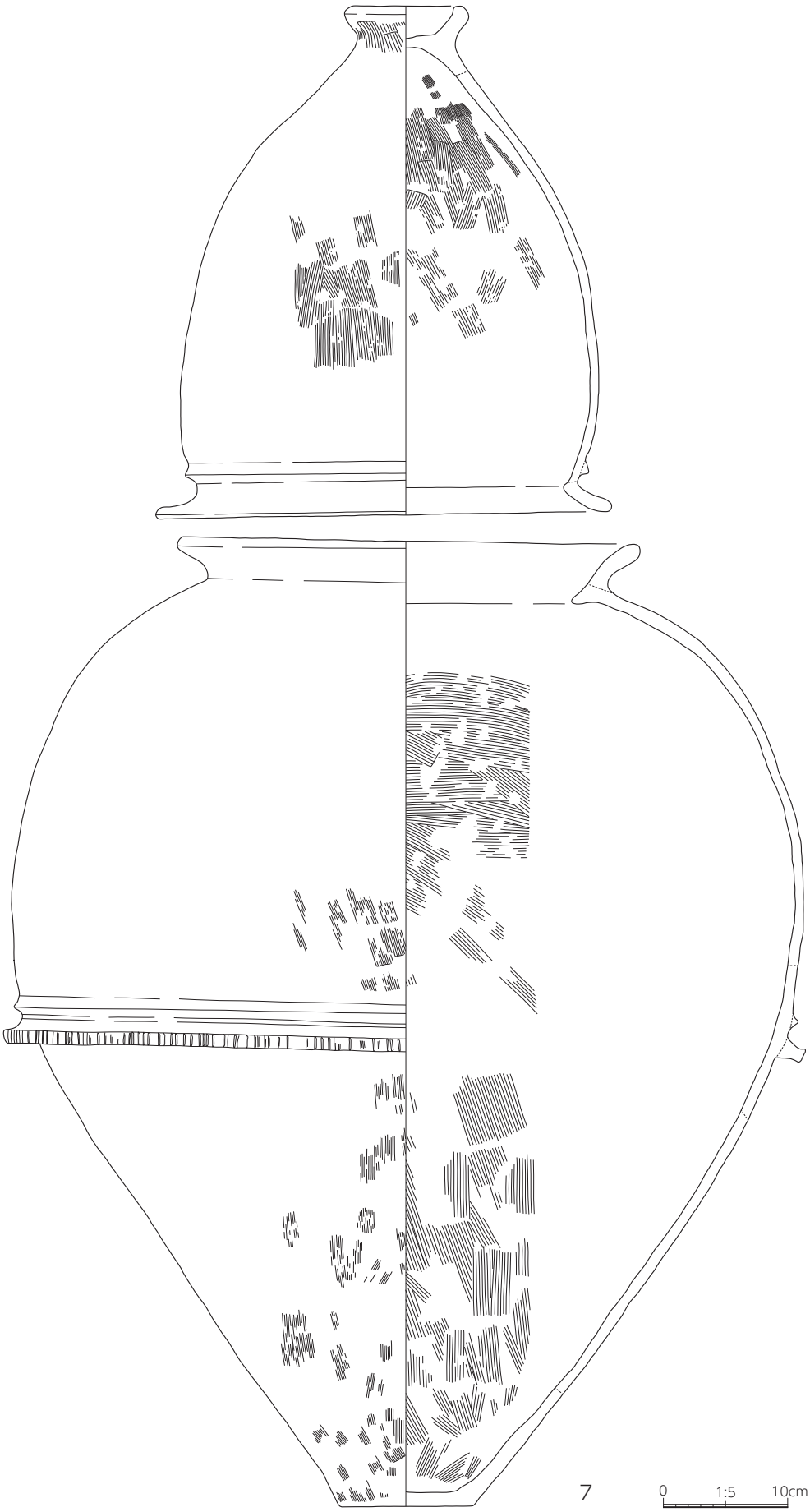
突帯は口縁下部に断面三角形の突帯が 1 条巡る。

エ　型式等

副棺の形態から黒髪四式、K Ⅲ c 式に属する。



第 40 図　甕棺第 2 群に属する甕棺⑤（82 号甕棺）



第 41 図　82 号甕棺実測図（第 2 群）

7　第２支群の甕棺（第 42 図）

第２群の西側に４基ほどの集中箇所が見られる。これを第２支群とする。第２支群には 64, 65, 68, 69 号甕棺が該当する。

（１）64 号甕棺（大型甕、第 43 図上段）

SZ08 の直下にあるためかは不明であるが墓壙のほとんどを消失しており、下端の一部が残存する程度である。甕は圧壊しており、口縁部のうち底面に接していた部分が折れて内側を向いており、その上に上端側の体部がつぶれて重なっている。胴部下半より下を消失し、胴部上半のうち底面に接している部分以外についても大部分を失っている状況である。

（２）65 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 43 図下段、第 44 図）

ア　遺構の特徴

SZ08 周溝の影響を受けて墓壙及び甕棺の一部を失っている。円形に近い墓壙で段を有しており窪みの中に主棺を斜方に納め底部を立ち上がりに、胴部を底面に沿わせて設置する。胴部上半と底面との間に小さくない空隙が生じるが、埋めるなどの措置が執られたものと思われる。納棺後小型の甕を主棺の口縁と副官の口縁を合わせることで蓋とする。

イ　主棺（中型甕）

内傾する鋤先状口縁で、口縁下部から屈曲して外側へ張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。その後ゆるやかに底部へ至り、底部は平底である。突帯は胴部下半付近に断面三角形のものと断面コの字のものがそれぞれ１条巡る。

ウ　副棺（小型甕）

内傾してくの字状に屈曲する口縁をもち、口縁直下から外へ張り出し胴部中頃で最大径となる。そこからは屈曲してやや直線的に底部へ向かい、底部はやや幅広の平底である。突帯は口縁下部に断面三角形のものが１条巡る。

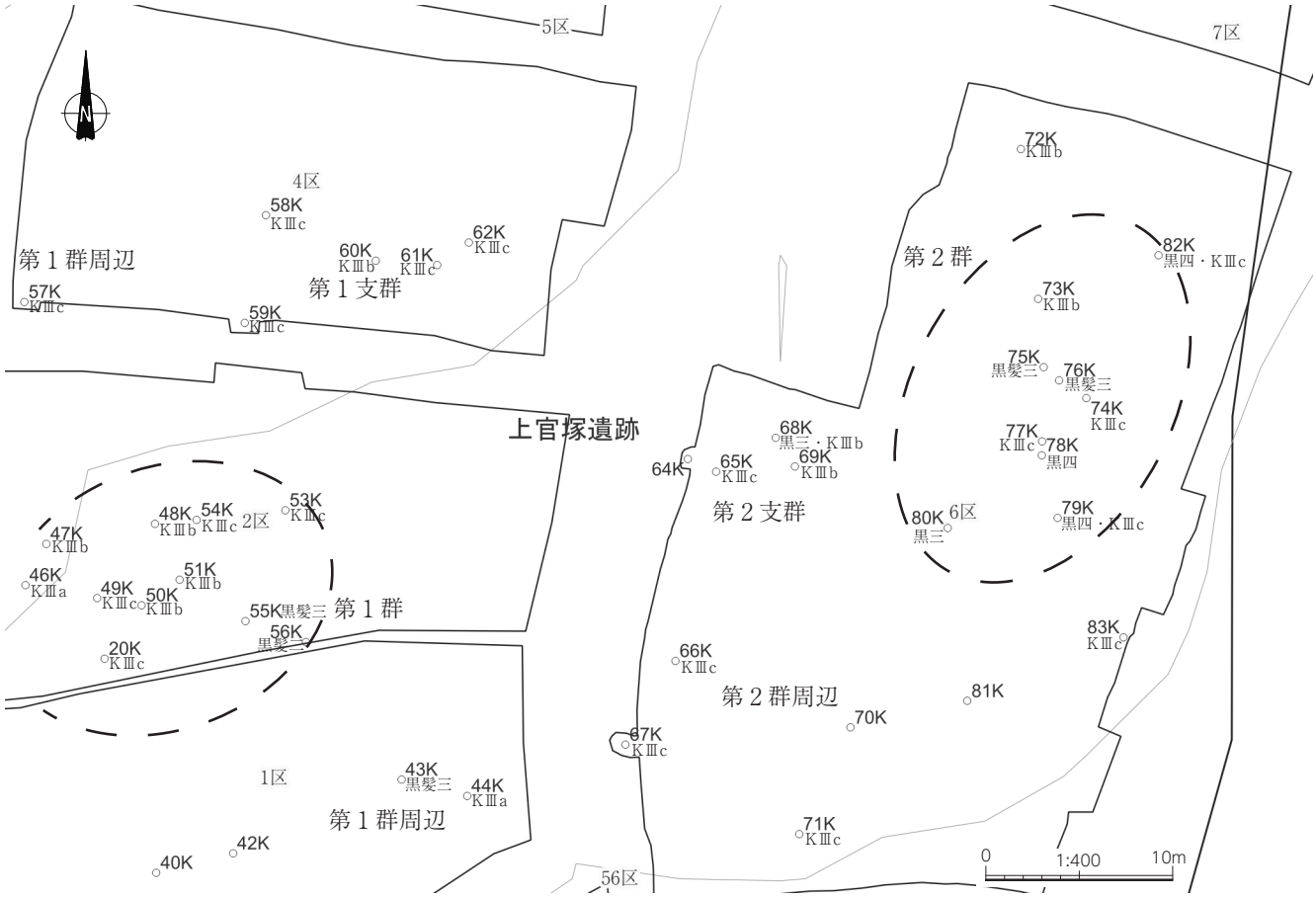
エ　型式等

特徴からＫⅢｃ式とする。

（３）68 号甕棺（中型甕 - 小型精製甕、第 45 図上段、第 46 図）

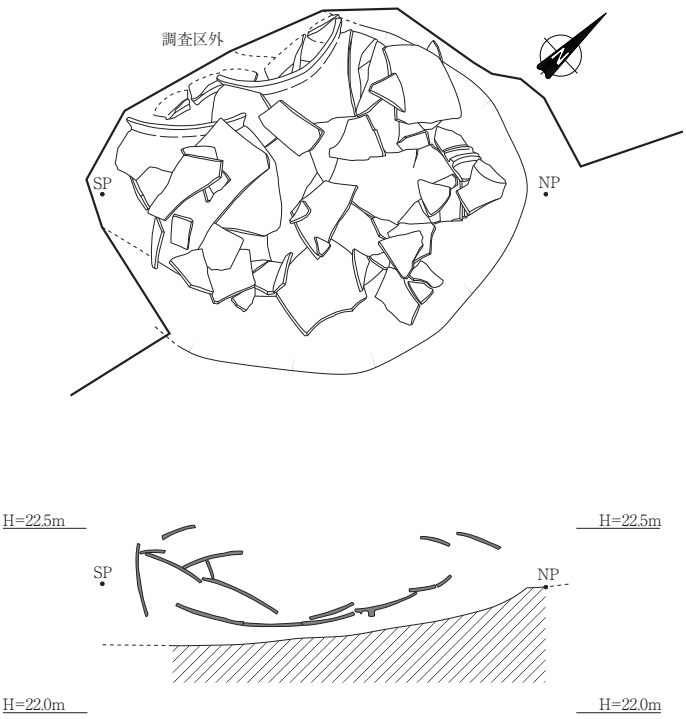
ア　遺構の特徴

長楕円形の墓壙で段差を有し、窪みの部分に主棺を納める。主棺の底部側は若干オーバーハング気味になっている。底部は墓壙の立ち上が

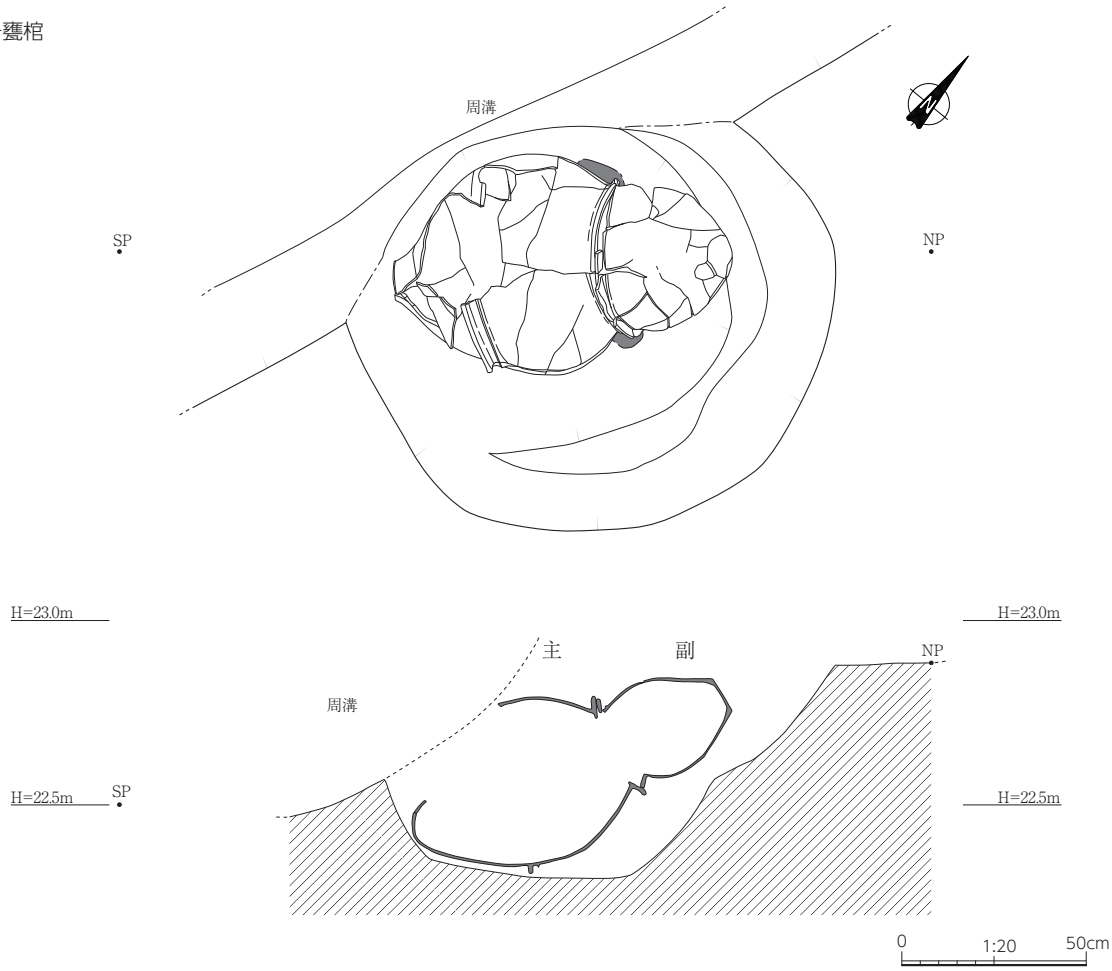


第 42 図　甕棺第２支群の分布

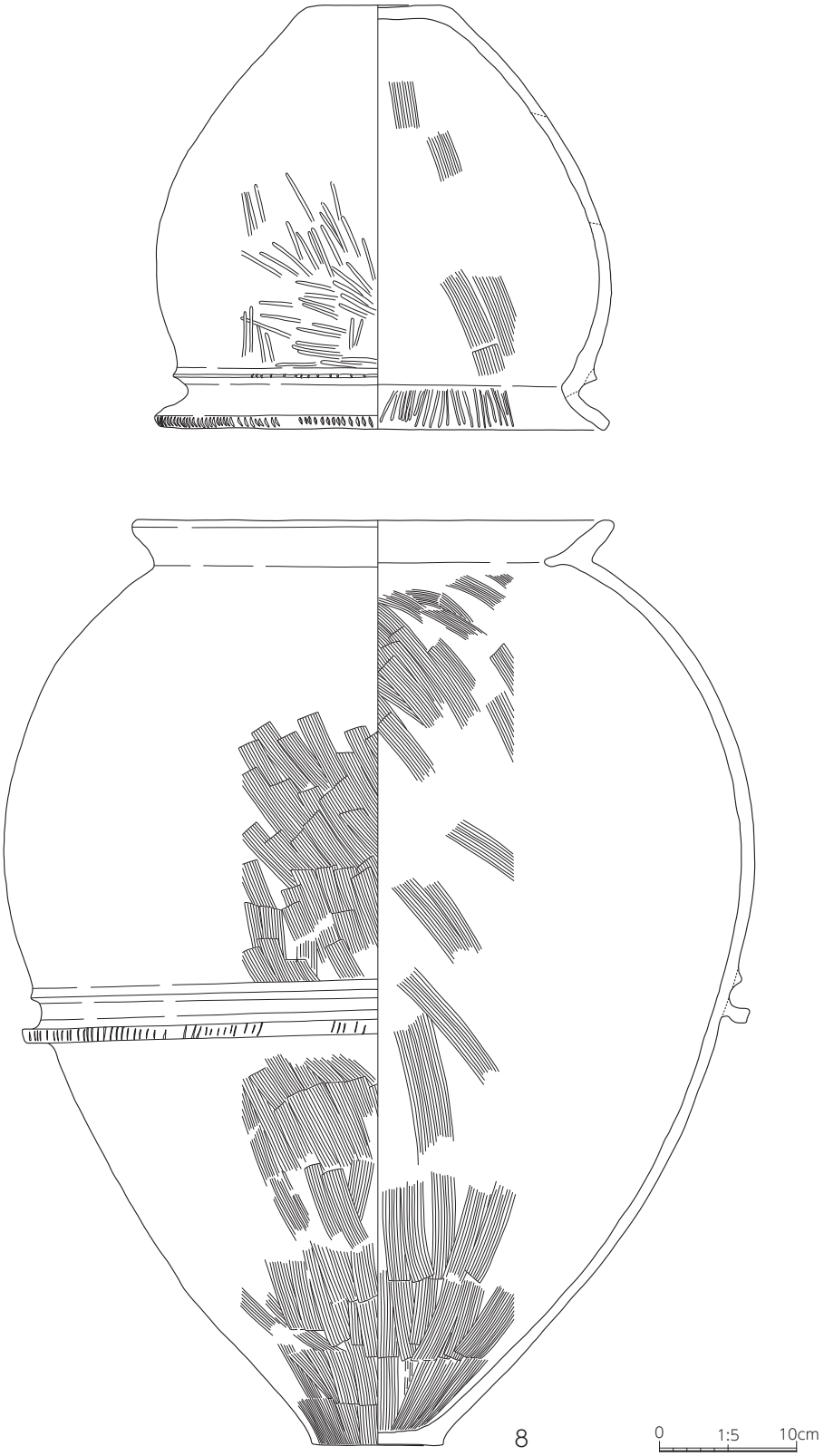
64号甕棺



65号甕棺

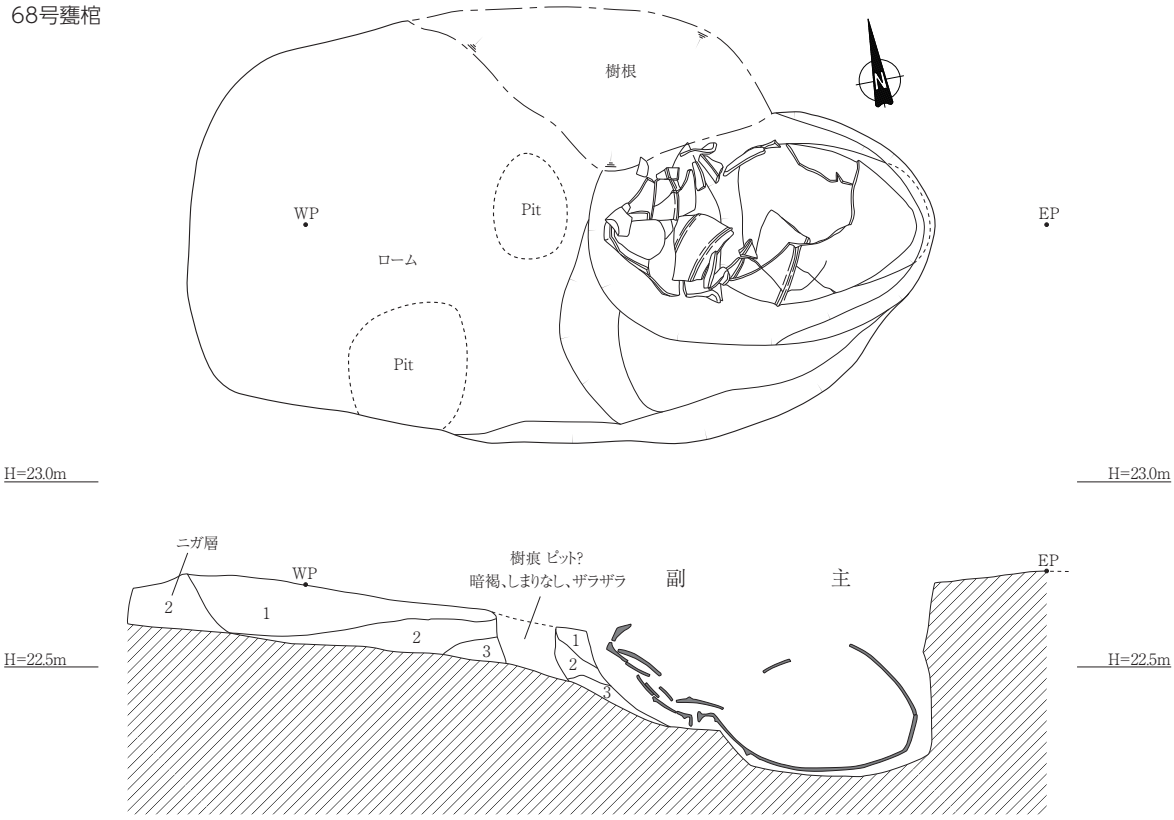


第 43 図　甕棺第 2 支群の甕棺①（64，65 号甕棺）



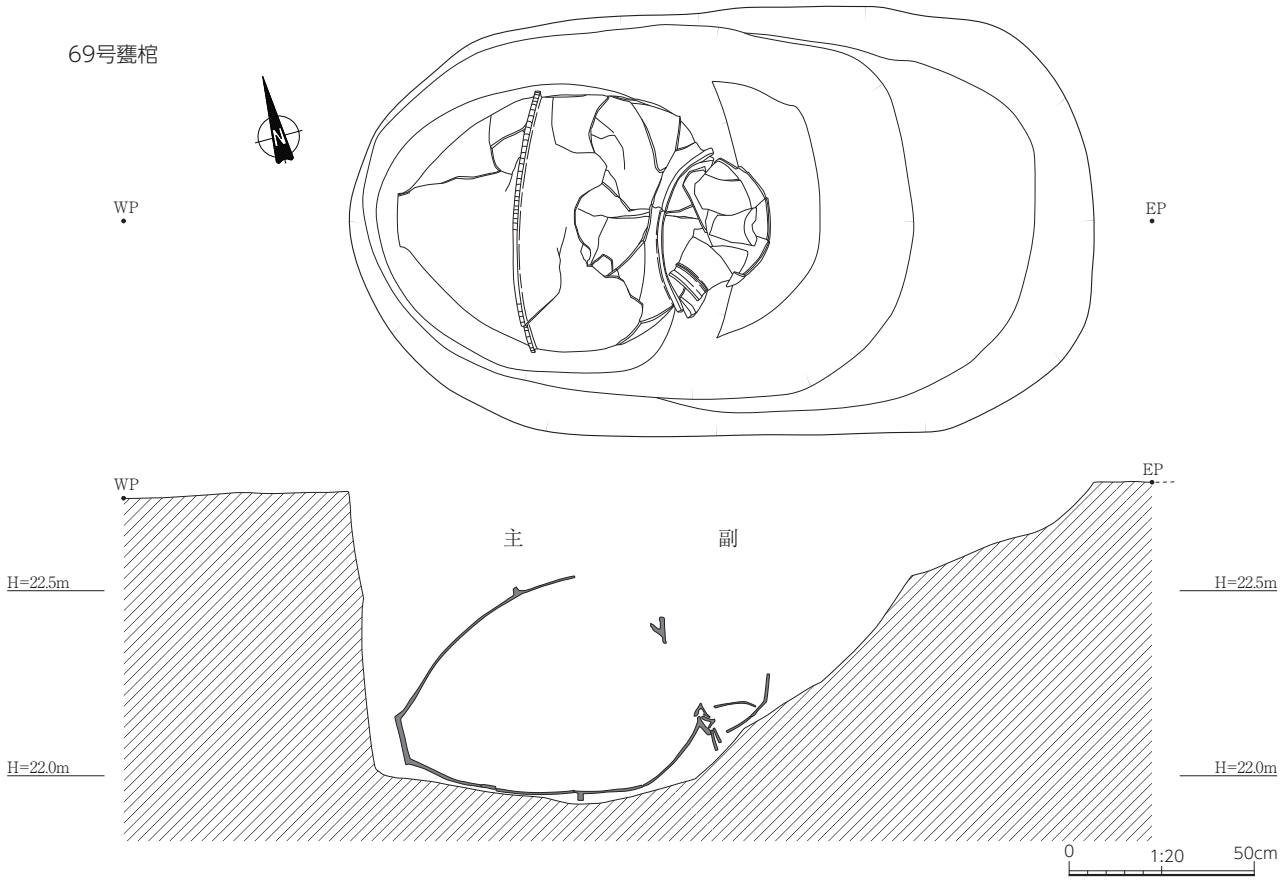
第 44 図　65 号甕棺実測図（第 2 支群）

68号甕棺

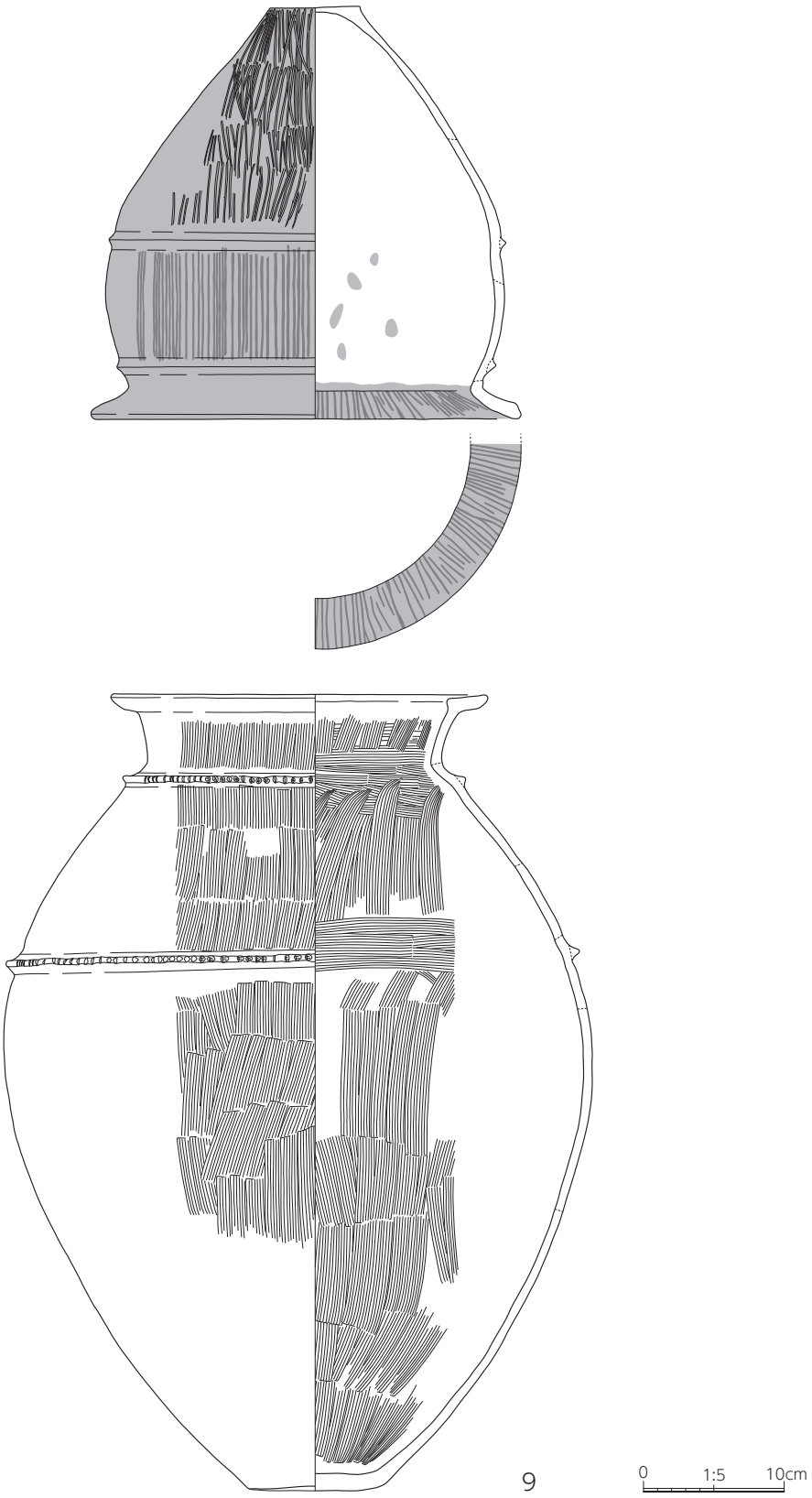


1層 褐色、よくしまる、粘土、ローム層を掘った土か?張り付けてあるようにも見える
2層ニガ土　部分的にまだら、しまり、地山(ニガ層)、粘性あまりなし、粒子は粗い
3層ローム層、褐色ロームややピンク、しまり、ほとんど小レキは混ざらない

69号甕棺



第 45 図　甕棺第 2 支群の甕棺②（68，69 号甕棺）



第 46 図　68 号甕棺実測図（主棺、第 2 支群）

りに接していないが、胴部が全体的に墓壙底面に接していることから安定的である。副棺である小型甕は段の上で主棺と合わせ口となる。小型甕も墓壙底面に沿う形であることから、予め甕棺の形状に合わせた地山の整形が行われていることが窺える。

イ　主棺

鋤先状口縁で、直下から外側へ強く張り出し、胴部中位で最大径となる。その後膨らみを維持しながら胴部下半へ至り、そこからやや内湾しつつ底部へ向かう。底部直上でわずかにくびれる。底部は平底である。調整は底部付近は縦方向、他は斜め方向のハケ目で突帯は頸部と胴部中頃付近に断面三角形の刻目突帯をそれぞれ1条巡らす。

ウ　副棺

内傾し、くの字状を呈する口縁で、口唇部はナデ押さえによりやや角張る。口縁下部から屈曲して外側へ膨らみ胴部中頃付近で内側へ角度を変え緩やかに底部へ至る。底部は幅広の平底であり、調整は外器面胴部にミガキ、口唇部に刻み目が施され、内器面は斜め方向のハケ目である。外器面全体に赤彩され、胴部上半の突帯間に縦方向の、口縁内側に放射状の線状彩文が施される。

エ　型式等

主棺の特徴から黒髪三式、KⅢb式に属する。

8　第2群周辺の甕棺

第2群周辺の甕棺は72号（北）、66号、67号、70号、71号、81号、83号（南）が該当する。

（1）72号甕棺（中型甕 - 小型甕、第47図）

ア　遺構の特徴

72号は長楕円形の墓壙をしていたと思われるが削平（それに加えて調査時の掘りすぎ）により基底部付近より上を失っている。それに伴ってか主棺の下半部を大部分失っている。

イ　主棺（中型甕）

内側がわずかに飛び出す口縁で口縁下部から膨らみ胴部上半で最大径を迎える。下半部を欠くため不明。

ウ　副棺（小型甕）

胴部上半を打ち欠いており、下半部を合わせることで蓋としている。底部は平底である。

エ　型式等

特徴からKⅢb式とする。

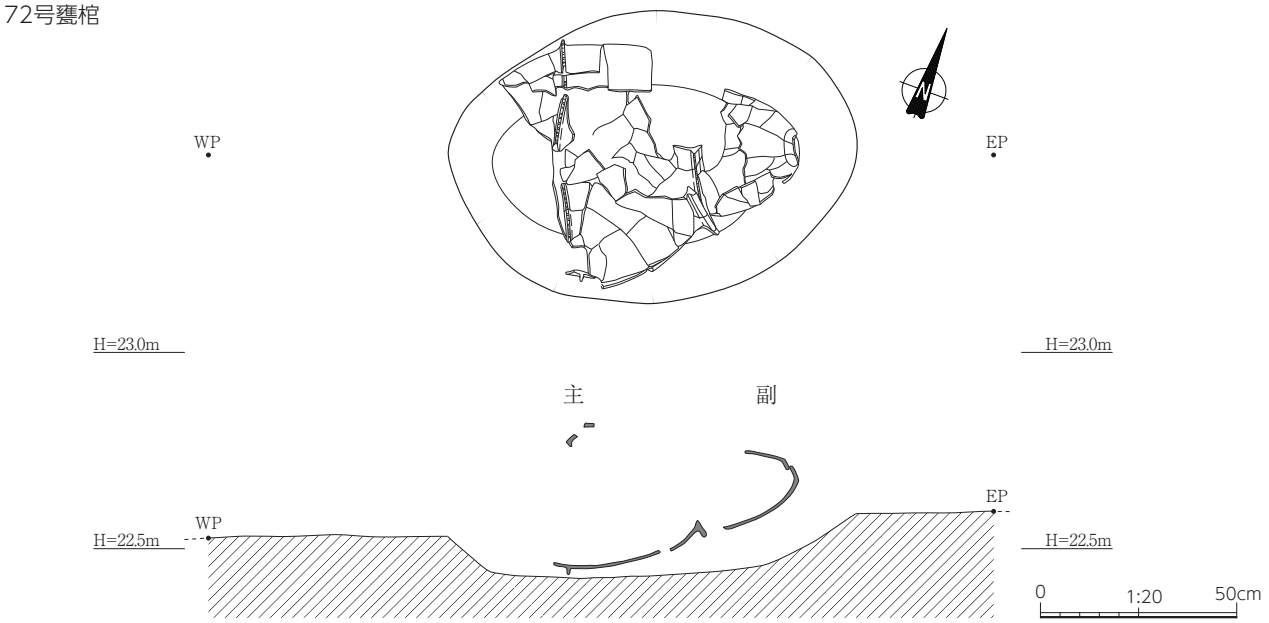
（2）66号甕棺（中型甕 - 小型甕、第48図上段）

ア　遺構の特徴

段を有する長楕円形の墓壙で、段下がりの部分に主棺を据え、口縁部を打ち欠いた小型甕を蓋とする。墓壙は副棺側が広く取られている。また主棺は据え方の問題ではあるが若干下を向く形で据えられている。

イ　主棺（中型甕）

孫の手状の口縁部で口縁下部から外へ膨ら



第47図　甕棺第2群周辺の甕棺（72号甕棺）

み、胴部中頃で最大径を迎える。下半でくびれ、そこからは直線的に収束する。底部はやや幅広の平底である。胴部中頃に断面コの字の刻目突帯を１条巡らす。

ウ　副棺（小型甕）

口縁部付近を打ち欠いている。胴部中頃で最大径を迎え、その後直線的に底部へ至る。底部はやや幅広の平底である。

エ　型式等

甕の特徴からＫⅢｃ式とする。

（３）67 号甕棺（大型甕 - 大型甕、第 48 図下段、第 49・50 図）

ア　遺構の特徴

長楕円形の墓壙であるが墓壙の大半を削平され、形状は不明。墓壙底面はほぼ水平で、甕棺もその形状に沿った形で据えられているが、主棺側は削平の影響で角度が変わっている。副棺側は底面に張り付いているためこの角度を基準とすると、傾斜は 10° でほぼ水平と言えるだろう。

イ　主棺（大型甕）

内側が飛び出し内傾する口縁で、口唇部はわずかに肥厚し丸みを帯びる。口縁直下から大きく張り出し胴部上半で最大径を迎える。その後胴部中頃で屈曲し直線的に底部へ至り、底部直上付近でくびれる。底部は平底である。器面は外器面の下半は斜め～縦方向、上半は縦方向のハケ目、内器面は底部付近が斜め方向、胴部下半は縦方向、胴部上半は横方向のハケ目を施す。胴部中頃に断面コの字の刻目突帯を１条巡らす。

ウ　副棺（大型甕）

口縁を打ち欠いて蓋とする。主棺とほぼ同様に口縁下部で強く張り出すため胴部上半で最大径を迎える。胴部下半で屈曲し、底部へ至る。底部は平底である。器面は外器面下半は縦方向、上半は斜め方向のハケ目、内器面は判然としないが上半が横～斜め方向のハケ目となる。胴部中頃付近に断面三角形のものと断面コの字の刻目突帯を各１条巡らす。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ式とする。

（４）70 号甕棺（第 51 図上段）

残存状況が極めて悪く、主・副の区別ばかりか甕棺であるかも判然としない。甕の底部と胴部付近の破片が散らばっている。

（５）71 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 51 図中段）

ア　遺構の特徴

墓壙の大半を削平されており、削平の影響を受けなかった底面付近のものが残存する。またそれぞれ削平により底部を欠いている。墓壙はやや小ぶりな主棺を据えるための墓壙を掘り、主棺を据え納棺した後蓋となる副棺をあわせている印象を受ける。

イ　主棺（中型甕）

内傾し内側がわずかに飛び出す口縁で、口縁下部から膨らみ胴部中頃付近で最大径を迎える。下半で内湾し底部へ至ると思われるが下半を大きく欠いているので底部形状等については不明。胴部中頃付近に断面三角形の突帯を１条巡らす。

ウ　副棺（小型甕）

やや内傾する鋤先状口縁で、口縁下部からわずかに膨らむ。胴部中頃を以下を欠く。

エ　型式等

特徴からＫⅢｃ式とする。

（６）83 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 51 図下段）

ア　遺構の特徴

墓壙の大半を削平により失っている。甕も墓壙底面側を残してほとんど失われているため副棺にいたっては口縁付近のごくわずかな部分に限られる。主棺の角度から推定するに 45° とやや斜め上方寄りに据えられている。また、主棺の胴部中頃の底面と接する部分が抜けており、意図的に打ち欠かれている可能性もある。

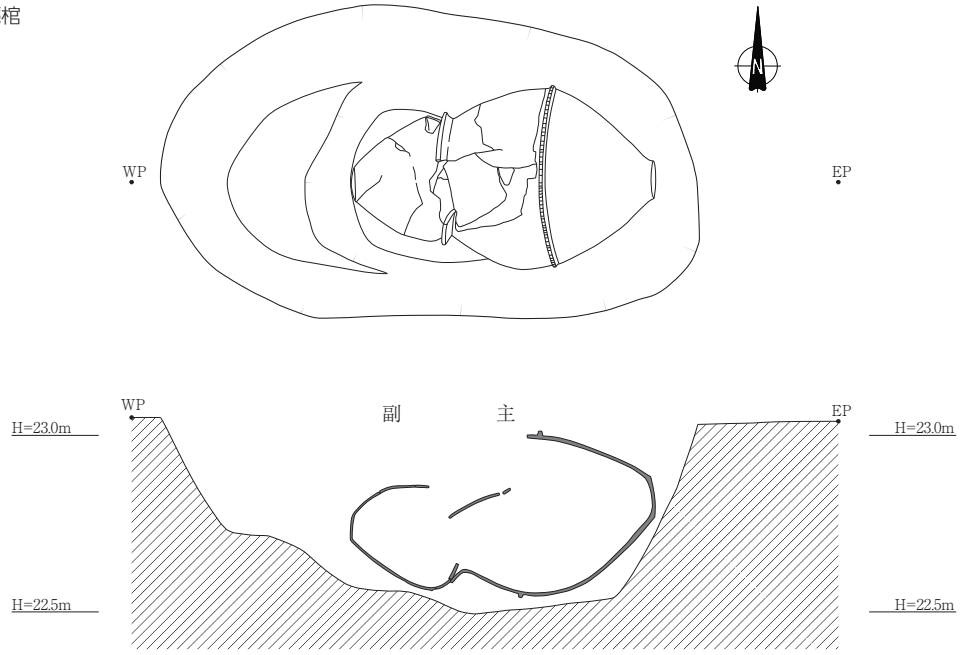
イ　主棺（中型甕）

口縁部は打ち欠かれており、元々この甕が主棺となるものであったかはわからないが副棺側は口縁部を有しており、主棺側を合わせた可能性も否定できない。口縁下部が強く張り出すことにより球状の胴部で下半から屈曲して底部へ至る傾向から形状としては 66 号甕棺に近い。底部はやや幅広の平底である。

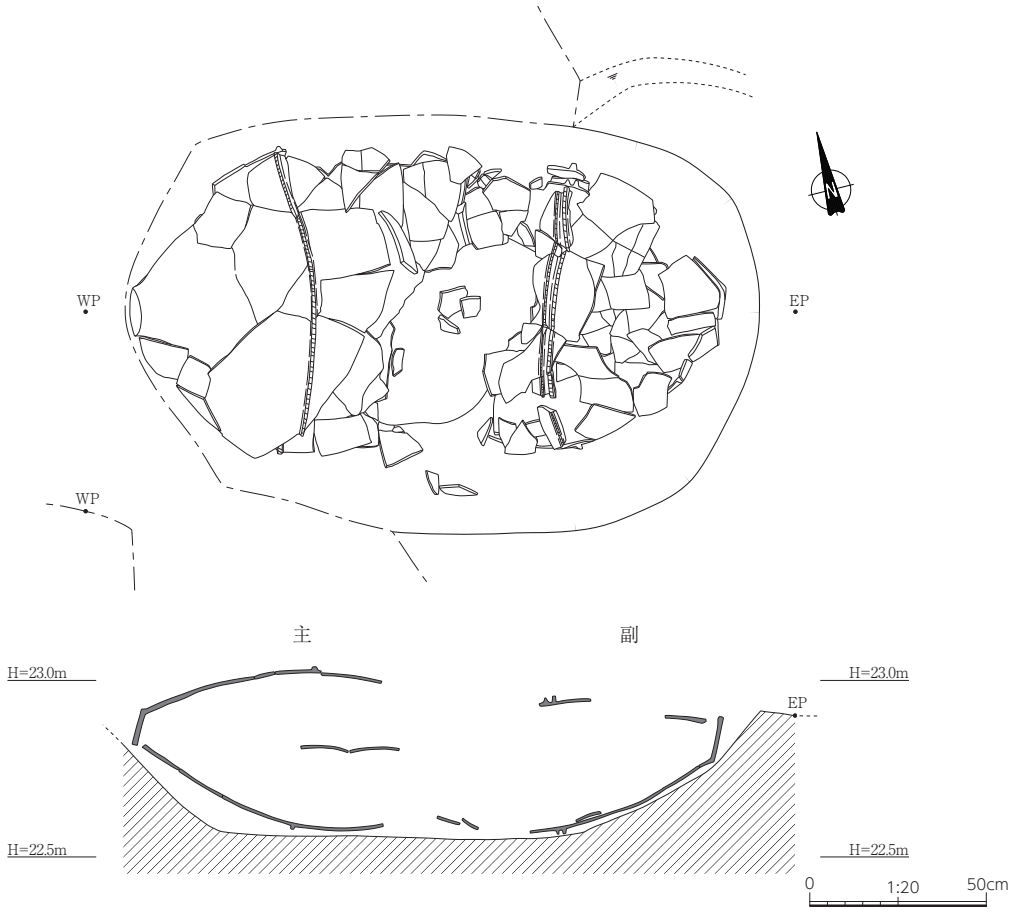
ウ　副棺（小型甕）

大半を欠いており全容は不明である。くの字を呈する口縁部に口縁下部から緩やかに内湾する。鉢様の形状の様に見えるが、口縁下部に突帯を有していることから甕とした。

66号甕棺



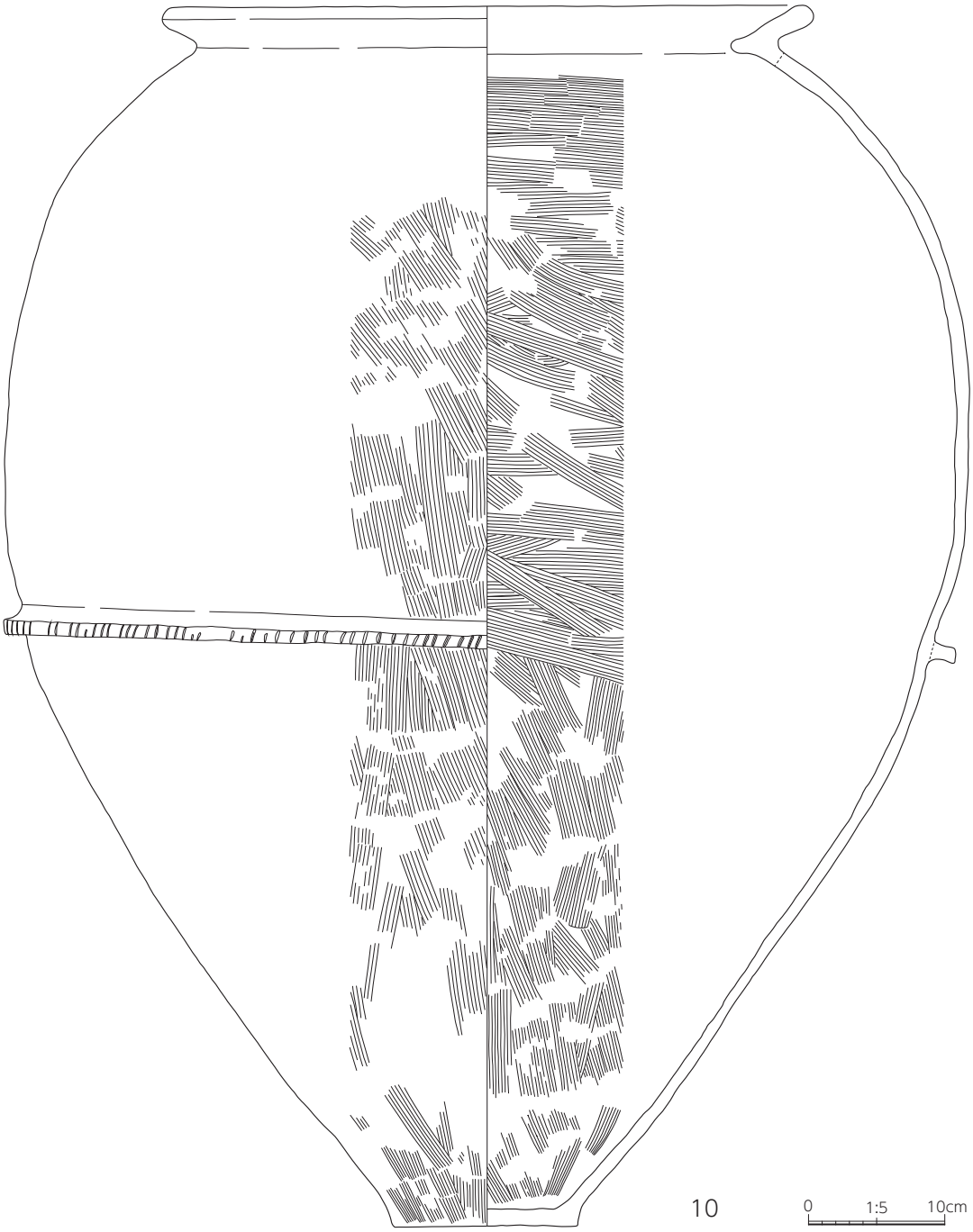
67号甕棺



第 48 図　甕棺第 2 群周辺の甕棺（66，67 号甕棺）

エ　型式等

甕の特徴からＫⅢｃ式とする。

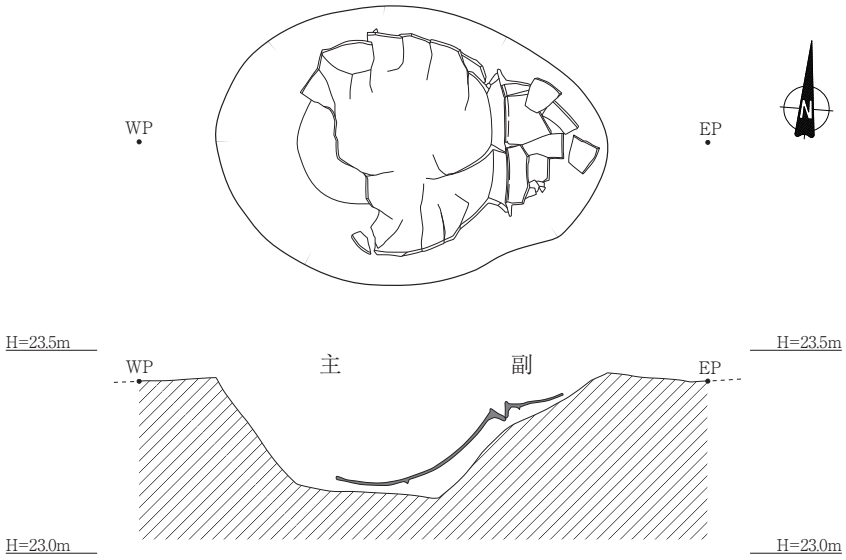


第 49 図　67 号甕棺実測図（主棺、第 2 群周辺）

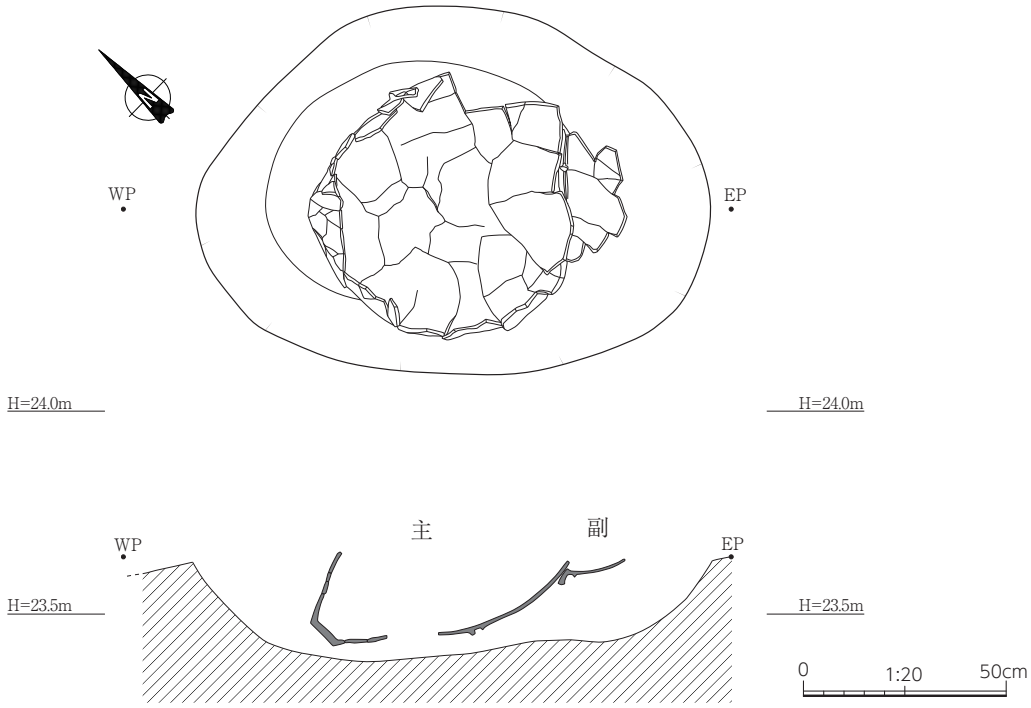
第 50 図　67 号甕棺実測図（副棺、第 2 群周辺）

70号甕棺

71号甕棺



83号甕棺



第 51 図　甕棺第 2 群周辺の甕棺（70，71，83 号甕棺）

９　甕棺第３群（第 52 図）

第３群に属するのは 84 号、85 号、86 号、87 号、88 号、89 号、90 号、91 号、92 号、93 号、94 号（11 基）がこれに含まれる。

（１）　84 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 53 図上段）

ア　遺構の特徴

遺構上面を大きく削平されており、主棺上半の一部と副棺のほとんどを失っている。墓壙底面は対称的なすり鉢状を呈し、最も深い部分に主棺の最大径部分である胴部中頃が据わるように設置され、口は水平に近くなる。結果として作業域は狭くなるが、納棺後小型甕を蓋として納める。

イ　主棺（中型甕）

口縁を打ち欠いている。胴部中頃で最大胴部径を迎え、そこから屈曲して底部へ至る。底部は平底で、胴部中頃付近に断面三角形の突帯を１条巡らす。

ウ　副棺（小型甕）

鋤先状口縁で胴部はわずかに膨らむ。中頃以下を欠くためそれよりも下の部分は不明である。

エ　型式等

ＫⅢｂ式と推定する。

（２）　85 号甕棺（中型甕 - 中型甕、第 53 図中段）

ア　遺構の特徴

墓壙のほとんどを失っており、甕も底面に張り付いている部分を除いて消失している。残存する墓壙底面の断面形状から主棺を墓壙の片側端に寄せ、底部を墓壙の裏面に掛けることで据え置く。納棺後同規模と推定される甕を被せている。また双方とも口縁部付近を打ち欠いているのもこの甕棺の特徴と言える。

イ　主棺（中型甕）

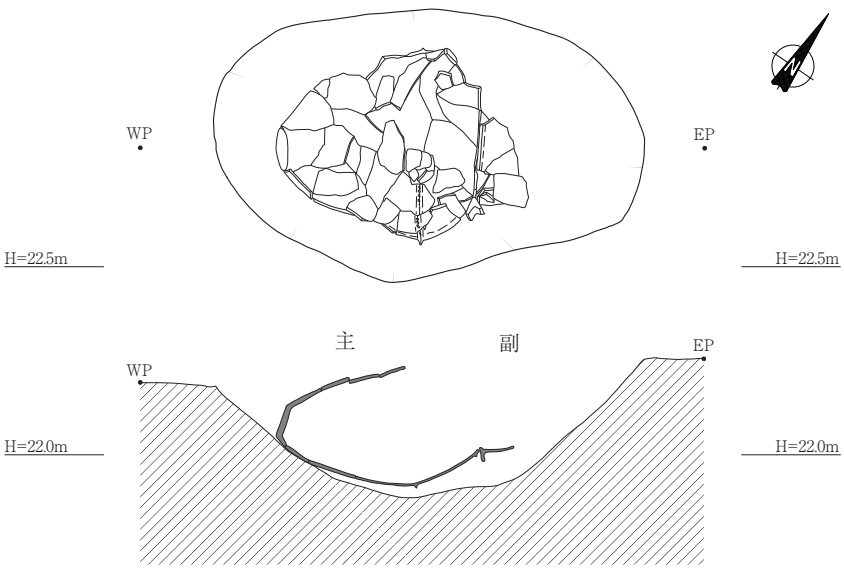
口縁部付近を打ち欠いている。胴部は上半付近で最大径を迎え、そこから内湾し底部へ至る。底部を欠いているが、胴部形状から平底のものと推定する。胴部上半に断面三角形の突帯を１条巡らす。

ウ　副棺（中型甕）

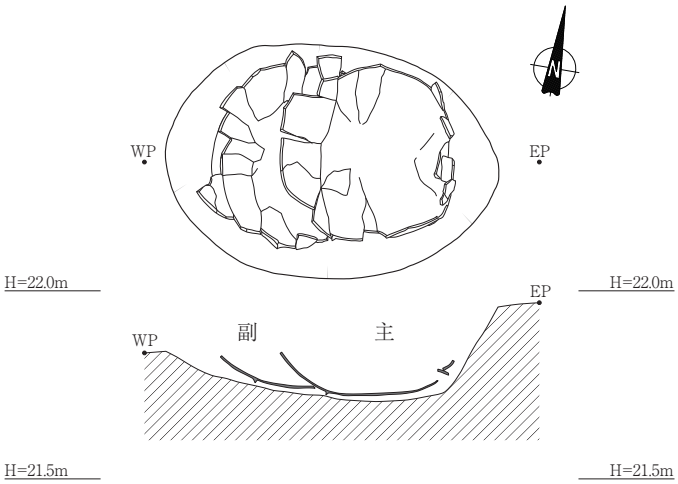
主棺と同じく口縁部を打ち欠いている。残存状況が悪く胴部中頃までであり底部付近を大きく欠く。主棺と同形状のものを使用しているものと思われる。胴部中頃付近に断面三角形の突

第 52 図　甕棺第３群の分布

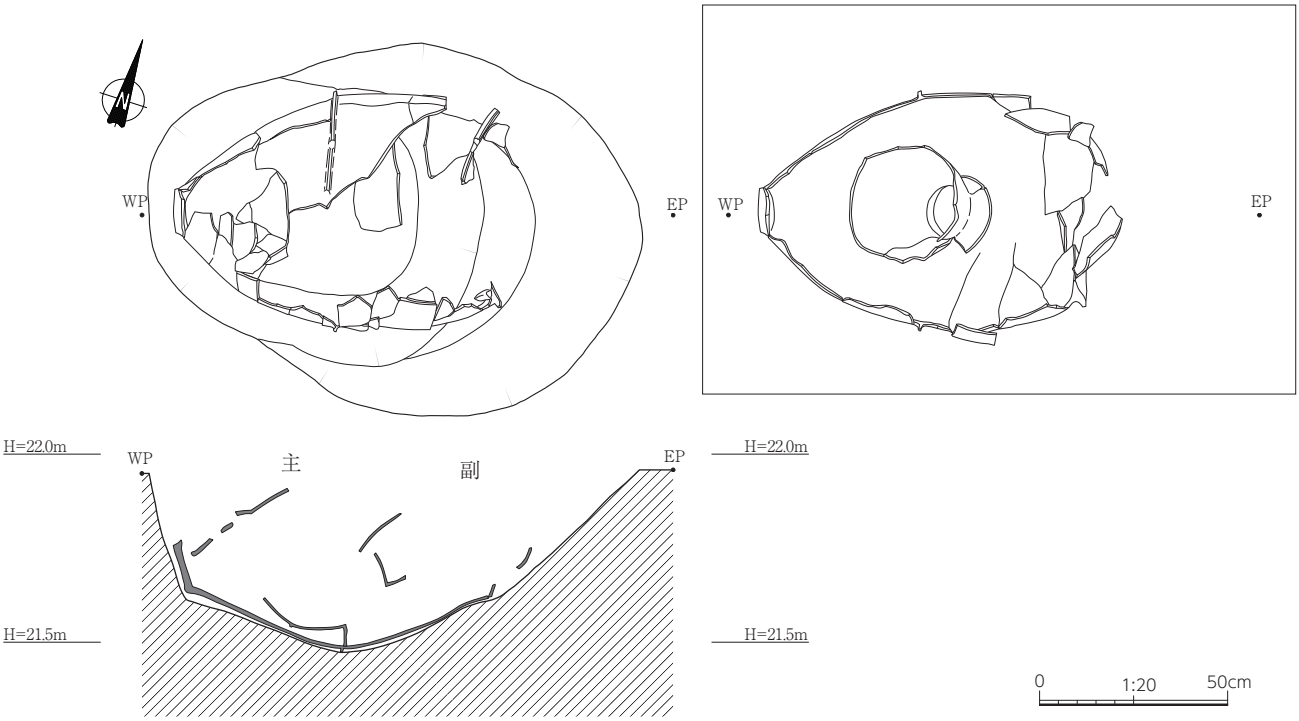
84号甕棺



85号甕棺



86号甕棺

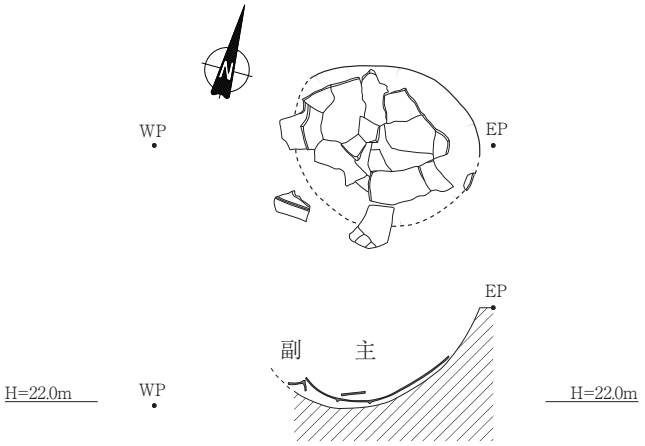


第 53 図　甕棺第３群に属する甕棺①（84，85，86 号甕棺）

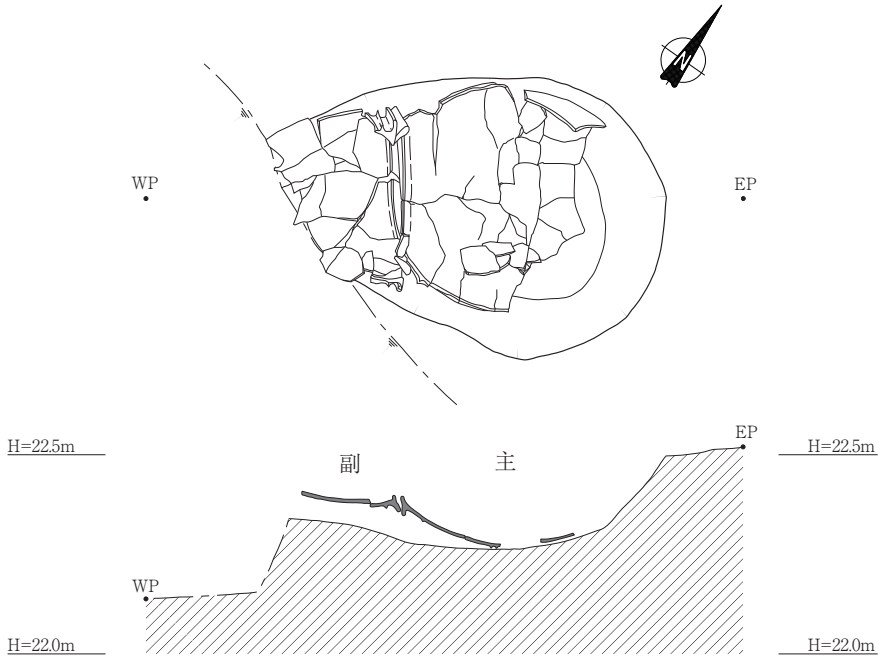
帯を１条巡らす。
エ　型式等
　ＫⅢｃ式と推定する。
（３）　86 号甕棺（大型甕 - 小型甕、第 53 図下段）
ア　遺構の特徴
　墓壙上面が大きく削られており副棺のほとんどを欠く。底面付近の形状から片側が屹立する長楕円形の墓壙であったと推測され、急角度の壁側に主棺の底部を沿わせ、墓壙の最深部に胴部が据わるように整えて設置している。納棺後比較的緩い傾斜に副棺を据えて蓋とする。削平時に生じたものかは不明であるが、主棺側の空間が残っている段階で副棺が壊され、副棺の胴部中頃から上の部分が主棺側に流れ込んでいる。
イ　主棺（大型甕）
　内側がわずかに飛び出す内傾する口縁で、口縁直下から外側へ張り出し胴部中頃で最大胴部径を迎える。その後ゆるやかに底部へ至り、底部上面付近で屈曲する。底部はやや幅広の平底である。胴部中頃付近に断面コの字の突帯が１条巡る。
ウ　副棺（中型甕）
　主棺の中に入り込んでいた胴部中頃より上半を欠いており、全体は不明である。断面くの字を呈する口縁で上部は外反し、口唇部はナデ押さえにより角張る。口縁下部でくびれ、その後強く張り出す。中頃以下を欠く。

（４）　87 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 54 図上段）
ア　遺構の特徴
　墓壙のほとんどを失っており、底面に張り付いている主棺の一部と副棺の口縁部が残存するのみである。そのため全容については不明である。主棺の胴部上半に突帯が２条認められることから中型甕と小型甕の組み合わせではないかと推測する。
イ　主棺（中型甕）
　口縁部を打ち欠いている。口縁下部から外へ張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。その後屈曲し底部へ直線的に至る。底部を欠いているが平底であると推定する。胴部上半に間隔をおいて断面三角形の突帯が２条巡る。
ウ　副棺（小型甕）
　口縁部のみでそれ以下を欠く。内傾する鋤先状口縁である。
エ　型式等
　ＫⅢｃ式に属する。
（５）　88 号甕棺（中型甕 - 中型甕、第 54 図中段、第 55 図）
ア　遺構の特徴
　墓壙の大半を削平されており、副棺側に至っては撹乱により深く削り取られている。また、中型甕の組み合わせによるものと推定され主副の区別が付きにくいが、墓壙底面に接している方を主棺、口縁部を合わせた結果墓壙より浮く形になる方を副棺とする。底面形状から片側が急角度の壁面を持つ長楕円形の墓壙で、急斜面側に主棺の底部を据え、納棺後口縁を合わせるようにして副棺で蓋をする。
イ　主棺（中型甕）
　口唇部がやや肥厚し丸くなった内傾する鋤先状口縁で、口縁部直下で屈曲し外側へ強く張り出す。胴部中頃付近で最大径を迎え、その後屈曲し直線的に底部へ至る。底部を欠く。外器面は胴部下半は縦方向、上半は横～斜め方向のミガキ、口縁部内側に放射状の彩文が施される。口縁下部に１条、胴部中頃に２条の断面三角形の刻目突帯が巡る。胴部と口縁下部の突帯間に線刻絵画が２つ施される。１つは半円でドーム状を描き、その中を直線で埋めるように表現している。２つめは横方向の直線と縦線を 10 本以上（部分的に欠損するので総量不明）描き、壁状のものを描いている。どちらも構造物をモチーフとしており、前者は竪穴住居を、後者は柵を表すか。
ウ　副棺（中型甕）
　鋤先状口縁で、口縁下部で屈曲し、やや直線的に外側へ向かう。胴部中頃で最大径を迎えるが主棺のものと比べて張り出しが弱く細身の印象を受ける。中頃から屈曲して直線的に底部へ向かうが底部を撹乱により欠く。主棺は精製甕と言えそうなものであるのに対し、副棺側の調整は簡素である。口縁下部に断面三角形の突帯が１条巡る。
エ　型式等
　黒髪四式に属する。
（６）　89 号甕棺（中型甕単棺、第 54 図下段）

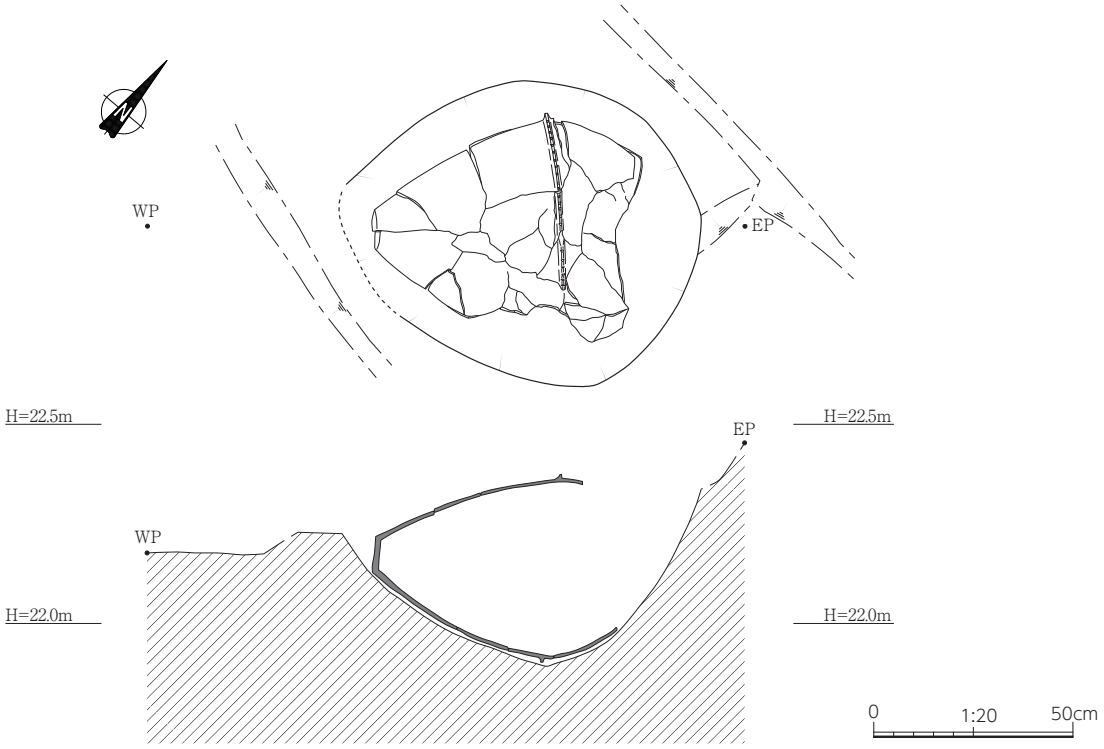
87号甕棺



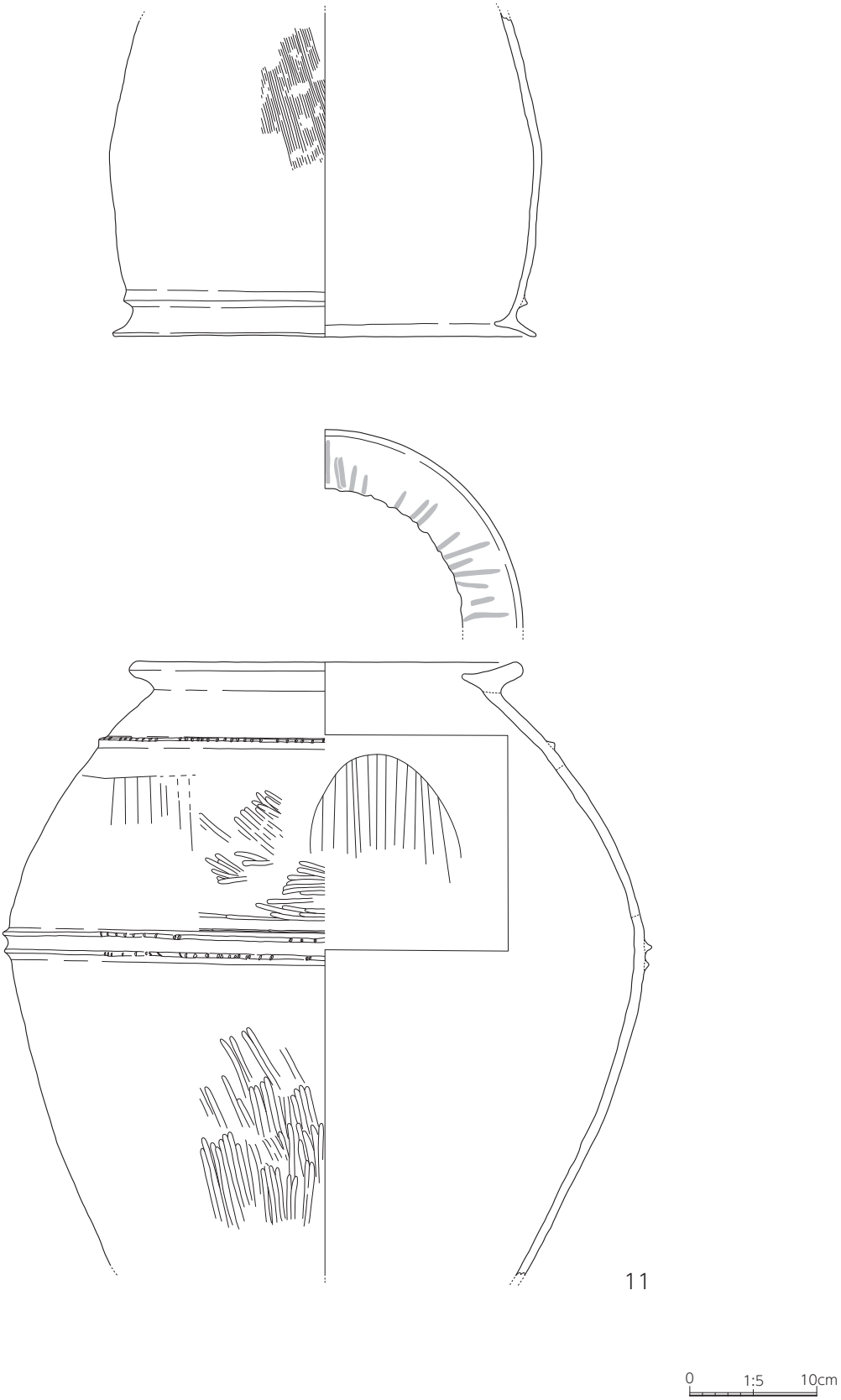
88号甕棺



89号甕棺

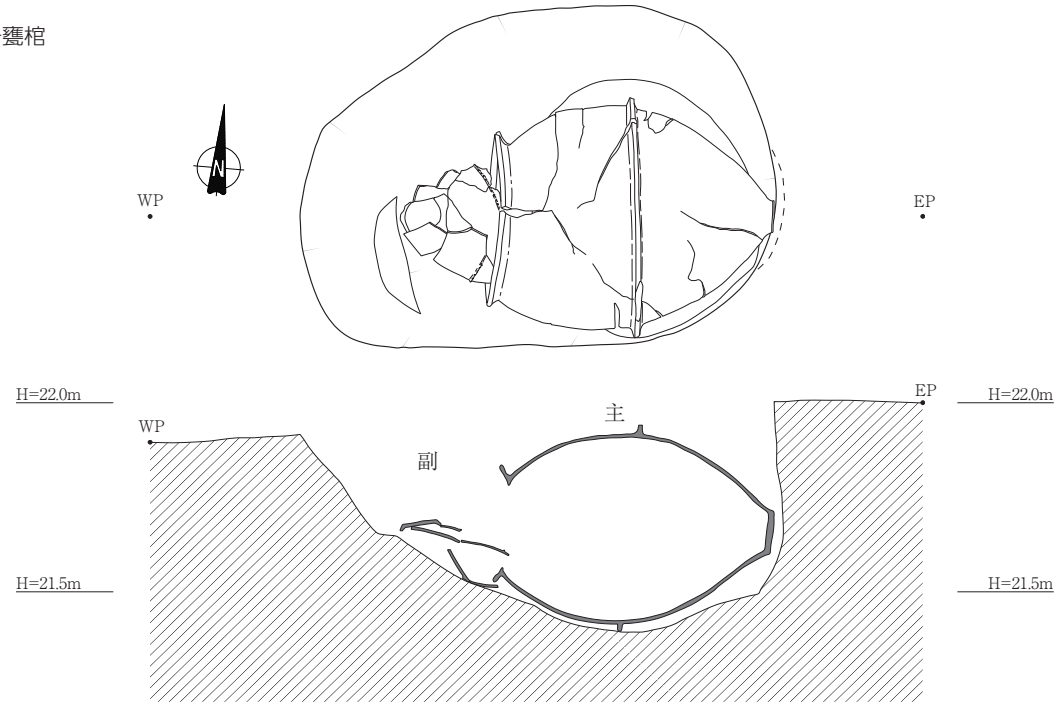


第 54 図　甕棺第３群に属する甕棺②（87，88，89 号甕棺）

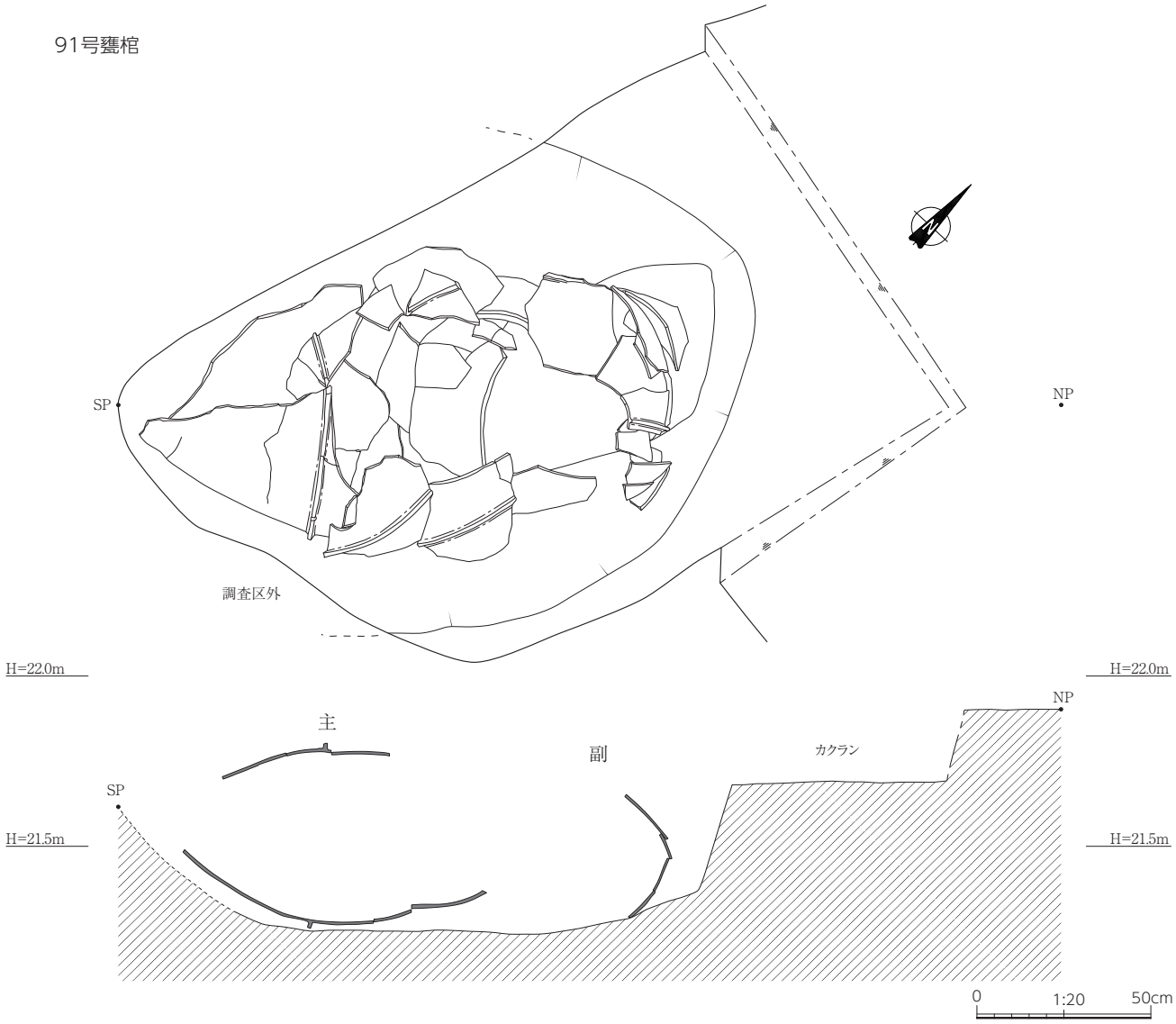


第 55 図　88 号甕棺実測図（第 3 群）

90号甕棺



91号甕棺



第 56 図　甕棺第３群に属する甕棺③（90，91 号甕棺）

ア　遺構の特徴

単棺と考えられるものである。墓壙の大半が削られている。甕の胴部中頃が墓壙の底面に接するように掘り込まれており、据えた結果口がやや下を向く。

イ　主棺

口縁部付近を打ち欠いている。口縁下部から外側へ張り出し、胴部中頃付近で最大径を迎える。その後屈曲して底部へやや直線的に至る。底部はやや幅広の平底である。胴部中頃に断面三角形の突帯が１条巡る。

（７）　90 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 56 図上段）

ア　遺構の特徴

片側が屹立する長楕円形の墓壙で、主棺側はわずかに窪む。その窪みを利用して胴部を設置させ、底部は急角度の壁面に沿わせる。結果口は水平を向く。納棺後小型の甕で蓋をする。

イ　主棺（中型甕）

口唇部が肥厚する鋤先状口縁で、口縁下部で屈曲し外側へ強く張り出す。胴部上半で最大径を迎え、その後ゆるやかに内湾し、胴部下半で屈曲、その後底部直上付近で内湾気味にくびれる。底部は幅広の平底である。胴部中頃付近に断面Ｍ字を呈する突帯が１条巡る。

ウ　副棺（小型甕）

口縁を打ち欠いており、主棺の内口縁にあわさる。口縁下部で屈曲する部分がわずかに残存し、屈曲部から外側へ強く張り出し胴部中頃で最大径を迎える。その後屈曲して内湾し底部へ至る。底部はやや幅広の平底である。外器面底部付近は縦方向、それより上は斜め方向のハケ目である。胴部中頃に断面三角形の刻目突帯が１条巡る。

エ　型式等

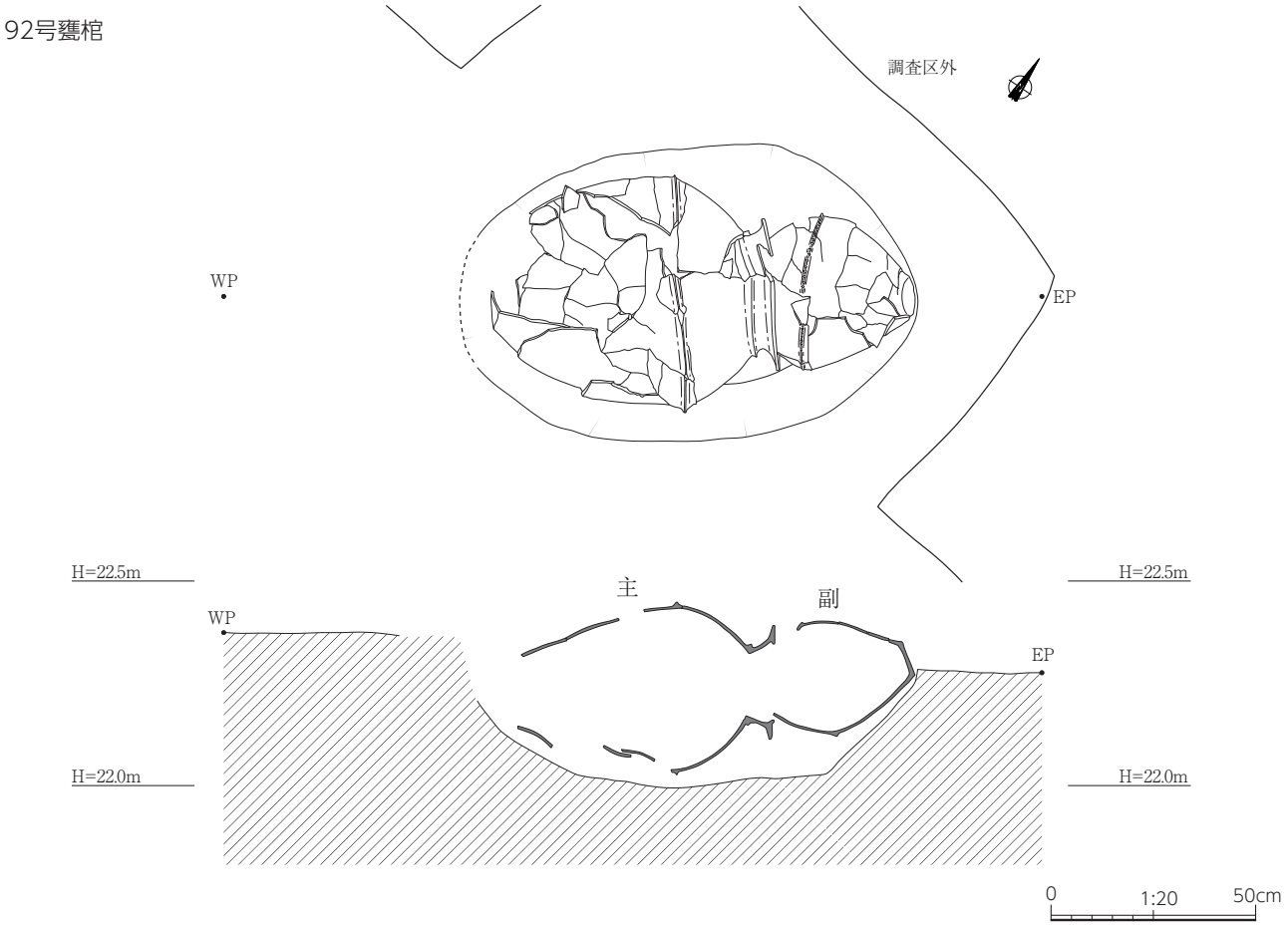
ＫⅢｃ式とする。

（８）91 号甕棺（中型甕 - 中型甕、第 56 図下段）

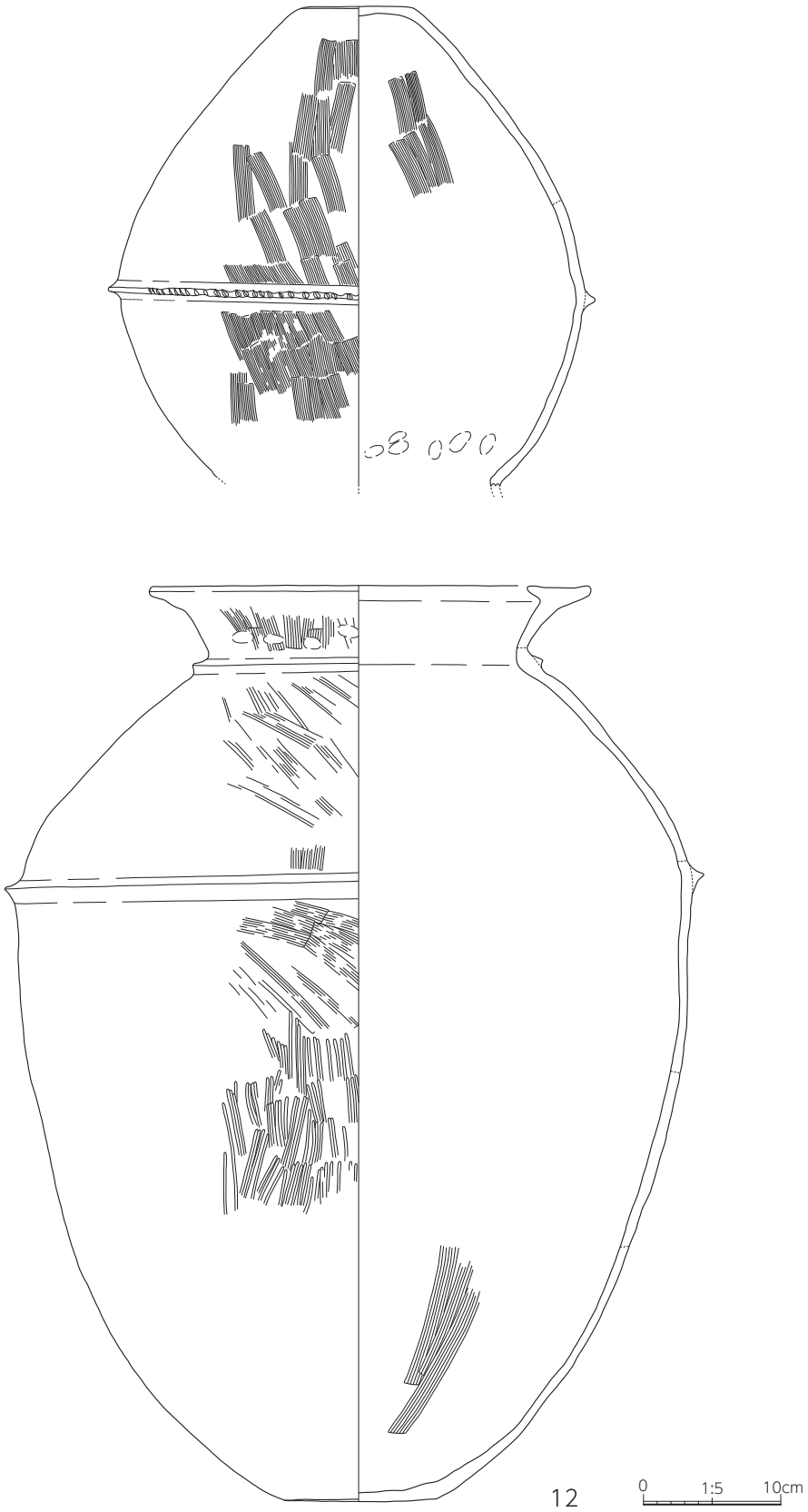
ア　遺構の特徴

長楕円形の墓壙で、底面は水平に近い。一部調査区外に出ているのでどちらが広い作業範囲を確保しているのか判然としないが、状況的に南側のものを主棺、北側のものを副棺とする。主棺･副棺ともに口縁部付近を打ち欠いており、合わせ口としている。

イ　主棺（中型甕）

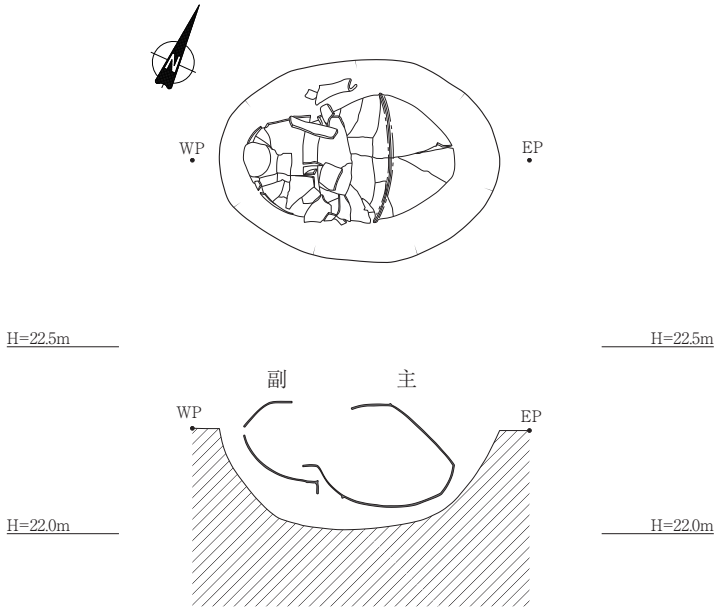


第 57 図　甕棺第３群に属する甕棺④（92 号甕棺）

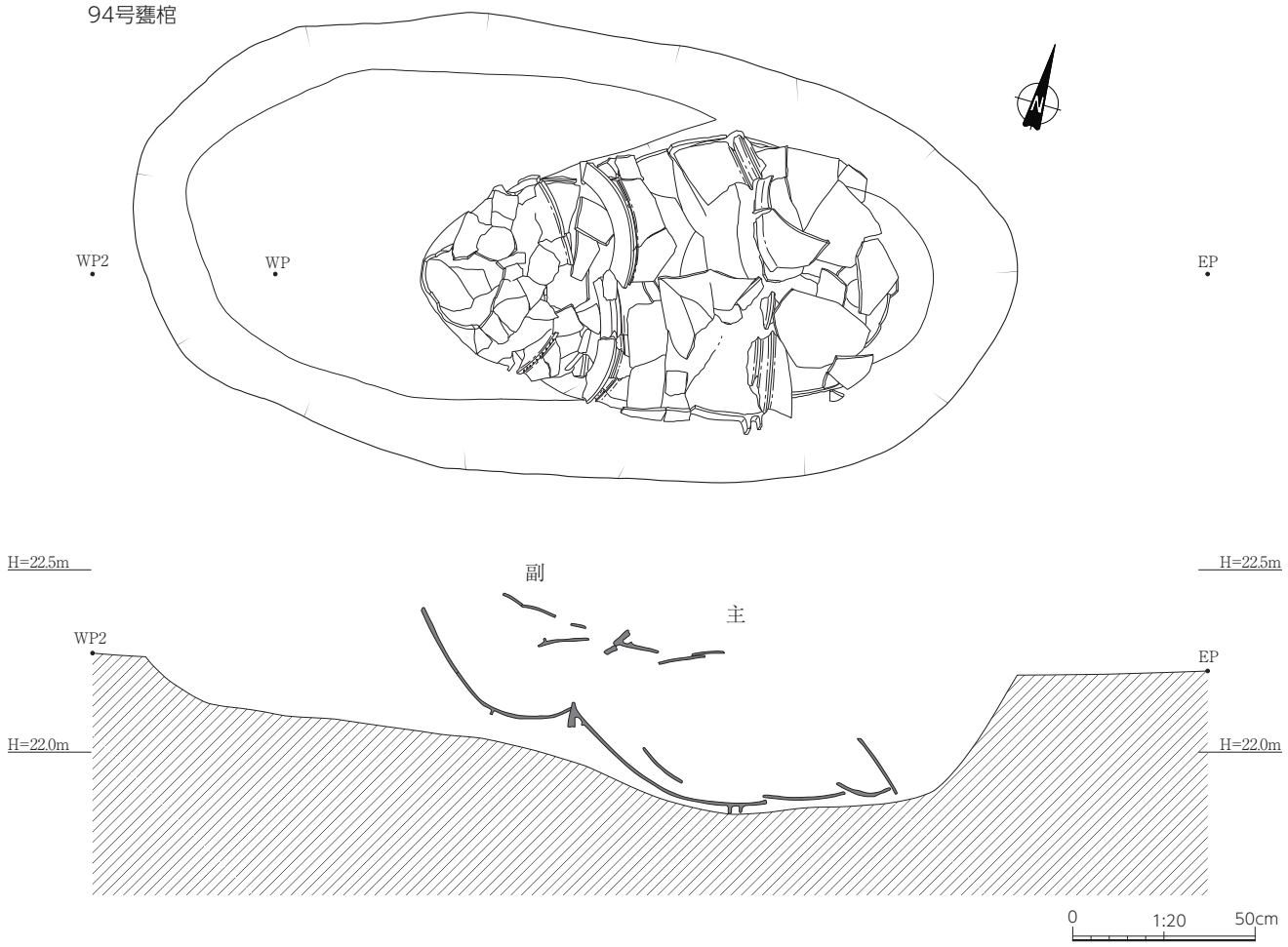


第 58 図　92 号甕棺実測図（第 3 群）

93号甕棺



94号甕棺



第 59 図　甕棺第３群に属する甕棺⑤（93，94 号甕棺）

口縁部付近を欠く。胴部に向かってやや強く張り出し、胴部から底部へ張り出しをある程度保ちつつ向かう。底部を欠いているが平底と思われる。胴部中頃に断面コの字の突帯を１条巡らせる。

ウ　副棺（中型甕）

削平によりほとんどを失うが、主棺と同様のものがあったと思われる。

エ　型式等

ＫⅢｂ式と推定する。

（９）　92 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 57、58 図）

ア　遺構の特徴

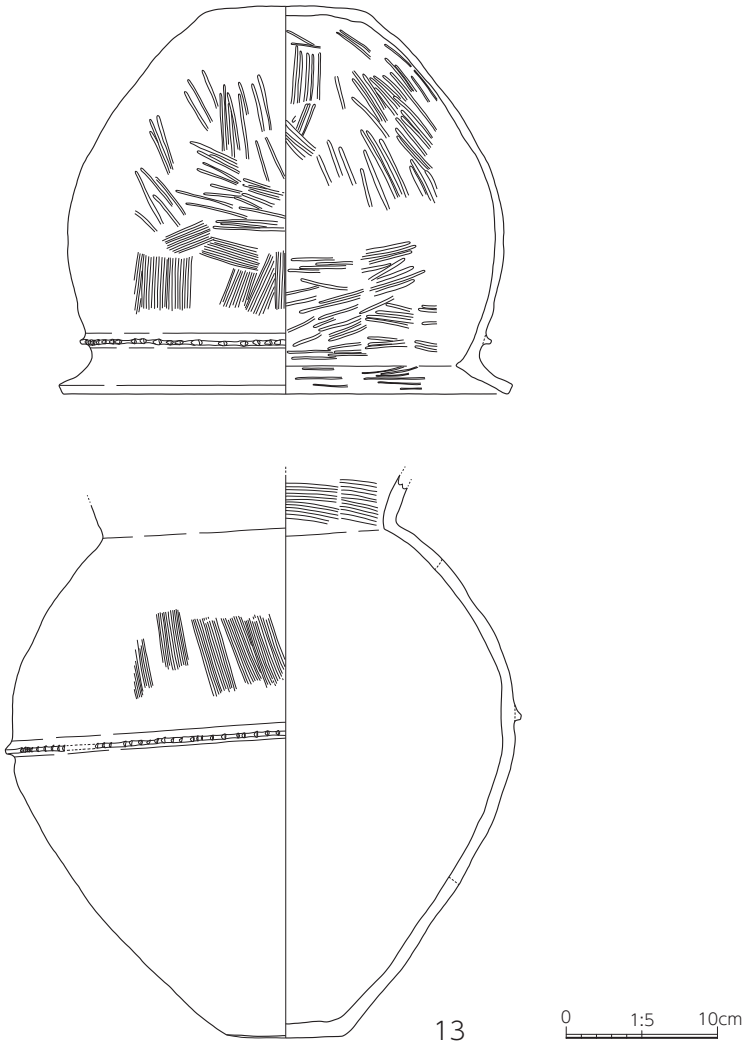
墓壙の大半を削平されている。底面付近の形状は長楕円形で、底面に主棺の胴部を沿わせ、片側の法面に底部を置くことで据わらせる。納棺後やや急角度の反対側の裏面を利用して小型甕を据え、蓋とする。

イ　主棺（中型甕）

平坦な面を持つ鋤先状口縁で、直下で内側に向かって屈曲し、直線的な頸状部分を設け、その下部から外側に向かって屈曲、やや張り出しつつ胴部上半で最大径を迎える。その後やや直線的に下半へ至り、下半からは緩やかに内湾し底部へ至る。底部は幅広の平底である。外器面胴部中頃は縦方向のミガキ、それより上部は斜め方向、頸状部分は縦方向のハケ目、内器面の底部付近はストロークの長い斜め方向のハケ目である。胴部上半と頭部に断面三角形の突帯が１条巡る。

ウ　副棺（小型甕）

口縁を打ち欠いており、副棺のくびれ部におよそ合わさる。口縁下部で屈曲する部分がわずかに残存し、屈曲部から外側へ強く張り出し胴部中頃で最大径を迎える。その後屈曲して内湾



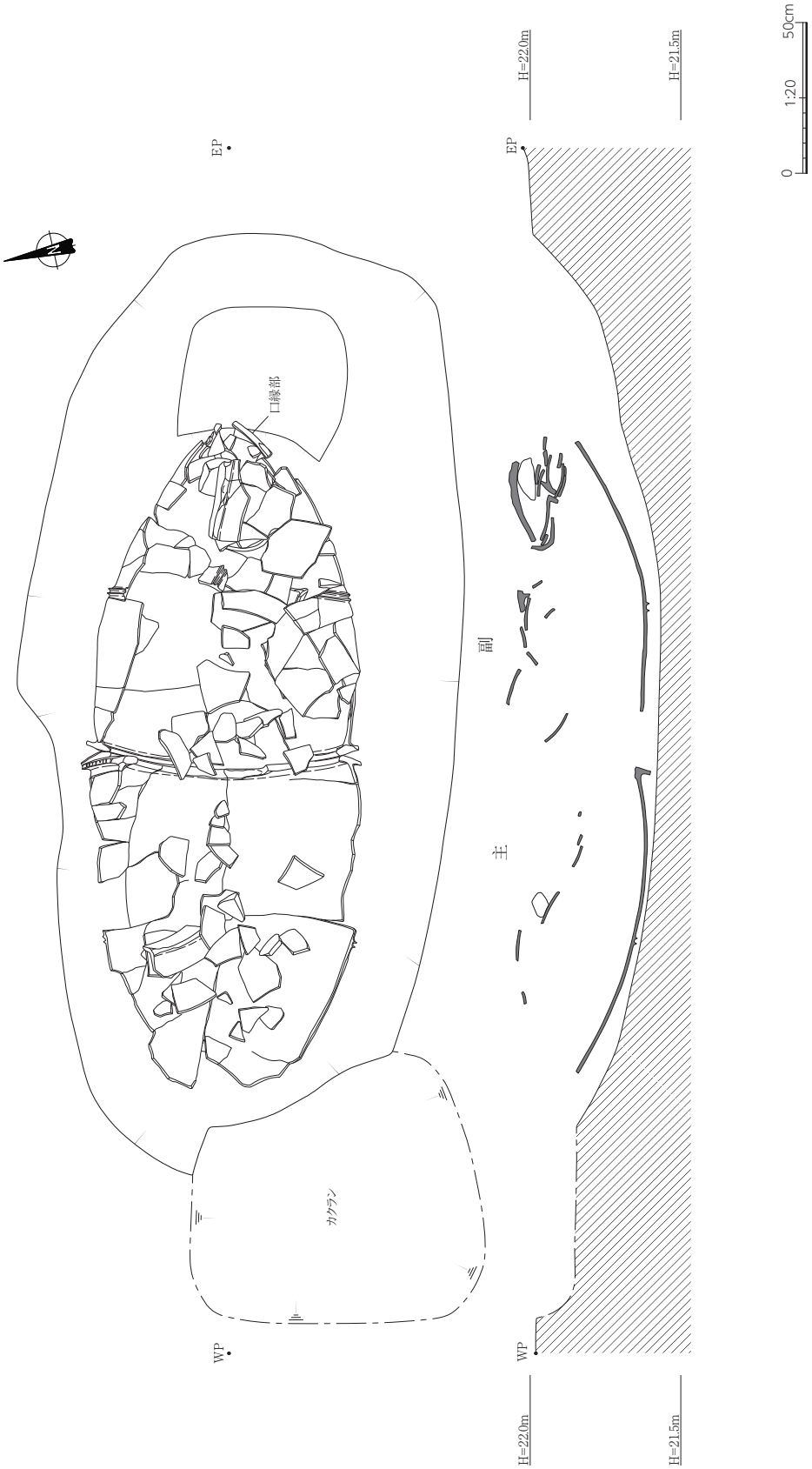
第 60 図　93 号甕棺実測図（第３群）

し底部へ至る。底部はやや幅広の平底である。外器面底部付近は縦方向、それより上は斜め方向のハケ目である。胴部中頃に断面三角形の刻目突帯が１条巡る。
エ　型式等
甕の特徴から黒髪二式に属する。
(10)　93 号甕棺（小型甕 - 小型精製甕、第 59 図上段、第 60 図）
ア　遺構の特徴
小さめの楕円形墓壙で、上半は削平されている。底面はボウル状で主棺を埋土でやや斜めを向くように調整して設置し、納棺後小型甕を被せて蓋とする。主棺は口縁の一部を欠いている。通常は主棺側に副棺側を合わせるが、副棺に精製甕が選択されているためこちらを整形した可能性がある。
イ　主棺（小型甕）
断面くの字の口縁部で、口縁端部を打ち欠く。口縁下部のくびれ部分から屈曲して外側へ強く張り出し、胴部中頃付近で最大径を迎える。その後屈曲してやや直線的に底部へ至る。底部はやや幅広の平底である。胴部中頃付近に断面三角形の刻目突帯を１条巡らす。
ウ　副棺（小型精製甕）
内側へわずかに飛び出す口縁部を有し、口唇部はナデ押さえにより角張る。口縁下部で屈曲し外側へ張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。その後ゆるやかに内湾しつつ底部へ至る。底部は幅広の平底である。外器面は下半にミガキ、上半はハケ目である。内器面は下半が斜め方向の、上半は横方向のミガキが施される。口縁下部に断面三角形の刻目突帯が１条巡る。
エ　型式等
主棺から黒髪四式、副棺からＫⅢｂ併行に属する。
(11)　94 号甕棺（大型甕 - 中型甕、第 59 図下段）
ア　遺構の特徴
墓壙の上半を削平により失う。この影響によるためか不明であるが主棺の下半部を失っている。残存する墓壙形状から長楕円形を呈し、底面は主棺の胴部付近がわずかに窪む程度であまり起伏がない。
イ　主棺（大型甕）
口縁部内側を頂点とし外側が下方に傾く鋤先状口縁で、口唇部は角張る。口縁直下でやや外反し胴部上半付近で最大径を迎えその後緩やかに底部へ至る。底部付近を欠いているが平底であると推測される。突帯は口縁下部に断面三角形のものが１条、胴部下半に断面コの字のものが２条巡る。
ウ　副棺（中型甕）
口縁部付近を打ち欠いている。口縁下部から強く外反し、胴部中頃で最大径を迎える。その後屈曲して底部へ至る。底部は平底である。胴部中頃に断面コの字の突帯が１条巡る。
エ　型式等
主棺の特徴からＫⅢａ式とする。

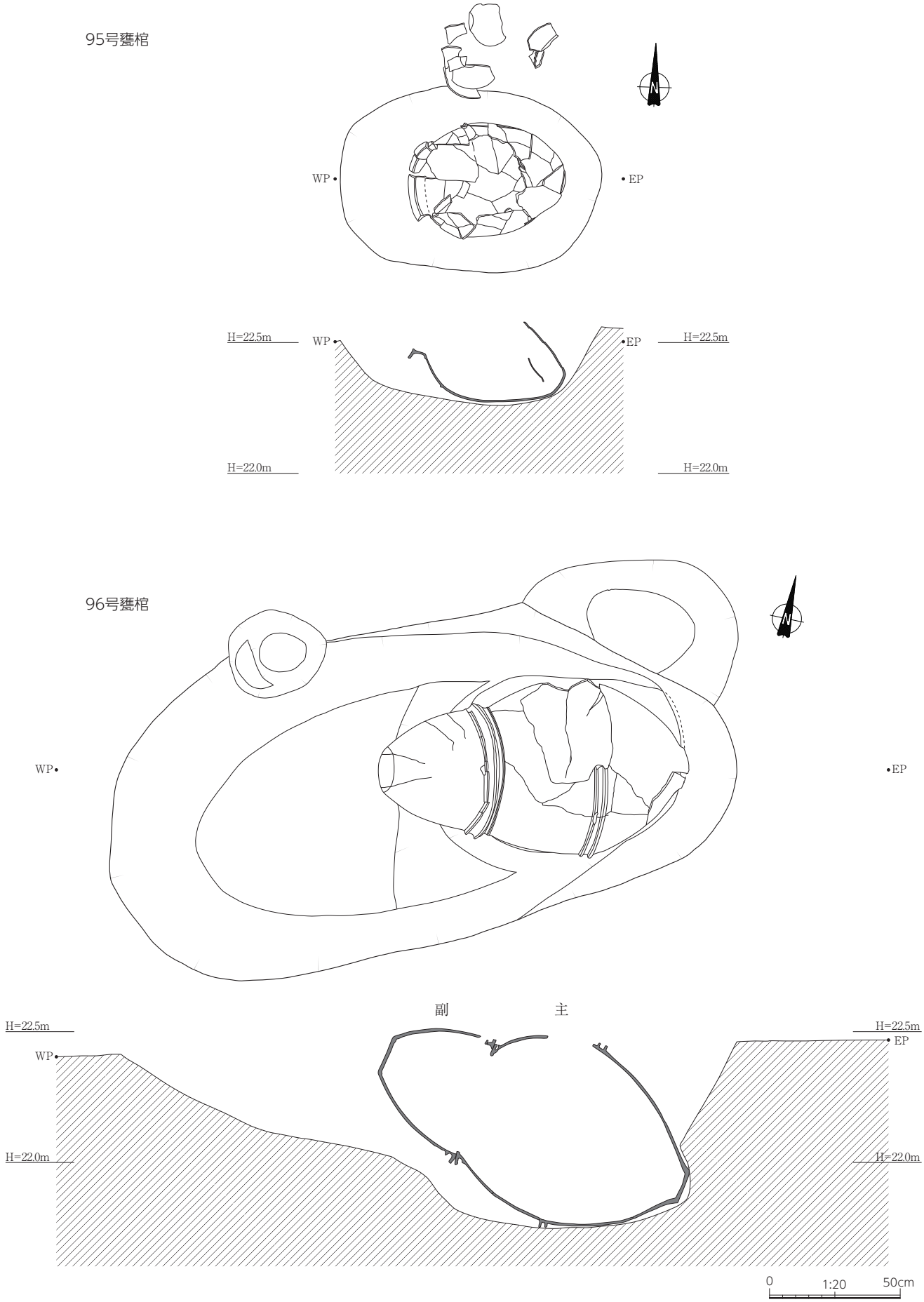
10　甕棺第３群周辺

第３群周辺のものとして 63 号（西）、95 号、96 号（東）が含まれる。
（１）63 号甕棺（超大型甕 - 超大型甕、第 61 図）
ア　遺構の特徴
遺構の上半を削平により失う。長楕円形の墓壙は平坦で、副棺側にやや大きめの空間を設けている。主棺を水平に据え、納棺後内口縁が接するように副棺を重ねる。
イ　主棺（超大型甕）
口縁部は下方へ傾く鋤先状で、口唇部に刻目を施す。口縁下部からゆるやかに膨らみ、胴部中頃付近で最大胴部径を迎える。底部を欠くが大型の平底であると推定される。胴部中頃に断面三角形の突帯を２条巡らせる。
ウ　副棺（超大型甕）
基本的には主棺と同様である。
エ　型式等
甕の特徴からＫⅡｃ式とする。
（２）95 号甕棺（中型甕 - 小型甕、第 62 図上段、第 63 図）
ア　遺構の特徴
小型の楕円形の墓壙で、底面は平坦である。主棺は胴部下半を墓壙底に沿わせて据えることで若干上向きとなる。納棺後に口縁部を打ち欠いた小型の甕を主棺の口縁下部にかぶせてあった。削平により副棺は位置を外れ、墓壙付近に散乱していた。
イ　主棺（中型甕）
肥厚するＴ字形口縁で、下部で内傾し肩部で

63号甕



第 61 図　甕棺第 3 群周辺の甕棺①（63 号甕棺）



第 62 図　甕棺第 3 群周辺の甕棺②（95、96 号甕棺）

屈曲する。その後強く張り出し、胴部中頃で最大径を迎える。その後緩やかに内へ向かい底部へ至る。外器面は口縁下部に縦方向、斜め方向のハケ目、胴部中頃にミガキを施す。内器面は下部縦方向、胴部中頃は斜め方向のハケ目、口縁部付近は横方向のハケ目を施す。口縁下部の屈曲部に断面三角形の刻目を有する突帯、胴部中頃に断面三角形の刻目突帯をそれぞれ１条ずつ巡らせる。

ウ　副棺（小型甕）

口縁部を埋葬時に打ち欠いているため欠損する。やや分厚な小型の甕で、口縁下部で屈曲し胴部は強く張り出し球状を呈する。底部は平底でやや厚みを増す。調整は外器面は上部を縦方向、中頃を斜め方向のハケ目、下部は斜め方向のミガキ、内器面は下部を斜め方向、上部を横方向のハケ目を施す。

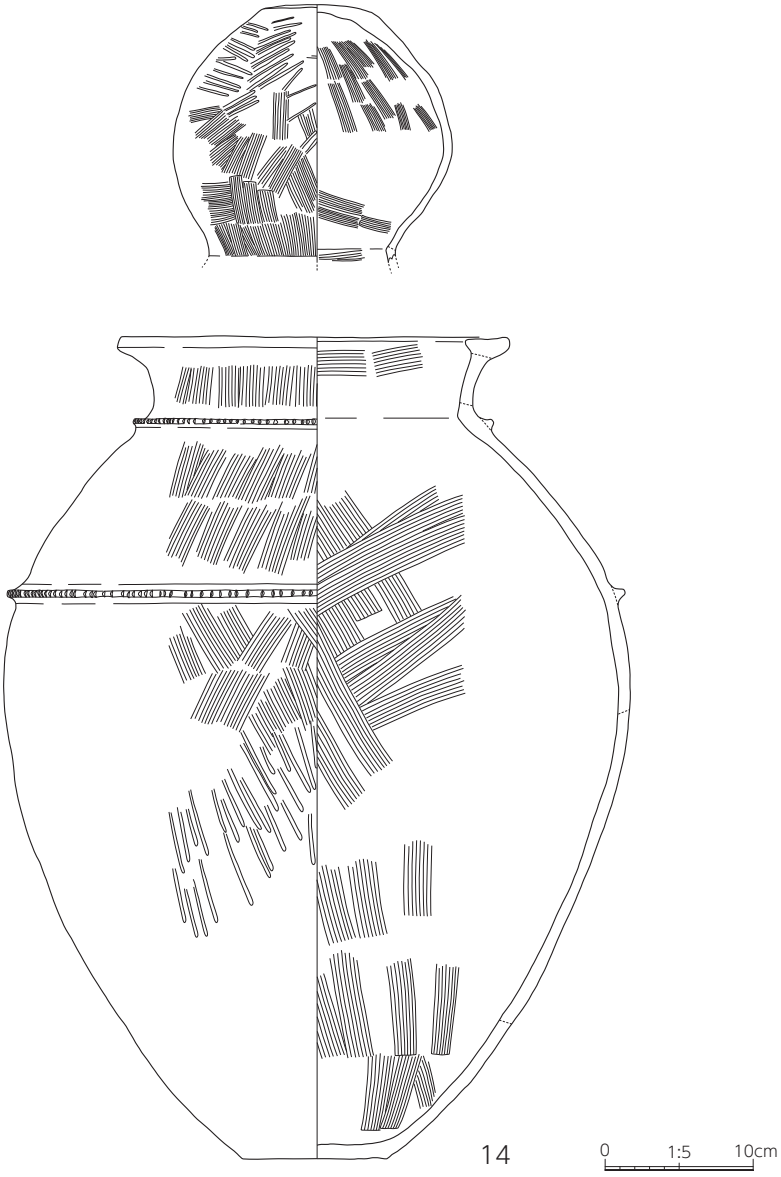
エ　型式等

甕の特徴から黒髪三式とする。

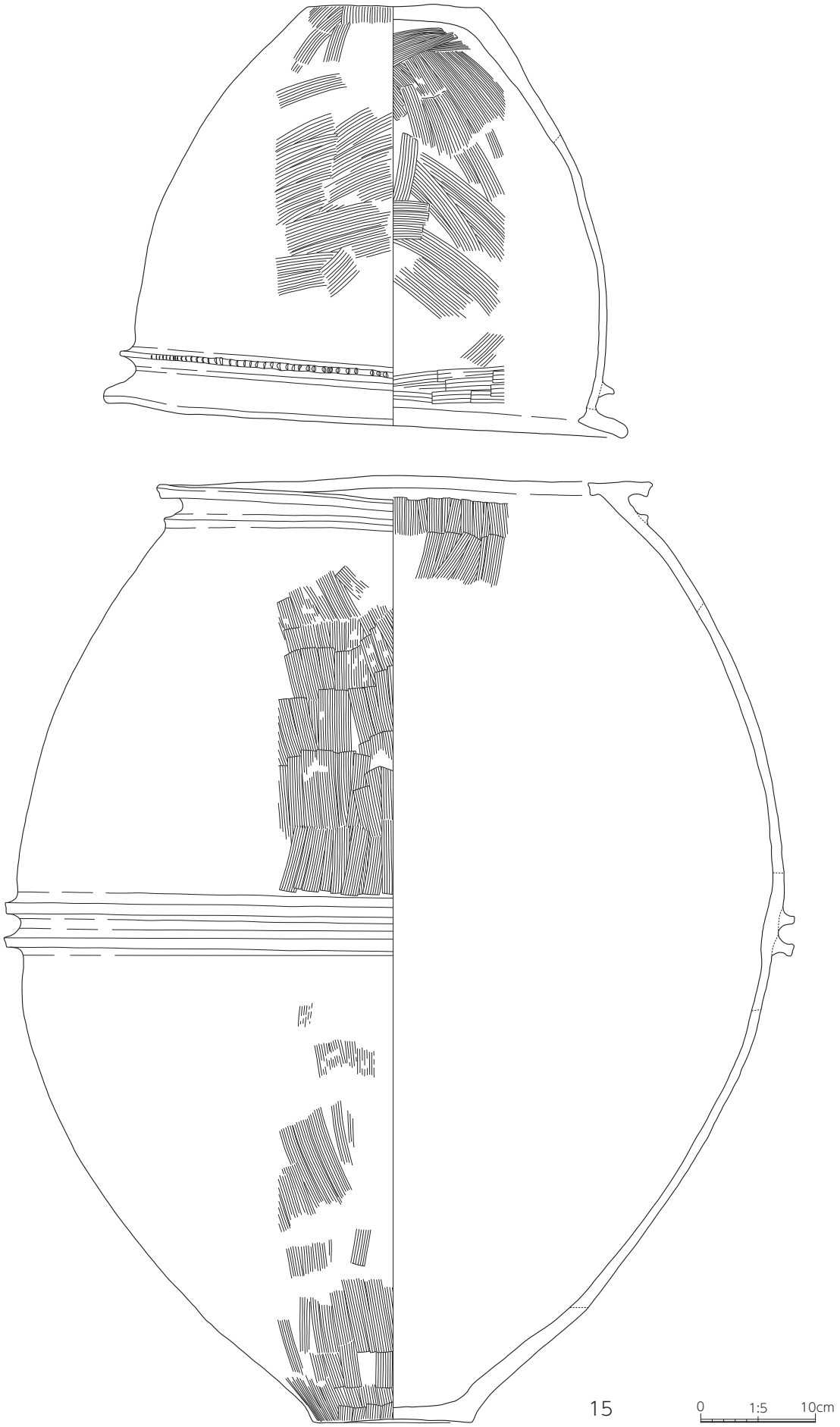
（３）96 号甕棺（大型甕 - 小型甕、第 62 図下段、第 64 図）

ア　遺構の特徴

段掘りされた長楕円形の墓壙で、主棺を納めるために壁面付近を掘りくぼめ、底部を据える。胴部下半を底面に沿わせて据えることから開口部は斜め上方を向く形となる。納棺後小型甕を

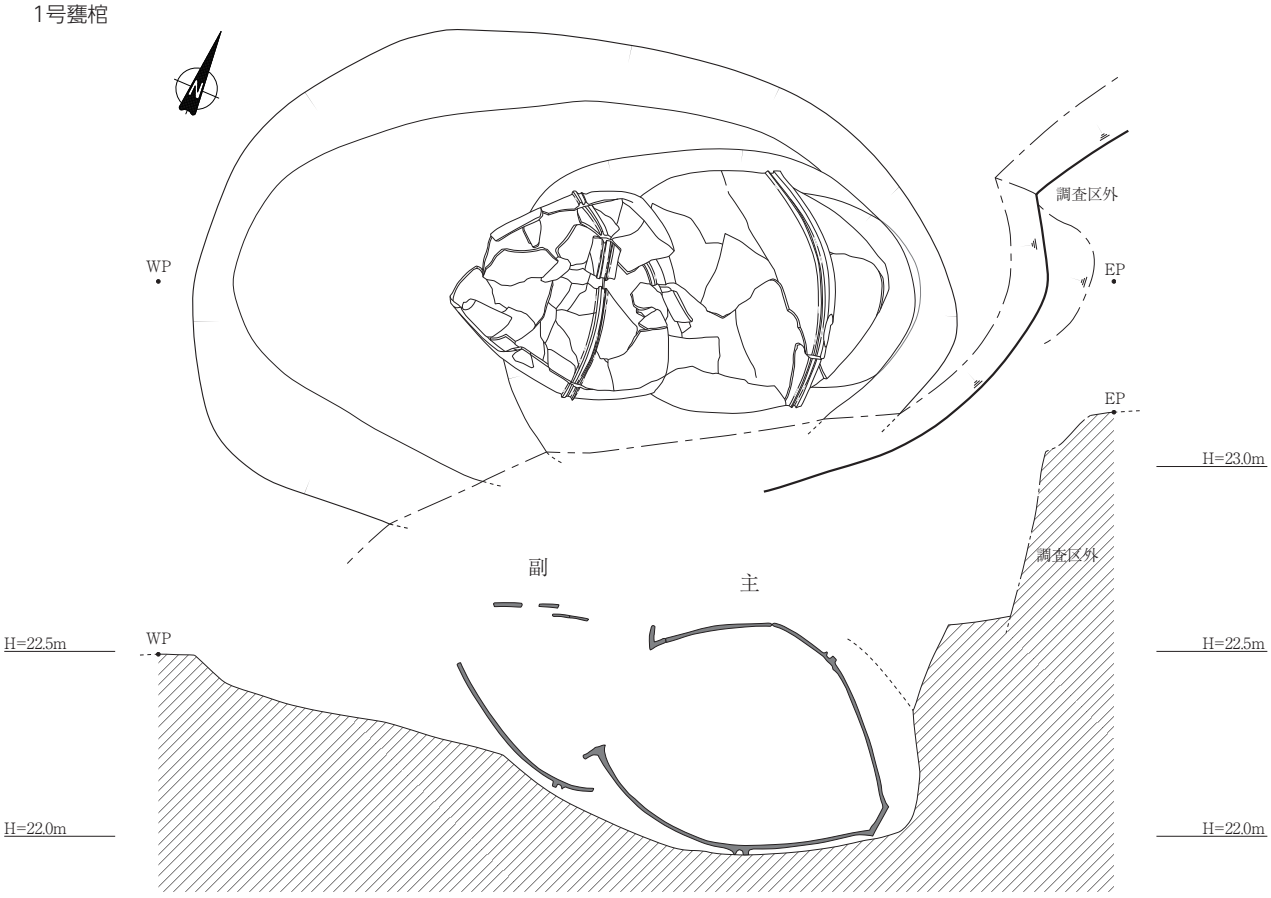


第 63 図　95 号甕棺実測図（第 3 群周辺）

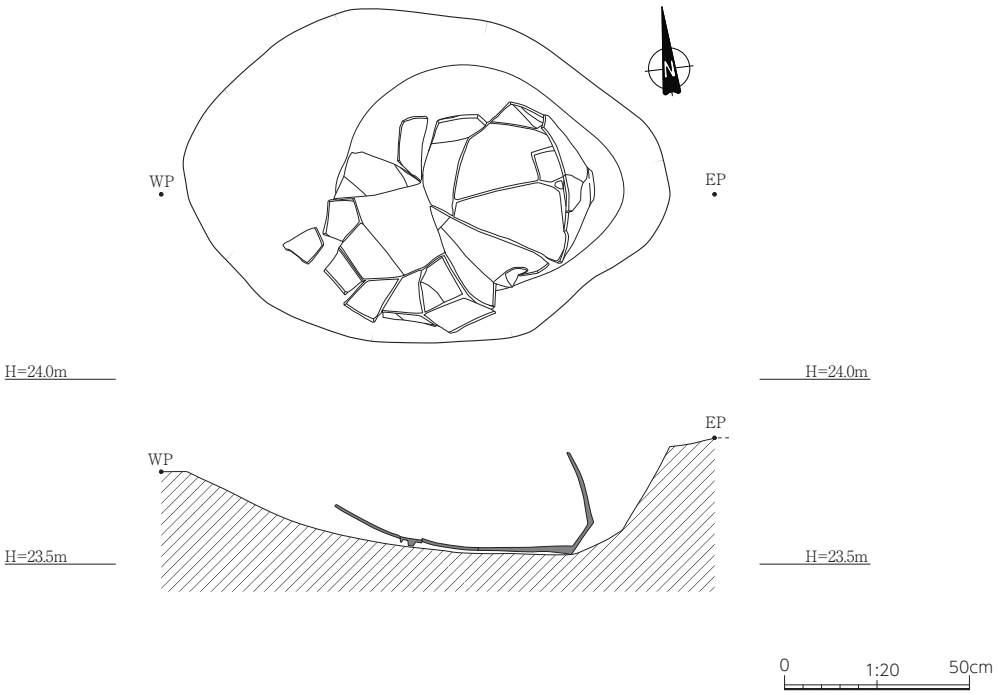


第 64 図　96 号甕棺実測図（第 3 群周辺）

1号甕棺



2号甕棺



第 65 図　上官塚古墳群の甕棺（1,2 号甕棺）

蓋としてかぶせる。

イ　主棺（大型甕）

鋤先状の口縁で口唇部はナデにより角張った形状を呈する。口縁下部から強く張り出し、胴部中頃より下で最大胴部径を迎える。その後強く内湾し、底部直上で屈曲する。底部は大形の平底を呈する。調整は外器面縦方向のハケ目、内器面の口縁部付近に縦方向のハケ目を施す。口縁下部に断面三角形の突帯が１条、胴部中頃に断面コの字の突帯を２条巡らせる。

ウ　副棺（小型甕）

口縁はやや内側が飛び出し内傾する。口縁下部で屈曲し、そこから外へ張り出し、胴部中頃から底部に向かって内側へ屈曲していく。底部はやや分厚な平底で、調整は外器面下部を縦方向、中頃を斜め方向のハケ目、内器面は下部～中頃を斜め方向のハケ目、口縁部付近に横方向のハケ目を施す。口縁下部に刻目を有する断面三角形の突帯が１条巡る。

エ　型式等

甕の特徴からＫⅡｂ式である。

11　上官塚古墳群の甕棺

（１）１号甕棺（大型甕 - 大型甕、第 65 図上段）

ア　遺構の特徴

段掘りされた長楕円形の墓壙で、副土壙側に主棺を納める。胴部下半を底面に沿わせて主棺を据える。このことで主棺の開口部は斜め上方を向き、納棺後口縁下部までを打ち欠いた大型甕をかぶせる形で蓋とする。

イ　主棺（大型甕）

内傾し、内側が少し飛び出す口縁部で、口縁部直下で強く張り出し、胴部中頃付近で最大胴部径を迎える。そこから内側へ屈曲し、たわみつつ底部へ至り、底部直上でくびれる。胴部中頃に断面三角形と断面コの字の突帯を１条ずつ巡らせる。

ウ　副棺（大型甕）

口縁下部を打ち欠いているため、その部分を欠く。主棺よりやや小ぶりであるが特徴が似ており、同形のものと思われる。

エ　型式

特徴からＫⅢｃ段階である。

（２）２号甕棺（大型甕、第 65 図下段）

長楕円形の墓壙で上半部を削平により失っている。そのため詳細は不明であるが、１号甕棺と同じく段掘り状の長楕円形墓壙であったことが推定されるが、主棺が納められる副土壙はやや浅く、ほぼ差が無い。胴部下部を底面に据えているため、主棺は斜め上方を向いていたものと思われる。胴部中頃以下の突帯や底部の形状等から１号甕棺と同等のものと考える。

第３節　土壙墓

１　弥生時代の土壙墓

今回報告する上官塚遺跡の北側を含め、遺跡内では多くの土壙墓が確認されている。かつて同様に多くの土壙墓を確認した塔ノ木遺跡において、弥生時代～古墳時代にかけての土壙墓の形状を元に３つに区分して検討を行った（嘉島町教育委員会 2018）。そのうち弥生時代の土壙墓として長方形の土壙で一段目の底面の一部をさらに掘りくぼめ、その位置が片側に寄ったＡ類（片袖型）として抽出した。

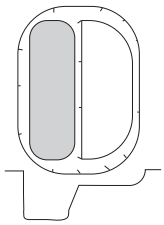
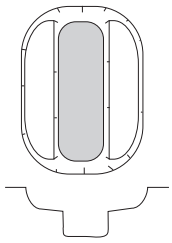
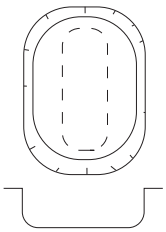
なお素掘り（Ｃ類）も弥生時代のものが含まれることが想定されるが、共伴遺物が無い場合その比定は不可能である。

２　土壙墓の分布

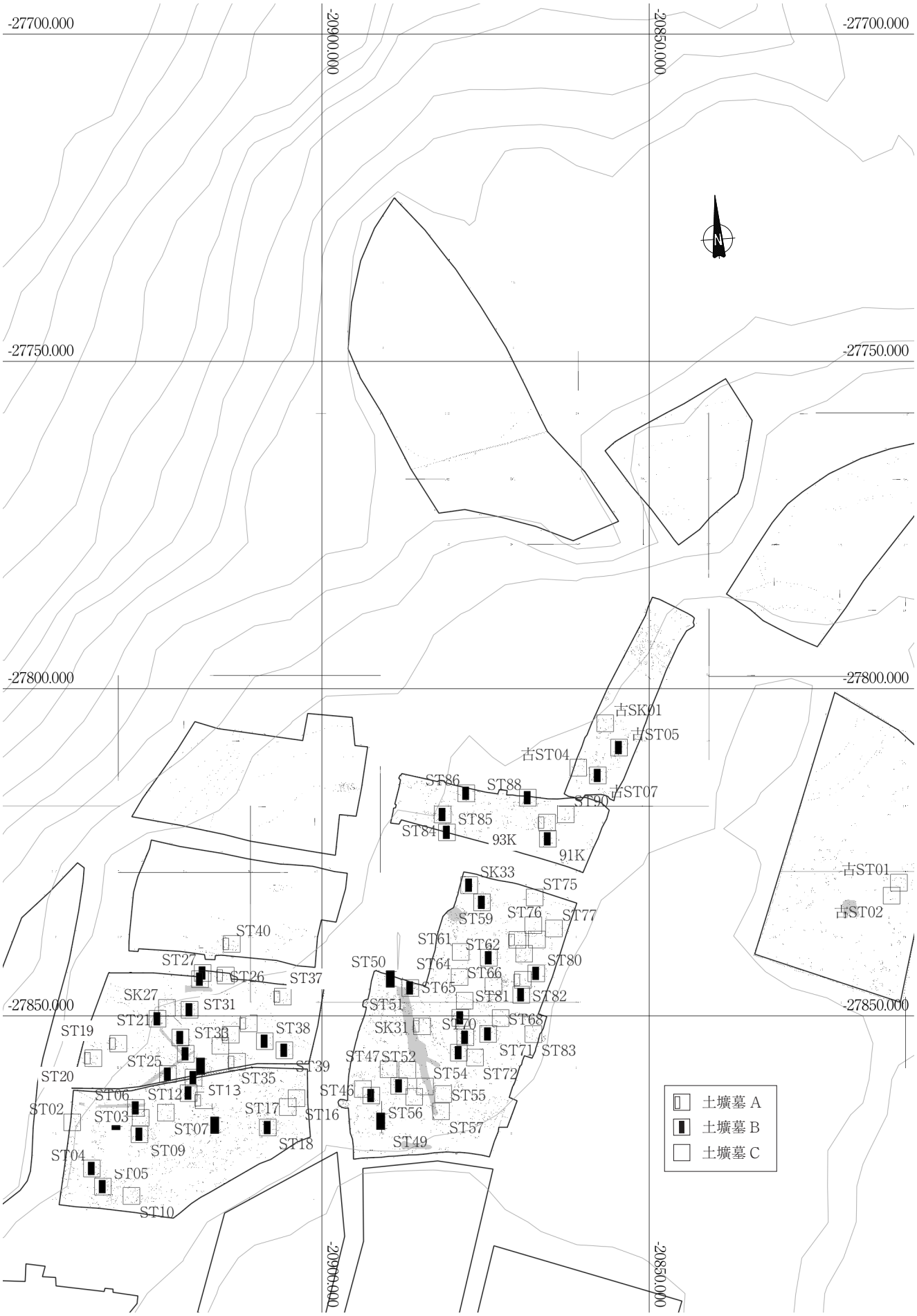
Ａ類に区分されるものは７基が該当する。２区に最も多く、その周辺に散発的であるが特に多く分布し、密集するわけではない。

３　土壙墓Ａ類

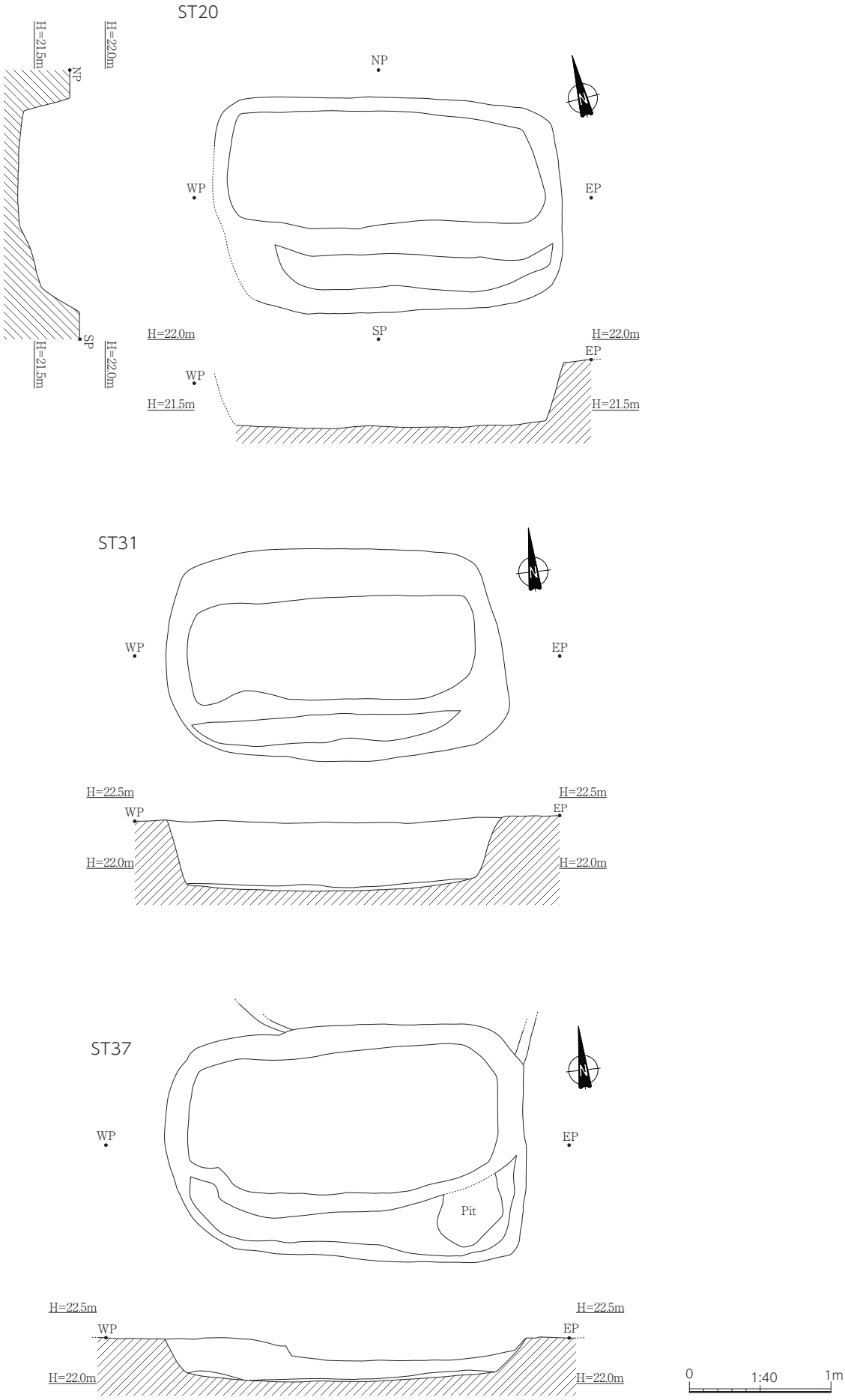
このうち典型的なものを例に取ると、土壙墓掘り方の長さは 300cm、幅 140cm、長辺南側に棺部となる墓壙を有する。墓壙の掘り方は長さ 252cm、幅 92cm を測る。ただしこれ以上の情報は図面での情報が足りておらず、特に埋土の検討ができない点は非常に残念である。

分類	様態	特徴
A	片袖	 埋葬主体が片側に寄る 墓壙中段に台場のような ステップが 主体の逆側に設けられる
B	中央	 埋葬主体が中央にある 墓壙底部を平坦にした 上で主体となる部分を 作り出す
C	素掘り	 埋葬主体の位置が判然 としない

第 66 図　土壙墓の区分


-27700.000
-20900.000
-20850.000
-27750.000
-27800.000
-27850.000
N
古SK01
古ST05
古ST04
古ST07
ST86
ST88
ST90
ST85
ST84
93K
91K
古ST01
古ST02
SK33
ST75
ST59
ST76
ST77
ST40
ST61
ST62
ST27
ST26
ST37
ST50
ST64
ST66
ST80
ST65
ST81
ST82
SK27
ST31
ST51
ST21
ST38
SK31
ST70
ST68
ST19
ST33
ST71
ST83
ST25
ST39
ST47
ST52
ST54
ST72
ST20
ST35
ST13
ST45
ST55
ST06
ST12
ST02
ST03
ST17
ST16
ST56
ST07
ST57
ST18
ST49
ST09
ST04
ST05
ST10
土壙墓 A
土壙墓 B
土壙墓 C

第 67 図　土壙墓の分布



第 68 図　土壙墓実測図 1

第４節　包含層出土遺物

１　甕（第 71 図）

完形のものはあまりないが、元は甕棺であったものがその後の遺構や削平等によって破損し原位置から移動したものが大半であり、生活に紐付けられるものは少ない。

16 は平坦で内側が飛び出る口縁部を有し、口縁直下で内側へ直線的に入り、頸部で屈曲して外側へ張り出す。頸部付近に断面三角形の刻目突帯を巡らせる。胴部以下を欠いているが、黒髪系の甕である。

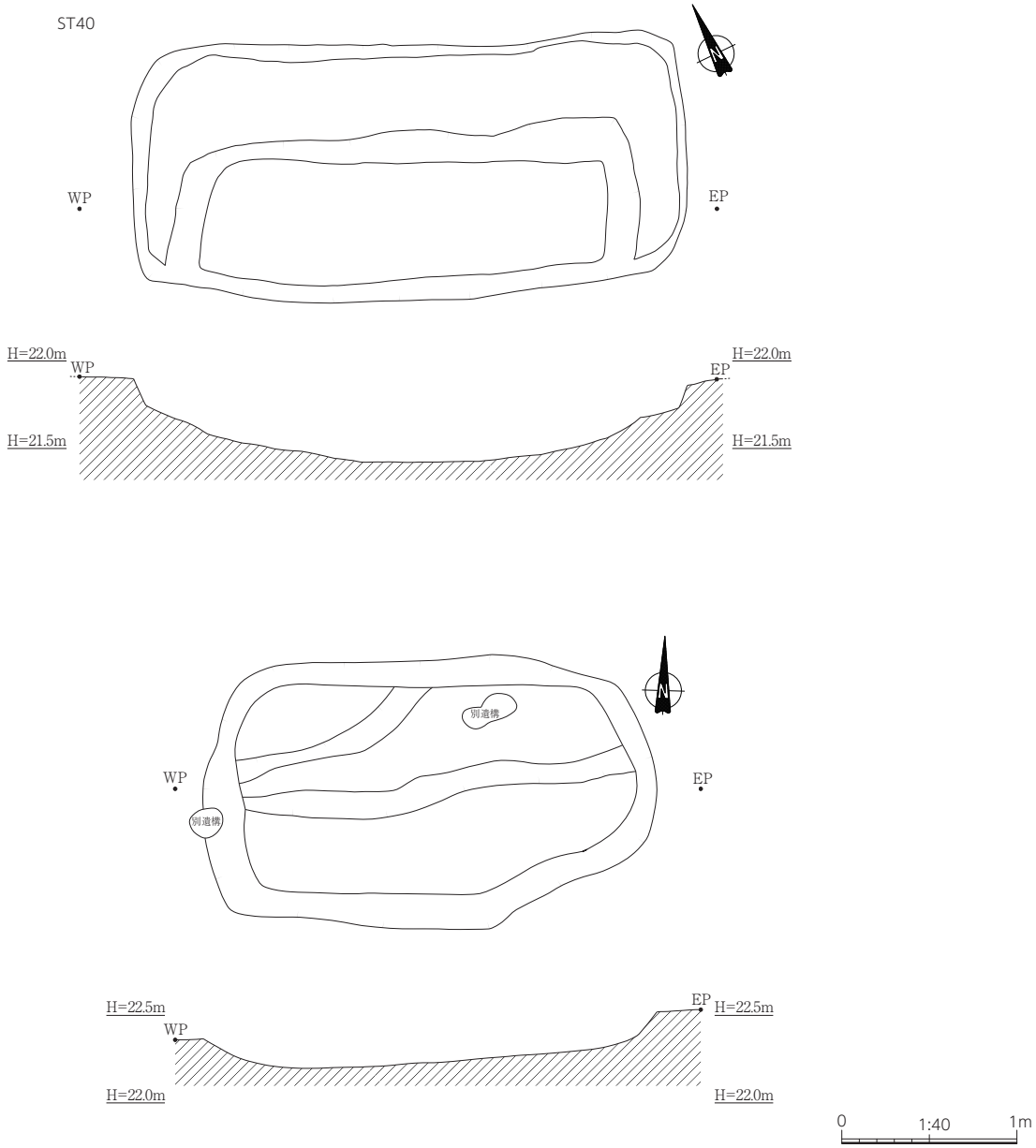
17 はくの字を呈する口縁で、頸部の屈曲から強く張り出すことで壺様の形状となる。頸部に断面三角形の刻目突帯が１条巡る。甕ではあるが小型の部類に入り、甕棺の副棺として用いられていたものと推定する。

18 は 17 よりもくの字部分の屈曲がゆるやかな甕である。屈曲部から外側へ張り出し最大胴部径を迎え、下半に入った辺りで直線的に内側へ向かい底部へ至る。底部は幅広の平底である。

２　高坏（第 72 図）

あまり残存が良くなく、状態が分かるものが少ないが、包含層や後の時代の遺構に巻き込まれる形で出土している。

21 は幅広い平坦な面を持つ口縁を有する高坏である。口縁下部はやや鈍角に底へ向かうた

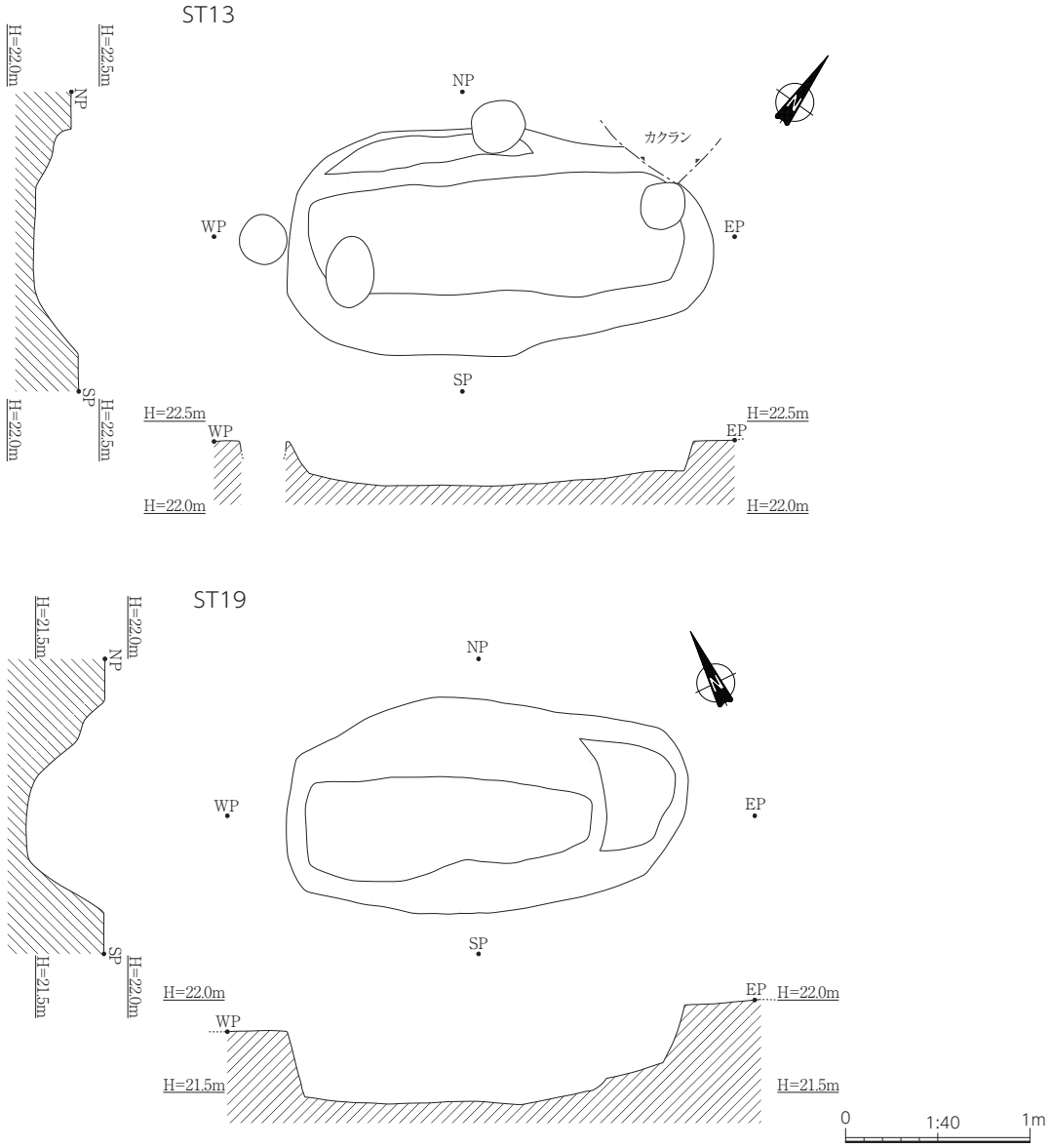


第 69 図　土壙墓実測図２

め、坏部の深さは脚部の高さに対して浅い。脚部は坏部との接合部から直線的に長く伸び、中程で裾へゆるやかに広がる。裾はナデにより押さえられ段を有し、屈曲して接地する。外器面の一部に赤色顔料の痕跡を認める。他は脚部の図示となるが、21 に比べればやや脚は短い。赤色顔料の塗布が認められ、祭器としての使用が想定される。

3　精製甕（第 73、74 図）

28 ～ 32 は精製甕であり、同様に包含層及び後世の遺構中から出土したものである。28 は内傾する T 字形口縁を有する甕であり、口縁下部から下方へやや直線的に向かう。口縁下部に三角形の、胴部中頃に断面コの字の突帯を各 1 条巡らせている。調整は概して丁寧であり、さらに外器面はストロークの長い縦方向のミガキ、内器面は縦方向のハケ目を施す。また口縁の平坦面にも放射状の暗文様へラミガキを施す。また外器面及び口縁部に赤色顔料を全体的に塗布する。29 は平坦な口縁を有する甕で、口縁内側の飛び出しはわずかに認められる程度である。胴部の一部を大きく欠損しており接点を持たないが、胎土や調整に共通点が多く認められるので口縁部と胴部中頃以下を同一個体として扱う。口縁下部から外側へ張り出し、胴部中頃の上面で最大胴部径を測る。そこから緩やかに内湾し、下半から直線的に底部へ向かう。



第 70 図　土壙墓実測図 3

底部はやや分厚な平底である。精製で外器面には規則的な縦方向のミガキ、口縁の平坦面にも放射状の暗文様へラミガキを施す。

4　その他（第 75 図）

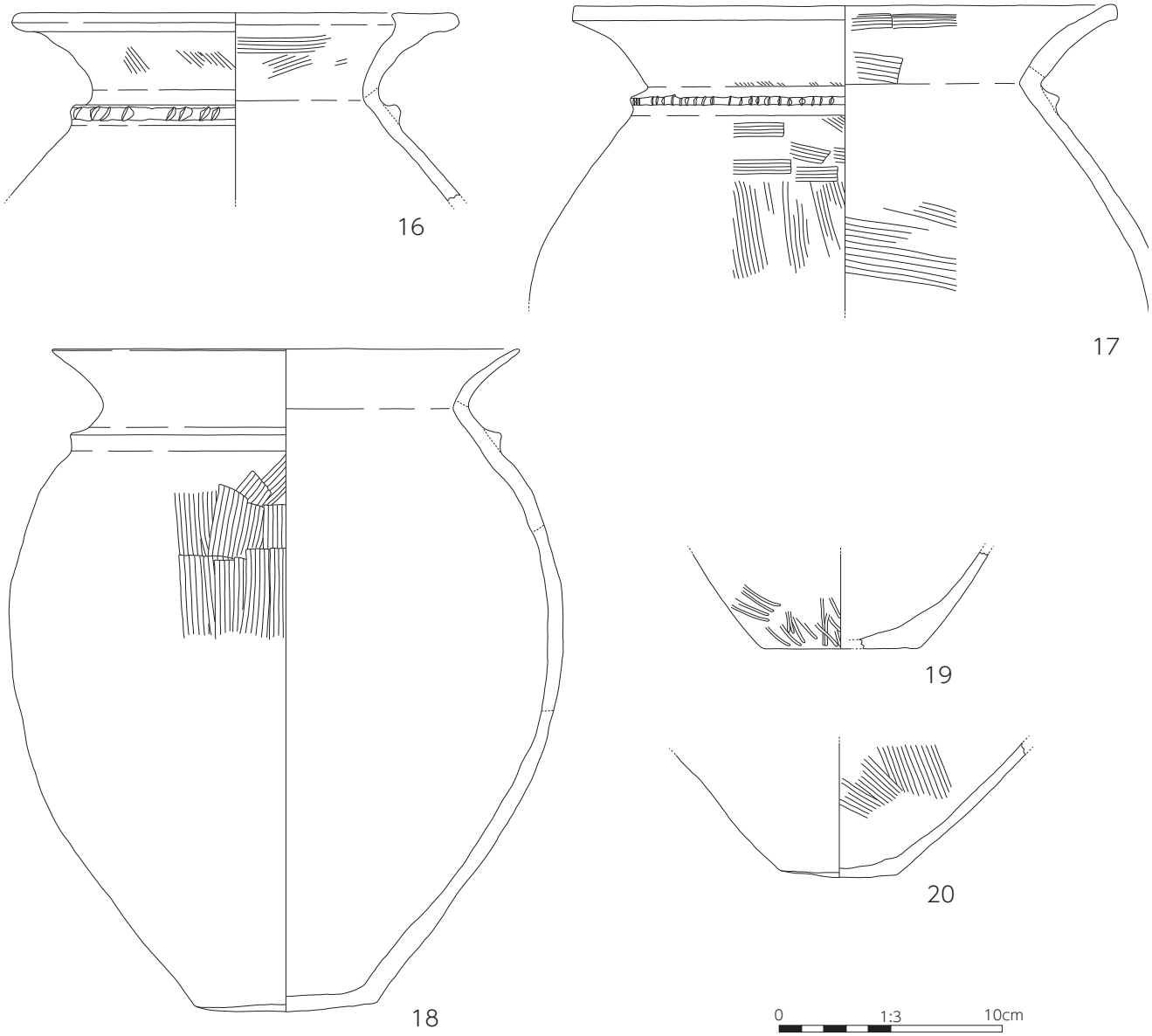
37 は精製の短頸壺である。口縁は外反するものがわずかに飛び出す。その後屈曲して直線的に外へ広く拡がる。中頃で最大径を迎えた後に再び屈曲して内側へ向かうと推定するがそれより下部を欠く。調整は丁寧で外器面に縦方向のミガキ、内器面は胴部中頃に斜め方向のハケ目、そこから上部は横方向のハケ目を施す。

36 は精製の壺である。口縁を欠くため長さは不明であるが、短頸壺に比べると長いことがわかる。頸と胴部の境目で屈曲し、胴部下半で最大胴部径を取る。その後内部へ屈曲して直線的に底部へ向かい、底部付近でわずかにくびれる。底部はやや幅広の平底を呈する。

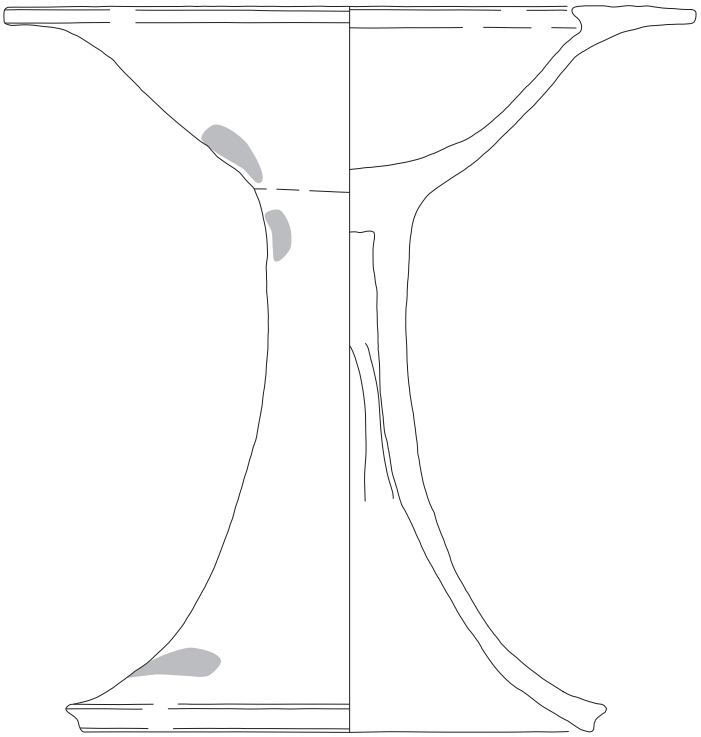
調整は外器面は斜め方向、内器面は縦方向のハケ目、また外器面には赤色顔料の痕跡が認められる。

38 は穿孔のある鉢である。外反する口縁部でくの字を呈する。胴部中頃で屈曲し、底部へ向かうが下部を欠損する。底部はやや幅広の平底と思われる。口縁の下部付近に穿孔を有する。

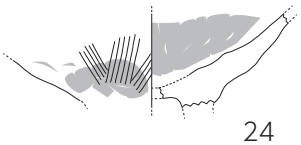
41 は甕形の手捏ね土器である。口縁を欠くが外反し、くの字を呈する。胴部中頃で最大径を迎え、その後内湾して底部へ向かう。底部は上げ底である。底部端を欠く。外器面は縦方向のハケ目を、内器面は複数の指頭圧痕が残る。



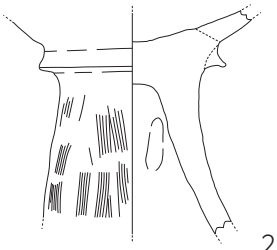
第 71 図　包含層出土遺物 1



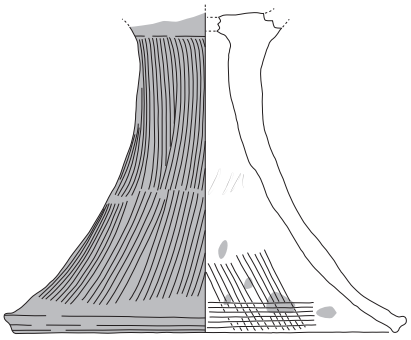
21



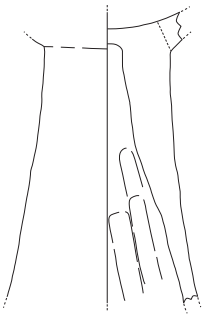
24



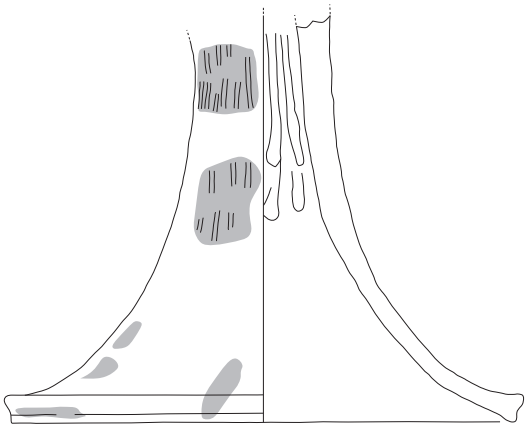
25



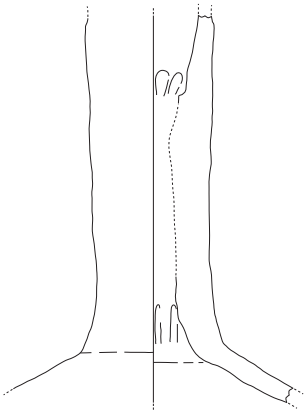
22



26



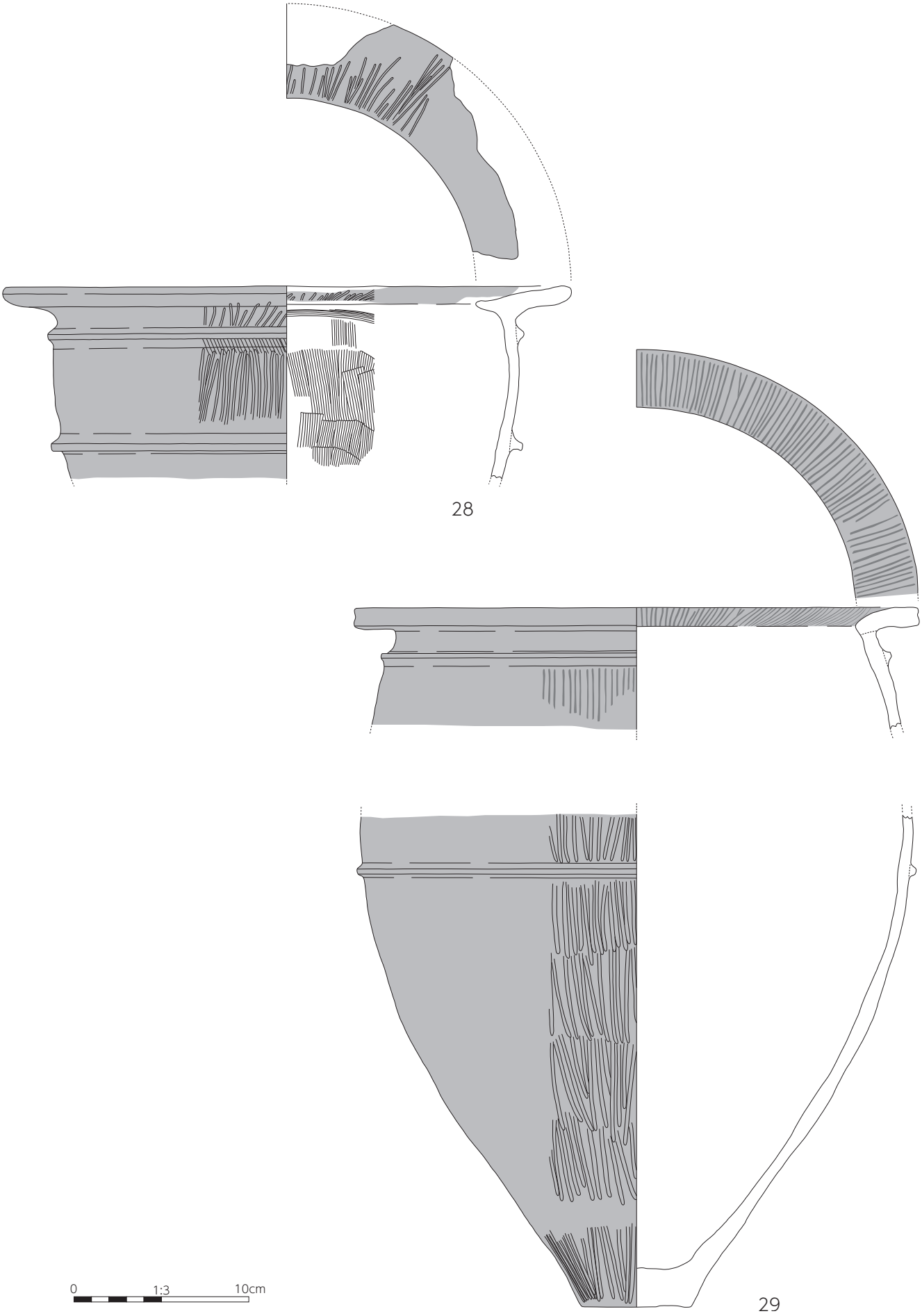
23



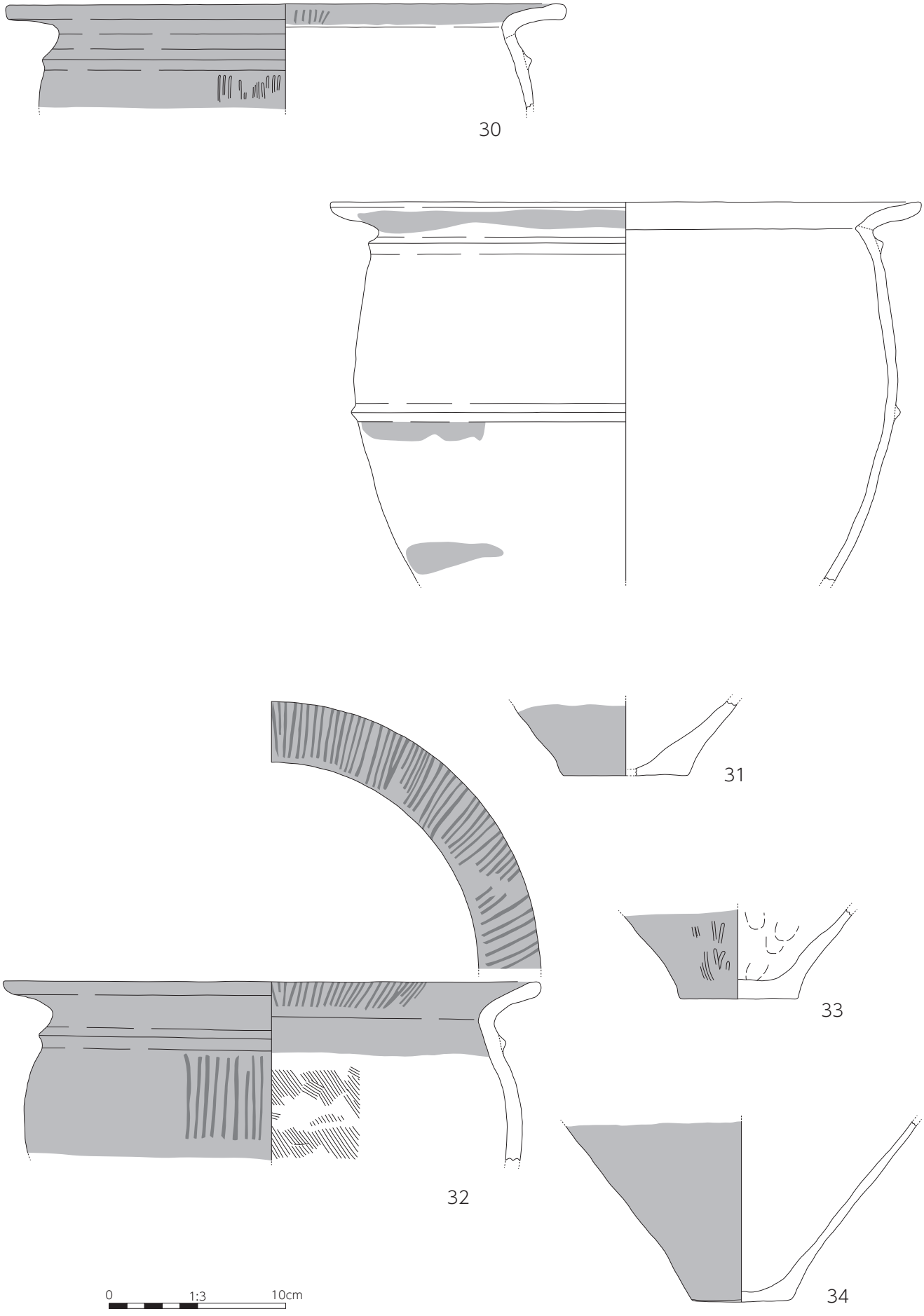
27

0 1:3 10cm

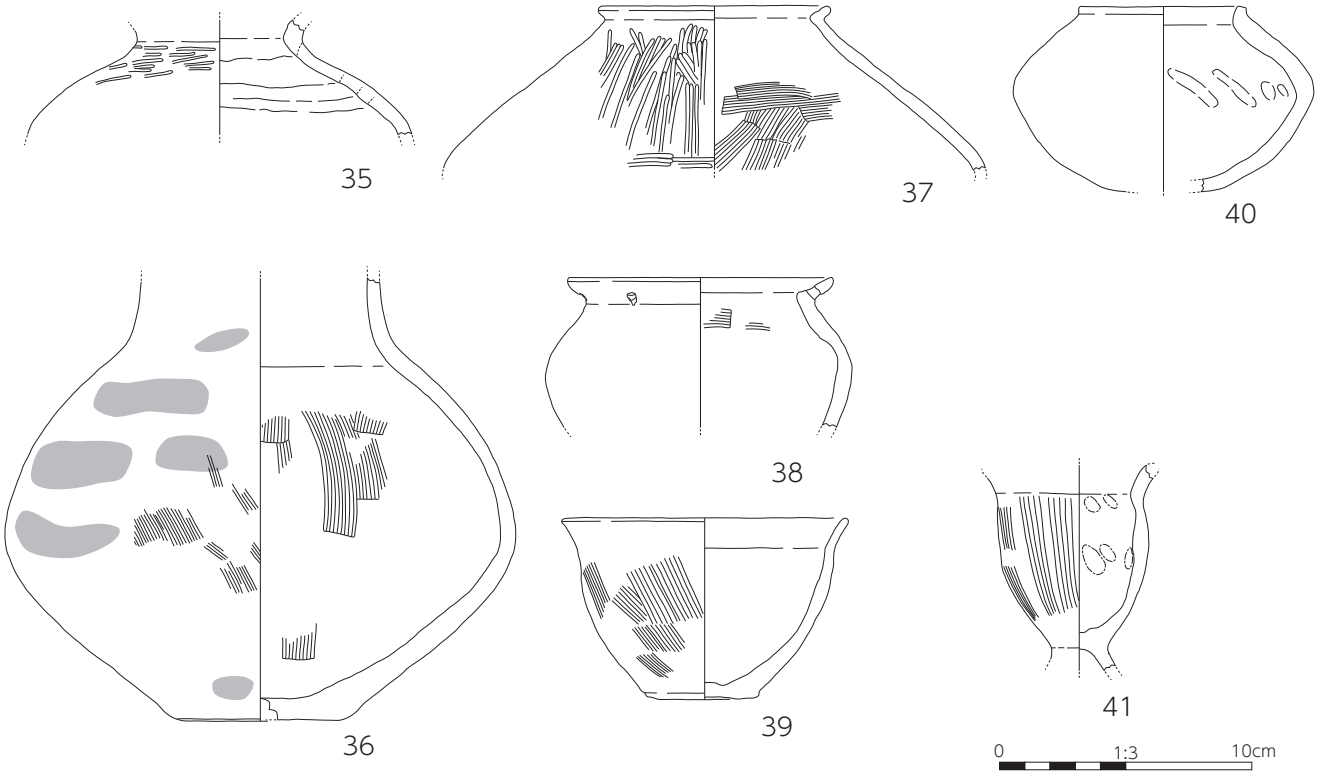
第 72 図　包含層出土遺物 2



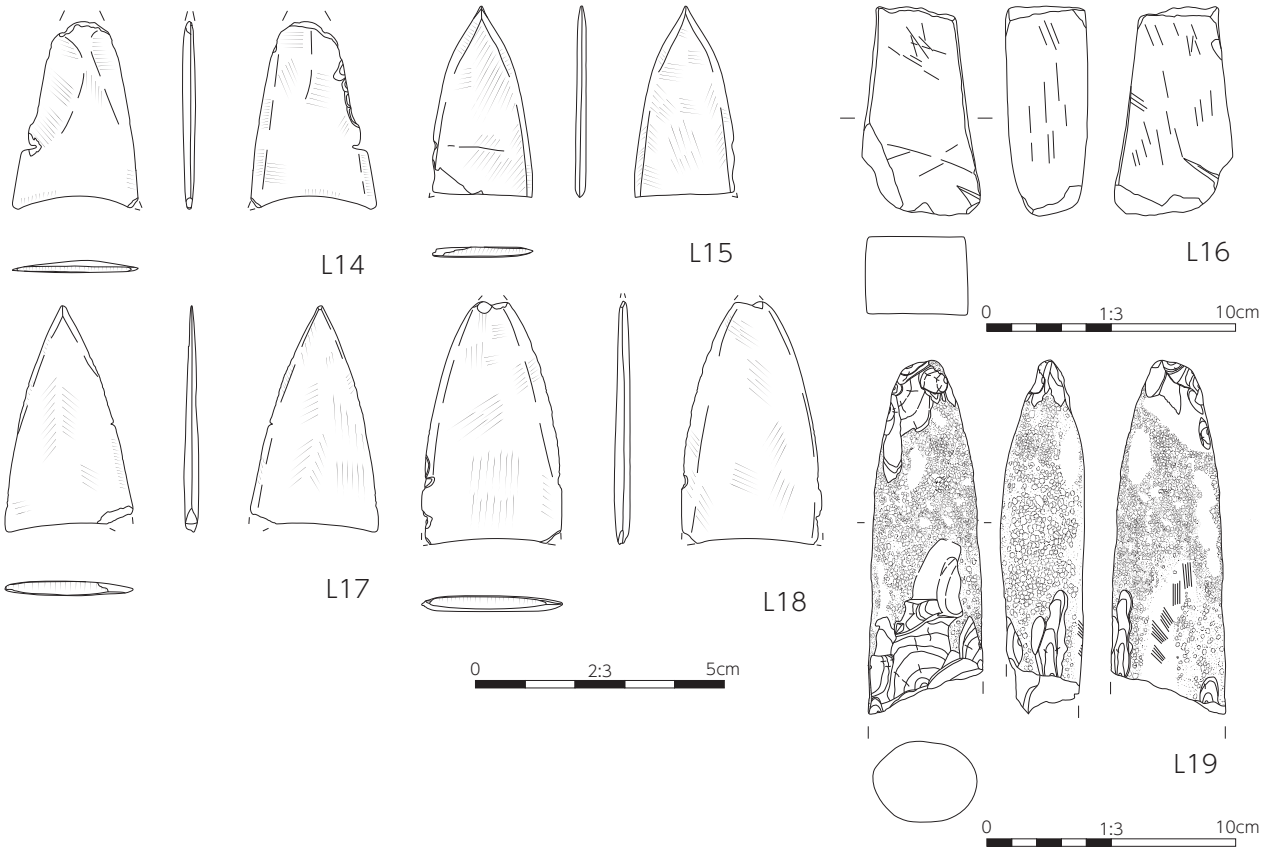
第 73 図　包含層出土遺物 3



第 74 図　包含層出土遺物 4



第 75 図　包含層出土遺物 5



第 76 図　包含層出土遺物 6

5　石器（第76図）

（1）磨製石鏃

L14・15・17・18は磨製石鏃である。両面に研磨痕を有し、ほぼ均一な薄型を呈する。先端は鋭く尖るが先端部を欠くものもある。基部は平基・ゆるやかな凹基とがある。

（2）砥石

形状から携帯性の砥石であり、半分を欠く。全面を使用しており、研磨の繰り返しの結果、中央付近に向かって内湾する。それぞれの面における擦痕の状況から運動方向は長軸に沿ったものが多い。

（3）石斧

太型蛤刃の磨製石斧で、やや細型だがよく調整されており断面形状は円柱状を呈する。全体的に彫琢痕が残るが研磨痕はあまり認められない。刃部を欠く。

第3表　弥生土器（包含層）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材(胎土)	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考	実測No.
16	6	SZ09		－	弥生土器	後期	甕	口縁～胴部	(20.0)	(8.6)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	浅黄橙 Hue10YR8/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	頸部に刻み目突帯1条	027
17	6	SZ08		－	弥生土器		甕	口縁～胴部	24.4	(14.0)	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR6/6	明赤褐 Hue5YR5/8	ナデ、ハケ目 ミガキ	ナデ ハケ目	良好	頸部に刻み目突帯1条	041
18	2	一括		－	弥生土器		甕	口縁～底部	(21.0)	30.1	8.2	長石、角閃石	明赤褐 Hue5YR5/8	明赤褐 Hue2.5YR5/8	ナデ ハケ目	ナデ	良好		132
19	6		Q14-14	－	弥生土器		甕	胴部～底部	－	(4.4)	(7.2)	長石、石英 角閃石、雲母	にぶい黄褐 Hue10YR5/4	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	ナデ ミガキ	ナデ	良好	外器面に煤付着	101
20	6		P14-10	－	弥生土器		甕	胴部～底部	－	(6.1)	5.3	長石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	暗灰 HueN3/0	ナデ	ナデ ハケ目	良好	外器面胴部、外底面に黒斑	121
21	2		P13-15	－	弥生土器	中期	高坏	口縁～底部	27.4	28.9	(20.4)	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR6/8	橙 Hue7.5YR6/8	ナデ	ナデ しぼり痕	良好	外底面に赤彩 外底面に黒斑	128
22	2	SZ05	P13-15	－	弥生土器		高坏	脚部	－	(12.7)	16.0	石英、角閃石、雲母	浅黄橙 Hue10YR8/3	浅黄橙 Hue10YR8/4	ナデ ハケ目	ナデ、しぼり痕 ハケ目、工具痕	良好	内器面の一部、外器面に赤彩	030
23	2		P14-11	－	弥生土器		高坏	脚部～底部	－	(16.2)	(20.6)	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	灰黄褐 Hue10YR6/2	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ ミガキ	ナデ 工具痕	良好	外器面に赤彩 外器面に煤付着	097
24	2	SZ05	P13-15	－	弥生土器		高坏	坏部	－	(3.7)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ	ナデ ハケ目	良好	内、外器面に赤彩	026
25	2	SZ01		－	弥生土器		高坏	坏部～脚部	－	(8.9)	－	長石、石英 雲母、赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	明褐 Hue7.5YR5/8	ナデ ハケ目	ナデ 指ナデ	良好	坏部に突帯1条	006
26	6		Q14-19	－	弥生土器		高坏	坏部～脚部	－	(11.5)	－	長石、角閃石、雲母	暗赤褐 Hue5YR5/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ 指頭圧痕	良好		100
27	2		P13-15	－	弥生土器		高坏	脚部	－	(15.4)	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	浅黄 Hue2.5Y7/4	ナデ	ナデ、指頭圧痕 ヘラケズリ	良好		053
28	6		P14-10	－	弥生土器		甕	口縁～胴部	(32.4)	(11.0)	－	長石、石英 角閃石、雲母	褐 Hue7.5YR4/6	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	ナデ、ハケ目 ミガキ	ナデ、ハケ目 ミガキ	良好	内器面口縁、外器面に赤彩 頸部、胴部に突帯各1条	115
29	2		P13-15	－	弥生土器		甕	口縁～底部	32.2	(39.9)	6.2	長石、石英 角閃石、雲母	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ、ミガキ 暗文	ナデ、暗文	良好	外器面に赤彩 頸部、胴部に突帯各1条	134
30	6	SZ09		1	弥生土器		甕	口縁～胴部	31.7	(6.0)	－	長石、石英 角閃石、赤色酸化粒	暗赤褐 Hue2.5YR3/6	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ミガキ	ナデ 暗文	良好	頸部に刻み目突帯1条 内、外器面に赤彩	079
31	2		P13-15	－	弥生土器		甕	口縁～底部	33.4	(32.5)	7.1	長石、石英 角閃石、雲母	明黄褐 Hue10YR7/6	明黄褐 Hue10YR7/6	ナデ	ナデ	良好	外器面に赤彩 頸部、胴部に突帯各1条	124
32	6	SZ09		2	弥生土器		甕	口縁～胴部	30.5	(10.1)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	暗赤褐 Hue2.5YR5/6	暗赤褐 Hue2.5YR5/6	ナデ 暗文	ナデ、ハケ目 暗文	良好	内、外器面に赤彩 頸部に突帯1条	098
33	6	SZ09		－	弥生土器		壺	胴部～底部	－	(5.1)	6.5	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	褐 Hue7.5YR4/6	浅黄橙 Hue10YR8/4	ナデ ミガキ	ナデ 指頭圧痕	良好	外器面、外底面に赤彩	025
34	2		P13-15	－	弥生土器		壺	胴部～底部	－	(10.2)	5.6	長石、石英 角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ	ナデ	良好	外器面に煤付着	046
35	2		P14-11	－	弥生土器		小型壺	頸部～胴部	－	(4.6)	－	角閃石、雲母 赤色酸化粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ ミガキ	ナデ	良好	内器面に粘土積み上げ痕	050
36	2		P14-07	－	弥生土器		壺	頸部～底部	－	(17.6)	(6.8)	長石、石英 角閃石、赤色酸化粒	灰黄 Hue2.5Y7/2	灰黄 Hue2.5Y7/2	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	外器面に赤彩	107
37	6	SZ08		－	弥生土器	後期	短頸壺	口縁～胴部	(9.2)	(6.5)	－	長石、角閃石、雲母	橙 Hue2.5YR6/6	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ ミガキ	ナデ ハケ目	良好	外器面に煤付着	092
38	2		P14-11	－	弥生土器		壺	口縁～胴部	(10.4)	(6.0)	－	長石、角閃石 赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ ハケ目	良好	頸部に穿孔4ヶ	111
39	2	SZ05	P13-15	－	弥生土器		鉢	口縁～底部	(11.4)	7.2	4.4	長石、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ	良好	内、外器面の胴部～底部まで煤付着	023
40	2	SZ05	P13-15	－	弥生土器		短頸壺	口縁～胴部	6.6	(7.9)	－	長石、石英 角閃石、雲母	浅黄 Hue2.5Y8/3	浅黄 Hue2.5Y8/3	ナデ	ナデ 指頭圧痕	良好	胎土が精製されていない為、 器面が粗い	020
41	2	SZ05	P13-15	－	弥生土器		小型甕	胴部	－	(8.1)	－	長石、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ 指頭圧痕	良好	手捏ね土器 外器面に煤付着	043

第４表　弥生時代甕棺観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大胴径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
3	2	46号甕棺	P13-15		弥生土器		上甕	口縁～底部	36.4	14.9	6.1	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR7/6	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ	良好	
							下甕	口縁～底部	38.3	55.1	10.0	50.0	長石、石英 角閃石、雲母	橙 Hue5YR7/6	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ	ナデ	良好	胴部に貼り付け突帯1条 内器面口縁に沈線～胴部に煤付着
4	6	75号甕棺	P14-10		弥生土器		上甕	頸部～胴部	－	(28.1)	－	28.6	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	浅黄橙 Hue10YR8/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に貼り付け突帯1条
							下甕	口縁～底部	26.1	56.2	9.9	41.9	長石、石英、角閃石 赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	明褐灰 Hue5YR7/2	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴上部に黒斑 頸部、胴部に刻み目突帯各1条
5	6	77号甕棺	P14-10		弥生土器		上甕	口縁～底部	25.8	32.1	10.2	31.6	雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/8	ナデ、ミガキ ハケ目、暗文	ナデ ハケ目	良好	胴部～底部に黒斑 頸部部に刻み目突帯1条
							下甕	口縁～底部	33.5	63.9	11.1	50.9	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue2.5YR6/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に黒斑 胴部に刻み目突帯1条
6	6	78号甕棺	P14-10		弥生土器		上甕	口縁～底部	31.3	34.9	9.4	28.9	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	浅黄橙 Hue10YR8/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	内器面口縁、外器面胴部に煤付着
							下甕	口縁～底部	34.5	60.4	11.8	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に刻み目突帯1条
7	6	82号甕棺	P15-01		弥生土器		上甕	口縁～底部	36.7	41.2	10.0	33.6	長石、石英、角閃石 赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/2	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	頸部に貼り付け突帯1条
							下甕	口縁～底部	36.8	77.7	10.7	63.2	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に黒斑 胴部に貼り付け突帯、刻み目突帯各1条
8	6	65号甕棺	－		弥生土器		上甕	口縁～底部	33.2	30.9	10.6	33.1	長石、石英、角閃石	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ ミガキ	ナデ、ハケ目 ミガキ	良好	口縁端部に刻み目突帯1条 頸部に刻み目突帯1条
							下甕	口縁～底部	35.4	67.4	9.6	55.2	石英、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に貼り付け突帯、刻み目突帯各1条
9	6	68号甕棺	P14-09		弥生土器		上甕	口縁～底部	30.5	29.4	6.5	28.3	長石、石英、角閃石	赤褐 Hue2.5YR4/8	橙 Hue5YR6/6	ナデ、ミガキ 暗文	ナデ	良好	内、外器面に赤彩 頸部、胴部に貼り付け突帯各1条 口縁内器面に打ち欠き
							下甕	口縁～底部	27.0	56.6	9.8	42.0	長石、雲母 赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR7/6	にぶい橙 Hue5YR6/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に煤付着 頸部、胴部に刻み目突帯各1条
10	6	67号甕棺	P14-18		弥生土器		上甕	胴部～底部		(75.1)	14.0	66.1	長石、石英、角閃石 赤色酸化粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	内、外器面に黒斑あり 胴部に刻み目突帯2条
							下甕	口縁～底部	(47.8)	(90.0)	13.4	70.8	長石、石英、角閃石 赤色酸化粒	浅黄橙 Hue10YR8/3	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	内、外器面に黒斑あり 胴部に刻み目突帯1条
11	7	88号甕棺	P14-24		弥生土器		上甕	口縁～胴部	33.3	(25.6)	－	34.1	長石、石英、雲母	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	褐 Hue10YR4/4	ナデ ハケ目	ナデ	良好	頸部に貼り付け突帯1条
							下甕	口縁～胴部	31.3	(48.3)	－	50.2	長石、石英、雲母	橙 Hue5YR6/6	明黄褐 Hue10YR6/6	ナデ ミガキ	ナデ 暗文	良好	胴部に刻み目突帯3条 胴部に線刻2か所 口縁端部に煤付着
12	7	92号甕棺	Q14-20		弥生土器		上甕	胴部～底部	－	(35.0)	8.1	33.6	長石、石英 角閃石、雲母	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	浅黄橙 Hue10YR8/4	ナデ ハケ目	ナデ、ハケ目 指頭圧痕	良好	胴部に刻み目突帯1条
							下甕	口縁～底部	32.4	66.7	11.4	48.9	長石、角閃石、雲母	明赤褐 Hue5YR5/6	橙 Hue7.5YR6/8	ナデ、ハケ目 ミガキ、指頭圧痕	ナデ ハケ目	良好	頸部、胴部に貼り付け突帯各1条 口縁端部の内器面に打ちかき痕あり 外器面に黒斑
13	7	93号甕棺	－		弥生土器		上甕	口縁～底部	(30.0)	25.7	10.7	28.8	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR7/6	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ、ミガキ ハケ目	ナデ、ミガキ	良好	外器面に黒斑、煤付着 頸部に刻み目突帯1条
							下甕	頸部～底部	－	(37.3)	7.8	33.1	長石、石英 角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	明黄褐 Hue10YR6/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に刻み目突帯1条
14	7	95号甕棺	－		弥生土器		上甕	頸部～底部	－	17.4	7.3	18.8	長石、角閃石、雲母	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ、ミガキ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	外器面に黒斑
							下甕	口縁～底部	26.4	55.6	9.7	42.4	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	ナデ、ミガキ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	頸部、胴部に刻み目突帯各1条
15	7	96号甕棺	Q15-16		弥生土器		上甕	口縁～底部	45.8	37.7	15.0	－	長石、角閃石、雲母	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	外器面に煤付着 頸部に刻み目突帯1条
							下甕	口縁～底部	43.3	83.0	13.9	67.0	長石、角閃石、雲母	明赤褐 Hue5YR5/6	明赤褐 Hue5YR5/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	頸部に貼り付け突帯1条、胴部に2条

第５表　石器観察表（弥生時代）

挿図番号	区	グリット	遺構番号	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
L14	1	P13-24	SD19	埋土一括	磨製石鏃	3.78	2.45	0.26	2.67	
L15	1	P13-24	SD19	埋土一括	磨製石鏃	3.82	2	0.21	2.36	
L16	2	P13-10		攪乱	砥石	8.44	4.61	3.37	196.95	
L17	6	P14-19	ST57		磨製石鏃	4.6	2.6	3	3.32	
L18	1	P13-25		攪乱一括	磨製石鏃	4.92	2.86	0.32	6.27	
L19	6	P14-14			磨製石斧	14.44	4.68	3.33	324.48	

第6章　古墳時代

第１節　概観

古墳時代に属するものとして古墳及び土壙墓が見られる。一方で同時期の住居祉については確認されていない。

第２節　北甘木台地における古墳

１　概況

今回報告する古墳は６基あり、北甘木台地における古墳全45基のうち１割弱を占める。まず個別について語る前に台地全体の状況を把握した上で説明していく方が個々を理解する上で有効かと思われるのでまずは台地全体の傾向について次項以降で述べる。

２　北甘木台地における古墳の分布

（１）古墳の分布（第77図）

古墳の分布は台地全体で見ると疎密あり、西側に大きく偏る。特に上官塚遺跡では37基と全体の約８割を占める。上官塚遺跡においては数もさることながら密集し群を成している一方で、他の部分では多くて４基程度が付近に点在する程度で上官塚における状況とは一線を画している。

上官塚遺跡における古墳の分布という観点に目を落としてみると、微高地を取り巻く裾部分に帯状に分布しており、弥生時代の甕棺における状況とやや似通っている。このため甕棺のいくつかは古墳の直下にあったため築造時の影響を受けており損壊するものも含まれている。甕棺はそれぞれが切り合わないように配慮されている節が強く見られるのに対し、古墳は甕棺の墓域に対して特段の配慮をしているようには思えず適地と判断して築造したものと推定され、先行の墓域に対する認識・考慮の薄れもしくは断絶が起きているものと考える。

古墳の分布に話を戻すと、帯状に分布する中で中間に空白域があり、群を異としているように見える。大型墳もこの空白域を挟んで北に３基、南に２基と分かれているようにも見える。ただしこの空白域における削平が著しいということもあり、この２群が当時明確に分けられたものであるかについては確証がないというのが現状である。

３　古墳の形状及び規模（第78図）

（１）古墳の形状

保護対象となったため未掘で形状が未確定のものもあるが、古墳の形状は円墳で占められ、前方後円墳は存在しない。

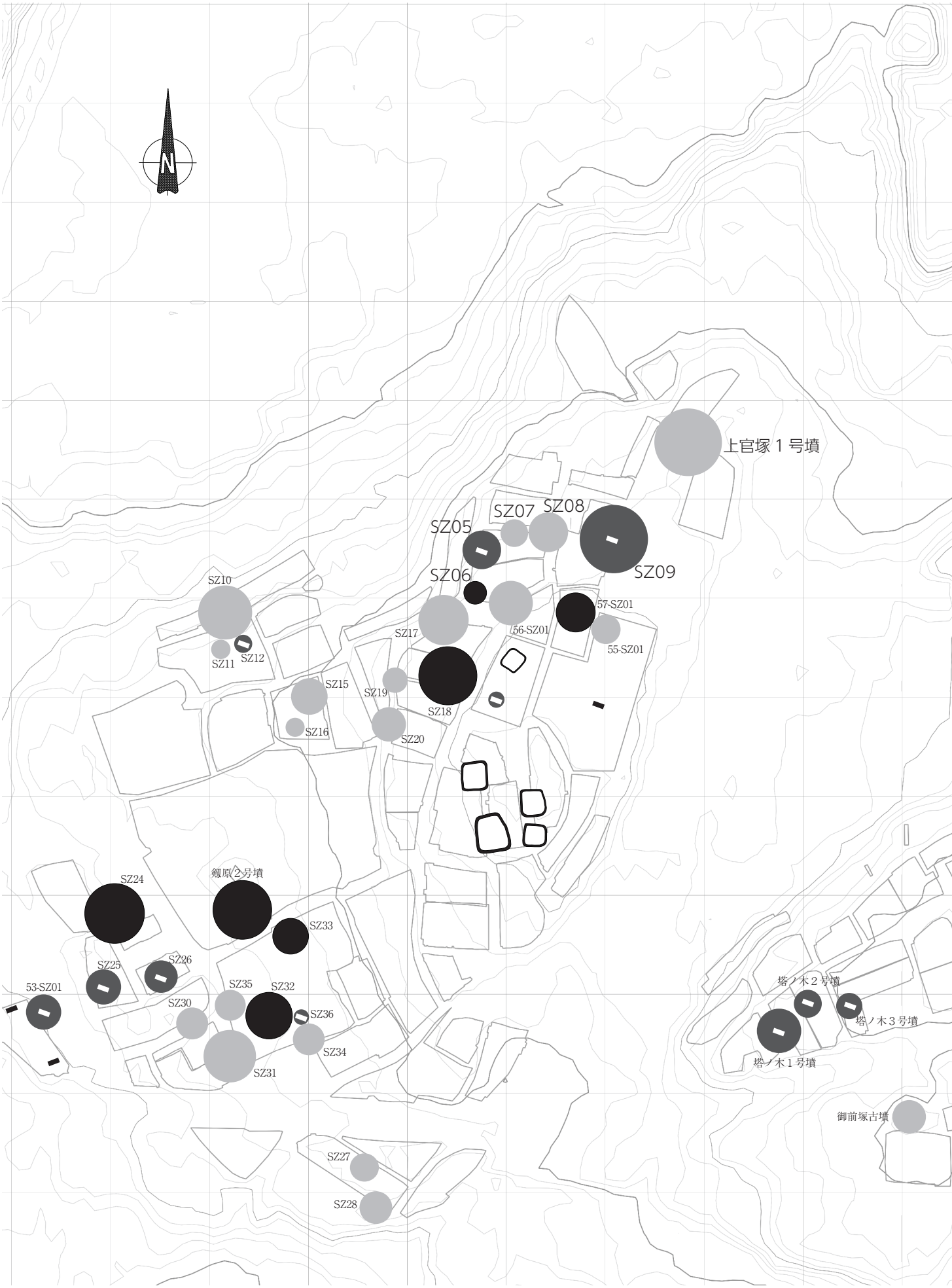
また、墳丘を有するものは北甘木台地においては上官塚１号墳と御前塚古墳を除いてほとんど存在せず、残存していても大きく削られているなど当時の姿を保っているものは皆無と言える。

（２）古墳の規模

こうした背景から規模という観点では周溝の径で量らざるを得ない。外周径を基に規模を図化したものが第78図であり、30ｍを超すものを大型、25～20m程度のものを中型、15m前後以下のものを小型と便宜上分けているが、明確な区分基準上に乗るものと若干の差を持っているために境界が曖昧なものもある。

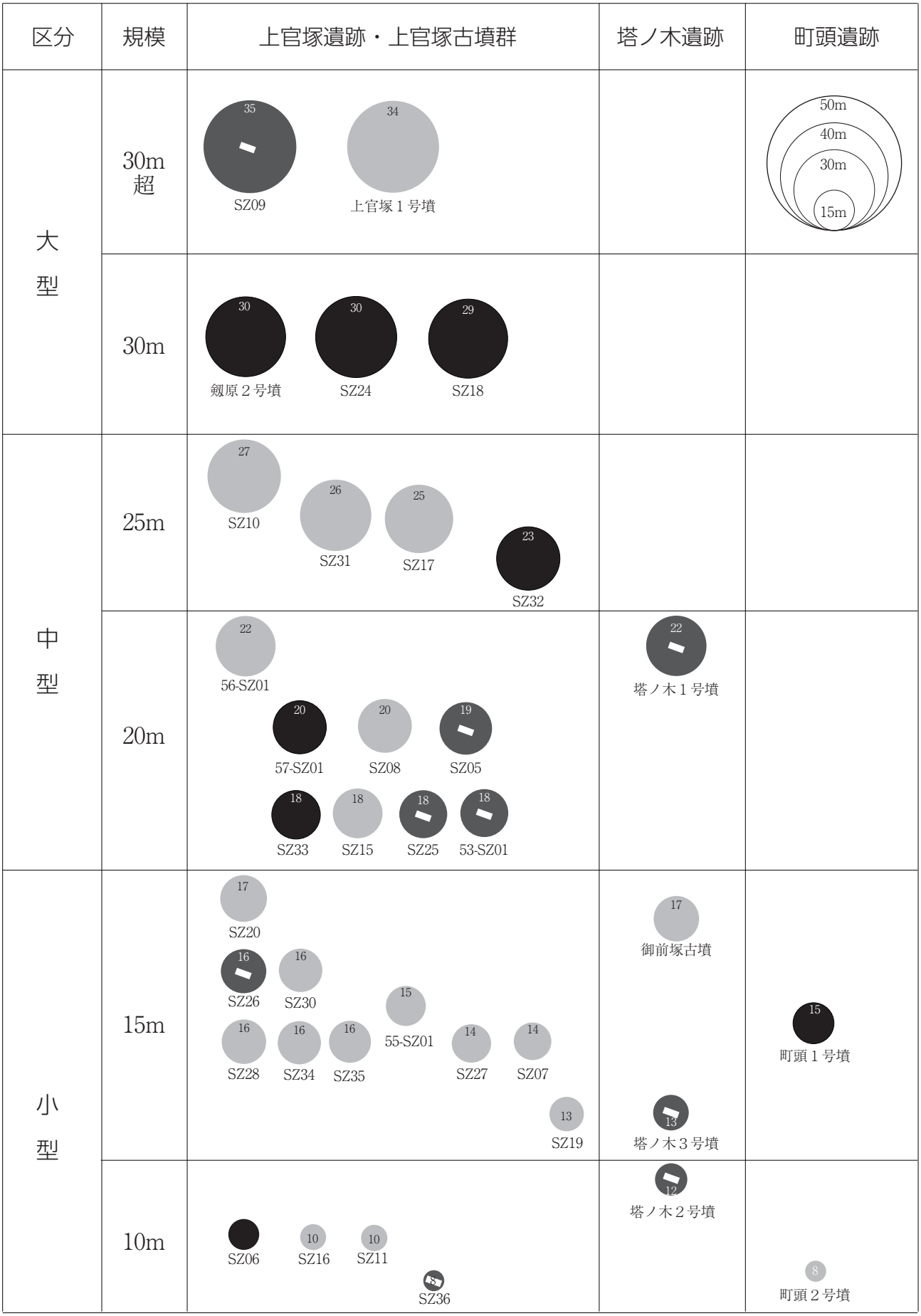
古墳自体ある程度の規格性を有しているように思えるが多少の誤差を含んでいることや削平の程度により周溝径が変動することなどもあり、明確に分かれている部分以外の差というものはあまり考慮に入れない方がよいと考え基準の±１ｍを該当とし、±２ｍに収まるものを範疇に収まるものとして扱うこととする。

この区分に基づいて大型のものとなるものは



第 77 図　北甘木台地における古墳分

分布（グリッド枠は旧測地系による）



第 78 図　北甘木台地における古墳の規模

第 79 図　上官塚遺跡・上官塚古墳群における大型古墳の分布

５基が該当する。５基のうち、今回報告する大型のものは２基（上官塚１号墳、SZ09）で、ともに34～35ｍを測る。

この規模は北甘木台地とは北隣の井寺丘陵にある井寺古墳と同規模となる。続いて比較的大きな規模（30m）を持つものに劔原２号墳、SZ24、SZ18が挙げられる。

大型円墳の分布は上官塚遺跡に限定され、同一台地上にある他の遺跡では大きくても塔ノ木１号墳の22ｍが最大、と上官塚に大きいものが集中する傾向にある。

また、数的には中型・小型が大半を占めており、特に15～20ｍが23基と全体の半数を占めている。分布の面で見るとこれら中型・小型の古墳は大型の周辺を埋めるように分布しており、個々が密接に関連した結果によるものと思われる。

（３）内部主体形式による分布

古墳の時期を推定する上で重要となるのが遺物を除けば内部主体の形式である。ただし上官塚遺跡を含め北甘木台地における古墳のほとんど全てが墳丘を失っていることやそれに伴って石室等の地上施設もその際に失われている。

一方で石室を持たない石棺で埋葬する事例もいくつか見られ、これについては墳丘を失っていても今回の調査により主体が確認されているものも含まれる。また、かつて石室であったものが削平の際に破壊され、そこで生じた残骸となる石材を一箇所にまとめて廃棄しているなど石室系古墳であったことを推測させる遺構もあり、そうした区分を反映させた図が第117図となる。

今回の調査で主体が判明しているものは上記の理由もあって一部に限られており、塔ノ木遺跡における古墳が石棺に限られる点以外は分布上特に偏りが見られるわけではなく、上官塚遺跡全体に満遍なく各段階の古墳が造営されたもののように思える。これらの詳細についての検討は現段階では整理中であるため全体が報告される段階で総括することとし、その端緒となる本編では今後の課題としておく。

第３節　古墳

１　概況

前節で述べたとおり台地全体での傾向を踏まえて、上官塚遺跡北側及び上官塚古墳群における古墳の様相としては大型が２基（上官塚１号墳，SZ09）、中型２基（SZ05，SZ08）、小型２基（SZ06，SZ07）という構成で、うち主体が判明しているものはSZ05（石棺）、SZ06（石室）SZ09（石棺址）で他は不明である。

１　上官塚１号墳（第80～81図）

（１）概況

上官塚遺跡の北側に隣接する上官塚古墳群は、北甘木丘陵の北端部付近に位置する。このうち１号墳については、墳丘がごくわずかではあるが残存しているものである。残存墳丘の形からそれほど大きくないと思われたが、調査の結果直径約34ｍと北甘木台地上で２番目に大きなものであることが判明した。なお、発掘調査で判明した周溝を含めて上官塚１号墳を現地保存することとなったため、墳丘部分の調査は実施していない。

（２）周溝

上官塚古墳群２区と３区で周溝が確認された。現存する墳丘よりもかなり外側を回る形であり、１号墳も相当規模で削平の影響を受けていることが分かる。周溝も削平の影響を受けており、特に北側では下端付近以上を消失しているため平面プランがややいびつである。残存する外周径は約34ｍ、内周径約25ｍを測る。

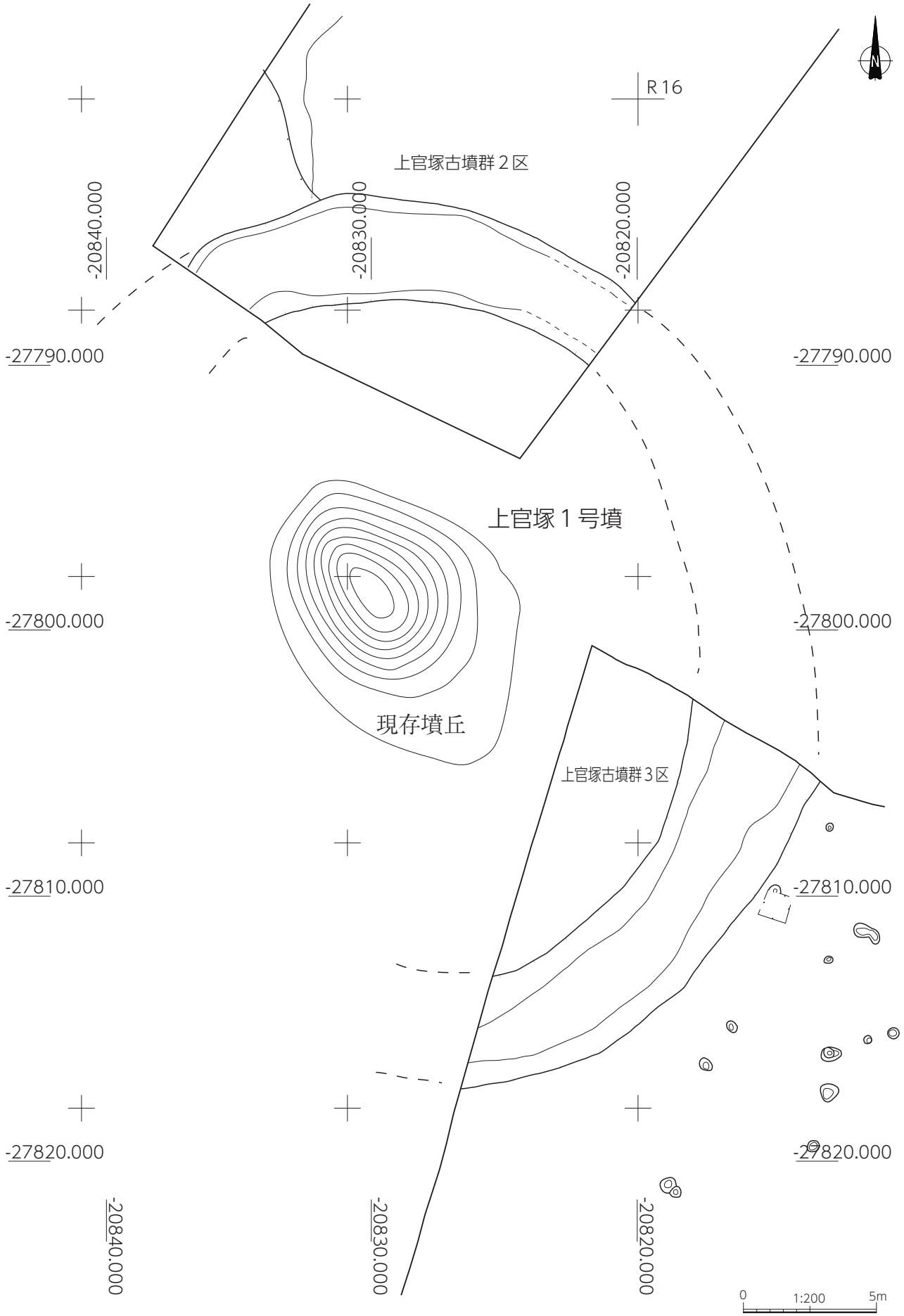
（３）内部主体

周溝を含めた墳丘があったであろう部分を調査しているが、内部主体は確認されていない。ただし石室であった場合はここまで削平が及んでいれば基底部が露出するはずであるが、それも認められないことから石棺系の主体であることが予想され、その位置は残存墳丘直下にあるのではないかと推定する。

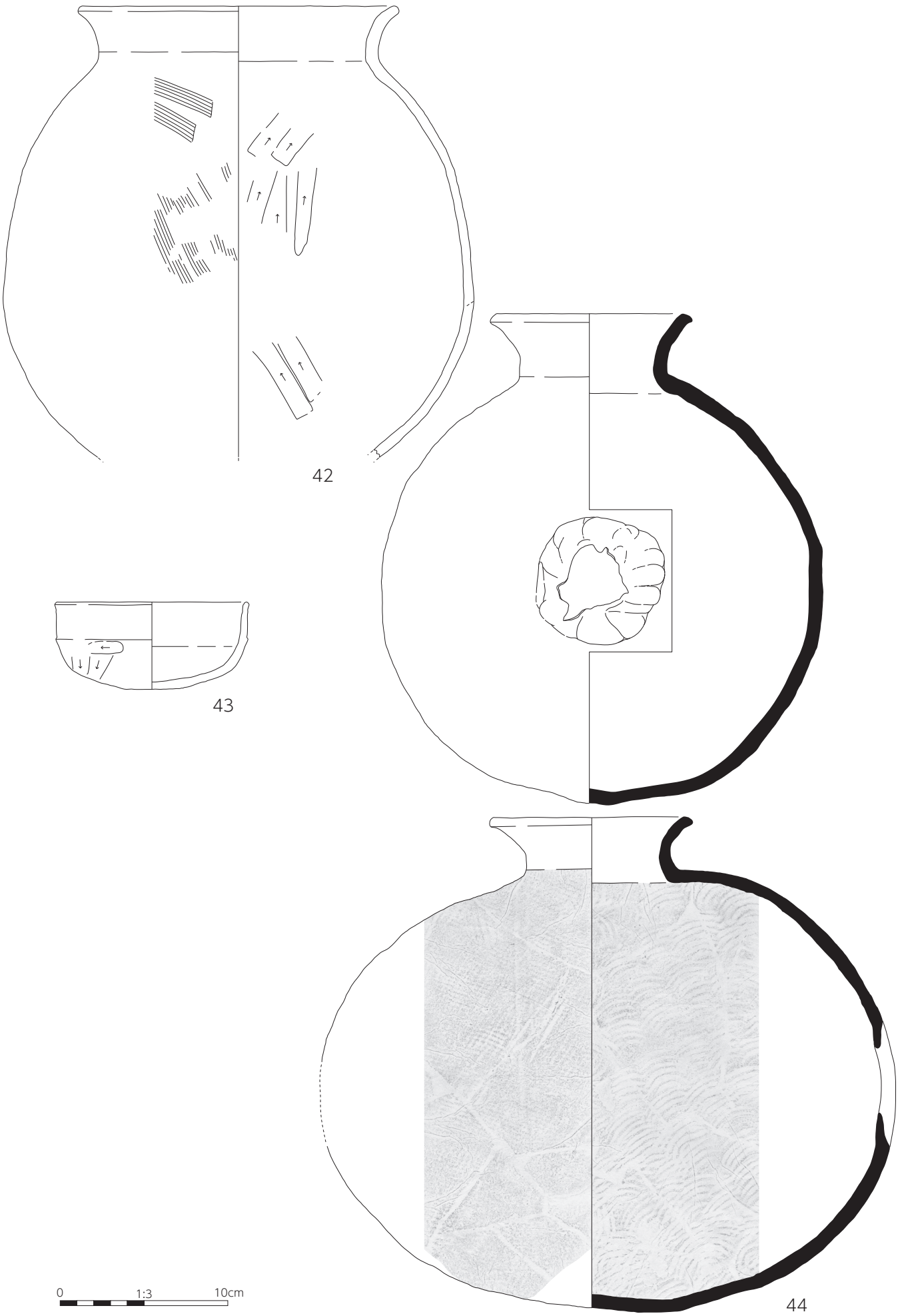
（４）周溝内出土遺物

ア　甕（42）

土師質で口縁が外反する甕である。口縁下部で屈曲した後大きく張り出し、胴部は球胴状を呈する。底部を欠くが、丸底であると推測され



第 80 図　上官塚１号墳遺構平面図



第 81 図　上官塚 1 号墳周溝内出土遺物実測図

る。調整は外器面に斜め方向のハケ目、内器面はヘラケズリが認められる。

イ　坏（43）

土師器の坏である。口唇部はナデによりやや丸みを帯びており、胴部にはケズリによる段が生じる。底部付近にもケズリの痕跡を認める。

ウ　横瓶（44）

須恵器の横瓶である。長楕円形の胴部を呈し、上部に外反する口縁が設けられる。横部分では成形時に利用する孔に対して蓋がされるが、接合面のところで剥離している。外器面は格子状、内器面は同心円のタタキ目が施される。

3　SZ05（第82～86図）

（1）概況

２区の西側付近で確認されている。３区に一部がかかると推定されるが、そちらでは周溝を確認できていない。周溝の外周径から直径約19ｍ（中型）の円墳である。周溝で区切られた区画の中心付近に石棺が１基あり、これがSZ05における内部主体と判断する。SZ07（小型）とは間隔約３ｍと肉薄して隣接する。

（2）周溝

外周径約19ｍ、内周径約15ｍの円形を呈する。陸橋部は確認されていないため開口方向は不明である。

（3）内部主体

ア　墓壙

墓壙の上端は長軸約３ｍ、短軸約1.6ｍの長方形を呈する。原図において断面図と石棺の状況が矛盾しており、石棺蓋が検出された高さから数十cm下げられた平面で断面図が作成されている。そのため墓壙の掘り込みに関する検討が出来ない。また、墓壙内の埋土に関する記述がなく、そうした検討を経ずに掘り上げている節がある。加えて原図が示す高さに矛盾が多く、底面付近については大きな齟齬がない程度に調整はしてあるが、これも正確な図面であるとは言えない。

イ　石棺

蓋は大きな１枚板状の石材を半割したようなものを２枚組み合わせて石棺上に置き、継ぎ目に小さな板石を置いて目張りとする。棺中央付近の継ぎ目には粘土目張りの痕跡が認められる。また、棺内に赤色顔料が塗布されており、屍床部にも顔料の散布が認められる。

ウ　被葬者・埋葬方法

石棺には人骨片が散布しており、被葬者のものと推定されるが、残存状況が悪く、さらに散乱しているように見受けられるため原位置を留めているとは言い難い。加えて調査時における人骨の所見が見当たらず、さらには人骨の所在についても不明であるため詳細についての検討は不可能である。

（4）主体部内出土遺物

刀子が１点出土している。棺の南東部付近にあり、顔料の散布域と重なっている。

（5）周溝内出土遺物

ア　高坏

土師器の高坏が出土している。完形のものはなく、全体の一部を留めているものに限られる。坏部については脚部と接する部分に台状の平場を設けてその縁から口縁までを積み上げるためその境目に段を有する。また、脚部と坏部の接合面は筒状の脚端に坏部底を押し込む形で接合されるため脚部に逆凸形の飛び出しを生じる。

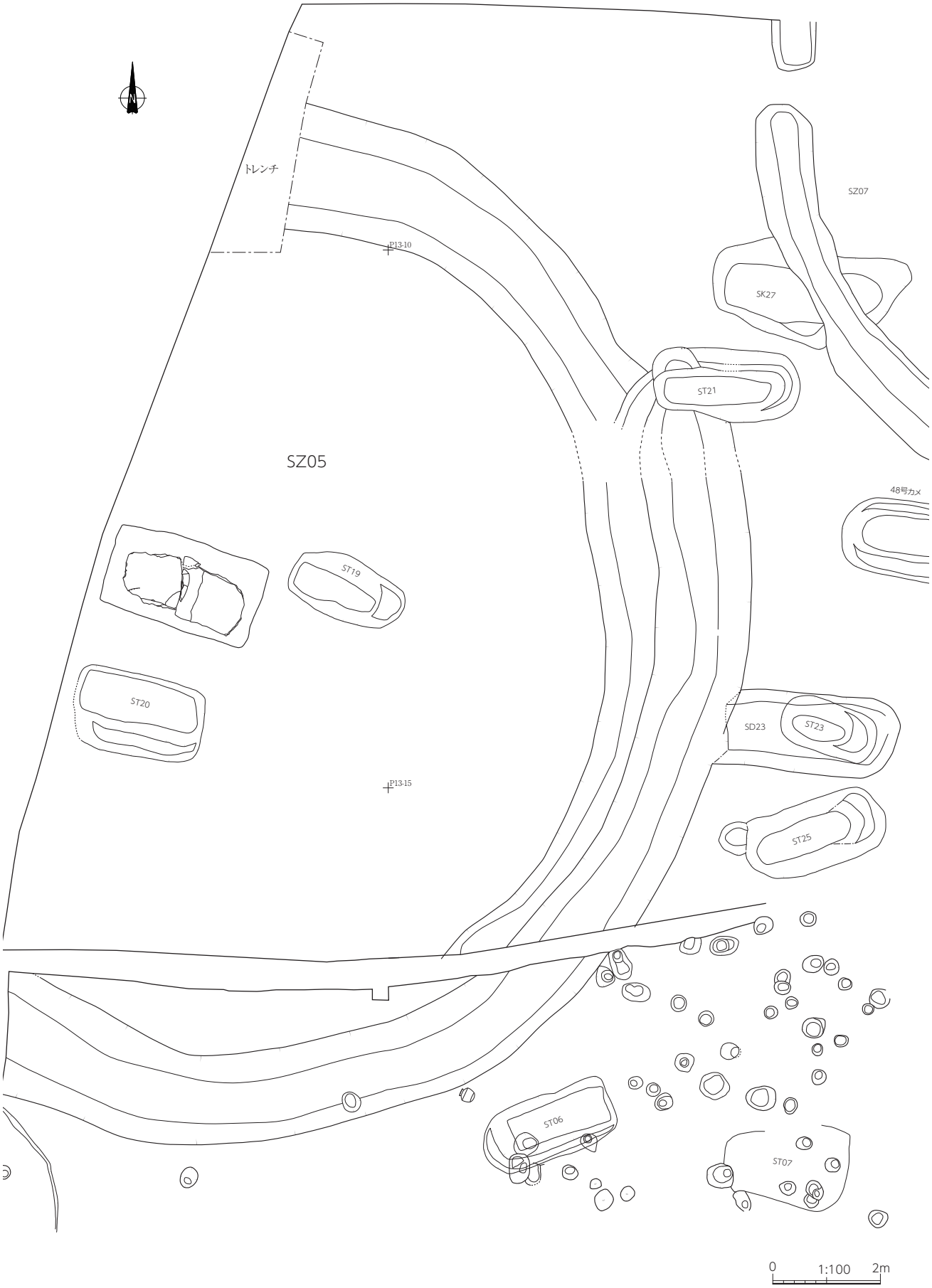
脚を有するものについては脚裾までは直線的に伸び、裾部で屈曲するものを主とし、47については一旦外湾して裾付近でくびれ、その後強く屈曲している。これは坏部も基底部分との境が明瞭でなく坏の立ち上がりも広く深めになっているなど若干様相を異にする。また50については外器面ではなだらかに裾まで伸びているが、内器面では裾付近で屈曲する。

イ　小形丸底壺

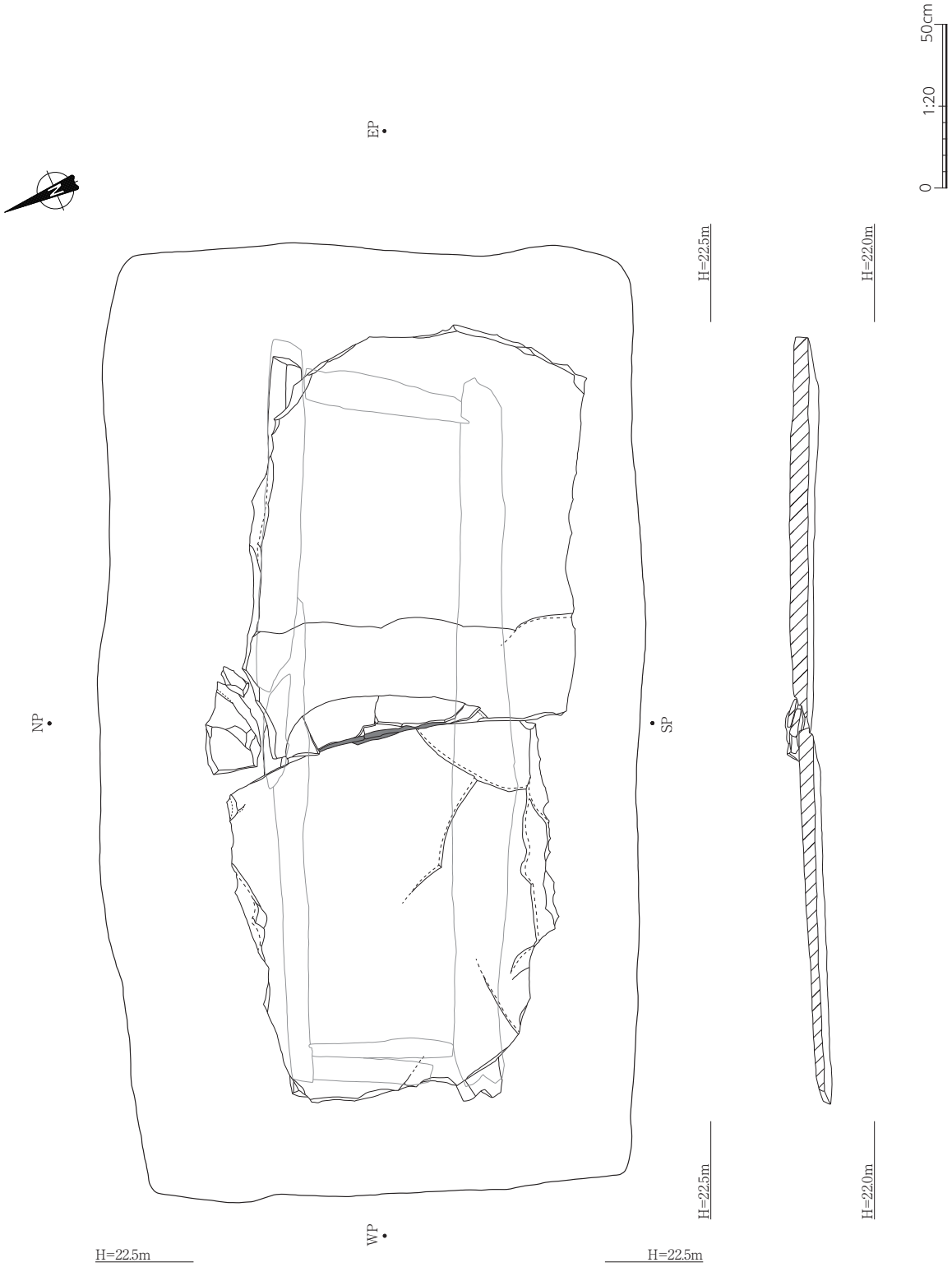
３点の小形丸底壺を図示する。高坏同様完形のものはない。そのため復元となるが器高は約９cm、口縁径も約10cmと全体的に小ぶりである。縁のない椀状のものを作り、その後継ぎ目から口縁を積み上げている。口縁は直線的な断面を示す。胴部の屈曲は角張って急になるものと丸く湾曲して球状をなすものがある。調整は胴部を斜め方向のハケ目、口縁部付近は横方向のハケ目を主とする。

ウ　横瓶

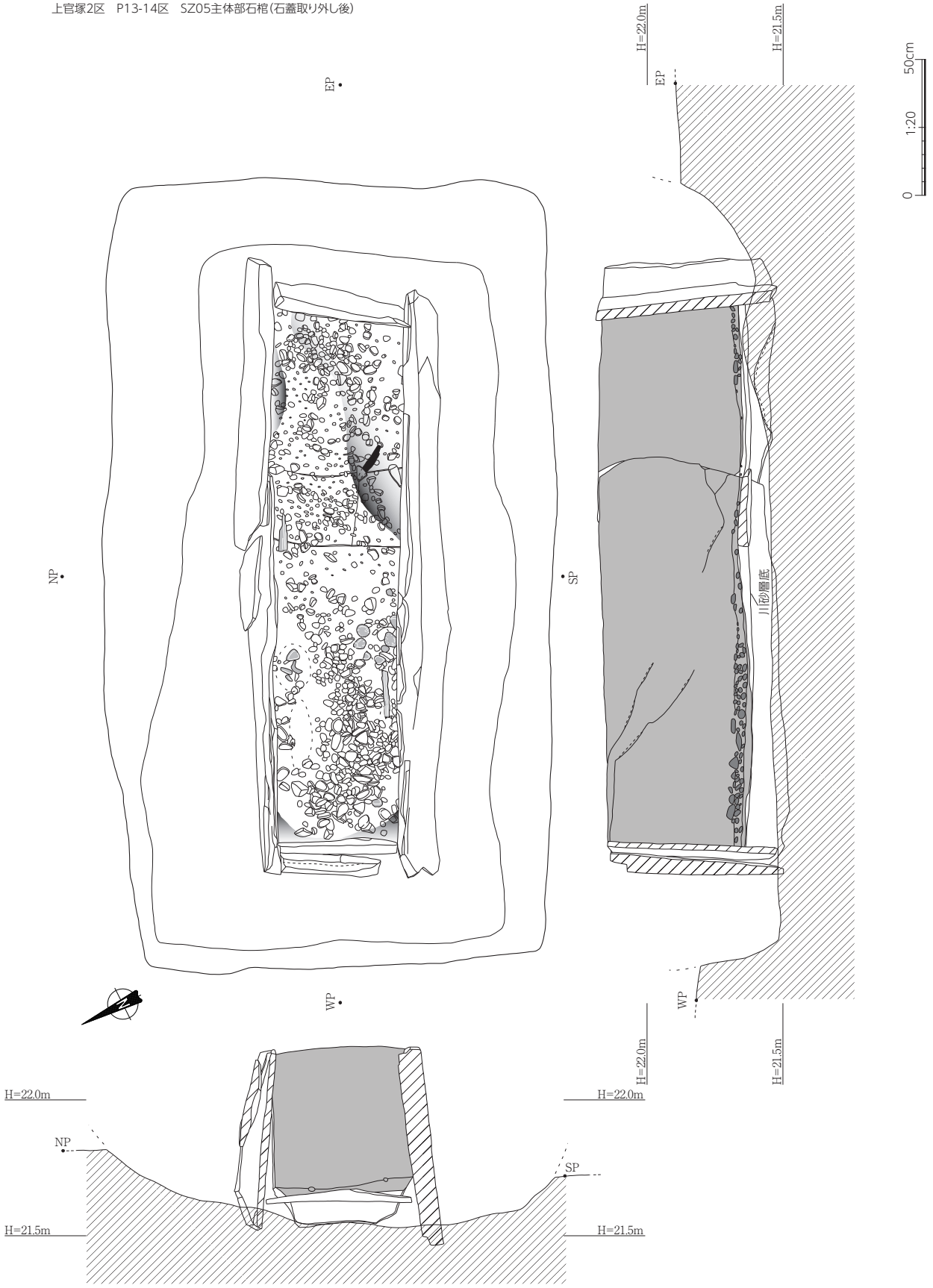
須恵器製の横瓶である。口唇部付近を欠く。胴が俵形を呈する。口径は約20cmを測り、胴部との境界付近はやや肥厚する。調整は外器



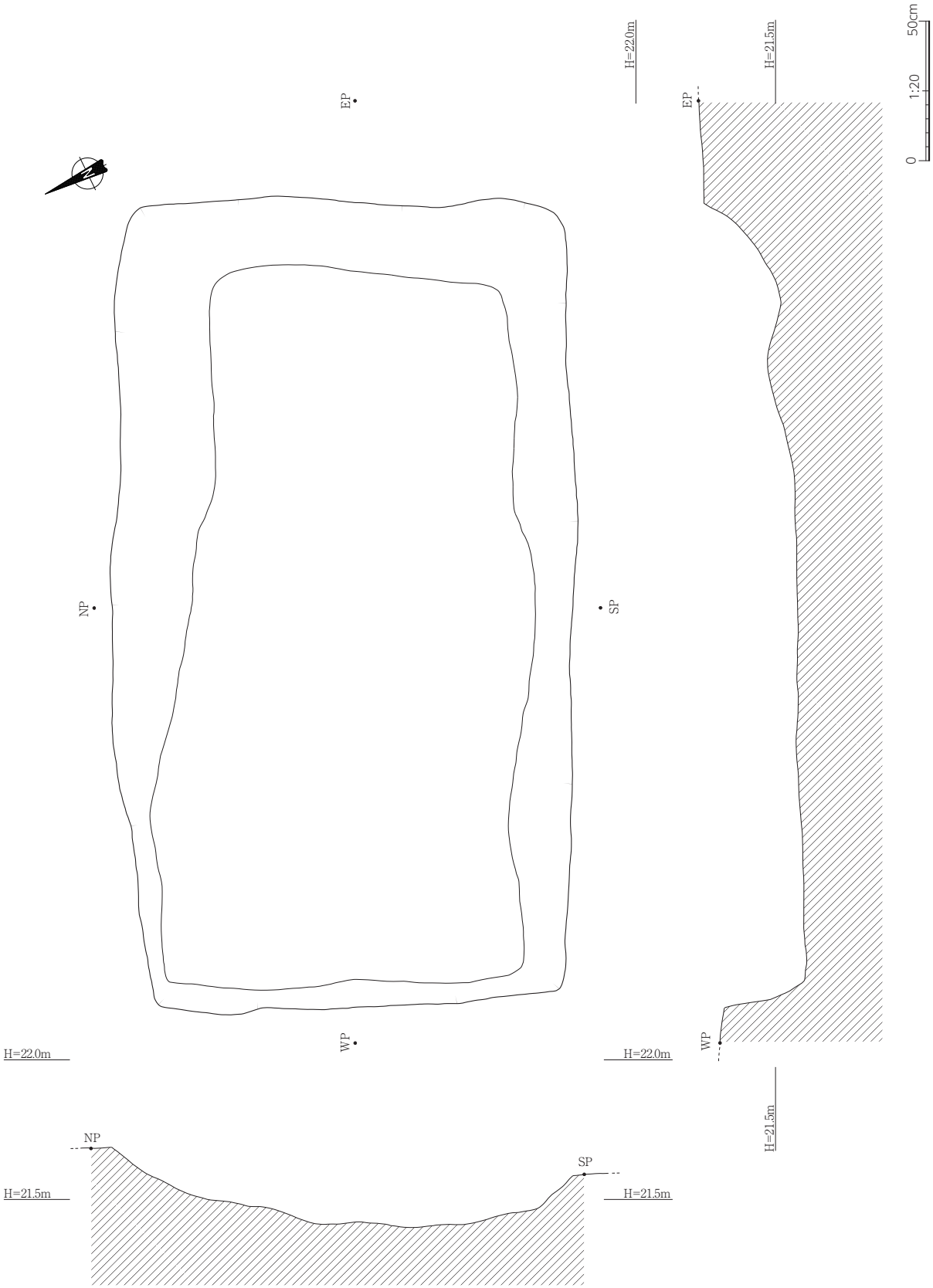
第 82 図　SZ05 遺構平面図



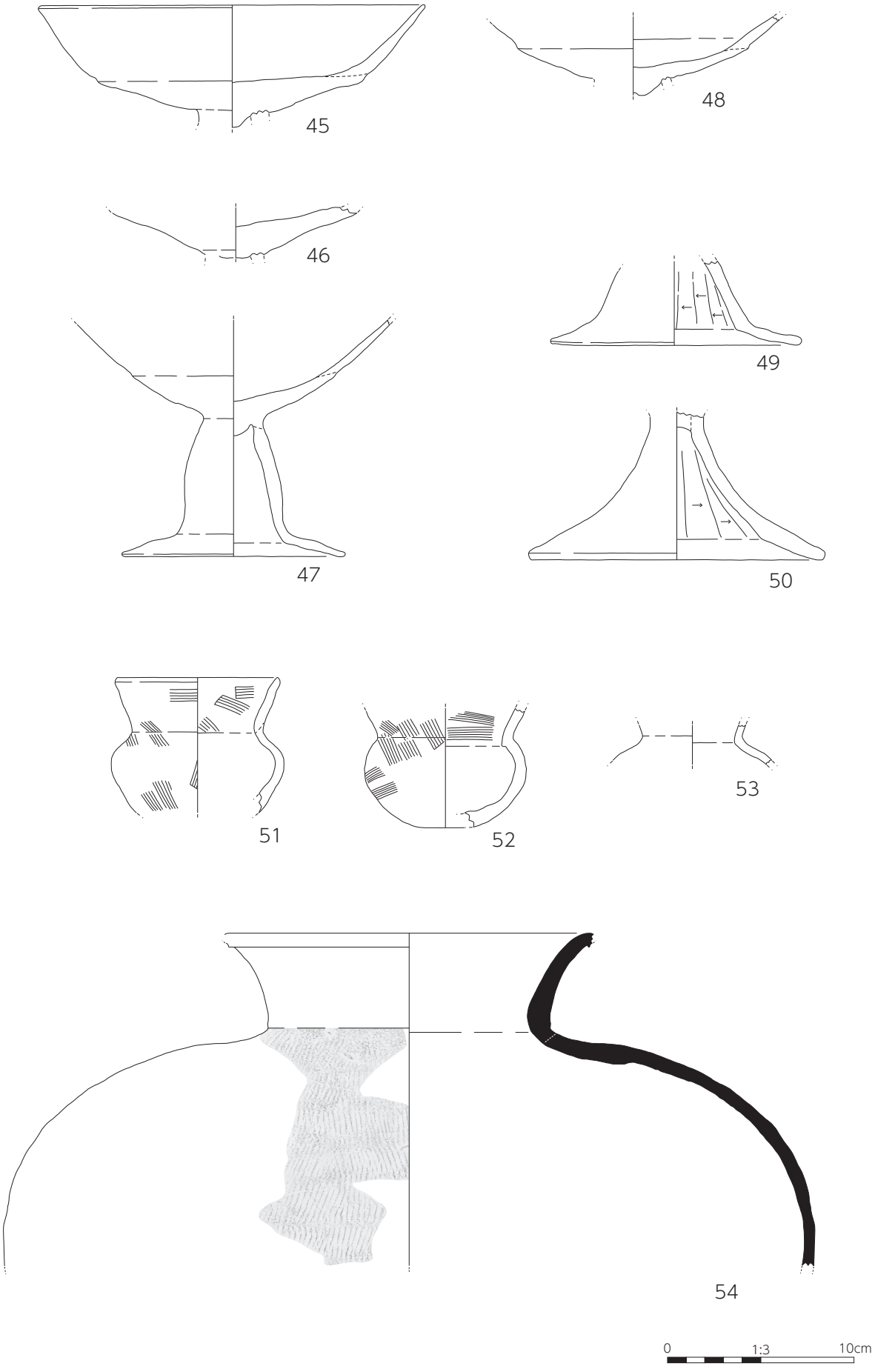
第 83 図　SZ05 主体部（石棺）蓋検出状況図



第 84 図　SZ05 主体部実測図（蓋除去後）



第 85 図　SZ05 主体部掘り方実測図



第 86 図　SZ05 周溝内出土遺物実測図

面に平行タタキ、口縁付近はナデが施される。

3　SZ06（第87図）

（1）概況

１区の南西端付近で確認されている。外周径が12ｍと小型の部類に含まれる。調査区南西端付近で主体部の痕跡と図に書いてあるものの、それ以上の状況が分からず不明である。墳丘は削平により失われている。

（2）周溝

外周径約12ｍ、内周径約10ｍを測る。断面図がないため、埋土の状況は不明である。

4　SZ07（第88図）

（1）概況

上官塚遺跡の北側、SZ05に隣接して存在し、２区と３区にまたぐ形で確認された。円形を呈し、円墳である。他と同様墳丘を失っている。

（2）周溝

外周径約14ｍ、内周径約11ｍを測る。上官塚遺跡近辺の古墳の中では小型の部類に含まれる。

（3）内部主体

周溝で囲われた領域の内部にいくつかの土壙墓（ST26~29）が確認されている。位置や形状からST28がそれに該当しそうであるが、石棺材などの痕跡がないなど他の土壙墓と区別する際の決め手に欠ける。

5　SZ08（第89～90図）

（1）概況

２区と３区にまたがる形で確認された。位置的にSZ07の東隣に位置し、両者の間隔は50cm程度と肉薄しているが、切り合うことなく並存している。

（2）周溝

外周径約20ｍ、内周径約17ｍを測り、中型の部類に含まれる。

（3）内部主体

主体がありそうな部分が調査区外の農道部分にあるため調査が実施されていない。

（4）周溝内出土遺物

ア　高坏

土師器の高坏であり、坏部下部から口縁部にかけて引き上げており、その境目に段を有する。脚部との接合部は坏部側が肥厚し、下向きの凸状を呈する。脚部は裾部に向けて直線的になり、裾付近で屈曲する。裾端部はナデにより上向きにわずかに反る。調整は坏部は斜め方向～横方向のハケ目、脚部はナデ、内器面はケズリが施される。また、58には内外器面ともに赤色顔料が塗布されていた形跡がある。

イ　坏

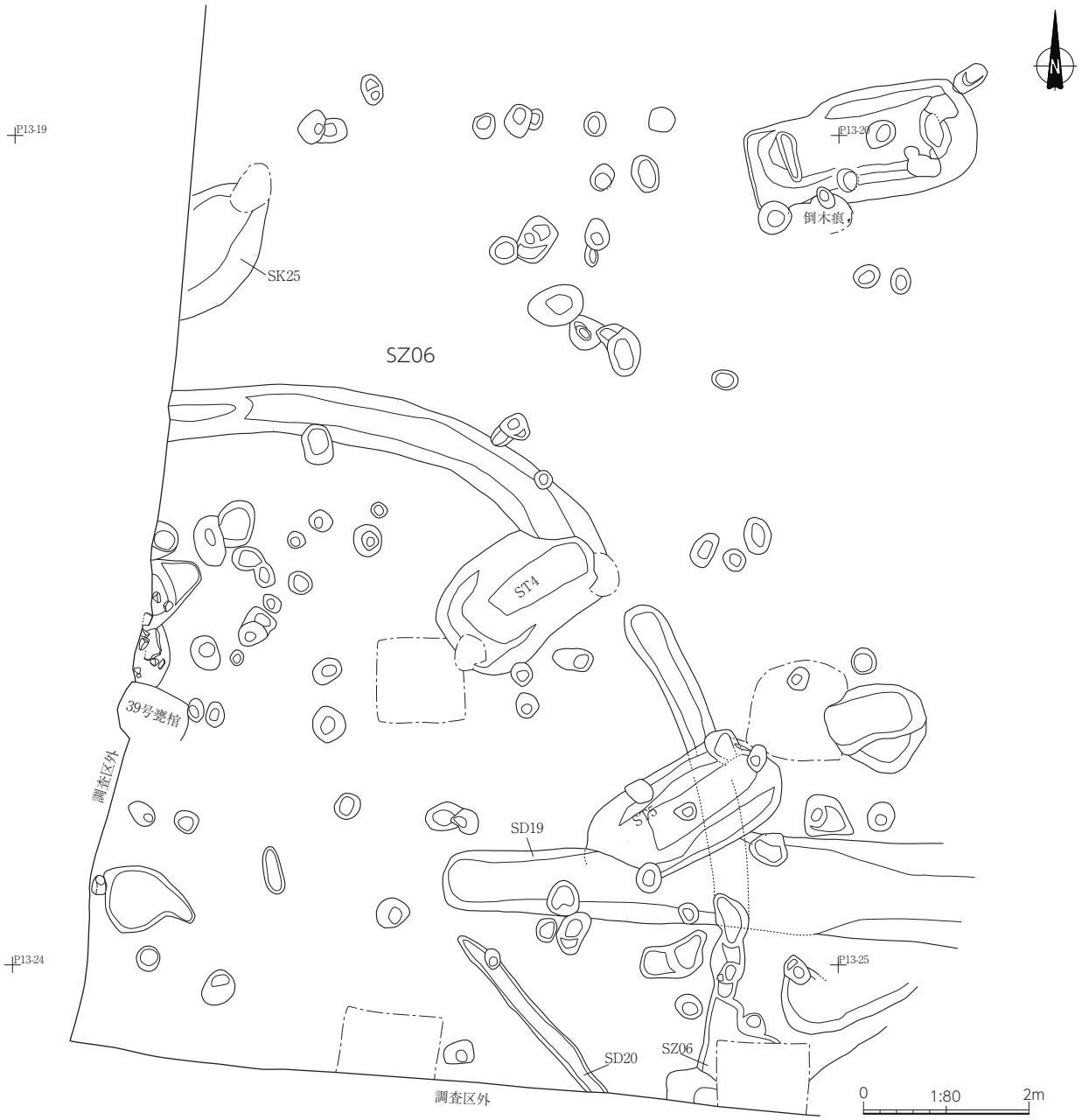
土師器の坏である。丸底で胴部も緩く丸みを帯びる。口縁は口唇部で内湾するもの（62）、胴部から直線的になるもの（64）、外反するもの（63）がある。調整は斜め方向のハケ目が施される。また63には赤色顔料の塗布痕、62と64には外器面にヘラ記号が認められる。

ウ　小型丸底壺

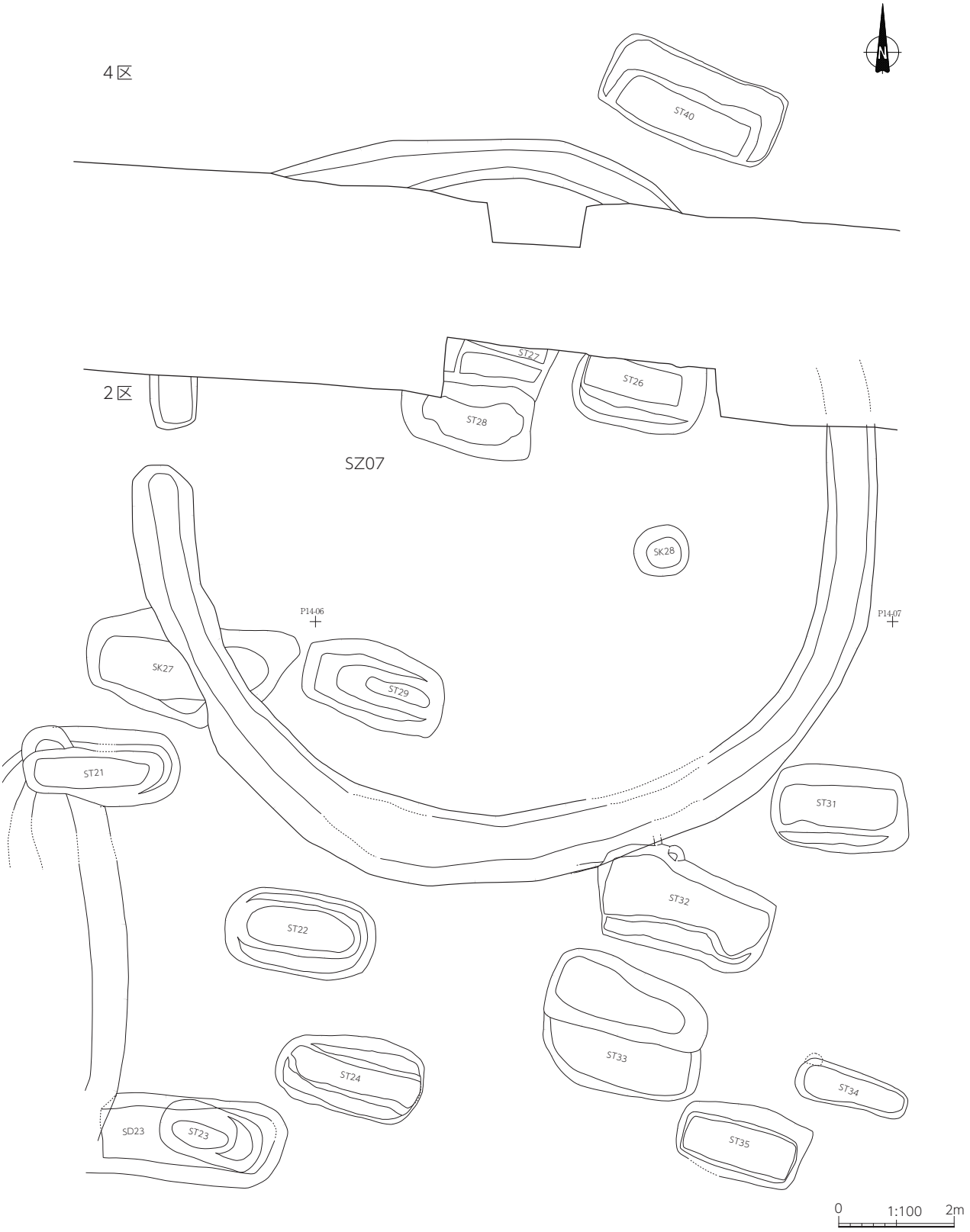
土師器の小型丸底壺である。胴部は長楕円形を呈し、頸部でくびれた後くの字状に屈曲し口縁へ至る。口縁は坏胴部のように外反して、口唇部でわずかに屈曲する。調整は胴部下半は横方向、胴部上半・口縁部は斜め方向のハケ目が施される。また66は口縁部内器面、68は胴部の内外に赤色顔料が塗布される。

エ　高坏

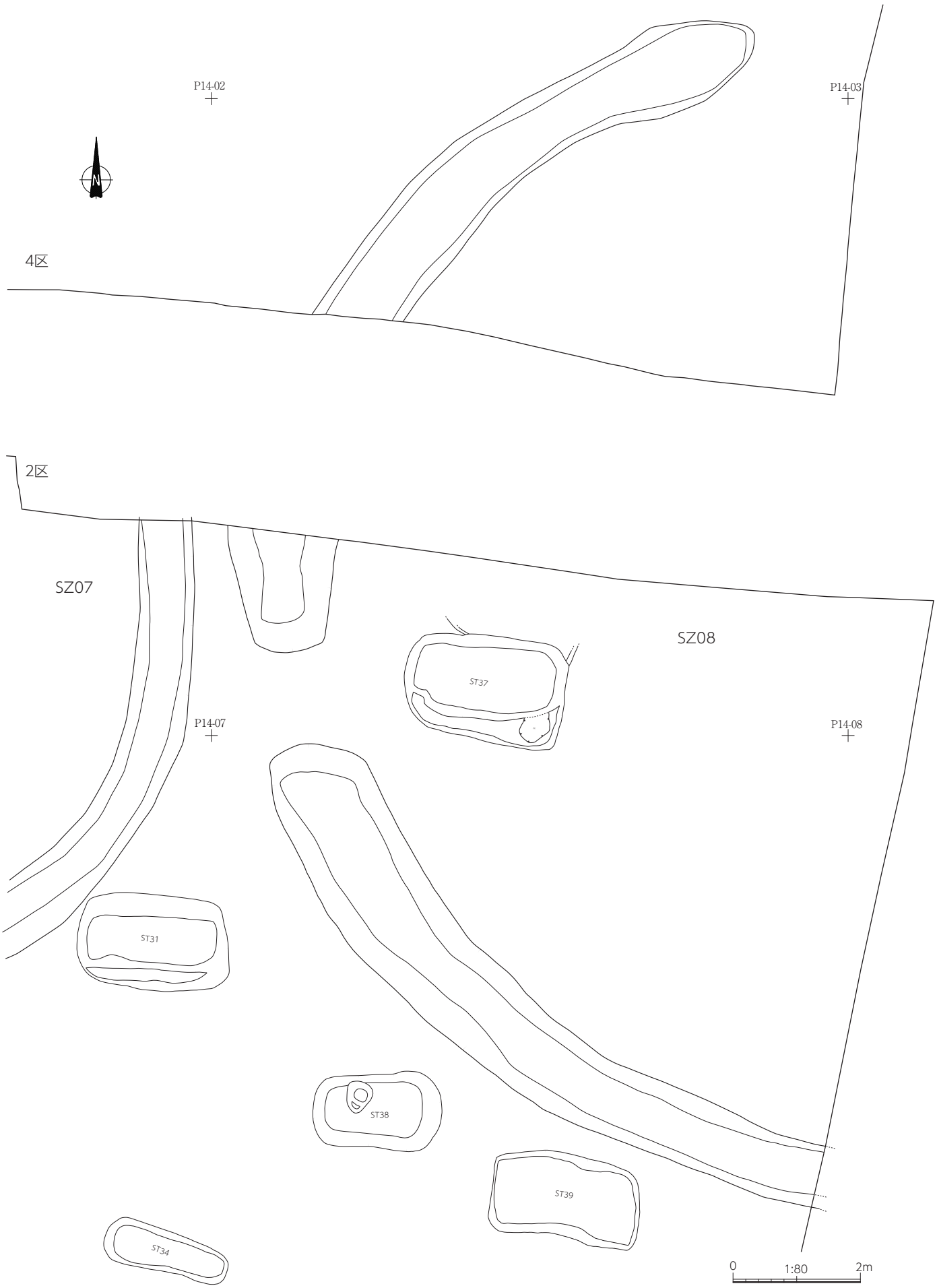
須恵器の高坏であり、坏部中頃に段を有するほか、把手状の突起を付けている。脚部は裾付近でやや肥厚し、段状を呈し、裾端部はつまみ上げにより先細り状に仕上げられる。また脚部には台形状の透かしが施される。



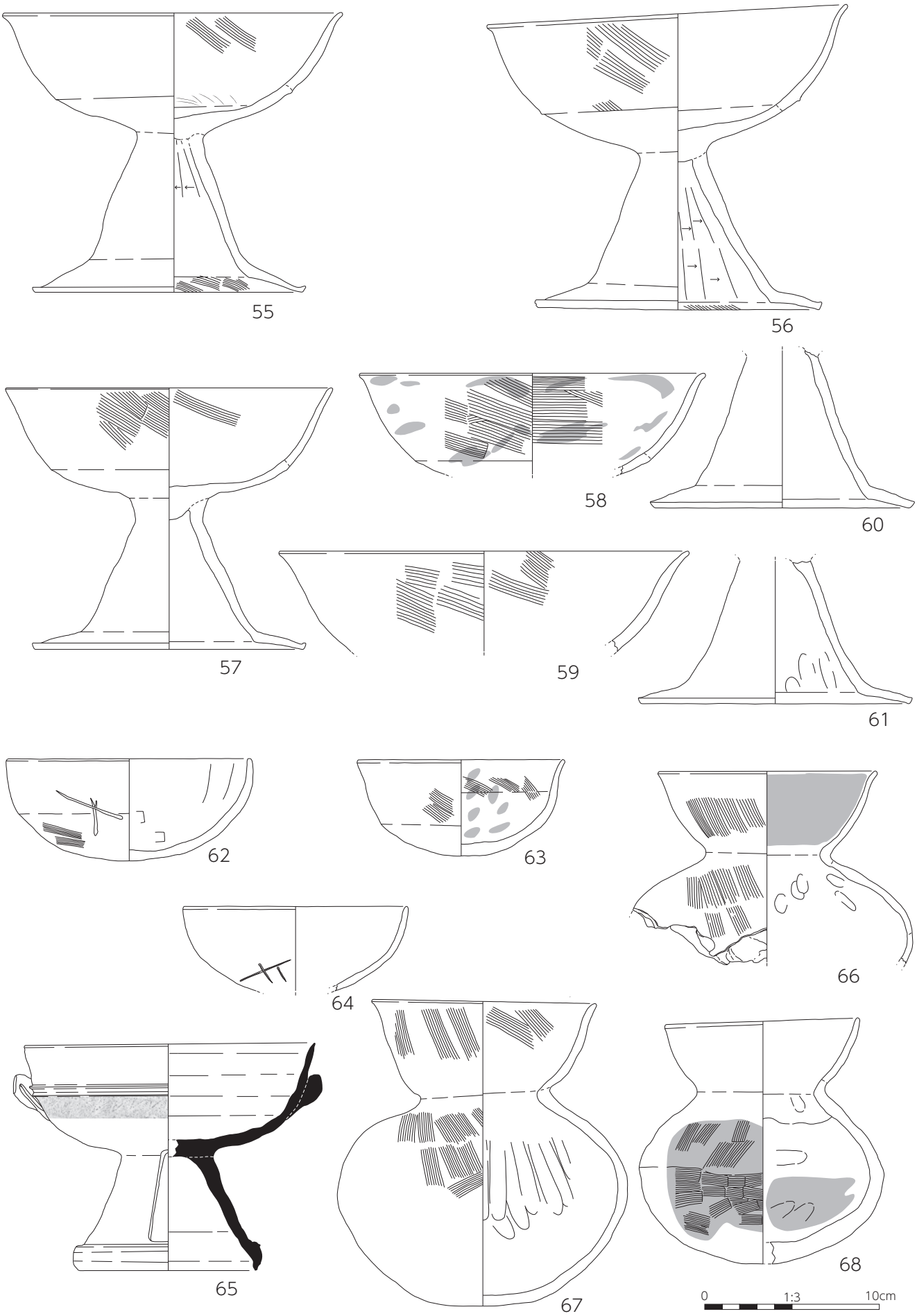
第 87 図　SZ06 遺構平面図



第 88 図　SZ07 遺構平面図



第 89 図　SZ08 遺構平面図



第 90 図　SZ08 周溝内出土遺物実測図

6　SZ09（第 91 ～ 101 図）

（1）概況

径 35 mと北甘木台地最大の規模を有し、周溝内から埴輪が出土している唯一の例となるものであり、埴輪も円筒埴輪・朝顔形埴輪を基本として家形・柵形の形象埴輪が出土している。

東半分については未掘であり、実際のところ形状は未確定ではあるが、上官塚１号墳と同様に事業課との協議によってSZ09 自体を現地保存としたため調査を実施していない。

（2）周溝

外周径約 35 m、内周径約 29 mを測る。陸橋部は未調査部分にあると思われる。

（3）内部主体

削平により破壊されており、その痕跡が周溝内領域の中心付近に認められる。

屍床の一部残存のほかは破壊されており、規模等については不明である。屍床に赤色顔料が撒かれていた。

（4）主体部内出土遺物

破壊が著しいため遺物は残存していない。

（5）周溝内出土遺物

ア　土師器高坏

周溝から土師器の高坏が多く出土している。坏下部から口縁部が立ち上がるものが主体を占めるが大分すると直線的に立ち上がるものと椀状に丸く立ち上がるものとに分かれる。脚部の裾は屈曲するものが多い。

周溝出土の高坏にはある程度時期幅を有しており、複数回にわたる祭事の実施が想定される。周溝中での散布状況がある程度把握できれば廃棄単位が見えるところではあるが、どの遺物においてもそうだが図と遺物の結びつけがなされておらず、そうした検討を不可能にしている。

イ　須恵器坏

周溝から須恵器の坏蓋が出土した。一方で組み合わせとなる坏身は出ていない。91 は口縁下部をケズリにより段状を呈し、口唇部は押さえにより先端がやや細くなる。92 は 91 に比べるとやや丸くなっており、口唇部付近は多少外反する。

ウ　円筒埴輪

SZ09 周溝から出土した埴輪の中で最も点数が多いのは円筒埴輪である。中でも図化に耐えられる 10 点を図示した。

概して小型のものが多く、全高が判明しているものの平均は 35cm 程度である。タガも２段であり、貼り付け時の接着が弱いためか２段目の欠損率は高い。調整は横方向のハケ目が主体であるが、元からの調整があまりはっきりしないことに加えて摩滅や破片のため連続した観察ができていない。透かしは１～２箇所、タガの１段目と２段目の間に設けられ、形状は円形のものである。

エ　朝顔形埴輪

数は少ないが朝顔形埴輪が出土している。104 は全体がわかる資料で、高さ 48cm を測り、円筒埴輪に比べるとやや大きい。タガは１段であり、タガの下部に下向き三角形の透かしが３箇所に施される。調整は横方向のハケ目を主体とする。

オ　家形埴輪

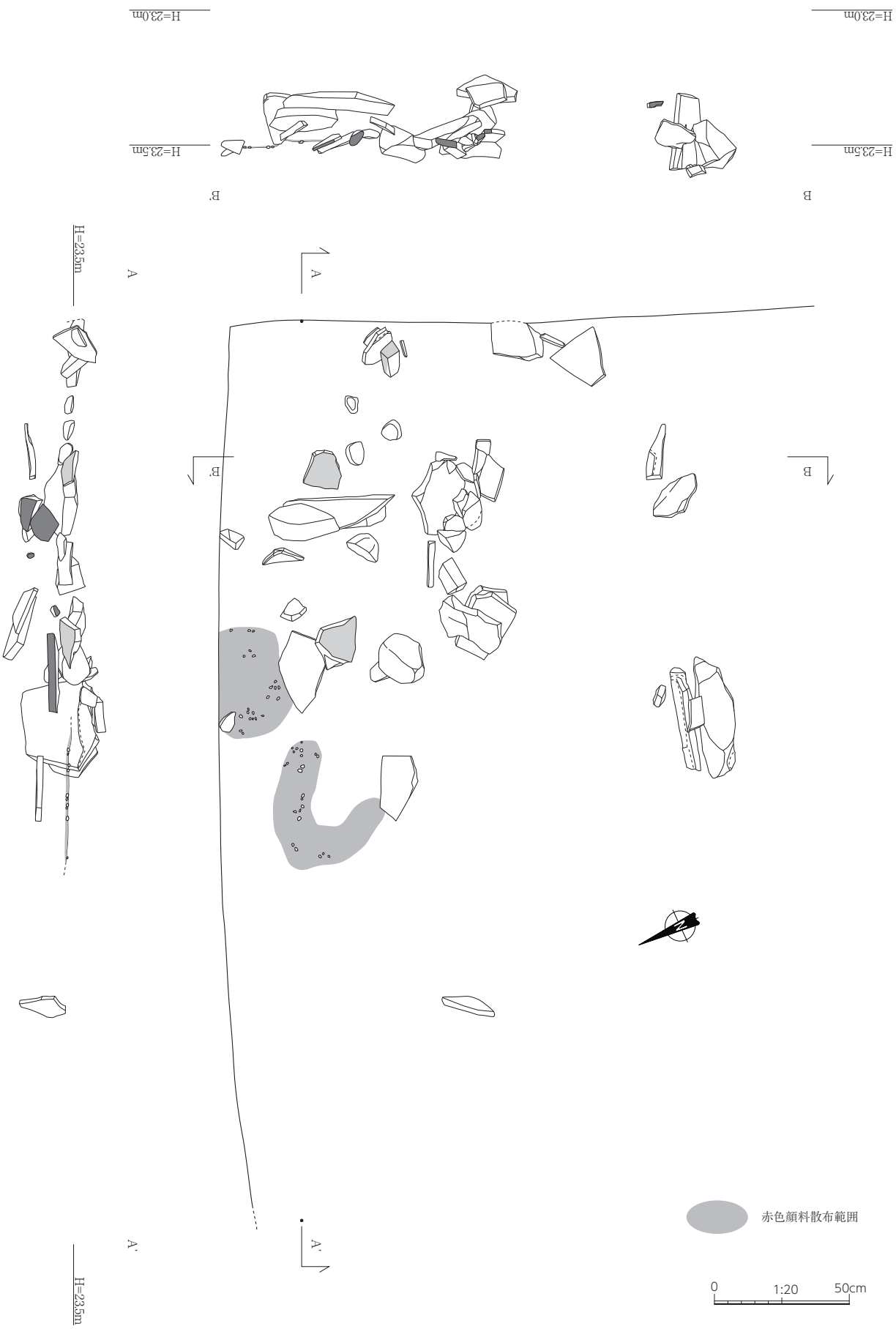
家形埴輪が１点出土した。入母屋造のもので、屋根部は比較的良く残っているが、壁以下は残りが悪く下半部の大半を欠く。調整は全般的に横方向のハケ目を主体で、赤彩される。下屋根はハケ目主体で沈線等による装飾は認められないが、上屋根には沈線で格子状の表現が認められる。線の切り合いから平行する横線を先に入れ、その後縦線で区切る。脇にいくにつれて線は斜めに傾き、正面から見た際の遠近表現のように思える。製作方法として板状の粘土により壁部になる枠を作成し、その後同様の板状粘土で下屋根を接合させる。煙道を持った上屋根はその上から乗せられて接合されるが、下屋根上部に空隙を設けており、貫通した状態となる。

また、正面となる側に入口と窓が透かしにより設けられ、それらを挟むように沈線による円文表現がある。向かって左の円文の中心に穿孔を認めるため、３つともコンパス文と推定する。また、円文の上部に２条の沈線を表現していることから、壁に鏡をつり下げた様子を示す表現と思われる。

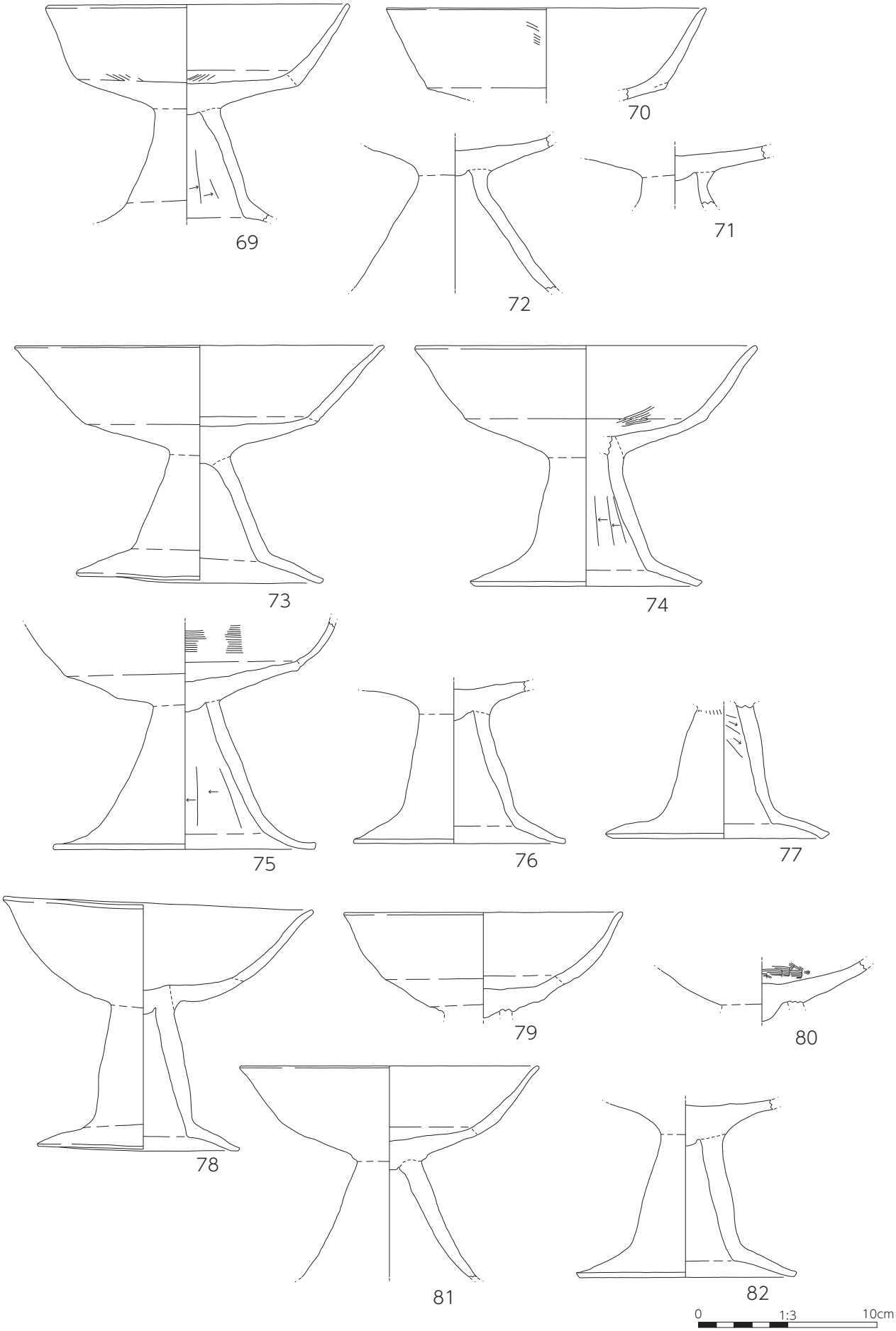
カ　囲形埴輪

上記に伴って、特殊な形状の埴輪が出土した。大きく見れば柵形か囲形かということになるが、複数を組み合わせて成立させる柵形とは異なり、単体で構造物として成立している点、正

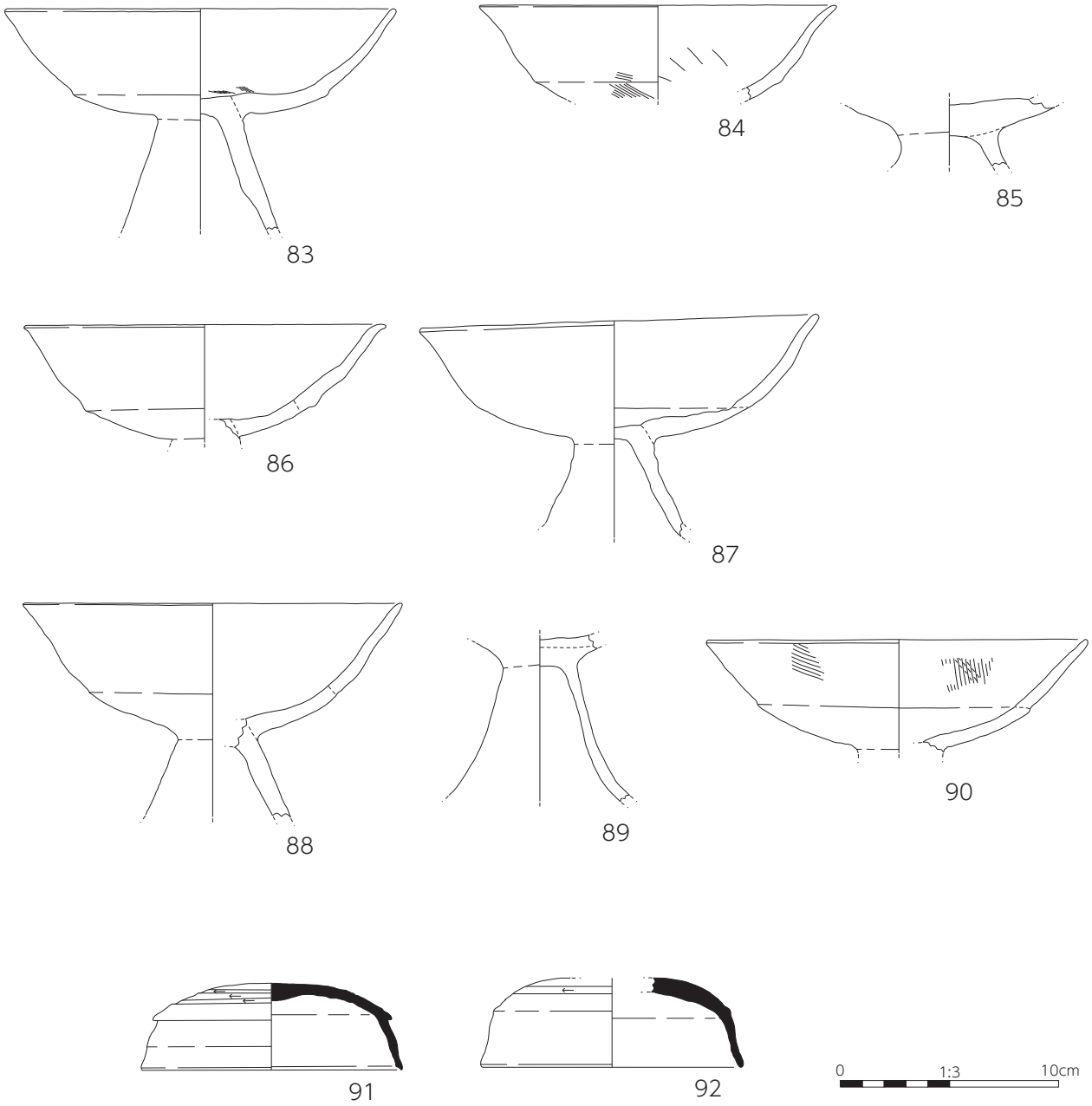
第 91 図　SZ09 遺構平面図



第 92 図　SZ09 主体痕跡実測図



第 93 図　SZ09 周溝内出土遺物実測図 1



第 94 図　SZ09 周溝内出土遺物実測図 2

面に入口を設けていることなどを考慮して囲形埴輪として扱うこととした。いずれにしても狭義の定義から離れる感は否めず、イレギュラー的なものと考える。

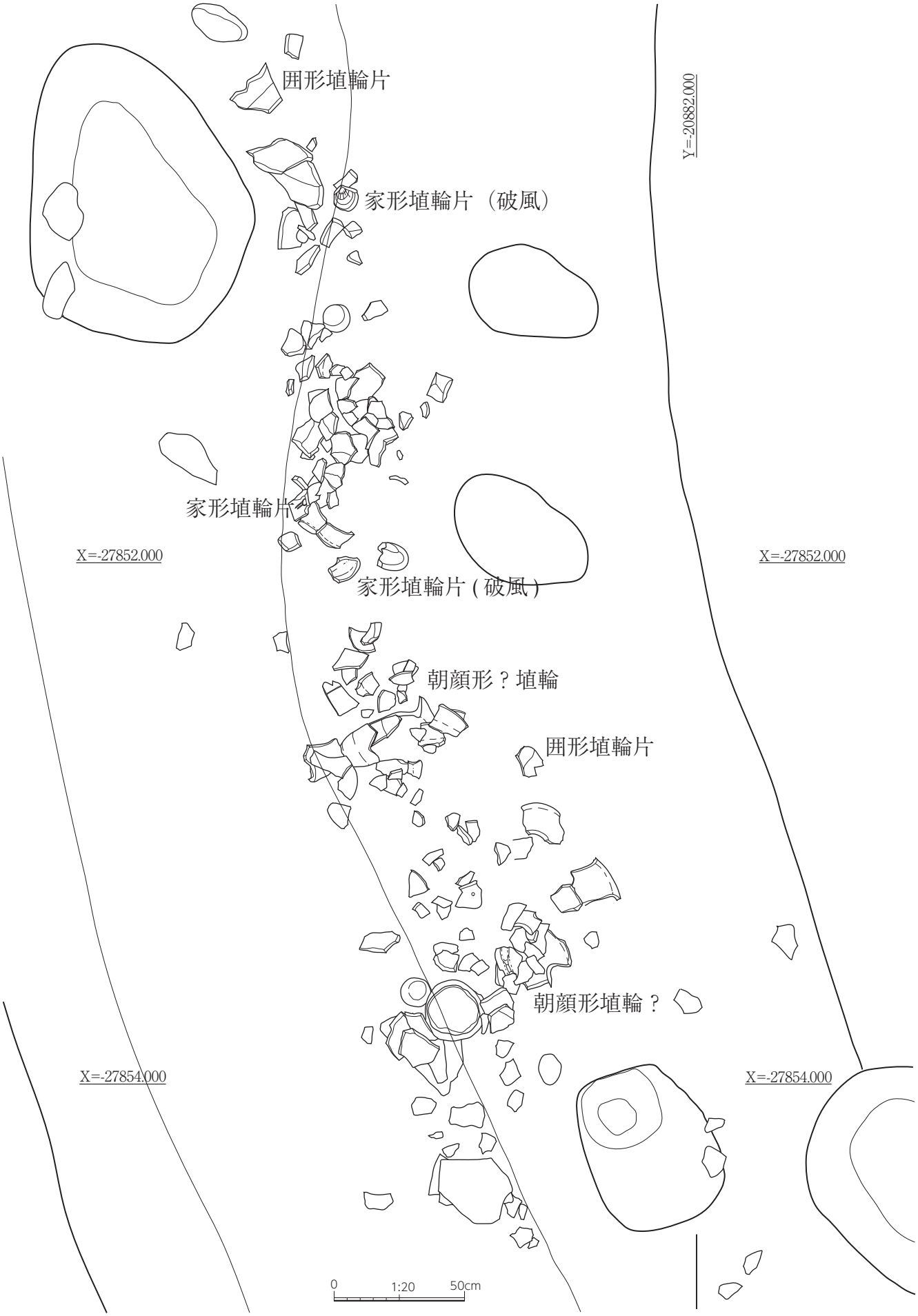
板状粘土により枠を形成し、上部に切り込みを入れていくことで尖った板壁状を形成する。完全に先端を尖らせるようなことをせず、先端付近には板状粘土であった痕跡をわずかに留めている。歪みが大きく、接合しても無理が生じやすく接合部で自壊する。他の囲形埴輪では壁板を留める部分の表現として突帯を巡らせるものがあるが、この例ではその代わりに沈線が周囲を巡る。

正面となる側には入口の表現となる透かしが設けられ、入口付近のみ沈線でさらに細かい板状の表現及び戸枠表現がなされる。

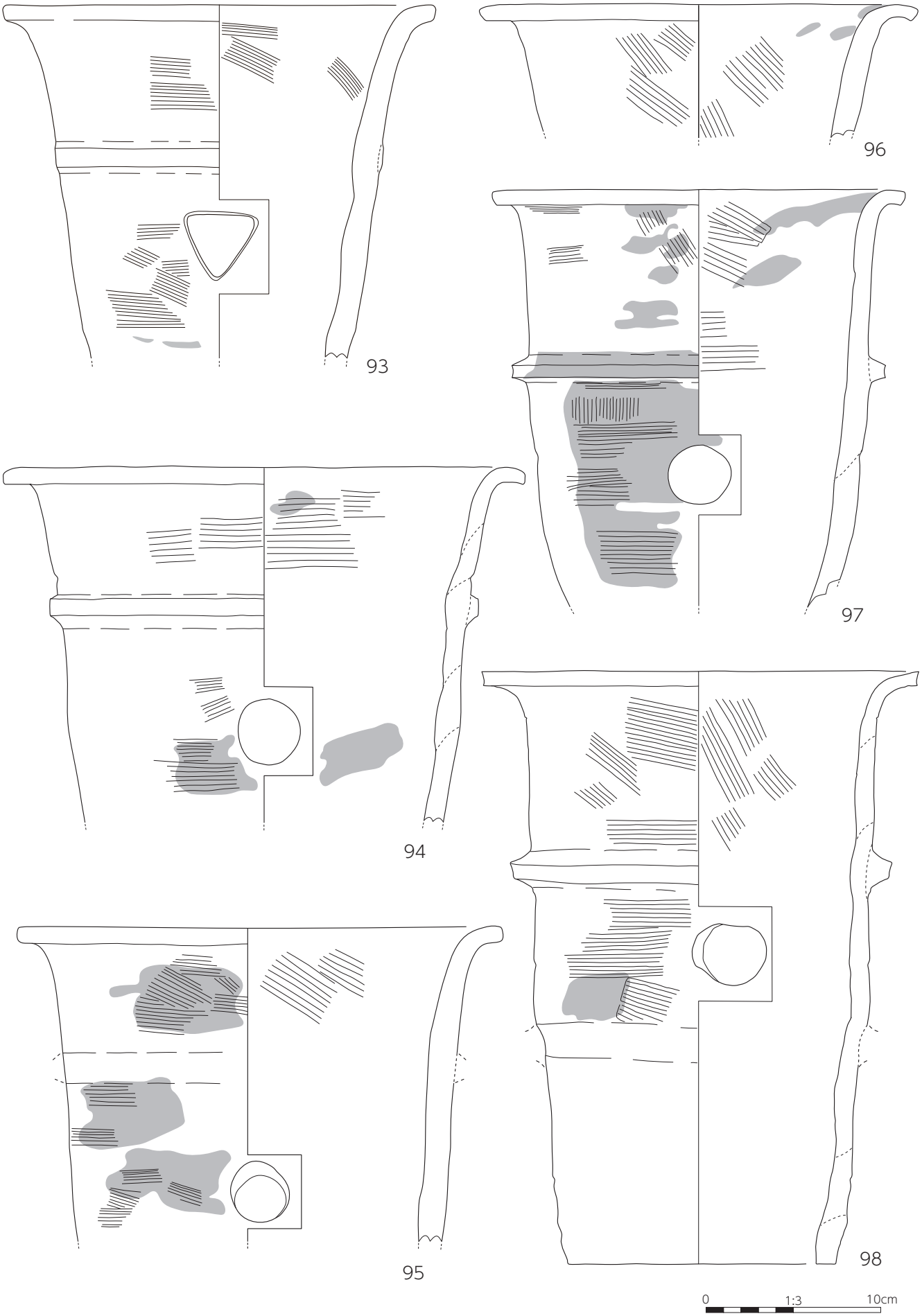
また、正面には家形埴輪と同じくコンパス文が装飾として表現されており、配置の間隔から最低３～最高５のコンパス文があったのではないかと考えられる。裏側は比較的良く残存しているがそうした表現は全く見られないため、正面となる入口のみに設けたものである。調整は横方向のハケ目を主体とし、全体的に赤彩された痕跡を認める。

（６）推定時期

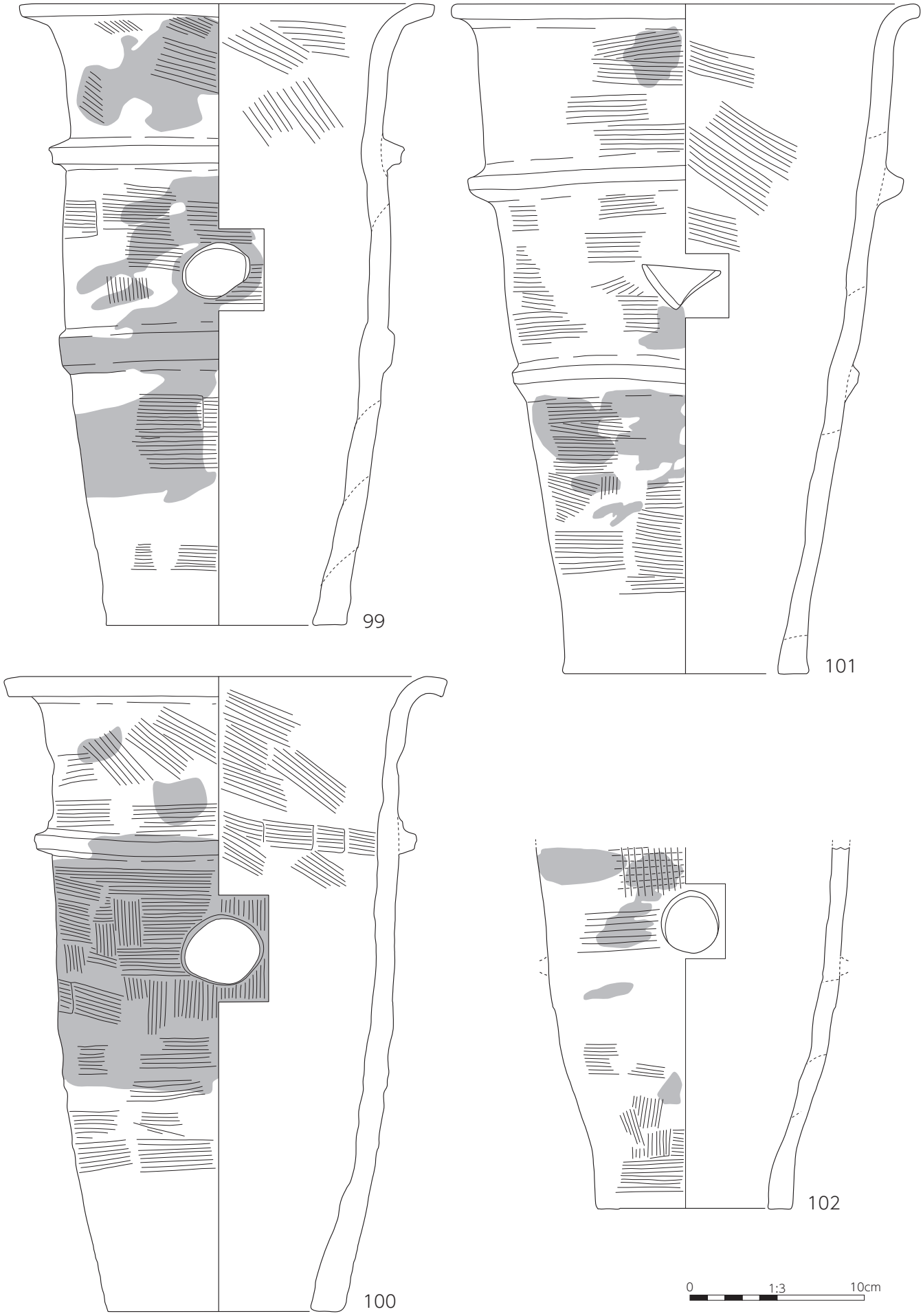
失われているが主体が石棺であることや埴輪の特徴から古墳時代中期、５世紀前半代を想定する。



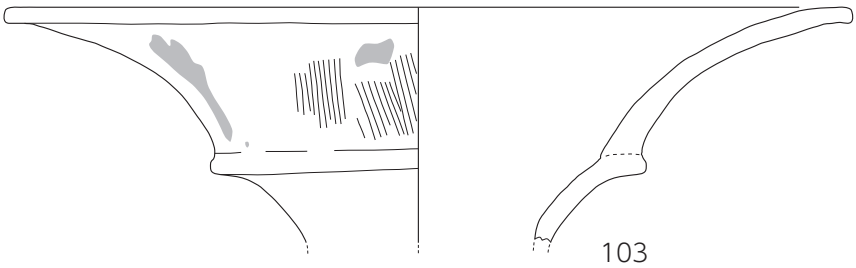
第 95 図　SZ09 周溝内埴輪出土状況実測図

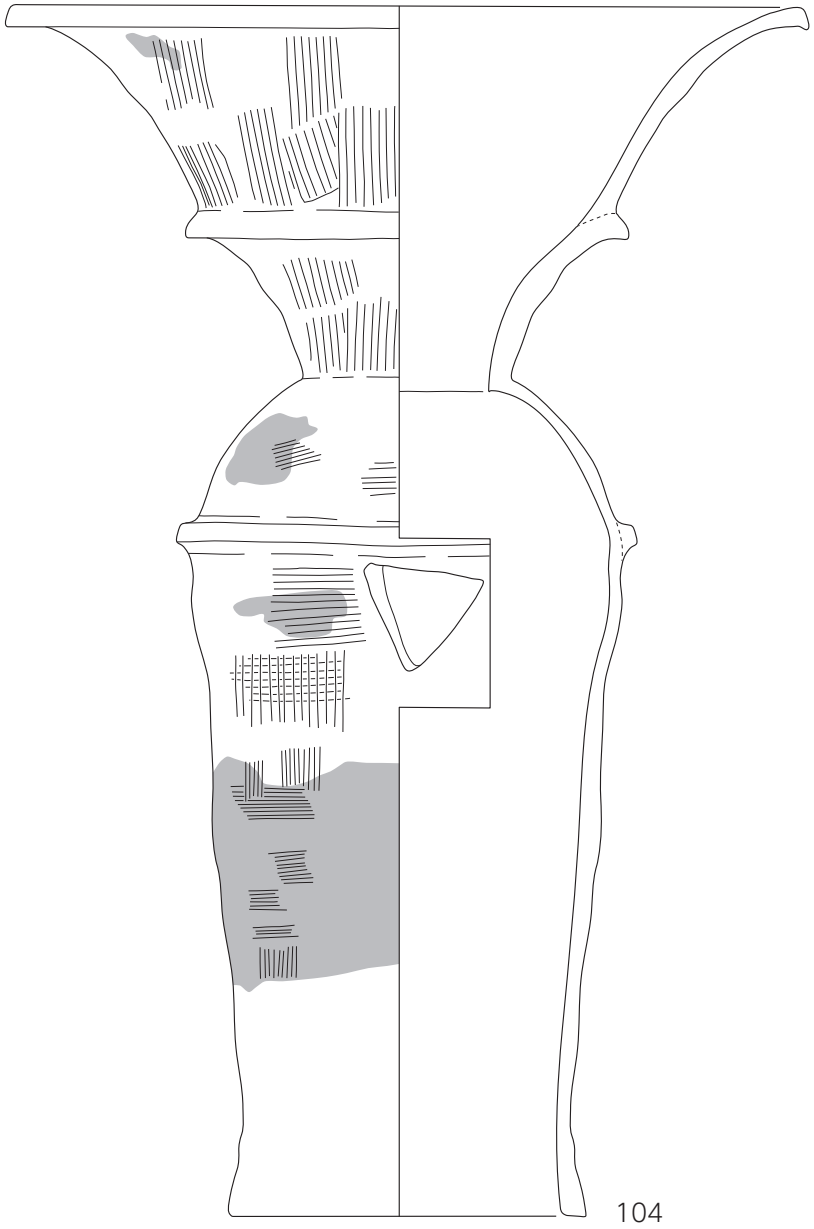


第 96 図　SZ09 周溝内出土円筒埴輪実測図 1

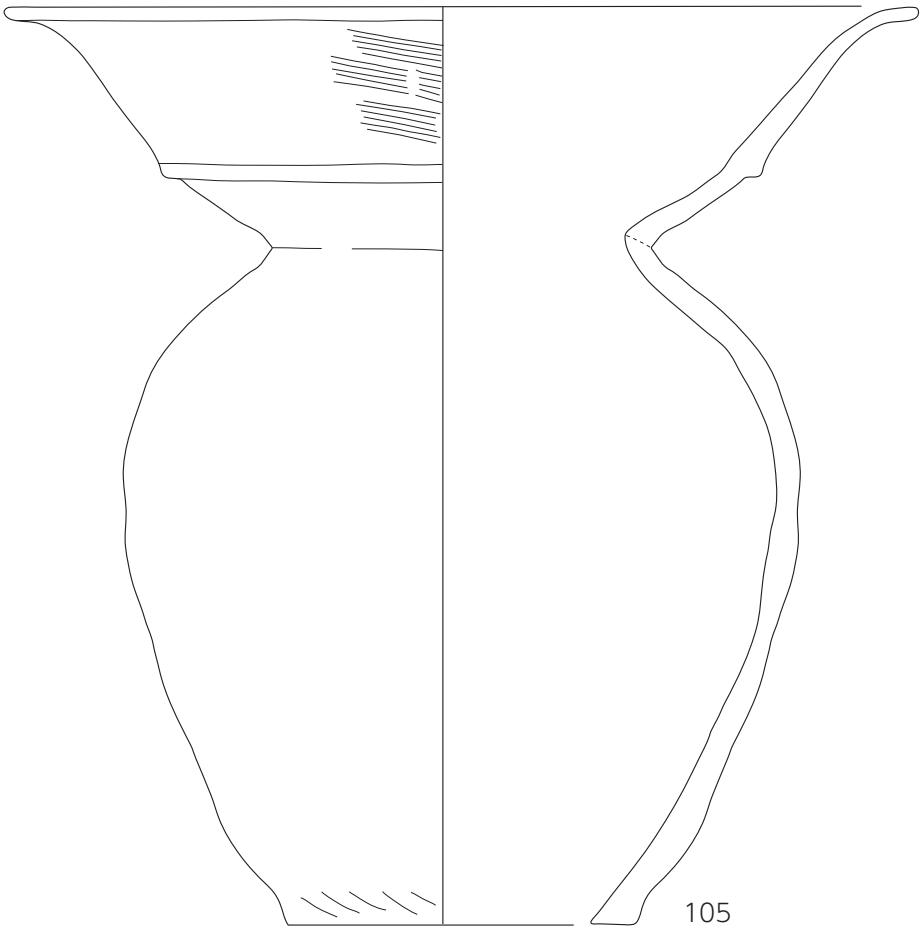


第 97 図　SZ09 周溝内出土円筒埴輪実測図 2

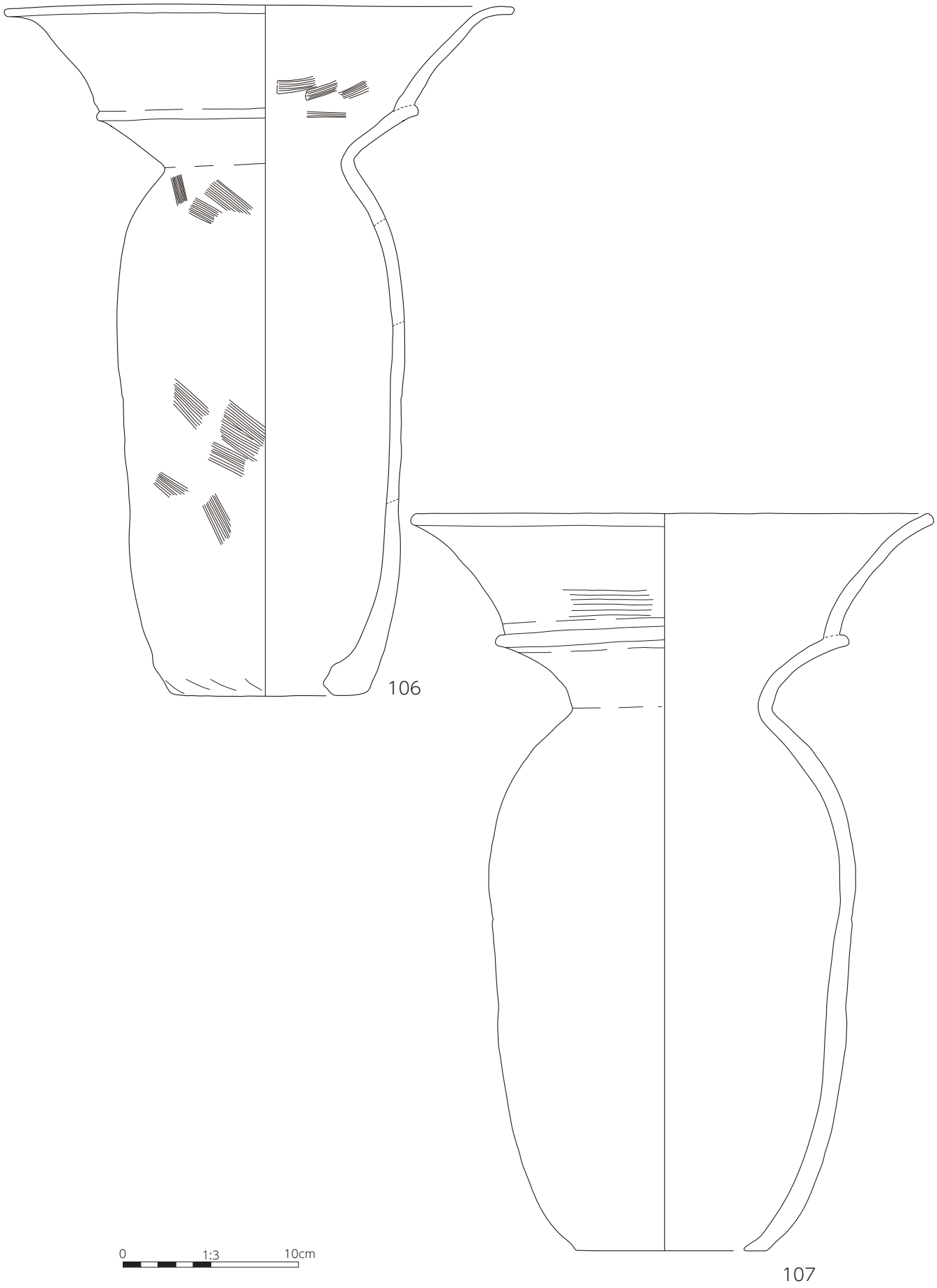




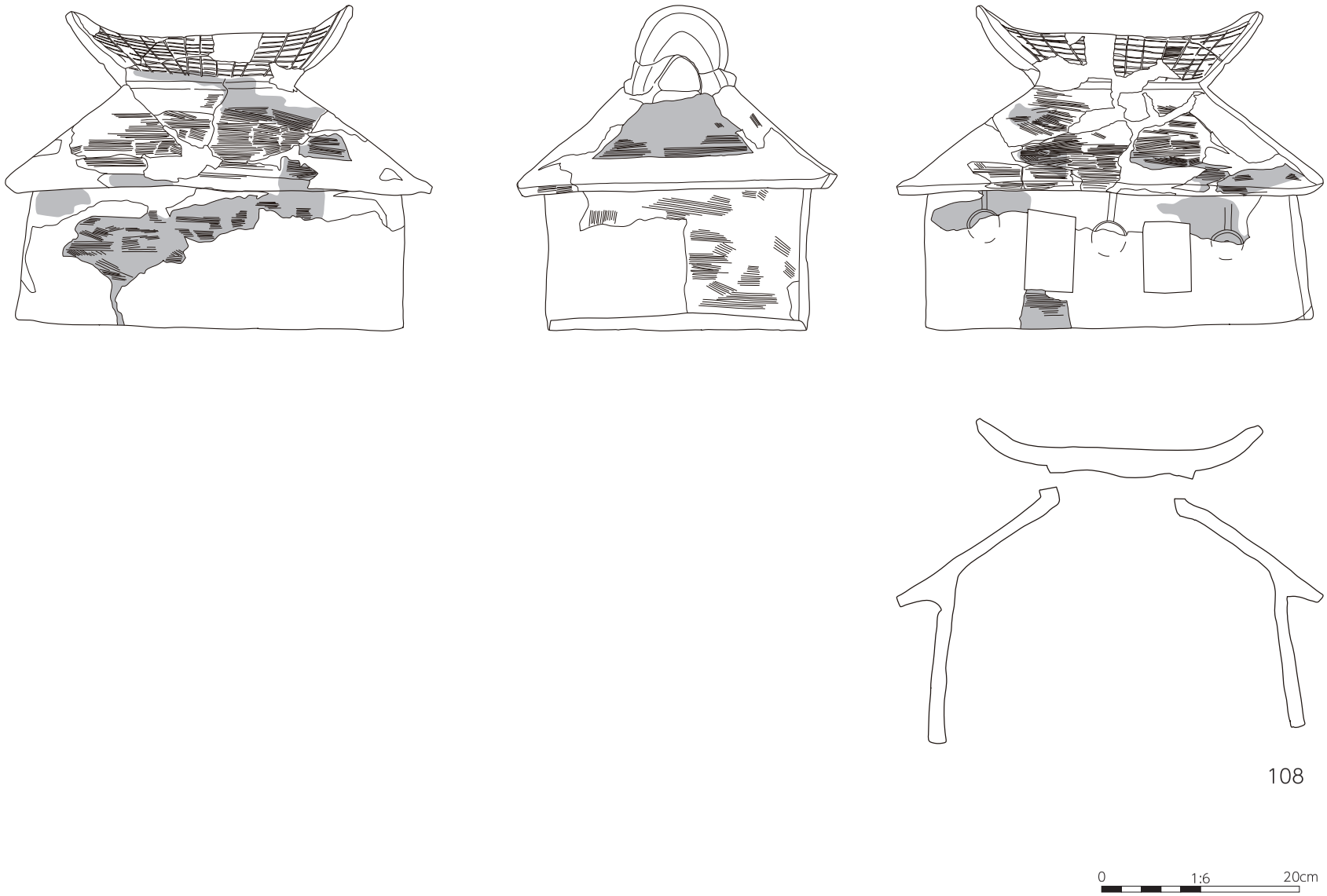
第 98 図　SZ09 周溝内出土朝顔形埴輪実測図



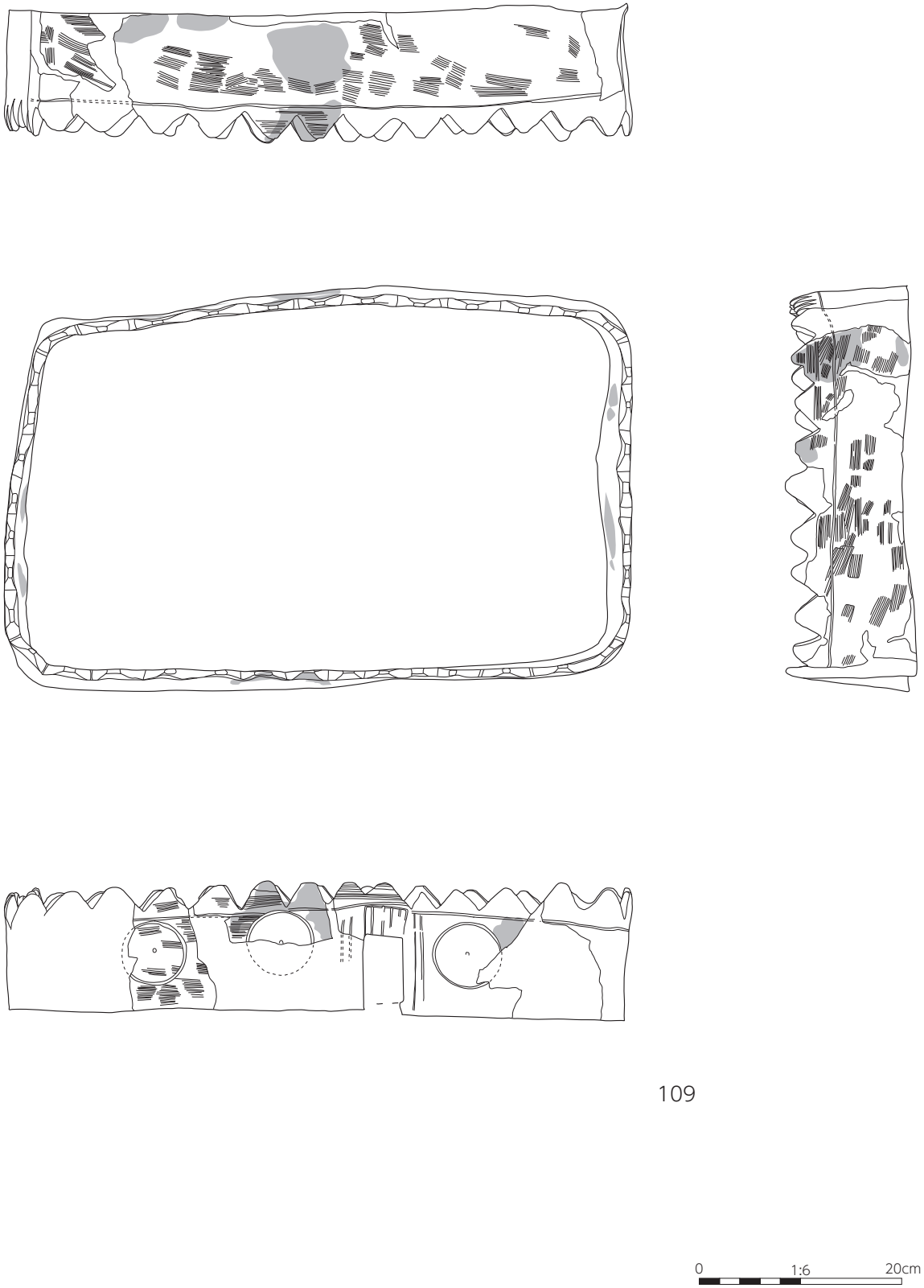
第 99 図　SZ09 周溝内出土壺形埴輪実測図 1



第 100 図　SZ09 周溝内出土壺形埴輪実測図 2



第 101 図　SZ09 周溝内出土家形埴輪実測図



第 102 図　SZ09 周溝内出土囲形埴輪実測図

第４節　土壙墓・木棺墓

１　古墳時代の土壙墓

塔ノ木遺跡において、古墳時代の土壙墓として取り扱うのは長方形の土壙に棺を安置するための墓壙を浅く掘るもので、その位置は土壙の中央付近にあるものとしている（嘉島町教育委員会 2018）。墓壙には棺を置いたと思われるが、明確に木棺設置の痕跡を認めるものもあり、掘り込みに限るものを狭義の土壙墓、掘り込みと木棺設置の痕跡を有するものを木棺墓として扱う。

２　土壙墓の分布

分布は１，２区、６，７区、上官塚古墳群４区に多く分布する。いくつかの集中区を持っており、ある程度かたまるように配置していたものと思われる。古墳の周溝内にも分布が見られ（第104 図）、塔ノ木遺跡における分布が土壙墓と古墳が明確に分布域を異としていた状況とは対照的である。

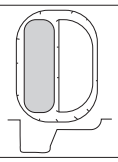
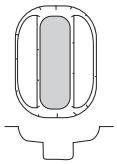
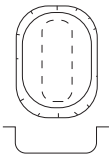
土壙墓が古墳に先行して配置され、後に古墳が築造されたものか、土壙墓中に副葬品を持たないものがほとんどであることから前後関係について論じることができず、今の時点では扱いを決めかねているが、前者ではないかと推測している。

３　土壙墓 B

土壙墓の幅は概ね 130cm 程度、長さは 210 ～ 240cm 程度の隅丸方形、若干方形に近い長楕円形とやや規格的である。土壙の中央付近を約 20~40cm 程度掘り下げて墓壙とする。墓壙の幅は 80cm 程度、長さは 190 ～ 210cm となる。墓壙の形状は長楕円形のものが多く、抹角方形のものは少ない。

ほとんどの場合、他の遺構と同じく掘り上がり時点の平面・断面図が書かれ、本来あるべき土層断面は無いためこれ以上の記述が難しい。

ただ、珍しく土層断面を記録したものを例に取ると、暗褐色の土層を基調とし、４層に区分されている。底面にたまった土はあまり混雑物を挟まない暗褐色土であるが、それより上の層は土壙掘り込み形成時の地山層となるニガシロ土を巻き込み、ブロック～粒状に多寡の差をもちながら堆積している。およそ上から一気に埋めることによって形成された様子が見て取れるが、混雑物を挟まない土を遺骸付近に被せる意図があったかについては、他の事例が鍵となるにも関わらず、ほとんどの場合それが確認できないのは残念である。

分類	様態	特徴
A	片袖	 埋葬主体が片側に寄る墓壙中段に台場のようなステップが主体の逆側に設けられる
B	中央	 埋葬主体が中央にある墓壙底部を平坦にした上で主体となる部分を作り出す
C	素掘り	 埋葬主体の位置が判然としない

第 103 図　土壙墓の区分

４　木棺墓

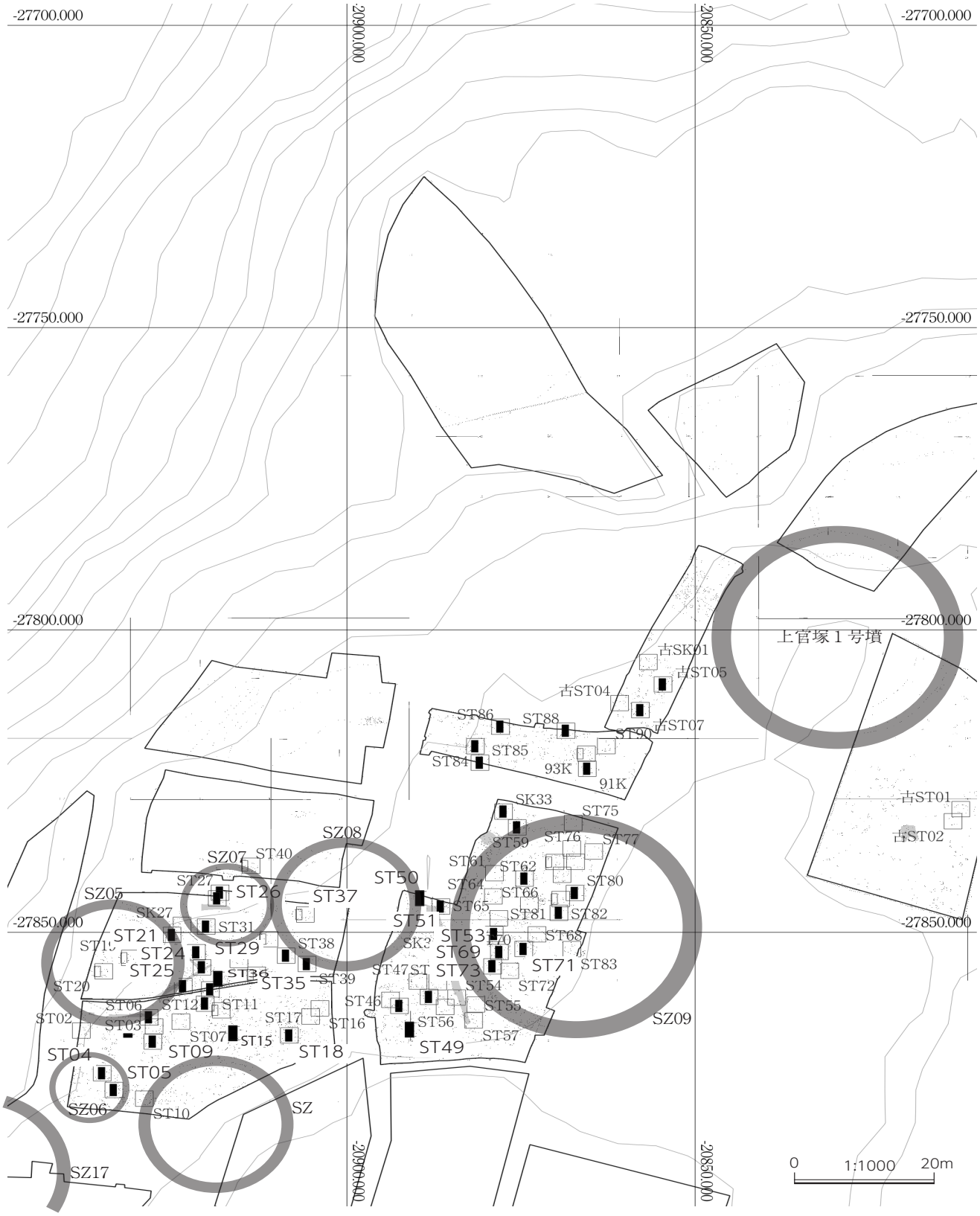
土壙墓と類似した形状のもので、木棺材を据えるための掘り方を有するものを木棺墓とした。

５　木棺墓の分布

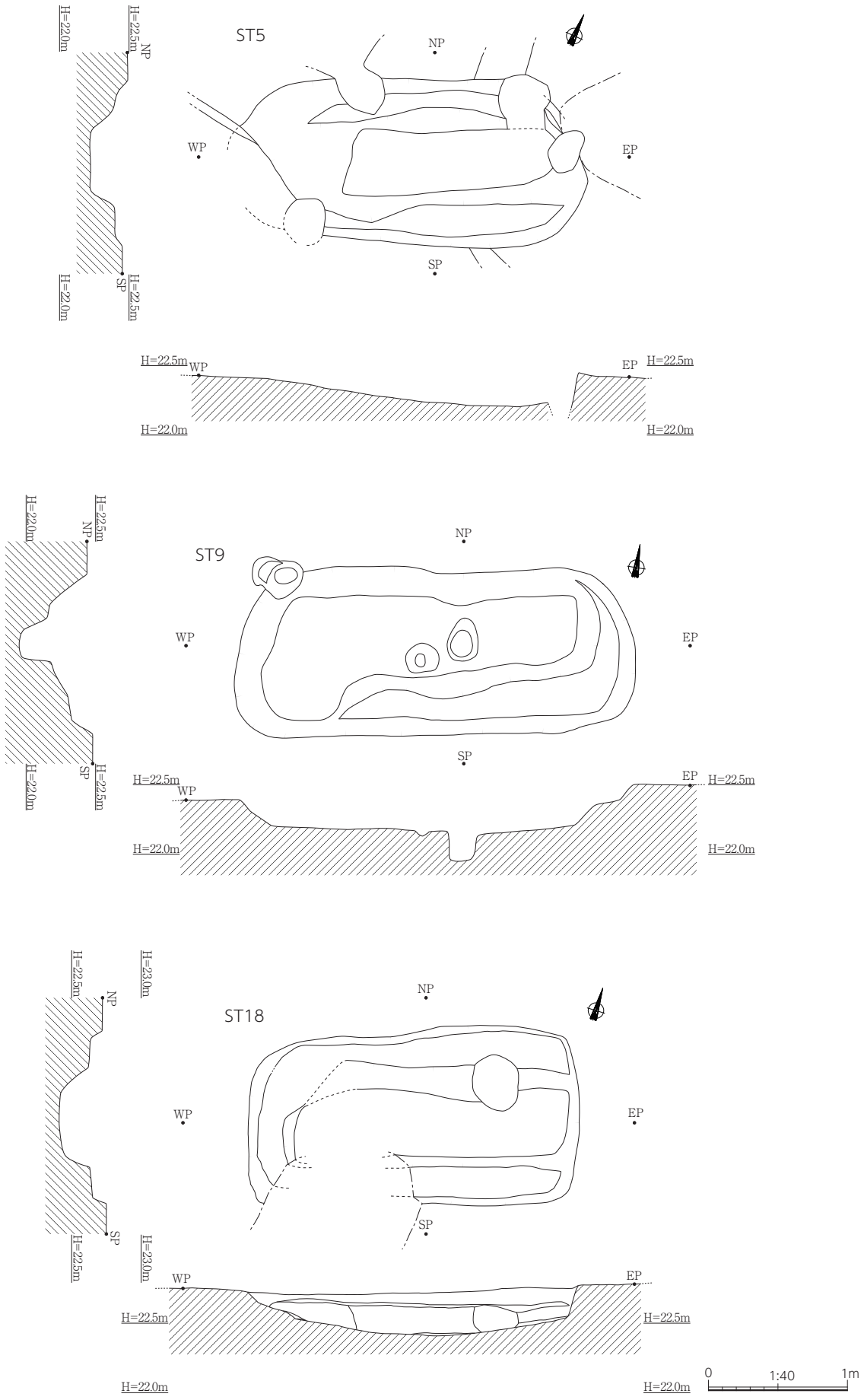
木棺墓だけで分布域を構成するものではなく、土壙墓とともにある形である。後述するが木棺墓の土壙形状は土壙墓のそれとほぼ一緒であるので、墓壙のあり方が木棺と掘り込みという差であり、バリエーションの中で捉えることもできよう。

６　木棺墓の特徴

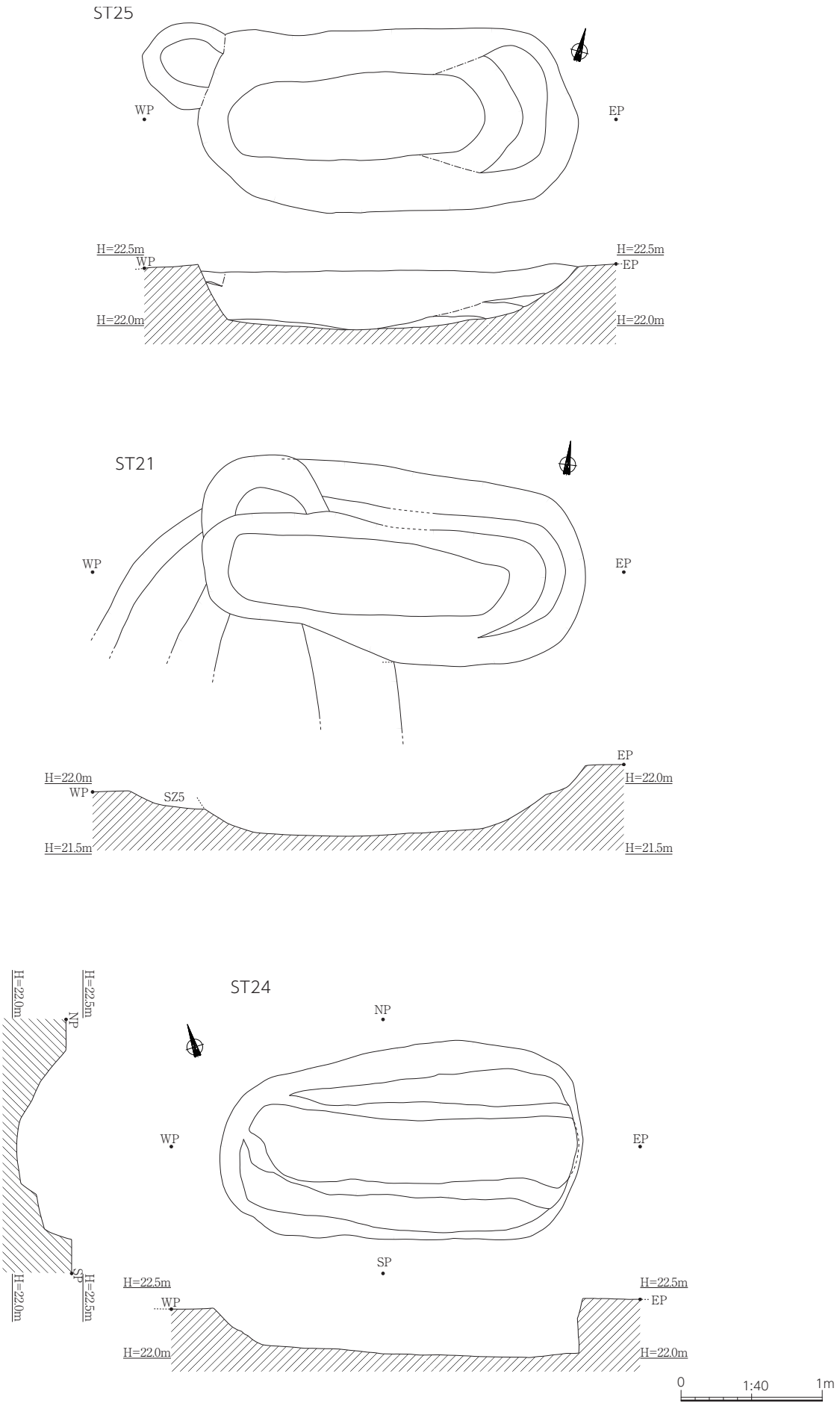
形状は土壙の長さ 180 ～ 248cm、幅 100 ～ 128 程度となり、土壙墓と大差が無い。中央部に浅い掘り込みを有し、その両端に細長い掘り方を有する。この対となる掘り方に板状の木材を立てたものと推定され、石棺墓と様子が似る。掘り方の幅は約 60cm、奥行き 20~40cm と長楕



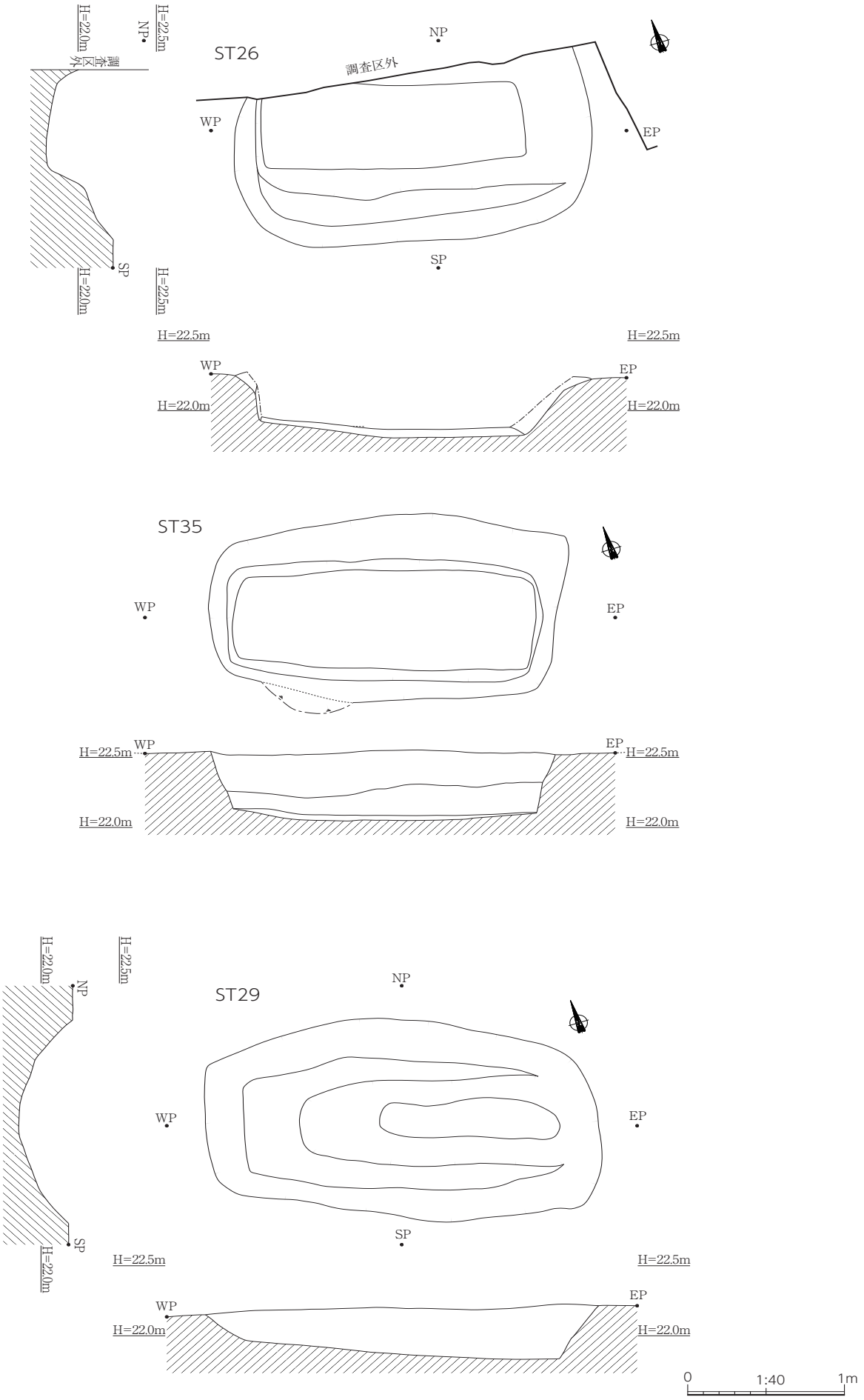
第 104 図　土壙墓の分布と古墳の位置



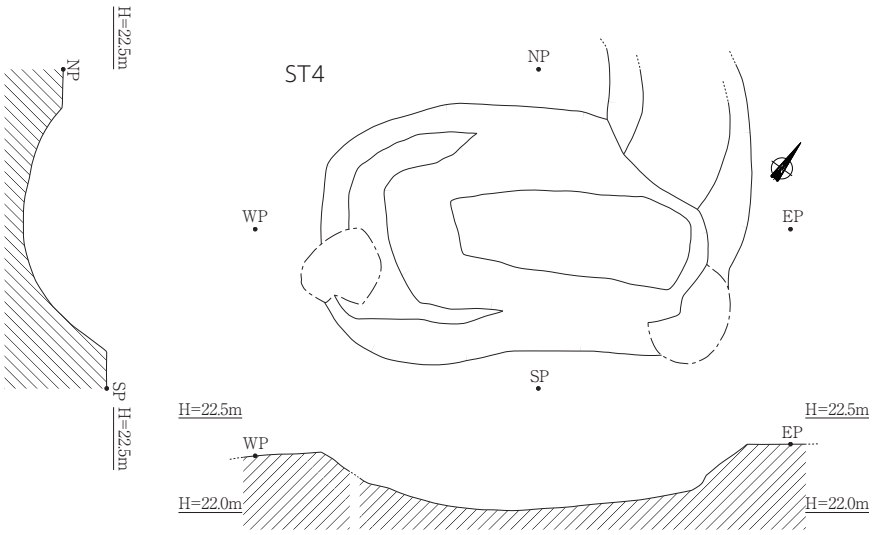
第 105 図　土壙墓実測図 1

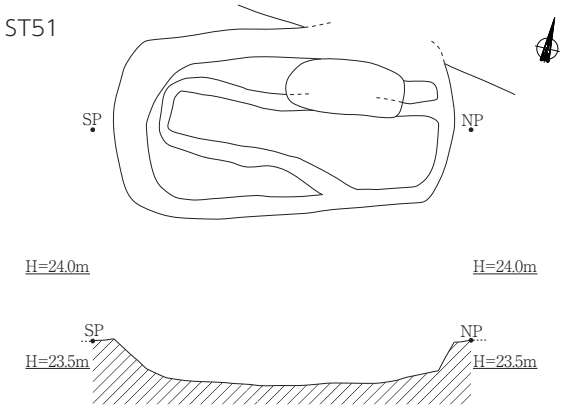


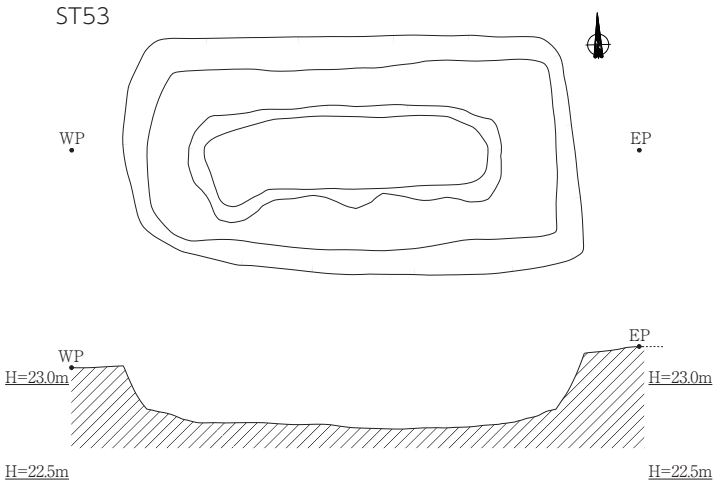
第 106 図　土壙墓実測図 2



第 107 図　土壙墓実測図 3

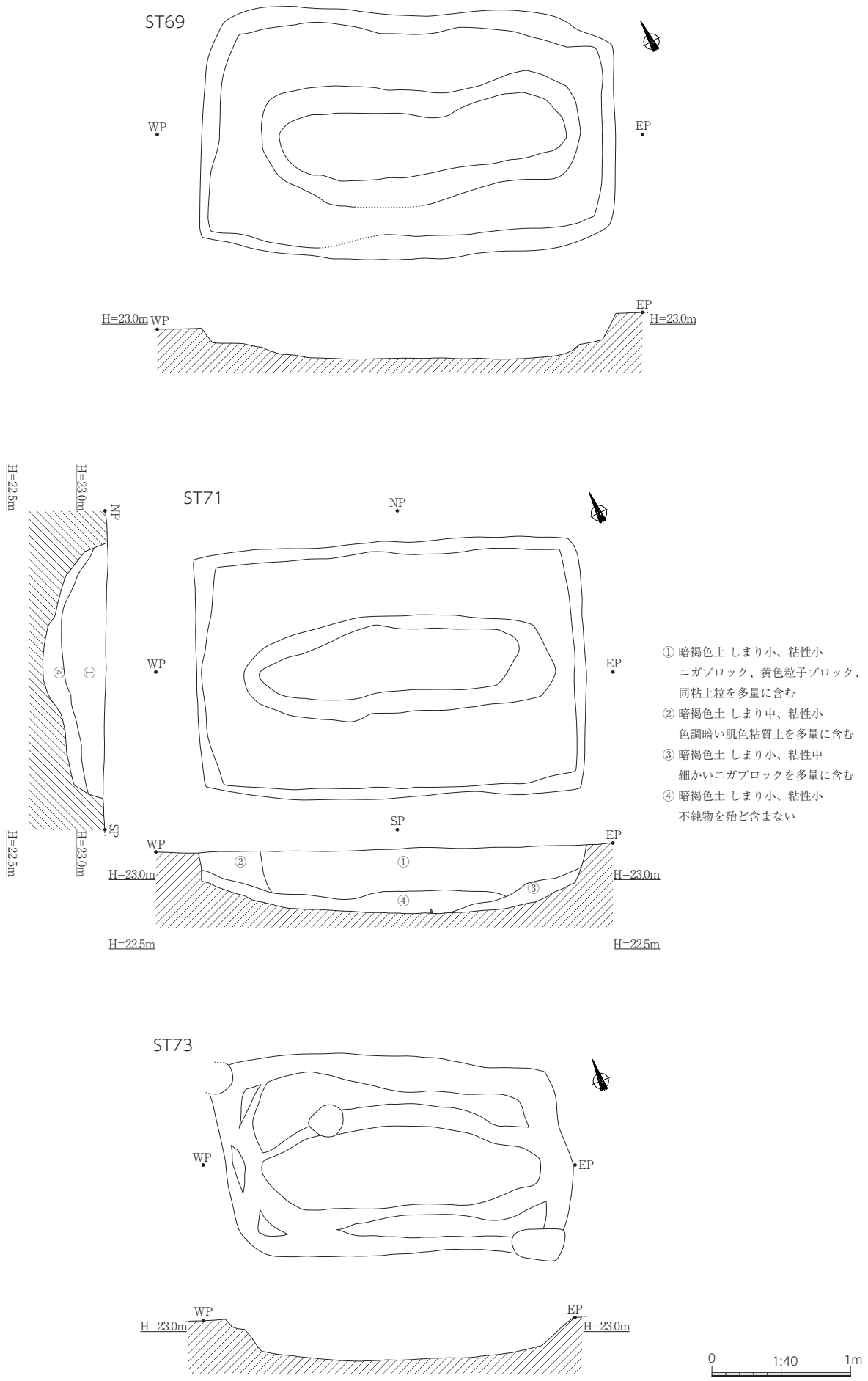




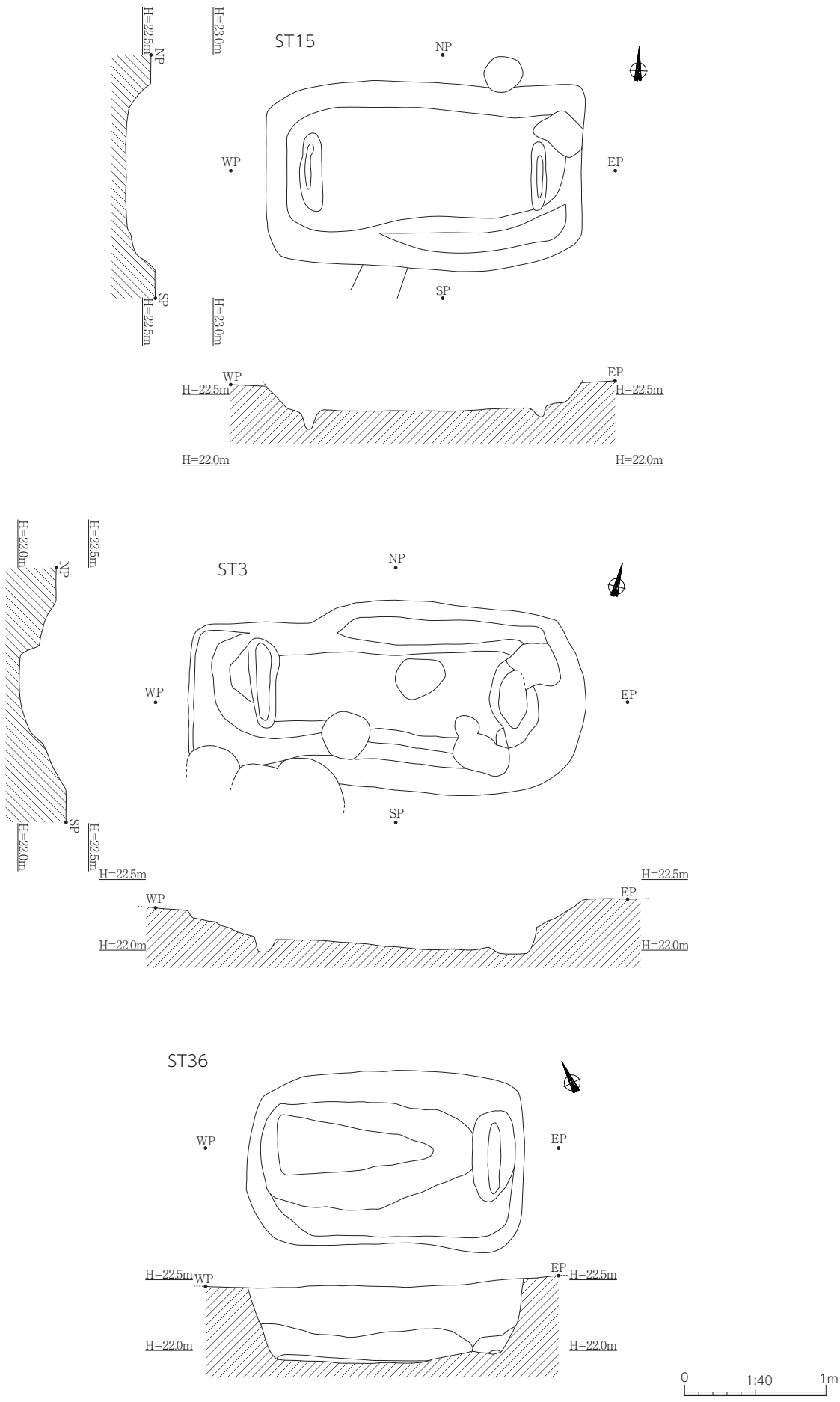


0 1:40 1m

第 108 図　土壙墓実測図 4



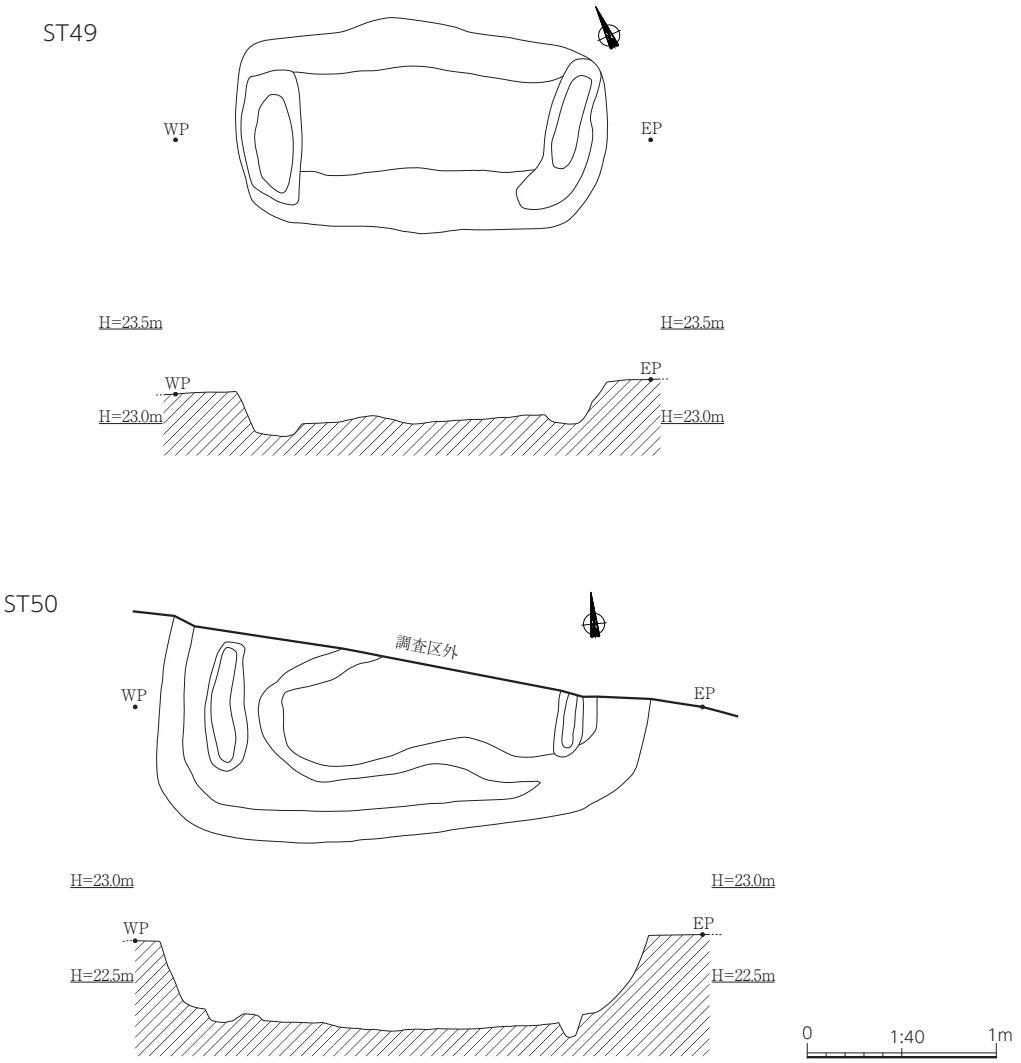
第 109 図　木棺墓実測図 1



第 110 図　木棺墓実測図 2

円形で、この掘り方の中心付近から対となる掘り方の中心付近との距離（想定板 - 板間）は 140cm ～ 160cm 後半である。これを大きく下回るものは存在せず、逆に大きく超えるものも存在しない。これは対象となる遺体に合わせて棺を作成し、サイズに合わせて墓壙が形成されたものと推定しており、必要以上に大きくすることで副葬品等をそのスペースに置くようなことはなかったことを示している。

また、長さ約 140cm の小型なものについては、成人ではなく年少者の可能性を指摘するが、推測の域を出ておらず、明言を避ける。



第 111 図　木棺墓実測図 3

第６表　上官塚１号墳周溝内出土遺物観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材(胎土)	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
42	2	SZ01		－	土師器	古墳	壺	口縁～胴部	(19.2)	27.0	－	長石、角閃石 赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ヘラケズリ	良好	外器面に煤付着
43	2	SZ01		－	土師器	古墳	坏	口縁～底部	(11.6)	5.2	－	長石、角閃石 赤色酸化粒	明黄褐 Hue10YR7/6	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	回転ナデ 手持ちヘラケズリ	回転ナデ	良好	
44	3	SZ01	Q16-11	－	須恵器	古墳	横瓶	口縁～底部	12.1	29.5	－	長石、角閃石	灰白 Hue2.5Y8/2	灰白 Hue2.5Y8/2	回転ナデ、指頭圧痕 格子目タタキ	回転ナデ 同心円文	良好	

第７表　SZ05 周溝内出土遺物観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材(胎土)	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
45	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	高坏	口縁～坏部	(20.7)	(6.5)	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	ナデ	ナデ	良好	
46	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	高坏	坏部	－	(2.7)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	ナデ	ナデ	良好	
47	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	高坏	坏部～底部	－	(12.7)	12.0	長石、石英、角閃石	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	
48	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	高坏	坏部	－	(4.2)	－	長石、石英 角閃石、赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	ナデ	ナデ	良好	
49	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	高坏	脚部～底部	－	(4.5)	13.4	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	ナデ	ナデ ヘラケズリ	良好	
50	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	高坏	脚部～底部	－	(7.8)	(15.8)	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ	ナデ ヘラケズリ	良好	
51	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	小型丸底壺	口縁～胴部	(8.8)	(7.2)	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR7/6	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	外器面に煤付着
52	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	小型丸底壺	頸部～底部	－	(6.4)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	
53	2	SZ05	P13-15	－	土師器	古墳	小型丸底壺	頸部	－	(2.1)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	
54	2	SZ05	P13-15	－	須恵器	古墳	横瓶	口縁～胴部	－	(17.8)	－	長石	灰白 Hue7.5Y7/1	灰 HueN6/	回転ナデ 平行タタキ	回転ナデ 同心円文	良好	

第８表　SZ08 周溝内出土遺物観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材(胎土)	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
55	2	SZ08	P14-07	－	土師器	古墳	高坏	口縁～底部	19.4	16.0	(15.6)	長石、角閃石 赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ	ナデ、回転ナデ ハケ目、工具痕 ヘラケズリ	良好	
56	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	高坏	口縁～底部	20.6	17.5	16.4	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR6/6	橙 Hue7.5YR6/6	ナデ ハケ目	ナデ、ヘラケズリ ハケ目	良好	
57	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	高坏	口縁～底部	(18.6)	(15.0)	15.7	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ ハケ目	回転ナデ ハケ目	良好	外器面に煤付着
58	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	高坏	口縁～坏部	(19.8)	(5.7)	－	角閃石、雲母	橙 Hue5YR6/6	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	回転ナデ ハケ目	回転ナデ ハケ目	良好	内、外器面に赤彩
59	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	高坏	口縁～坏部	(23.6)	(5.8)	－	角閃石、雲母 赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR6/6	回転ナデ ハケ目	回転ナデ ハケ目	良好	外器面に煤付着
60	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	高坏	脚部～底部	－	(9.0)	(15.2)	石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR6/8	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	良好	
61	2	SZ08	P14-07	－	土師器	古墳	高坏	脚部～底部	－	(8.2)	(15.6)	角閃石、雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	回転ナデ	ナデ、回転ナデ 指頭圧痕	良好	脚の先端部に煤付着
62	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	坏	口縁～底部	14.0	5.8	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい黄 Hue2.5Y6/4	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ 工具痕	良好	外器面にヘラ記号
63	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	坏	口縁～底部	11.9	5.5	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	内器面に赤彩 外器面に煤付着
64	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	坏	口縁～胴部	(12.8)	(4.8)	－	長石、石英 雲母、赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ	ナデ	良好	外器面にヘラ記号
65	2	SZ08	P14-12	－	須恵器	古墳	高坏	口縁～底部	16.7	13.0	10.8	長石、角閃石	オリーブ黒 Hue7.5Y3/2	オリーブ黒 Hue7.5Y3/1	回転ナデ	回転ナデ 波状文	良好	胴部につまみ細工2箇所、脚部に透かし窓3箇所、 内・外器面に自然釉
66	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	小型壺	口縁～胴部	12.5	(11.1)	－	角閃石、雲母	橙 Hue5YR6/8	灰黄褐 Hue10YR6/2	ナデ、回転ナデ ハケ目	ナデ、回転ナデ 指頭圧痕	良好	外器面を打ち欠いている 口縁の内器面に赤彩
67	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	小型壺	口縁～底部	12.9	17.6	－	長石、角閃石、雲母	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ ハケ目	回転ナデ ハケ目、指頭圧痕	良好	外器面に煤付着
68	2	SZ08	P14-12	－	土師器	古墳	小型壺	口縁～底部	11.1	14.1	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ、回転ナデ ハケ目	回転ナデ 指頭圧痕	良好	内、外器面に赤彩 胴部外器面に黒斑

第 9 表　SZ09 周溝内出土遺物観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材(胎土)	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
69	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	口縁～脚部	(17.0)	(12.1)	－	長石、角閃石 赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	灰黄褐 Hue10YR6/2	ナデ ハケ目	ナデ、ハケ目 ヘラケズリ	良好	
70	6	SZ09		－	土師器	古墳	高坏	口縁～坏部	(17.8)	(5.1)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ	良好	
71	6	SZ09	P14-14	1	土師器	古墳	高坏	坏部～脚部	－	(3.2)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue5YR6/4	にぶい橙 Hue5YR7/4	ナデ	ナデ、ハケ目 ヘラケズリ	良好	
72	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	坏部～脚部	－	(8.4)	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue2.5YR6/8	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	
73	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	口縁～底部	(20.8)	13.3	(13.8)	長石	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ	良好	胎土が精製されてない為器面が粗い
74	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	口縁～底部	(19.2)	13.5	(13.0)	長石	橙 Hue7.5YR7/6	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	ナデ	ナデ、ハケ目 ヘラケズリ	良好	口縁内器面に煤付着
75	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	坏部～底部	－	(12.8)	14.7	長石、石英 角閃石、赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	ナデ	ナデ、ハケ目 ヘラケズリ	良好	脚部内器面に煤付着
76	6	SZ09		－	土師器	古墳	高坏	坏部～底部	－	(8.6)	(11.8)	長石、石英 角閃石、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	
77	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	高坏	脚部～底部	－	(7.5)	(12.5)	長石、角閃石 赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ヘラケズリ	良好	
78	6	SZ09		1 2	土師器	古墳	高坏	口縁～底部	17.3	14.3	11.3	長石	明赤褐 Hue5YR5/6	暗灰黄 Hue2.5YR4/2	ナデ	ナデ ハケ目	良好	
79	6	SZ09	P14-09	－	土師器	古墳	高坏	口縁～坏部	15.6	(5.9)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	胎土が精製されてない為器面が粗い
80	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	坏部	－	(3.3)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue5YR7/3	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ ハケ目	良好	
81	6	SZ09		－	土師器	古墳	高坏	口縁～脚部	(16.8)	(11.8)	－	長石	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue2.5YR6/6	ナデ	ナデ	良好	胎土が精製されてない為器面が粗い
82	6	SZ09	P14-10	2	土師器	古墳	高坏	坏部～底部	－	(9.9)	12.3	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR7/8	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ ヘラケズリ	良好	
83	6	SZ09		－	土師器	古墳	高坏	口縁～脚部	(18.0)	(10.2)	－	長石	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ ハケ目	良好	
84	6	SZ09	P14-09	－	土師器	古墳	高坏	口縁～坏部	(16.3)	(4.3)	－	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	回転ナデ ハケ目	回転ナデ 工具痕	良好	
85	6	SZ09	P14-14	1	土師器	古墳	高坏	坏部～脚部	－	(3.1)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue2.5YR6/8	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	
86	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	口縁～坏部	(16.6)	(5.2)	－	長石、角閃石 赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	橙 Hue7.5YR7/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	口縁外器面に煤付着
87	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	口縁～脚部	(18.8)	(10.2)	－	長石	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/8	ナデ	ナデ	良好	胎土が精製されてない為器面が粗い
88	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	高坏	口縁～脚部	17.4	(9.8)	－	長石、角閃石 砂粒、赤色酸化粒	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/8	ナデ	ナデ	良好	胎土が精製されてない為器面が粗い
89	6	SZ09		1	土師器	古墳	高坏	坏部～脚部	－	(7.6)	－	長石、角閃石 赤色酸化粒	橙 Hue5YR7/8	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ	ナデ ハケ目	良好	粘土貼り付け痕
90	6	SZ09		2	土師器	古墳	高坏	口縁～坏部	(17.5)	(5.2)	－	長石、角閃石 赤色酸化粒	橙 Hue2.5YR6/8	橙 Hue2.5YR6/8	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	
91	6	SZ09		－	須恵器	古墳	坏蓋	天井部～口縁	(12.0)	4.0	－	長石 赤色酸化粒	灰 HueN5/	暗青灰 Hue5B4/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	
92	6	SZ09	P14-15	－	須恵器	古墳	坏蓋	天井部～口縁	(12.0)	(4.1)	－	長石、角閃石	灰 Hue10Y5/1	灰 Hue10Y6/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	

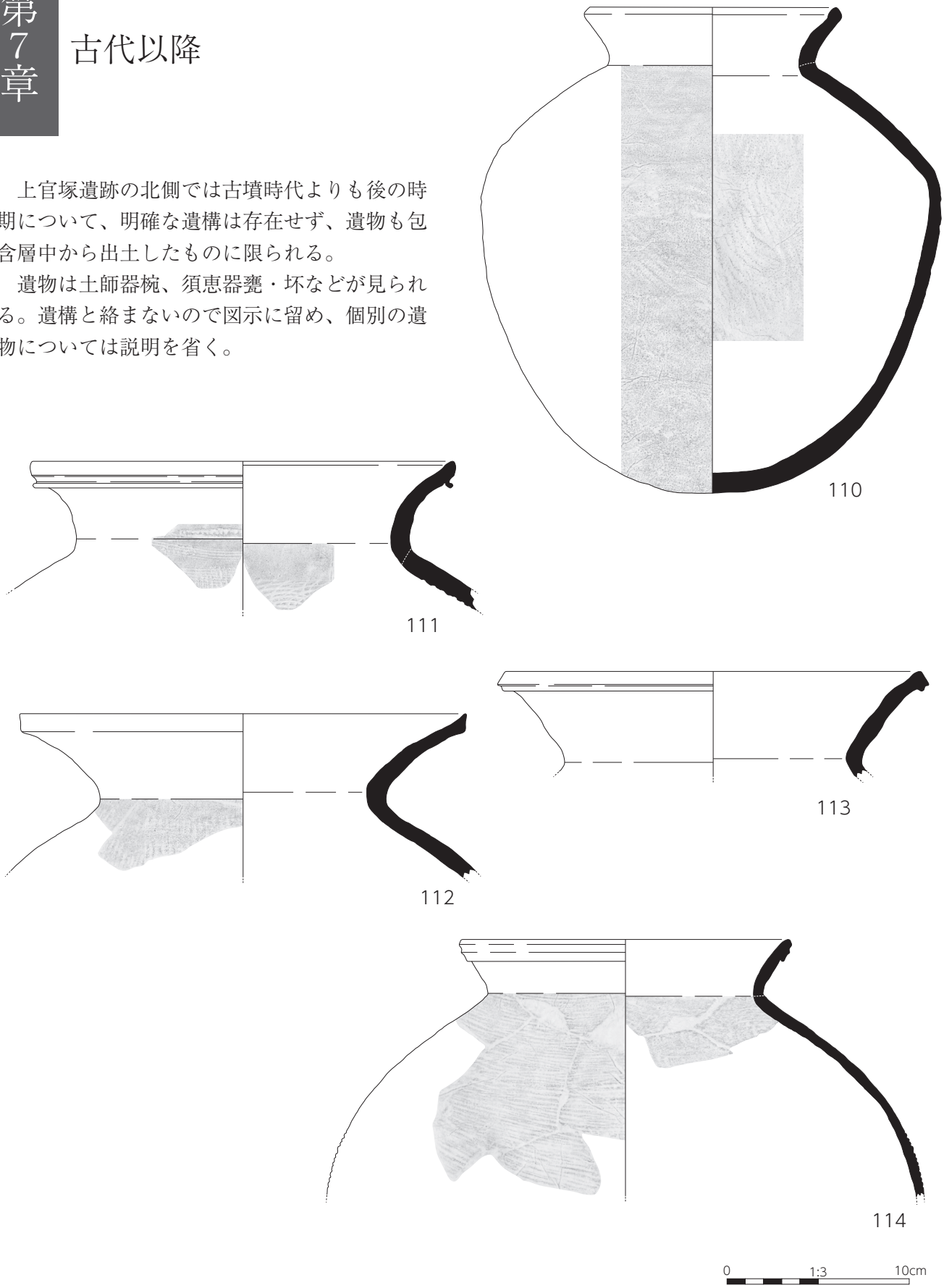
第 10 表　SZ09 周溝内出土埴輪観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材(胎土)	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
93	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～胴部	(24.8)	(20.2)	－	長石、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue5YR7/4	にぶい橙 Hue5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に突帯1条、逆三角透かし窓1ヶ 外器面に赤彩あり
94	6	SZ09	－	2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～胴部	(29.9)	(20.3)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に突帯1条、透かし窓1ヶ 口縁上面に黒斑あり、外器面に赤彩あり
95	6	SZ09	－	2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～胴部	(27.7)	(18.0)	－	長石、雲母 赤色酸化粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/3	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に突帯1条、透かし窓1ヶ 外器面に赤彩あり
96	6	SZ09	－	埋 2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～胴部	25.1	(7.6)	－	長石、雲母 赤色酸化粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	口縁上面に黒斑あり 口縁上面から内器面に赤彩あり
97	6	SZ09	P14-20	2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～胴部	(23.5)	(23.9)	－	角閃石、雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に突帯1条、透かし窓1ヶ 外器面口縁から胴部にかけて黒斑あり 内、外器面に赤彩あり
98	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～底部	25.0	33.9	(15.4)	長石、雲母	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に突帯2条、透かし窓2ヶ 口縁上面に黒斑あり、外器面に赤彩あり
99	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～底部	23.8	35.7	13.9	長石、雲母	明褐灰 Hue7.5YR7/2	橙 Hue5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に突帯2条、透かし窓3ヶ 外器面に黒斑あり、外器面に赤彩あり
100	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～底部	25.4	36.4	14.4	長石、角閃石 赤色酸化粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	橙 Hue5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に突帯1条、透かし窓3ヶ 外器面に赤彩あり
101	6	SZ09	－	2	土師器	古墳	円筒埴輪	口縁～底部	26.9	38.4	(14.0)	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue5YR7/4	橙 Hue5YR7/8	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部に突帯2条、逆三角透かし窓3ヶ 外器面胴部に黒斑あり、外器面に赤彩あり
102	6	SZ09	P14-09	－	土師器	古墳	円筒埴輪	胴部～底部	－	(20.7)	(11.3)	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ	良好	胴部に突帯1条、透かし窓2ヶ 外器面に赤彩あり
103	6	SZ09	P14-14	1	土師器	古墳	朝顔形埴輪	口縁～頸部	33.5	(9.5)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ ハケ目	ナデ	良好	口縁の端部から内器面にかけて黒斑あり 外器面に赤彩あり
104	6	SZ09	－	埋 2	土師器	古墳	朝顔形埴輪	口縁～底部	31.9	47.9	14.1	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒	にぶい橙 Hue5YR7/4	橙 Hue5YR6/6	ナデ ハケ目	ナデ	良好	胴部に突帯1条、逆三角透かし窓3ヶ 外器面に赤彩あり
105	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	壺形埴輪	口縁～底部	(36.0)	36.5	14.1	長石、角閃石、雲母	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/8	ナデ、ハケ目 工具痕	ナデ	良好	
106	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	壺形埴輪	口縁～底部	(29.0)	39.2	11.2	長石、角閃石、雲母	明赤褐 Hue2.5YR5/6	赤橙 Hue10R6/6	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	
107	6	SZ09	P14-14	2	土師器	古墳	壺形埴輪	口縁～底部	29.8	42.2	11.0	長石、石英、雲母	橙 Hue2.5YR6/8	橙 Hue5YR6/6	ナデ ハケ目	ナデ	良好	口縁から内器面にかけて黒斑あり
108	6	SZ09	－	－	土師器	古墳	家形埴輪	－	最大幅 (43.2)	(32.8)	厚み (32.4)	長石、雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 Hue5YR7/4	にぶい橙 Hue5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ	良好	外器面に赤彩あり
109	6	SZ09	－	－	土師器	古墳	囲形埴輪	－	横幅 (62.0)	最大器高 (13.8)	縦幅 (40.0)	長石、雲母	にぶい橙 Hue5YR7/4	にぶい橙 Hue5YR7/4	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	良好	内、外器面に赤彩あり

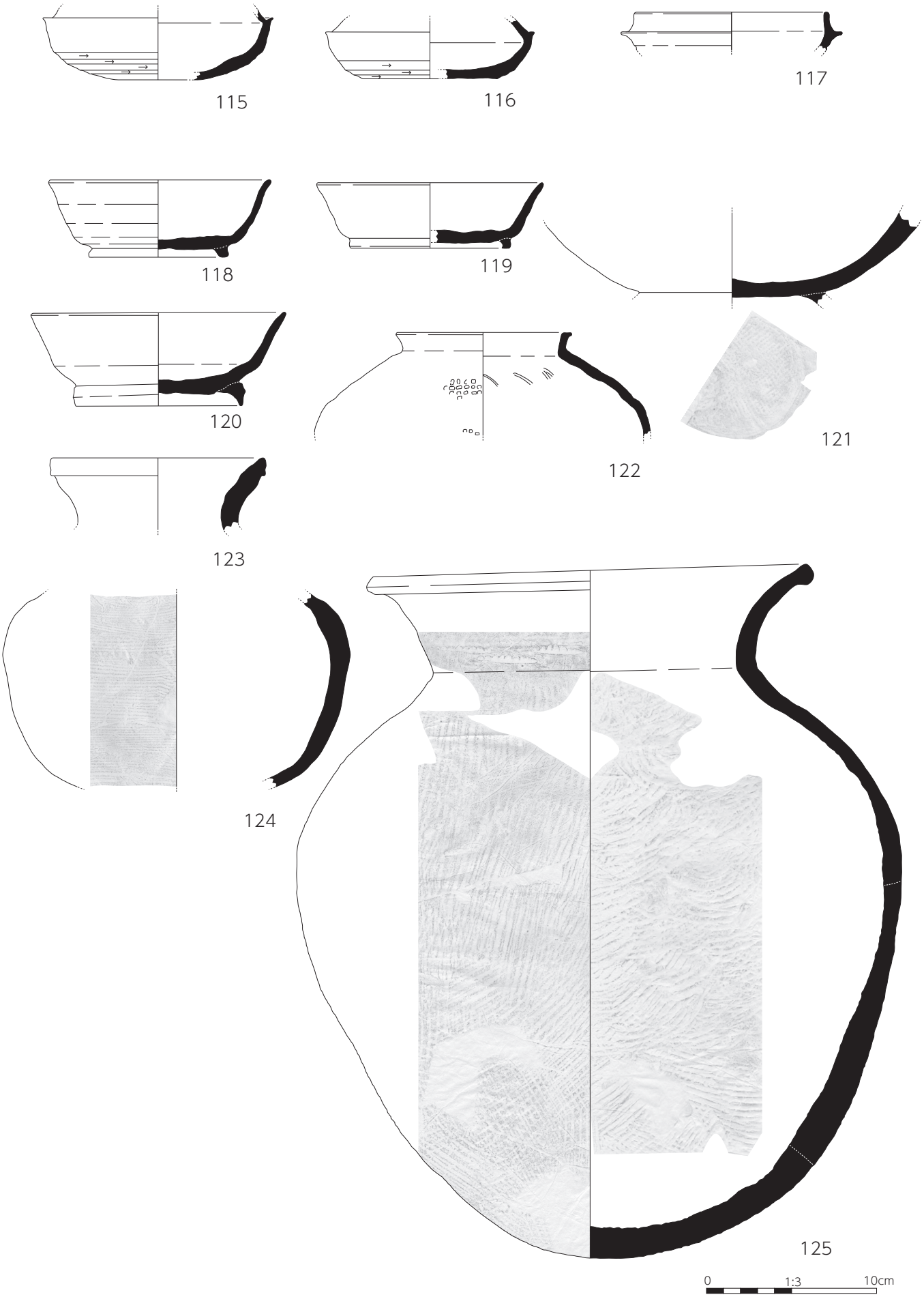
第7章 古代以降

上官塚遺跡の北側では古墳時代よりも後の時期について、明確な遺構は存在せず、遺物も包含層中から出土したものに限られる。

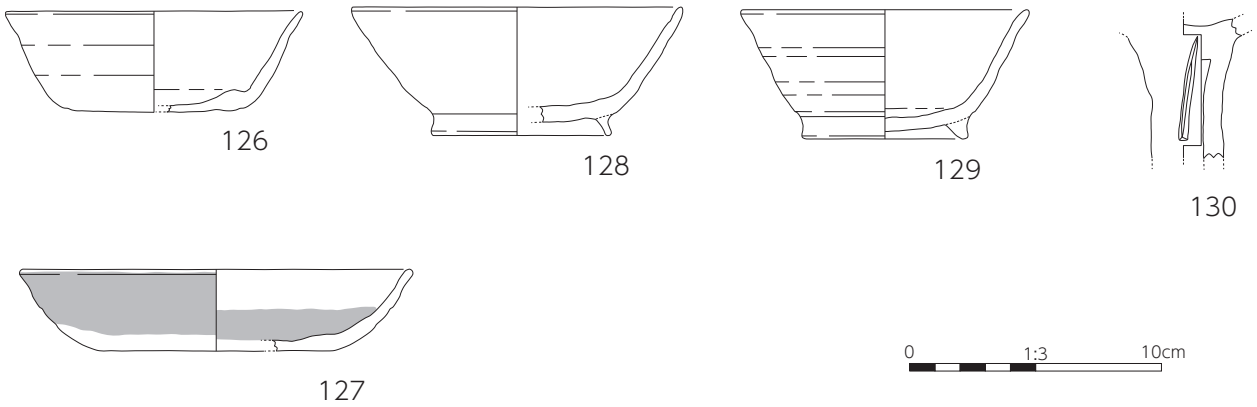
遺物は土師器椀、須恵器甕・坏などが見られる。遺構と絡まないので図示に留め、個別の遺物については説明を省く。



第112図　包含層出土遺物実測図



第 113 図　包含層出土遺物実測図



第 114 図　包含層出土遺物実測図

第 11 表　古代以降出土遺物（包含層）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材(胎土)	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
110	1		P13-20	－	須恵器	古代	壺	口縁～底部	14.1	26.7	－	長石、石英 赤色酸化粒	明黄褐 Hue2.5Y7/6	明黄褐 Hue2.5Y7/6	回転ナデ 平行タタキ	回転ナデ 同心円文	良好	
111	1	一括		－	須恵器	古代	甕	口縁～頸部	(23.4)	(8.1)	－	長石、角閃石 赤色酸化粒	灰白 Hue10Y7/1	灰白 Hue10Y7/1	回転ナデ、ハケメ 格子目タタキ	回転ナデ 同心円文	良好	口縁に沈線1条
112	1		P13-19	－	須恵器	古代	甕	口縁～頸部	(24.5)	(8.9)	－	長石、石英 赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ 平行タタキ	回転ナデ	良好	
113	1		P13-19	－	須恵器	古代	甕	口縁～頸部	(23.6)	(5.8)	－	長石、雲母	灰 HueN6/	灰 HueN6/	回転ナデ	回転ナデ	良好	内、外器面に自然釉
114	1		P13-20	－	須恵器	古墳	壺	口縁～頸部	(18.2)	(14.0)	－	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	回転ナデ 平行タタキ	回転ナデ 青海波文	良好	
115	6	SZ09	P14-14	－	須恵器	古墳	坏身	頸部～底部	－	(4.2)	(5.0)	長石	灰白 HueN5/	灰白 HueN5/	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	
116	6		P14-20	－	須恵器	古墳	坏身	頸部～底部	－	(3.4)	(7.8)	長石	灰 HueN6/0	灰 Hue7.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	良好	
117	1		P13-25	－	須恵器	古墳	坏身	口縁	11.4	(2.3)	－	長石	黄灰 Hue2.5Y4/1	褐灰 Hue5YR4/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	
118	4		Q15-13	－	須恵器	古代	高台付坏	口縁～底部	(13.0)	4.5	8.2	長石、角閃石 赤色酸化粒	明青灰 Hue5BG7/1	明緑灰 Hue10G7/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	
119	3	SZ01	Q16-11	－	須恵器	古代	高台付坏	口縁～底部	(13.2)	3.8	(9.2)	石英、角閃石 赤色酸化粒	暗青灰 Hue10BG4/1	青灰 Hue10BG6/1	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	良好	
120	2		P14-07	－	須恵器	古代	高台付坏	口縁～底部	(14.8)	5.4	9.7	長石	暗青灰 Hue10BG4/1	青灰 Hue10BG6/1	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	良好	
121	4		Q15-16	－	須恵器	古墳	高台付壺	胴部～底部	－	(5.3)	－	長石、角閃石	灰オリーブ Hue7.5Y5/1	オリーブ灰 Hue2.5GY6/1	回転ナデ 平行タタキ	回転ナデ ヘラケズリ	良好	内底面、外器面に自然釉
122	3	一括		－	須恵器	古墳	短頸壺	口縁～胴部	10.3	(6.0)	－	長石、角閃石	灰 HueN4/	灰 HueN6/	回転ナデ 格子目文	回転ナデ 同心円文	良好	
123	3	SZ01	Q16-11	－	須恵器	古墳	壺	口縁	(12.5)	(4.2)	－	長石、石英 雲母、赤色酸化粒	灰白 Hue2.5Y8/2	灰白 Hue2.5Y8/2	回転ナデ	回転ナデ	良好	
124	2	SZ05	P13-15	－	須恵器	古墳	壺	胴部	－	(11.2)	－	長石、雲母	灰 Hue5Y5/1	灰 Hue5Y5/1	カキ目	回転ナデ	良好	
125	1	SZ05	P13-19	－	須恵器	古代	甕	口縁～底部	26.0	40.5	－	長石	灰 HueN5/0	灰 HueN5/0	ナデ 平行タタキ	ナデ、平行タタキ 同心円文	良好	
126	3		Q15-15	－	土師器	古代	坏	口縁～底部	(11.8)	4.0	(7.6)	長石 赤色酸化粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	良好	
127	6		P14-05	－	土師器	古代	坏	口縁～底部	(15.6)	3.2	(9.6)	長石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	良好	
128	6	一括		－	土師器	古代	高台付坏	口縁～底部	(13.2)	5.1	7.2	雲母 赤色酸化粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	
129	3	一括		－	土師器	古代	高台付椀	口縁～底部	(11.4)	(5.1)	(6.6)	長石、角閃石 赤色酸化粒	黄橙 Hue10YR8/6	浅黄橙 Hue10YR8/4	回転ナデ	回転ナデ	良好	
130	1	一括	P13-25	－	土師器	古墳	高坏	脚部	－	(5.5)	－	長石、雲母 赤色酸化粒	灰白 Hue5Y7/2	灰白 Hue5Y7/2	回転ナデ	工具痕	良好	透かし窓が3箇所 内2は形骸化してる。

第8章　総括

第１節　調査の成果

１　上官塚古墳群と上官塚遺跡北側の様相

今回の調査により北甘木丘陵西端付近に位置する上官塚遺跡と、その北側にある上官塚古墳群の様子が明らかとなった。

この付近の特徴を端的に言えば、弥生時代～古墳時代にかけての甕棺墓・土壙墓・古墳などが数多く分布する一方で、住居等の生活に関する遺構はほとんど見られず、この時期において墓域が展開していた場所ということができる。

２　上官塚古墳群

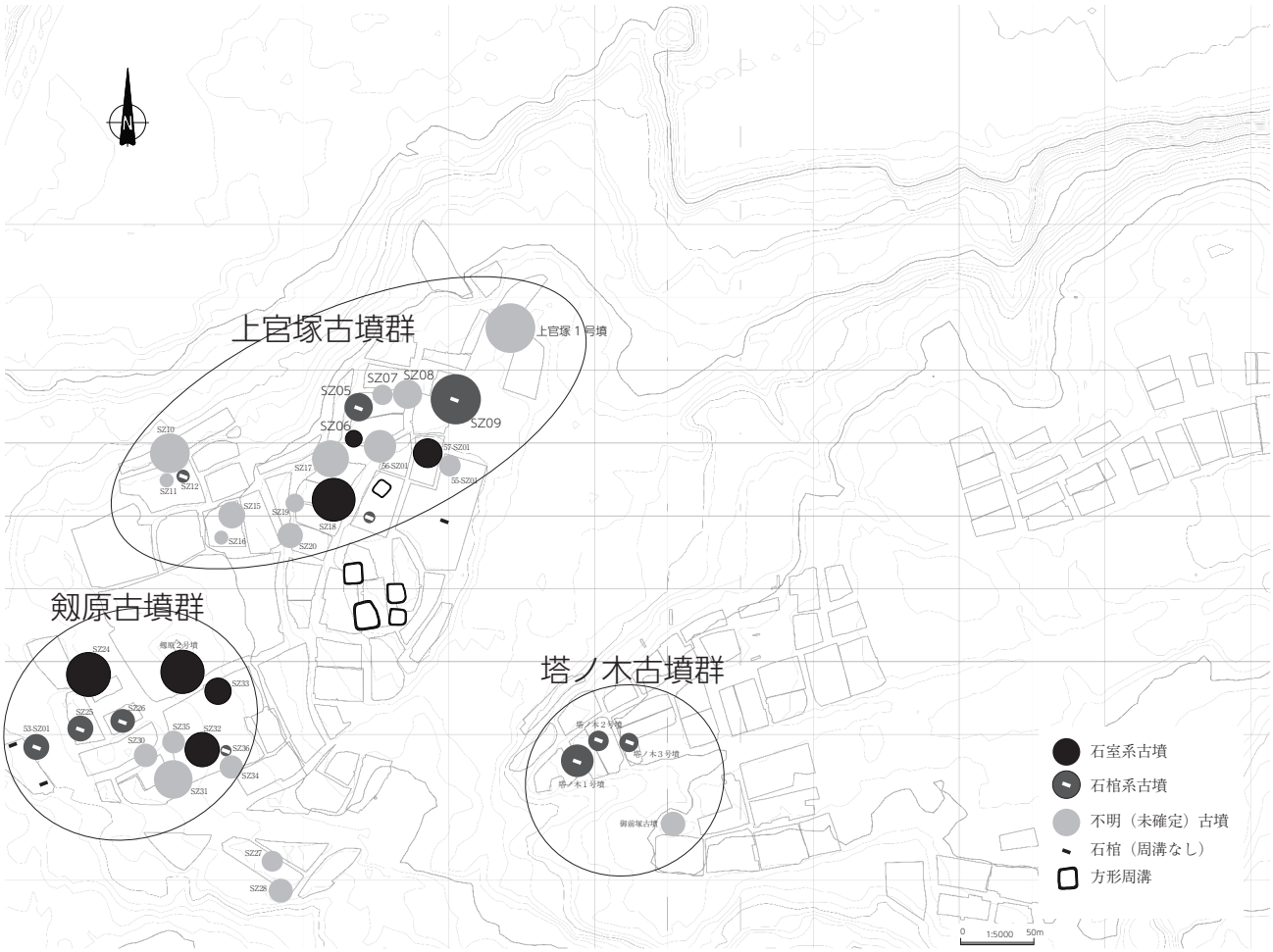
（１）上官塚古墳群の調査成果

上官塚古墳群の調査によって、上官塚１号墳の状況が判明する一方で、隣接すると言われる上官

※グリッドは旧測地系（TokyoDatum）で設定されたものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている。

第 115 図　上官塚古墳群と上官塚遺跡調査地点配置図

第 116 図　上宮塚古墳群と上宮塚遺跡（南東から、2020 年撮影）



第 117 図　北甘木丘陵における古墳の分布

塚２号墳については様相が掴めず、加えてそれらよりも北側では削平が著しく、表土下は地山という状況で遺構の残存が認められないということも明らかとなった。反対に上官塚古墳群の南側においては削平により遺構面に影響を受けつつもある程度までは残存しており、上官塚古墳群が形成された古墳時代及びそれ以前の弥生時代の墓域が広がっていることが確認された。

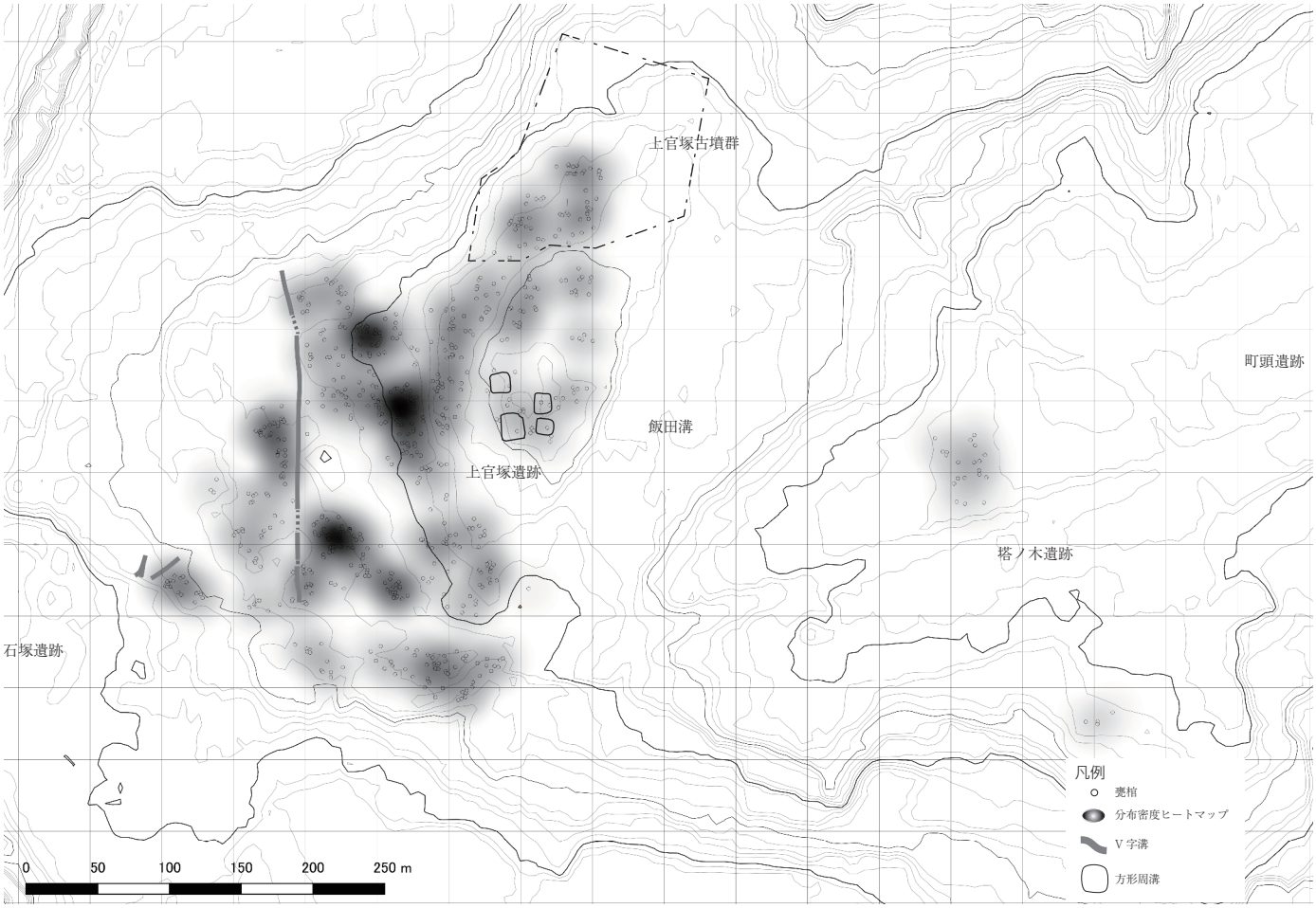
（２）上官塚古墳群における古墳

結論から言えば、上官塚古墳群と上官塚遺跡は単純に遺構の粗密を持ちつつも一体化した不可分なものであり、遺跡を分けていた理由としても残存墳丘を有する上官塚古墳群、墳丘を失った上官塚遺跡、と便宜的に扱われたに過ぎないことが今回の調査を含め一連の北甘木丘陵における調査で分かってきている。

北甘木丘陵西端における調査成果は今回のものが端緒となり、これから逐次報告されていくものであるが、後世の削平により墳丘を失った古墳が地上部分を失いながらも地下に残されたものが多く存在し、特に今回の対象となった上官塚遺跡北側と上官塚古墳群のある丘陵北西端に集中して存在する一群、その南にある小丘陵の裾部を挟んで南西側に展開する一群、東側にある飯田溝を挟んで向こう岸にある塔ノ木遺跡、というようにいくつかの分布域を持っているように見える。

規模から見てみると、上官塚１号墳とその南にあるSZ09は30ｍを超える北甘木丘陵において最大規模を持つ古墳である。逆を言えばこれ以上の大きさの古墳はこの丘陵上には存在しない。

北甘木丘陵の北側にある井寺丘陵の頂部に所在する井寺古墳も、周辺を大きく削られた結果判然としないながらも少なくとも34ｍ前後の大きさと見積もられる（嘉島町教育委員会2021）ことから、本地域の最大級古墳の規模はこれら古墳のことを指すことができ、それに準ずる30ｍ級の古墳が大型墳の区分に含まれると考えて良さそうである。



第118図　北甘木丘陵における甕棺の分布

（３）北甘木丘陵上の古墳を巡る問題

こうした大型墳が３基存在し、それらを取り巻くように中～小型の古墳が存在する上官塚古墳群に限らず、北甘木丘陵における古墳群の特徴を捉えづらくしている点は、内部主体が判然としない例が多くあることである。

保存のために調査をしていない例も含めて、削平により主体を失っている例や、道や土地境界に阻まれて主体を明らかにできなかった例が多く、遺構から見た古墳の区分を困難なものとしている。そうした場合、辛うじて残された周溝から出土する遺物の検討によって時期をある程度判断するしかなく、周溝に遺物を含まない古墳は時期を推定することが難しい。

３　上官塚遺跡北側における成果

（１）上官塚遺跡

上官塚遺跡は北甘木丘陵にある西側の緩斜面一帯に広がっている。以前は上官塚遺跡・遠見塚遺跡・石塚遺跡、その周辺にある未周知遺跡といったような区分けになっていたところではあるが、今回の調査を進めていった結果これらのうち標高が高い部分にある遠見塚と上官塚は区分しがたいものであるとの判断から、整理作業の実施に際して遠見塚遺跡を上官塚遺跡に、石塚遺跡が不自然な（調査者がそのように処理したため）形でこれらに食い込むようになっていたものを標高が高い部分を上官塚、川に面する標高の低い部分を石塚、というように整理した。

（２）上官塚遺跡の北側

今回取り扱った上官塚遺跡の北側、というのはそうした古墳や甕棺の分布のうち北端付近であり、甕棺墓群の規模としては最も密集している遺跡中央部からは外れてはいるがそれなりの規模を有している。

加えて土壙墓も併せて分布しており、土壙墓・甕棺・古墳、と当時の葬送に関わる遺構がひしめき合っている、というのが上官塚遺跡の弥生時代～古墳時代にかけての様相で、この北側においてはそれ以外の遺構が少ないことも相まって墓域が展開していた場所の一部と言っても良いだろう。

４　上官塚遺跡北側出土の甕棺

（１）甕棺の様相

上官塚遺跡北側から甕棺が図示できるもので54基が出土した。そのうち53基（約98％）が合わせ口甕棺であり、確実に単棺と断言できるのは１基（2％）に留まる。次に遺体を納めたと考えられる主棺の大きさを見てみると、超大型甕１基（３％）、大型甕16基（30％）、中型甕31基（57％）小型甕４基（９％）と中型甕が約半数を占め、大型甕がこれに続く。

（２）時期幅と分布状況

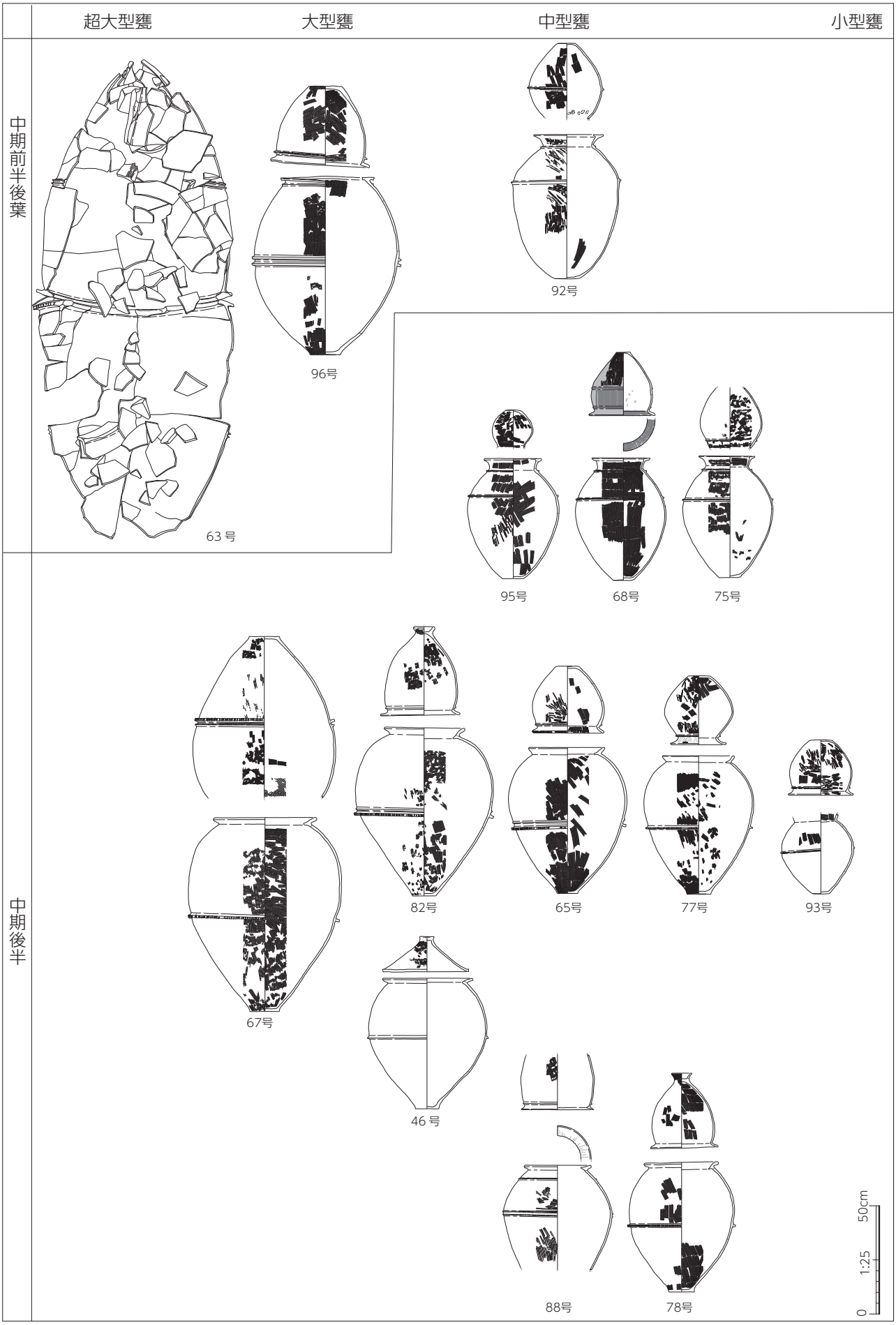
甕棺には北部九州系のものと在地系のものが混在する。時期はある程度まとまった傾向にあり、中期前半末～中期後半付近と言える（第119図）。時期によって分布に差が見られるかという視点から見れば、最も数の多いＫⅢｃ式の甕は３つある密集域だけではなくその付近に分布し、先行するＫⅢｂ式のものもこの分布とほぼ重なる。更にそれより前のＫⅢａ、ＫⅡｂ式は数が極めて少ない。一方でこれらが多く見られる地点もあるため、これは時期差によるものと考えて良さそうである。

在地系と呼ばれる黒髪式の諸型式において、分布はどうかという点であるが、分布域が重なっていることや、北部九州系の甕と組合わせて使用される例などあり、並存していると言って問題はない。

（３）主棺開口角に見る墓壙形態について

整理を進めていく上で気になったのが、墓壙に対して甕がどのように設置されるか、という点である。本遺跡はこれまでに述べているとおり削平によって原地形を大きく削られており、本来地中深くにあるはずの甕棺が現地表近くで露出しかけていたりするなどその影響を大きく受けている。辛うじて残ったものから当時の人が甕をどう据えて納棺したのかを考える上で、据える前段階である墓壙の形態が当時の人の意図を示しているものと考えた。墓壙を掘り、納棺の際の作業効率を考慮した上で意図した形に据えて、納棺後甕や鉢（あるいは木板など）で蓋をし、粘土で目張りをして封をして埋め戻す、という段階を経る。

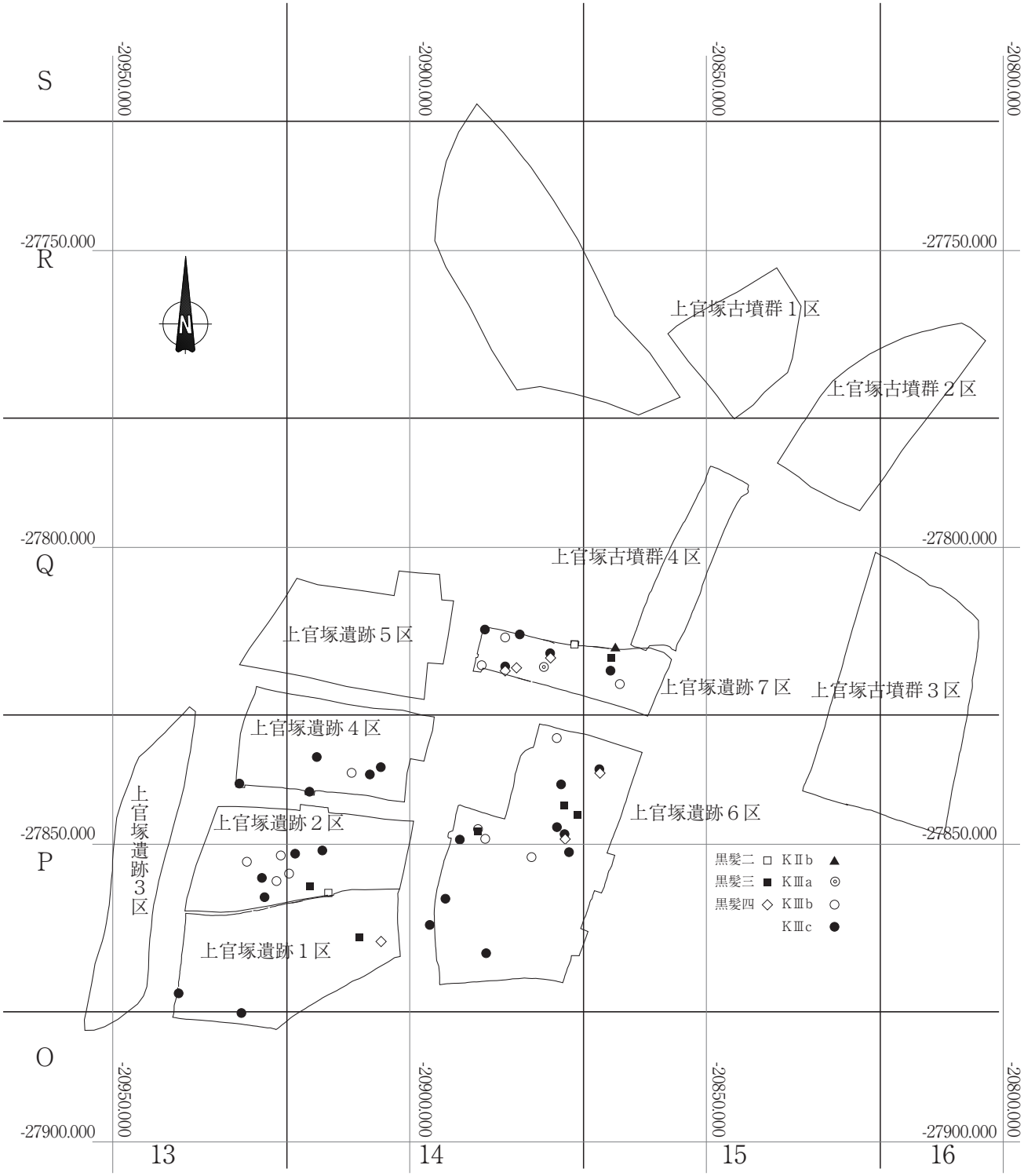
甕の形状が変わることや甕の大小によって墓壙や据え方が変化するのか、同一の甕によって



第 119 図　上官塚遺跡北側における甕棺編年

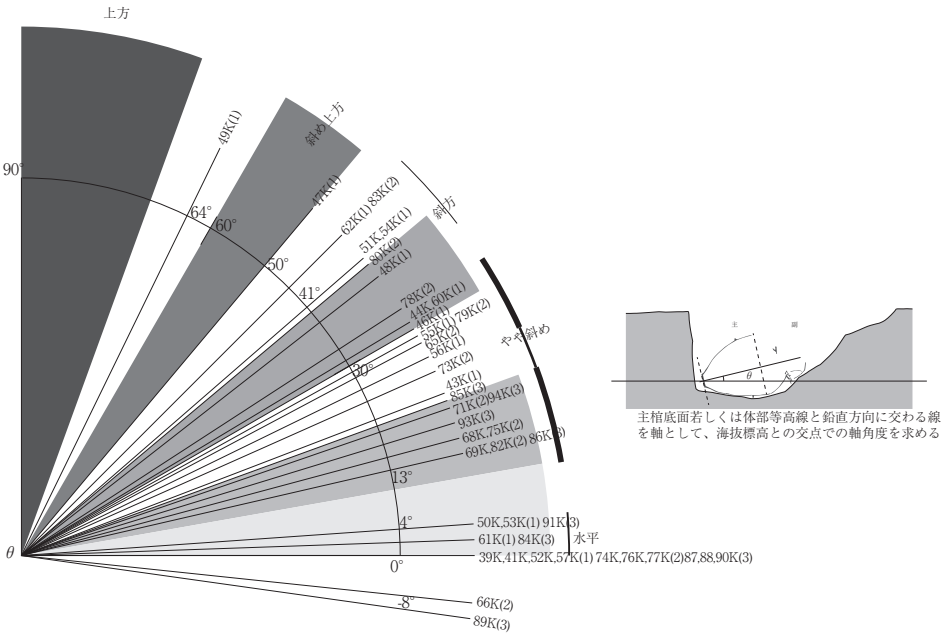
掘り方が異なるか、などについて検討を行うことにした。

方法として、主棺の口縁が両端とも原位置付近で残存している場合は口縁端を結んだ線に直行する線を引き、水平線とどの角度で交わるかで開口角を測ることができる。口縁が無い場合や削平を大きく受けている、等の場合は等高線ないしは底部をその基準とする。実際には口縁・胴部は圧壊する際に原位置から動くことが多く、地面に接している胴部～底部は削平の影響や圧壊の影響を受けにくい。特に胴部下半は頑丈であることや土壙底面に接していることから動きにくく、底部は胴部から離れることが少ないという特徴がある。



※グリッドは旧測地系（TokyoDatum）で設定されたものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている。

第 120 図　甕棺の型式と分布



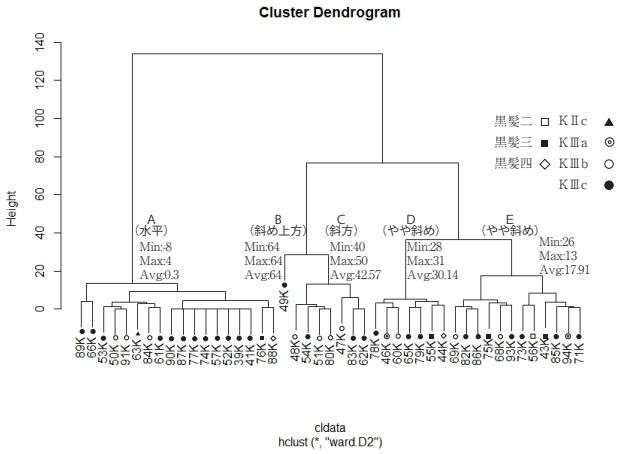
第 121 図　甕棺主棺の開口角

今回はその性質を利用して底部に線を引き、そこに交わる垂線と水平線との角度を計測することとした。

角度を計測できたものの数は 44 基に及ぶ。その角度を中心点からの放射角として置き直したものが第 121 図となる。当初予測として「水平」、「やや斜め」、「斜方」、「斜め上方」、「上方」の５段階程度が存在すると想定していたところ、①０～５度の「水平」、②13 ～ 33 度の「やや斜め」、③ 33 ～ 45 度の「斜方」、④ 50 ～ 64 度の「斜め上方」、⑤ -4 ～ -8 度の「やや下方」となった。もっとも数が多いのは②であるが、10 ～ 20 度付近と 25 ～ 35 度付近で更に分かれる可能性がある。

加えて型式分類に開口角が関連しているかについて検討を行った。Ｒを用いて型式と角度を要素としてクラスタ分析を実施した。クラスタ距離に応じた樹形図を描画したところ、角度の観点から３～５つの枝で分けることができた（第 122 図）。さらに今後サンプル数が増えることで妥当な枝分岐数が出てくるものと思われる。

数が多いＫⅢｃ式はどの区分にも存在しているが、特に水平において数が最も多い。ついでやや斜め（低角度）を含めて考えれば０～ 20 度付近に多く分布すると言える。一方でＫⅢｂはやや斜め（急角度）～斜め上方に多く



第 122 図　開口角と型式によるクラスタ分析結果

見られる。その他についてはサンプル数の問題もあるが、黒髪系はやや斜め方向に据えられることが多い。

今回の分析は、あくまで傾向を見るために実施したものであり、これの背景を探るにはもう少しサンプル数を増やした上でさらなる視点からの検討を要する。ある程度型式において角度に傾向が見られることが明らかとなったことから、この視点に基づいた分析はある程度有用であると思われる。

少なくとも言えることとしては、上官塚遺跡における甕棺は墓壙内部に設けられた副土壙の底面に主棺を据えることが多く、胴部がここに接するため水平～低角度の斜め方向を向く傾向

にある。

4　線刻のある甕

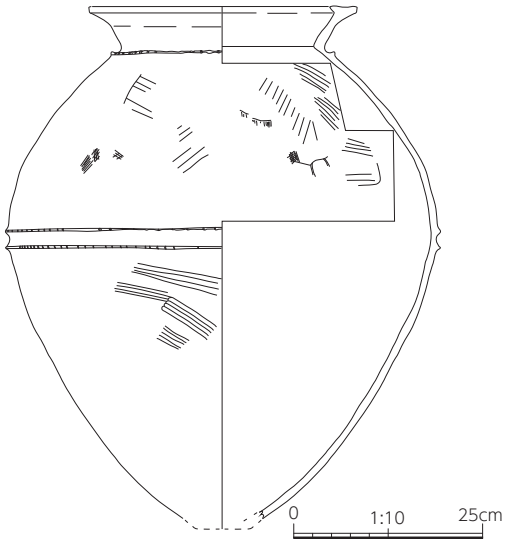
（1）88号甕棺

上官塚遺跡7区出土の88号甕棺に2つの線刻絵画が描かれていた。絵画、としたのは記号や文様とは異なる実物の具象である点からである。1つはドーム状の半円弧内に縦線、もう1つは横線1条の下に縦線という、単純ではあるが何かの構造物であることを想起させるものである。文中で前者は竪穴住居、後者は柵、とした。線刻の施される位置は口縁下部と胴部中頃の突帯間にある部分である。

（2）北甘木丘陵上における類例と特徴

類例は塔ノ木遺跡出土の甕にあり、この場合は甕棺としてではなかったが、やはり88号甕棺と同様に口縁下部と胴部中頃の突帯間にある部分を使用している。描かれている絵画は、シカのような動物、中心に棟木のようなものを持ちそこへ垂木をかけたようなもの、柵状のものがある。

上官塚遺跡の整理作業中にこうした線刻のある甕をしばしば見かける。詳細については今後刊行される報告書により明らかとなっていくが、着目したいのはこれらと同様の線刻絵画を持つものは中期後半台の胴部が強く張り出す甕棺にほぼ限られていると言ってよく、さらに描画する部分は胴部上半～肩部に限定されている点である。突帯を紋様帯の区画線とするように扱っており、限定的な時期の特殊なパターンがあるものと推定する。また、加勢川流域に破片ではあるが同種の甕に線刻が認められるものがあり、特定の時期にどこかの供給源からもたらされた甕の中に同様の線刻絵画を有したものが一定量存在し、流域内において流通したと考えられることから、これら線刻絵画の分布域を見ることで当時の地域文化圏の広がりを見ることにつながるのではないかと期待する。



第123図　塔ノ木遺跡出土線刻のある甕

（3）絵画のモチーフとなるもの

繰り返すが絵画、と限定して呼ぶのは他に記号や文様と思われるものが甕に刻まれないからである。また、簡素な線画ではあるが抽象的なものではなく実物を元に描いた具象的なものであり、そういった点からも記号的なものではないとするところである。ではこれら絵画のモチーフとなるものを列挙してみる。

【構造物】

・竪穴住居（横から見た？）
・　〃　　（上から見た？、中から見た？）
・柵　　（正面から見た、遠くから見た）

【動物】

・シカ？

現時点で把握できているものとしては以上のものとなる。これからも新たなモチーフが現れることを期待したいが、現状目に付く限りでは上記のいずれか、特に構造物で竪穴住居と思われる表現のものが多い。これを考えるとモチーフになったものは甕を作る場所の近くで目に付くものであり、武器や鏡といった非日常的なものではなく、ありふれた日常的なものと捉えることもできる。

（4）描き方

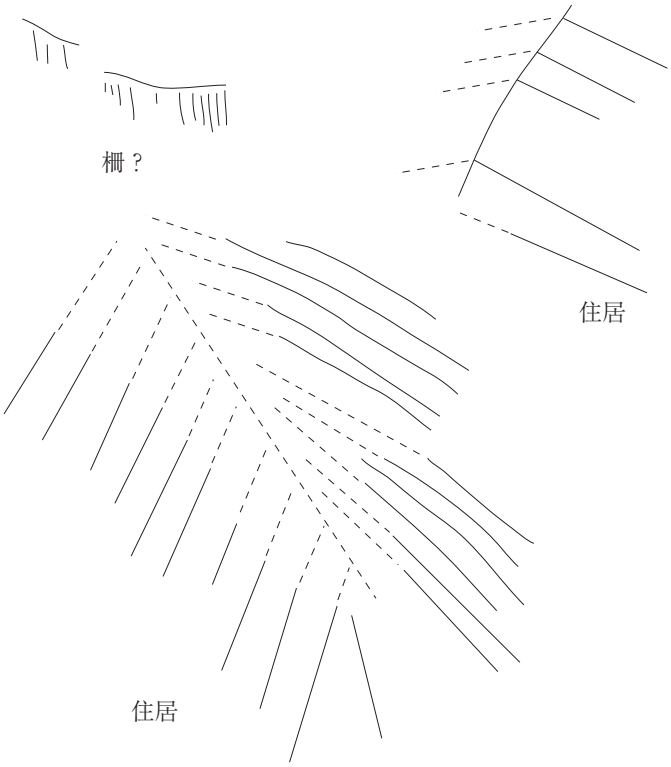
絵画の描き方として、一つのものを描くことが多いように思われる。一方で塔ノ木例のように近くに複数のものを描き、その大小で遠近感を出しているように描いているものもある。

（5）理由と意味

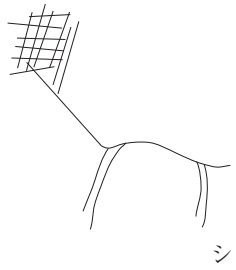
何もない甕であることが多い中でこうした絵画土器が甕棺として用いられること、特に主棺として用いられることが多い中～大型の甕に限られることなどを見てしまうとどうしても意図的であるように思える。現象としては認識しうることであるが、当時の人の気持ちを理解し、物証を以て証明しないことには意味は見いだせないだろう。

塔ノ木遺跡

構造物（破線は断片のため復元）



動物

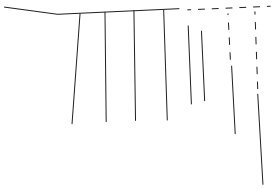


0　2:3　5cm

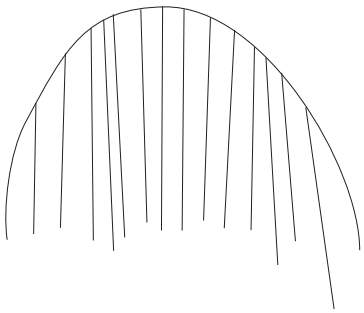
上官塚遺跡 88 号甕棺

構造物（破線は断片のため復元）

柵？



住居



0　2:3　5cm

第 124 図　塔ノ木遺跡の線刻絵画と上官塚遺跡の線刻絵画

第２節　まとめ

１　上官塚古墳群と上官塚遺跡北側

前節において上官塚古墳群と上官塚遺跡北側における調査成果について総括を行った。

現在は平坦な畑地が広がっている本地点は地下にこうした遺構を多く含む墓域が広がっていた。甕棺の密度は最も密集する所に比べると密度は落ちるが相当程度の分布は見られ、本地点の南にある小高い丘状の高まりを巡るように帯状の分布を見せる甕棺墓群の北端であると言える。その後の古墳も上官塚遺跡の北側と一体的に群を成して築造されており、数として６基を数える。

弥生時代～古墳時代の甕棺、土壙墓、古墳と墓及び墳墓が多く分布する一方で、住居や倉庫など集落を構成する要素がほとんど全くないと言える。この土地一帯が集落ではなく墓域として認識されていたという可能性もあるが、地表近くに構築されるであろう竪穴遺構は削平により消失し、地下深くまで掘削される土壙墓・甕棺･周溝などが残された可能性も否定できない。

ただしそうした場合遺物は破片化して耕作土中に含まれるはずであり、包含層出土遺物の量が相当程度見込まれるのであるが今回はそれが顕著ではなく、元から墓域として使用され、長い期間それであり続け、近現代において削平されるまでの間古墳が林立する土地であったのではないかと推測する。

２　上官塚遺跡出土の甕棺

上官塚遺跡北側において甕棺 59 基の出土があった。全体で 700 基を超えており、割合から言えば約１割にあと少しという程度の数が本地点に分布する形となる。

前述したように甕棺分布の北端にあり、いくつかの集中域を有している。時期による分布の偏りが見られるか、という点においては、特に数が多いのは弥生時代中期後半台のものであり、特にＫⅢｃ式及び並行する黒髪４式が広く分布する。それよりもやや古い段階のものがこの分布域と重なるように存在している一方で、上官塚遺跡で甕棺が出現する時期のものについてはほとんど存在しない。

これまでの他地点の整理作業を通じて感じるのは様々な時期のものが遺跡中に見られる一方で、ある程度限られた時期幅に納まると推測している。塔ノ木遺跡の甕棺においても時期は重なると考えられ、塔ノ木遺跡では時期によって分布域が異なる傾向にあることが窺えた。

今回報告した上官塚遺跡北側は弥生時代中期前半末～中期後半、特に中期後半に重点が置かれる。こうした点を見ると、上官塚遺跡でもある程度時期による分布の差が認められる可能性はありそうで、「中央の丘」と「西の環濠」を巡る緩斜面一体に甕棺墓地群が広く分布するのは、こうした時期差による分布域の違いが蓄積した結果である可能性を指摘できるだろう。

他方、副葬品を持つ甕棺は北側には存在していない。といっても全体で見ても確実に副葬を行っているのは１例しかない（磨製石鏃は副葬なのか体に入っていたものか区別が付きにくい）ため、そもそも他と明確な差を持つ甕棺はあまりないのかもしれない。いずれにしても今後の整理によって周辺の様子が明らかとなっていくことを期待する。

３　上官塚古墳群と上官塚遺跡北側の古墳

上官塚古墳群及び上官塚遺跡北側において６基の古墳を確認した。そのほとんどが墳丘を失っており、地面の下に掘られた周溝によってその存在を知ることができた例でほぼ占められている。さらに内部主体については墳丘を失わせた削平によってもろとも破壊されたもの、存在が不確かなものも多く存在する。

主体が確認できたもののうち、石室は１基も見当たらず、石棺（痕跡を含む）が２基（SZ05,SZ09）という状況である。

墳丘規模は直径 30 m超級の円墳２基を筆頭に 20m 級の中型円墳２基、10 ～ 15 m級の小型円墳２基という内容である。いずれも円墳である。

時期的には５世紀前半台～６世紀初頭あたりのものであり、特に埴輪を有する SZ09 は５世紀前半台と見ている。

SZ09 は上官塚遺跡にあって唯一埴輪が出土した古墳である。ここも墳丘を失っており、埴輪は全て周溝内から出土したものである。これ

らが元々墳丘にあったものが墳丘破壊に際して墳丘上から取り除かれたのか、元からそこにあったのか､それを検証できる図面が存在せず、その後の検討をより困難なものとしている。

またユニークであるのは家形埴輪や囲形埴輪といった形象埴輪を伴っている点で、さらにそれらにはコンパス文が正面に描かれていることが最大の特徴と言える。

他の埴輪にはなく、この２種類についてコンパス文が描かれており、それぞれが特別な意味を持った施設であることを暗示している。

特に興味深いのは家形埴輪におけるコンパス文に細い沈線で紐状の表現をしている点にある。円文にこうした紐状表現を持つものとしては大鼠蔵東麓１号墳（八代市）、広浦古墳（上天草市）などに例を求めることができるが、これを埴輪で表現するのはあまり例を見ない。紐付きのコンパス文を少なくとも３つ正面の軒先に設けている様はさながら鏡を軒に吊している情景を思い浮かべる。意味合い的に邪を退け、内部を守る意図があったと思われる。

また確実に家形埴輪と対になっていたと言い切れないものであるが、囲形埴輪にも同様のコンパス文が描かれている。正面に門を持ち、その両脇に一つずつ、さらにその横にも最低一つという配置で描かれている。バランス的にあと一つあっても良さそうであるが、それを示す部分を欠いており、正確な数については不明である。このコンパス文は壁面に対して半分程度を占める大きさで描かれている点や家形のものと異なって紐状の表現が認められないなどの差異が認められ、モチーフとなったものが実物にあったとすればこれは板塀に鏡を吊したものではなく盾に描かれる円文のように壁に描かれていたのではないだろうか。

ともに例が少ないものであり、検証には困難を伴うものであるが、埴輪にも円文を記すあたり非常に「肥後らしい」と思ってしまうものである。

囲形埴輪についてはこれを囲形埴輪とするか柵形とするか議論が分かれる所ではあるが、単体で全体構造を完結させている点、入口を表現している点などを総合的に判断して囲形埴輪としておこうと思う。

一方で囲いの内側にある建物として切妻の家形埴輪であることが多いのに対し、SZ09 で出土した家形埴輪は入母屋であることなど色々な面でユニークであることを考えると、導水施設を有した建物ではない（実際そのような遺物片は SZ09 周溝中から出土していない）と思われるが、門と家の軒先にそれぞれ辟邪の仕掛けをするなど内部には徹底して神聖視した対象がそこにあったと見ることができるだろう。それが何かはわからないが、県内でも稀に見るものであり、特筆すべきものである。

時期的にも井寺古墳に先行するものとして注目されるものであり、他地域から見れば規模は小さく副葬品が少ないなどありながらも、特殊な埴輪を有し、その後宇土半島の馬門石をふんだんに用いた井寺古墳を構築するなど、５世紀～６世紀にかけての当地域は他地域にとって決して無視できない勢力であったことは間違いない。

４　おわりに

今年度で発掘調査を終えることができ、平成 28 年に発生した熊本地震の復興事業も井寺古墳を除けば完了し、ようやく上官塚遺跡の整理作業をまとめていく段階に入ることができた。

今後刊行されていく報告書から膨大な成果がもたらされ、弥生時代～古墳時代に限らず中世に至るまで地域にとって重要な位置を占める遺跡であることが明らかとなっていくことが予想できる。

惜しむらくはその後の破壊が著しく、特に現代にいたっての削平の影響はその遺跡の価値のほとんどを失わしめた。これが良好な形で残っていたならば、と思うのはあるが、これも世の流れではないか。

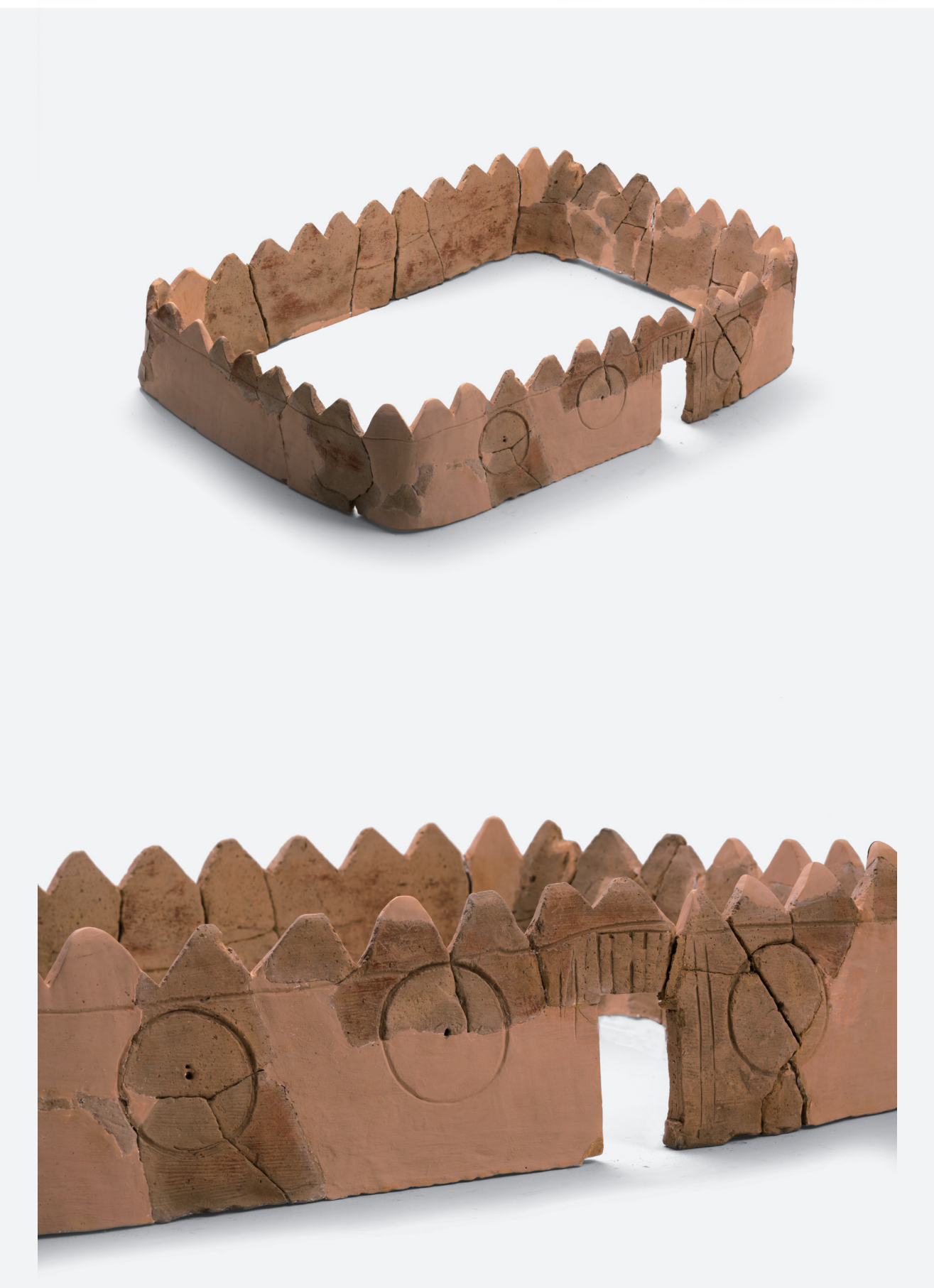
そうであれば少しでもその断片を記録として残し、後世へと語り継いでいくことが我々の使命だと考える。それ故に調査で得られる情報を記録することが求められているのだが、多くの情報が発掘調査の時点で失われたことについては残念でならない。

図　版

Plates

上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土円筒・朝顔形・壺形埴輪

上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土家形埴輪



上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土囲形埴輪

上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土遺物①

上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土遺物②

上官塚遺跡　SZ09 周溝内出土遺物③

上官塚遺跡　SZ08 周溝内出土遺物

上官塚遺跡　65 号甕棺

上官塚遺跡　68 号甕棺

上官塚遺跡　75 号甕棺

上官塚遺跡　77 号甕棺

上官塚遺跡　78 号甕棺

上官塚遺跡　82 号甕棺

上官塚遺跡　88 号甕棺

上官塚遺跡　92 号甕棺

上官塚遺跡　96 号甕棺

上官塚遺跡　47 号甕棺

上官塚遺跡　50 号甕棺

上官塚遺跡　55 号甕棺

上官塚遺跡　57 号甕棺

上官塚遺跡　63 号甕棺

上官塚遺跡　66 号甕棺

上官塚遺跡　74 号甕棺

上官塚遺跡　76 号甕棺

上官塚遺跡　80 号甕棺

報　告　書　抄　録

ふりがな	じょうかんづかいせき
報告書名	上官塚遺跡
副　題	嘉島東部台地土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

シリーズ名	嘉島町文化財調査報告
番　　号	第 11 集
編　著　者	橋口剛士
編集機関	嘉島町教育委員会
所　在　地	861-3106 熊本県上益城郡嘉島町上島 545
発　行　年	2024 年 3 月

所収遺跡名	所　在　地	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調　査　原　因
上官塚 遺　　跡	熊本県上益城郡嘉島町 井寺	32° 44′48″	130° 46′44″	H16 年度 H18 年度	7,998㎡	土地区画整理事業

所収遺跡名	区　分	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上官塚遺跡	集　落	縄文時代		縄文土器（後～晩期） 石器（石鏃、剥片など）	
		弥生時代	甕棺・土壙墓	弥生土器（中期～後期） 石器（石斧、石鏃など）	
		古墳時代	古墳・土壙墓・木棺墓	土師器・須恵器（中期） 鉄器（刀子など）	
		古代以降		土師器 須恵器（坏・甕など）	

嘉島町文化財調査報告第１１集

上官塚　遺　跡

発　　行　　令和６年　３月２９日

編　　集　　嘉島町教育委員会
　　社会教育課
発　　行　　嘉島町教育委員会
　　〒 861-3106　熊本県上益城郡嘉島町大字上島 545
印　　刷　　株式会社　啓文社